

---

# 傭兵と決闘者の協奏曲

デボエンペラー

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

傭兵と決闘者の協奏曲

### 【Nコード】

N3100X

### 【作者名】

デボエンペラー

### 【あらすじ】

SEED事変から3年後のグラール太陽系、そこでは亜空間研究のほかにあるカードゲームが流行していた。だがそのカードゲームは旧文明から伝わる決闘の儀式でもあり、それを知っていた異能者の集団があった。一人の異能者が依頼で海底レリクスの調査を行っていた際、あるカードを手にした時物語は始まった。（転生者の募集を始めました。こいつはムカつく、と言うような奴を頼みます

11月9日現在）

## 傭兵と少女の邂逅

それは遙か遠いところのお話

母なる太陽と三つの惑星を持つグラール太陽系

そこに住む『ヒューマン』と彼らから生まれた『キャスト』『ニューマン』『ビースト』は、外宇宙から飛来した『SEED』による襲来を受け、滅亡の危機を迎えた。

しかし、四つの種族は心を一つにして戦い、激しい攻防の末、これを封印した。

それから三年後。

近年グラールで流行しているカードゲーム『デュエルモンスターズ』や今まで自粛されていたスポーツや芸能関係の番組の再開等の影響もあり、グラールに活気が戻ってきてつつあった。

しかしその影ではSEEDとの攻防の傷跡が未だに深く刻まれ、資源枯渇が深刻な問題になっていた。

外宇宙への移動を可能とする『亜空間航行理論』が提唱され、再興の道を外宇宙への大規模な移民計画に求めた。

政府・軍・三惑星中の企業は結束し、『亜空間航行』への実現化へ向けて動き出していた。

グラールの新しい未来を願って……

「……分かりました。ではしばらくお待ちください」

パルムに存在する高層ビルに訪れた私は受付嬢にそう言われてロビーのソファアームに座ると、手の甲に装着させていたナノトランサーを起動させて旧文明について書かれた書物を手にしてページをなぞるようにして読み始めた。

「……」

旧文明の遺跡『レリクス』にそこに存在する機動兵器『スタリテ  
イア』、そしてSEED事変最終決戦の地となったSEEDに汚染  
されたレリクス『リユクロス』……リユクロスは完全な『合の時』  
に消滅したものの、それでもレリクスは未だに数多く存在している。

「……やはり興味深いな」

今の子供たちがイーサン・ウェーバーの英雄譚に憧れるように、  
私は現在のグラールで再現できない旧文明の技術の数々に心惹かれ  
ている。

グラールに住むヒトの素となったヒューマンが他の三種族を作り  
上げたと言うのに、レリクスが持つ封印装置などの技術は今の技術  
を持ってしても再現できていないのだ。

近年流行しているカードゲームも、流行した切欠は旧文明が持つ  
技術の再現に成功したからと言う理由であり、『それ』が無かった  
時代は単なる知る人ぞ知る物にしか過ぎなかったのだ。

閑話休題。

「近年旧文明の技術も少しずつ解明されて来ている……出来るな  
ら全て解明されるまで生きていたいかな……それに最近新たに」  
「お待たせしました。社長がお会いになられるようです」

感嘆の声を上げる中で先程の受付嬢が声を上げると、私は読んで  
いた本を閉じて腰を上げた。

「ありがとうございます」

そう言って私は足を進め、転送装置に乗ると係の者が装置を操作  
すると私の周りの景色が消滅すると、次の瞬間には別の景色に変わ  
っていた。その先には赤いラインが特徴的な扉があり、私は迷わず

声を上げた。

「私です。入ります」

その声に反応したのか扉のラインが緑色に変わって音を立てて開かれる。その最奥に高価なスーツを着た黒髪の男がおり、彼は窓からパルムの町並みを見下ろしていた。

「来たか」

彼の言葉を合図に私は礼をして頷く。その一方で彼は私に向かって声を上げた。

「海底レリクスが新たに発見されたのは知ってるな？」

その言葉を聞き私は頷く。その一方で彼は目つきを鋭くさせて私に向かい声を上げた。

「……一番新しいウオザーブルグ動乱とウオザーブルグ・レリクスの件は覚えているな？」

その件を聞き、私も思考を海底レリクスからウオザーブルグ・レリクスに変える。あそこではSEED事変を生き抜いた戦友が2人行方不明となってしまうからだ。

「ウオザーブルグ・レリクスで発見された『星屑の竜』と『無限獄の民』……それと似た様な“モノ”が存在する可能性はあると思うか？」

彼の問いに対して私は考える。確かに“無い”とは言い切れない

が、“在る”のならば既にSEED事変で見つかっているはずだ。だがしかし、万が同じものが“在る”のならば

「……無いとは言いませんが、在るとも限りません。ですが在った場合、即座に行動に移さなければなりません」

私が言う曖昧な言葉に対して彼は溜息をついたが、予想していたのか落胆も大声を張り上げもしなかった。

「そう、だろうな……」

彼自身と同じ事を思っていたのだろう。探せば在るのかもしれないが、態々彼自身が熱を上げる必要は無いのだ。

それに彼自身、グラールを代表する三大メーカーに今や亜空間研究で有名なインヘルト社には劣るがこの『MAW社』の代表であり、今や自分達の所属する一族の長でもある。

私や彼は直接関わっていないが、一番新しいウォザールブルグ動乱は『舞台となった場所に偶然居合わせていただけ』の今までのものと違い、完全に『自分達の争いが元凶』なのだ。結果2人の戦友がそこに封印されていた“モノ”を使い殺しあつてお互い行方不明になってしまった。

その結果として当時の長は責任を取って隠居して一族の長は彼になり、物のついでに一族が経営していたMAW社の株価は一時期悲惨なものになってしまった。

まあ、私たちにとって会社の経営がまずくなつたと言うのが一番重要だった。私たちのスポンサーでもあつた組織もスキャンダルやら組織の代表の交代（代表が2人のうち一方の師匠だった）でゴタゴタしていたのだ。

今でさえまずい状況だと言うのにもしココで新たに問題を起こしたらどうなるか？ そうなれば今度こそ一族崩壊、彼は名実共に先

代以上の無能の烙印を押される事だろう。

閑話休題。

「……まあ、今回の調査には私が向かいます。私個人レリクスに興味がありますし、調査ついでに在れば回収します」

その言葉に嘘は無い。今回の件にしたって“アレ”の事が無かったとしても私自身が立候補して向かうつもりだったのだ。

「……すまないな」

「気にしないでください兄上。私は荷物を纏め上げ、現地へ向かいます」

そう言っただけ私は彼の部屋を出てこの場を去った。扉を閉じた時、あの2人の顔が過ぎったが首を大きく横にふるってこの場を後にした。

そんな会話があったのがつい2〜3日前。

私は今、新たに発見された海底レリクスに足を踏み入れていた。集められた傭兵の多くが単独行動を好むのか纏まるうともせず、広間にいる同業者を値踏みしているように見えた。



『これだけの人数と質のいい傭兵が集まっているって事は大手のスポンサーがついているようだな』

自分の隣にいたフルフェイスメットを被った男が周囲を見渡しなから声を上げる。だがその声は機械質で、合成音声に近いものを持つ。恐らく彼は『キャスト』と呼ばれる種族なのだろう。

私自身が話題を欲していたのか、見ず知らずのキャストに向かって声を上げた。

「大手のスポンサーがついているって事は儲けられそうだ、と言うところか？」

『ハハハ。どうやら台詞を取られてしまったようだな』

目の前のキャストはそんな声を上げると周囲を見渡しして言った。

『周囲の傭兵の輪に加わろうとしない事からフリーなんだろう？

大したものだな』

「昔チームを組んだ事があったがリーダーが死んだ上、残った仲間たちが行方不明になったりして自然消滅だ」

私は声を上げると、目の前のキャストは申し訳なさそうに声を上げた。

『………すまない。軽率だった』

流石に今回は嫌味に聞こえてしまったのだろうか、若干気まずい雰囲気の流れてしまう。だが、そんな気休めの言葉など私には煩わしいだけだ。

「気にしないでくれ、よくあった話だ」

SEED事変ではガーディアンズだろうが傭兵だろうが。メンバ―が死んだりチームが解散したりするなどは吐いて捨てるほど良かった話だ。

私たちの場合もウォザールブルグ事変は終わった後だったが、リーダーが死んだのはガーディアンズコロニーが落下した時の事だったから嘘ではない。

「それに私たちが悔やんだところで死んだ者が蘇えるわけでも在るまい……」

『君は仲間の死を簡単に受け止めているのか……？』

「そうしなければ、やってられなかっただけだ」

私はそう言うのと他のヒトを見渡す。キャストの男も気が滅入ったのか話題を変えてきた。

『まあ、海底レリクスの調査もあって腕利きを集めているのかもな』

「もしくは人海戦術を選んだか、だな」

私はそう言うのと手にしていた本を開いて呟いた。

「ま、私は興味があつて海底レリクスの調査に来たんだ。スポンサーの考えなんかどうでもいいさ」

『ほう、傭兵を辞めて学者になったのか？ だったらココは宝の山だぞ』

「別に辞めた訳でも学者になつた訳でもないが……あと『宝の山』とはどつという意味だ？」

彼の台詞に食指が働いたのか私は彼に向かって声を上げた。

『この海底レリクスはつい最近発見されたものだ。調査はまだ、殆どされていない……この意味は分かるか？』

「システムはまだ動いているからソフト面の解析が出来るし、お宝もまだ残っているから旧文明の技術の粋を集めたモノも手に入る……といったところかな？」

『ああ。あとこれは極秘情報なんだが……』

キャストの男は私に向かって耳打ちする。

『どうやらこの海底レリクスには何か異常なものが存在するらしい。何でも『デュエルモンスターズのモンスターが突然現れた』と言う話が数件出ているらしいんだ』

その言葉を聞き、私の表情が強張ったのが自分でも分かった。自分がココに来た『本命』らしきものの情報が出ってしまった以上、ココに留まる必要もない。

「興味深い情報ありがとう。では私はそろそろ奥に向かうよ」

『そうか。気をつけるよ、この辺りはまだ安全なようだが奥は正に『未開の地』って訳だからな』

「気をつけていくさ。お互い運があったら、また会えるかもしれないな」

さて、一応渡された地図を見ながら進むか。

そう思って奥へ進み始めた矢先

「帰ろう！！ 帰ろうって！！」

めんどくさそうにしていた短髪の男ビーストに向かって声を上げたヒューマンらしき金髪の少女　恐らくハーフか養子か何かだろう　の争いが眼に映った。

『……何だ、あの子供は？　腕利きの傭兵や学者のようにはとても見えないが……』

先程まで一緒だったキャストの男が怪訝そうな声を上げた。だが私にしてみたら興味が無い事だったので気にせず奥へと進む。

「……？」

だが何歩か進もうとした矢先

「……！！」

突然心臓が強く鼓動し、私の足を止めた。

(バカな……在り得ない……!!)

真っ先に思い浮かんだのは自分達の一族に伝わる、行方不明になった片割れが言うには『呪い』と呼べる代物だった。だがそれは一族の極僅かな“女性”にしか発現しないはずのものだ。

私は男であるから在り得ない。もちろん同一性障害ではない。押さえつけた心臓が熱い、まるで強い熱が心臓を焼き尽くさんばかりだ。

その熱さに耐え切れずに膝を折って蹲った瞬間、突然視界が揺れた。だが今は心臓の熱を鎮めるのが先決だがどうすればいいのか検討がつかない。

「う……ぐ……」

視界の揺れが治まるとようやく心臓を燃やさんとしていた熱は矛を収めた。触れてみても先程の熱さが嘘のように静まっていたのだ。

「何だっ たんだ……今のは……」

周囲を見渡すと、そこは先程まで人がいたのが嘘だったかのように誰も存在しなかった。先程の心臓の熱さに負けそうになっていたので気付かなかったが相当な揺れだったのだろう。

(……体の調子は異常が無い……私は男だから一族の呪いと言う話ではない……)

私は拳を握っては離したりを繰り返し、身体機能に異常が無い事を確認する。かすかにだが耳に奥の方から誰かが何かを叩く様な音が響き渡る。

（私がやるべき事は海底レリクスの調査……そして本命は海底レリクスに在る“モノ”の搜索……）

眼を瞑って自分のやるべき事を再確認する。その時に耳に誰かが叫ぶ声が聞こえた。

（最大の懸念は先程の一件だ……これが万が一原生生物やスタリティアとの戦闘中に出してしまったら不味いな……単独行動は控えるべきか……）

先程の件を考え、ここは救助を待つしかないかと考えた矢先

「……ちよつと」

（だが救助が来るかどうかも怪しくなってきた状況だ、どうしたものか……）

「ちよつと!! 無視しないであたしに声かけてよ!!」

甲高い怒り声が私の耳を貫き思考を吹き飛ばす。声のした方を振り向くと、そこには羽のついたヘッドフォンが特徴的な金髪の十代前半近くの少女がいた。

「……それは私に言ってるのか？」

「アンタ以外の誰に声をかけられるって言うのよ!! か弱い女の子が泣いてるんだよ？そこは優しく声をかけるものでしょ!？」

だが今の彼女を見ても泣いていた様には見えなかった。むしろこっちに怒りを向けてきたようにも見えたのだが……

「その割には元気そうだな」

「う……」

その言葉に対して彼女は気まずそうに顔をそらした。気のせいか冷や汗も流れているように見える。

「だ、だって『困った時の女の子の武器は涙だよ』ってチエルシーが言ってたから……」

「やはり嘘泣きだったか」

「さっきまではホントに泣いてたんですー……ってこんな話をしてる場合じゃないよね」

顔を若干動かすと彼女の奥のほうに在る扉の色は赤。つまり閉じられた状態だ。更に言えばその扉は私がココに来る際に入ってきた扉でもある。

「ああ、どうやら私たちは閉じ込められたようだな」

「うん。同じ境遇の人がいてもどうにかなるって訳じゃないし……ところで、何が起きたか分かる？」

彼女の問いに対して私は首を横に振るう。自分自身心臓が熱くなってそれどころではなかったし、視界が揺れた事と何か関係が在るのか？

「そうよね。あたしもいきなりで、それどころじゃなかったし……気がついたら皆いなくなってるし……どうしたらいいんだろ？」

彼女の問いに対して私は淡々と答えた。

「このまま救助が来るまでおとなしくするか、奥に進んで脱出するか、の二者択一だな」

「やっぱそれしかないよね……大人しくするのって苦手なんだけどな……」

彼女が納得したかのような表情を見せるが私は奥に進む。その姿を見たのか慌てたかのような声を上げた。

「……って、まさか奥に進む気!？」

「そうだ……まあ、慎重に進むしかない。待っていても救助が来ないかもしれないしな」

先程起こった心臓の熱の件もあって奥に進むにしても慎重に事を進めなければならない。本当ならば彼女の力を借りたいところだが、その様子では借りられそうに無い。

「無理無理!! やだやだ!! 危ないって!! ココは未開のレリクスなんだよ? すっごい危ないんだよ!？」

「……嫌なら来なくてもいいぞ。ココは安全のようだからな」

私がそう言うと奥へと進む。しばらくすると彼女が声を張り上げながらこっちへ向かって走ってくる音が響いた。

「行くから!! あたしも一緒に行く!!」

その言葉を聞いて私は小さく笑みを浮かべた。これで心臓が熱を持ってしまった時の保険は出来た。



「そうか……すまないが名前は何と言った？」

一応同行する事になるので、名前だけは聞いておこうかと思って聞いたのだ。

「ふえ？ あたし？ あたしはエミリア。エミリア＝パーシヴァル」

エミリアはきよとした表情で自分の名前を答えたが、即座に表情を変えて聞いたのだ。

「それでアンタはなんて名前なの？ あたしに名乗らせてアンタは名乗らないんじゃないわよ」

彼女の問いは尤もだ。私は心臓の熱を気にしながら声を上げた。

「そうだな……私の名前はギユスターヴ。ギユスターヴ＝ウィンストンだ」

私が自分の名前を名乗ると、エミリアが再び声を上げる。

「それじゃギユスターヴ……その……これからしばらく一緒だから……よ、よろしくね」

彼女がそう声を上げると私も声を上げた。

「了解した」

そう言ってしばらく先へ進んだ矢先、先程の広場より小さい部屋に行き着く。するとそこには二足歩行の鮫の様な原生生物が腕を振

り上げながら歩いていった。

「ああー、やっぱり原生生物がわんさかいる……見逃したりは

」

「してくれるんだっいたら傭兵など必要ない」

「だよねえ……」

エミリアの言葉を私は一刀両断する一方で、ナノトランサーを起動してツインハンドガンと自作のシャドゥーグを取り出す。それは悪魔をデフォルメ化させ、右手に音叉を持たせたマスコットの様なものだった。

「あれ？ ドゥーグとハンドガンを使い分けるの？ 近距離主体の人かなって思ったんだけど……」

「……そうだ。私の都合ですまないが今回は遠距離主体で行く」

あの発作が元凶で今回は遠距離主体の攻撃方法を取る事にした。だが私の様子を見てエミリアの様子がおかしくなる。確かにツインハンドガンとシャドゥーグを同時に使うのは珍しいとは思うが、別に法律で禁じられているわけではない。

「あの……その……」

「何だ？」

「あのね……えっと、えっとね……直前で言うのもんだけど……」

しどろもどろに言い出すエミリアだったが、意を決したのか声を上げた。

「あたし、武器は持ってても実は戦闘経験なんて殆ど無いの」

その言葉に対して私は一瞬だけ眼を見張った。自信なさ気だった彼女は先程の言葉の影響か、活気に満ち溢れていた。

「…………だから、頑張つて！！ あたしは応援してあげるから！！」

その言葉に対して私は大きく溜息を吐いた。

その時私は気付いていなかった。その溜息がSEED事変の時、仲間たちの喧騒や見当はずれな発言に呆れていた時の物と同じだった事を。

## 傭兵と少女の邂逅（後書き）

さて皆さん、最低なチート系転生者が嫌いなことが判明してしまつた久々のデボエンペラーです。

リア友や皆様からの意見を元に執筆しなおしました。まぶ錬などは気が向いたらリメイクしようと考えていますゆえご容赦を。

ところで皆さん、質問があります。

再修業していた際、私は瞬様のなのは小説を見て転生者のオリ主について深く考えさせられました。

そしてP s p o 2は実質オリ主様の物語でもあります。更に『オリ主』の大半は『転生者』を指す事が多いです。

その中には「腐った運命を変えてやる!!」「ハーレム作るぜフハハハハー!!」「なんでチートオリ主の僕様の方が優れてるのに、何のとりえも無い原作主人公が勝ち組なんだ!! 許せないお!!」「はなんて傲慢な悪なんだ!!」とほざく最低系転生者なんざ吐いて捨てるほどあります。

本題に入りますが、そう言った「最低系オリ主」を敵に出していいのかと言う考えになつてしまい、出した場合もうラスボス変更の可能性（特にエピソード1）まで出てきてしまいました……それにP s p o 2の原作なぞるだけって言うのもなんだし……

と言うわけで転生者をどうするかと言うアンケートをとります。

1・転生者お断り（大まかなストーリーやラスボスは原作どおりに行きます）

2・転生者上等！（ストーリーやラスボスに変更される可能性あり）

どちらかに入れてください。

……まあ、遊戯王入れた時点で原作崩壊上等ですけど……あれマジで劇薬だわ

## 異能者（前書き）

ここでようやく遊戯王と本格的にクロスします。  
何かいろいろととんでもない事になってますが、遊戯王じゃ特に珍しくないよねー！

## 異能者

エミリアのカミングアウトから数十分後……

「行け！！ リゾネーター！！」

悪魔を模したシャドウグが地面を射抜いて原生生物を転ばせ、私とその隙をついて左手の銃でその頭部を射抜く。続けて右手の銃で突進してきた浮遊型のスタリティアを撃ち落した。

「エミリア、1体そっちに行つたぞ！！」

私の声を合図にエミリアが手にした長柄の棒から炎を灯す。流石に応援するだけだと言うのは私も反感を覚えたので何が出来るかと問いただしたところ、炎と雷に回復系のテクニックが使えろし接近戦や射撃戦も基礎だけは出来るとの返事が返ってきたので、私が撃ち漏らしたのは彼女が担当すると言う事で決着がついた。

「ほいっと！！」

彼女が放った炎……炎系テクニックの初歩・フォイエがスタリティアを焦がしつくし、地面に落下したと同時に砕け散る。

「さて、次は……」

扉を開き細い通路が伸びているのを見ると、ナノトランサーを調整してバイザーを取り出すとそれを装備してから眼前を見た。

「やはりか……」

直後に右手のハンドガンで通路に向けて何度か発砲する。エミリアが驚いた表情を見せるが次の瞬間には私の行動を理解した。

「え……爆発した？　なんで畏があるって分かったの？」

「このバイザーはガーディアンズなどで支給されているゴーグルの改造品で、コイツを使って爆弾を見つけたと言う訳だ。ちなみにサーチした爆弾の数も数えてくれるぞ」

そう言いながらも撃ち続ける私だったが、ゴーグルのカウントが0になったのを合図に撃つのを止めた。

「ゴーグルって……重い、嵩張る、邪魔の三拍子が揃った不良在庫じゃなかったっけ？」

「昔の話だ。私のバイザーはMAW社の商品だし、今ではGRM社から性能がいいゴーグルがガーディアンズや同盟軍に支給されているって話だからな」

今もガーディアンズにいる仲間の一人が手紙で愚痴っていたのを思い出して言う。私の言葉に対してエミリアが感嘆の声を上げる。

「行くぞ……とは言えまだまだ続くか……いつになったら外に出られる事やら……」

徐々に奥に進んでいく私たち。再び広い空間に出て、周囲に危険が無い事を判断した時エミリアのほうからなにより音が響いた。

「何があつた？」

私がそう言って振り向いた時、彼女は腹部に手を当てて、ただ一



言言っただけだった。

「お腹空いた……」

彼女の赤くした表情と腹部を押さえた様子を見て私は溜息をつく。仕方ない、リゾネーターを警戒モードにセットしなおして私も腰を下ろした。

「さて、と……」

私は黄色い箱を取り出すとその中からカロリーメイトを取り出し、一本エミリアに渡した。

「食うか？ あとサバイバル用の缶詰もあるが……」

「……いただきます……」

彼女がそう言っつてすごい勢いでカロリーメイトと缶詰にあった物を食べると声を上げた。

「技術や知識、事前の用意まで隙が無い……さすが傭兵って感じ……」

彼女がそう言っつとようやく安心の声を上げた。満腹になったのか表情も明るい。

「……なんか、ちょっとホッとしたよ。あんたがいれば、安心ほいっしよ」

「そうか」

私は黙々と缶詰や箱を仕舞う。レリクスの調査団が後でこれを見した時、何を言われるか分かったものではないからだ。

「あたしは軍事会社に登録されてるだけで、戦う気とかこれっぽちも無かったのに……だって言うのに、あのおっさん。あたしが働かないからって、無理やり連れ出してこんな危険なレリクスにほっぽって……」

徐々にエミリアの話は「おっさん」なる人物に対する愚痴にシフトされていった。と言うより先程とんでもない発言が出た気がするのだが……

「あー、なんかだんだんハラが立ってきた！！　こんなか弱い女の子を、一人にするなんてひどいと思わない！？」

「エミリア、お前は少し働いた方がいい」

先程のとんでもない発言に対して私が水を飲みながら意見を言うと、エミリアは更にふて腐れたような声を上げる。

「ぶー！！　なによギユスターヴ！！　アンタもおっさんの味方！？」

「少なくとも働かない奴に拒否権は無いだけだ。何も過労死するまで働けというわけでもない」

「いいよいよ。けっきょく皆そうなんだから。あたしの言う事なんて誰も本気で聞いてなんかくれないんだ……まあ、とにかくあなたがいれば無事に帰れるような気もするし、おっさんには後で文句言いまくってやる！！」

エミリアの言葉に私は相槌をうつただけで済ませる。よくよく考えれば仲間の一人の愚痴も良くこうやって聞き手に回っていたなと思いついた。

「『SEEDはもう存在しないからレリクスは安全だ』とか言い張ってあたしの言う事信じてくれないしさ……」

「それが一般的な解釈だからな。そもそも原因が完全消滅したのではレリクスも起動しなくもなる」

私は一般的な解釈を述べてエミリアに反論する。だが私の言葉が切欠になったのか彼女の表情は真剣なものになる。

「そりゃ、今まで発見されたレリクスはSEED襲来があったときばかりに機能を覚醒させていたよ。でも、全部が全部そうだったかって言うത്そう言うわけじゃなかったんだよね」

突然真剣な表情になった彼女の言葉に私は息を呑んだ。今までの自堕落な彼女とは打って変わったかのような雰囲気には私は圧されていた。

「一説によるとSEEDの散布する素粒子に反応して起動しているみたい。だけど同時に磁場の乱れも観測できるから、どうもそれだけじゃないんだよね」

「だが、何故お前はレリクスは危険だと言えるんだ？ 磁場の乱れとか素粒子云々は関係ないのでは？」

「うん、でもSEEDは3年前に一掃されているはずなのに、こうしてレリクスは起動しているわけでしょ？ それにSEEDが居たにも拘らず起動しなかったレリクスも存在しているのよね」

その言葉に私は息を呑んだ。レリクスやスタリティアの存在意義はSEEDの消滅と共に全て意味が無いものになっていくはずだ。それに私は起動しなかったレリクスについて1つ思い当たる節が在る。そう、ウォザーブルグ・レリクスだ。

それにこの海底レリクスではSEEDが存在しないにも拘らずス

タリティアは今もなお起動している。それに対してウォザーブルグ・レリクスはSEED事変の際には微塵も反応しなかったが、今回のウォザーブルグ動乱に関しては起動していた。

「レリクスがプログラム管理である以上、トリガーになるものもそれに準じたものになるのよ。それにウォザーブルグ・レリクスはSEED以外のものが原因となって起動しているわけだし……」

しかしそこでエミリアの説明が止まって表情も元のエミリアに戻る。その表情はまるで赤点のテストを隠そうとする子供のように見えた。

「……あ、え……ええ〜つと……」

「……やけに詳しいな……」

彼女の話は非常に興味深かった。私もレリクスに関しては思い当る節があったが、推論だけの机上の空論どまりだったのだ。しかし彼女の話は何らかの条件を組み込んだ非常に興味深い話になっている。

「あ、いや……こ、このぐらい常識でしょ？」

「私もレリクスには興味を持っていたからその話を仲間たちにした事はあったが分かっていなかったぞ」

昔こういった話を生き残った仲間たち（ウォザーブルグ動乱の主役とガーディアンズに居るキャスト、後は逃亡・行方不明・死亡が1人ずつ）にしてみたが、あの2人は曖昧な表情を浮かべて残った1体は完全にわかっていなかった。

「だったらその仲間たちに問題があったんじゃないの!? 常識

！！ 常識だつて！！ 傭兵なら誰だつて知つてて当然なの！！」

あまりに真剣な表情で彼女は私に向かって声を荒げた。

「いい、今の説明は流して！！ アンタは結構知ってるみたいだけど、どうせあたしが言ったところで誰も信じてくれないんだし！！」

「少なくとも私は興味を持ったぞ。後で詳しく話してくれ」

純粹に彼女の解釈に私は興味を持った。何故今もレリクスが起動しているのか、ウォザーブルグ・レリクスは何故SEED事変の時に起動せずに問題が起きた時ばかりに起動していたのか、その謎が解けるかもしれないのだ。

「詳しくつて……当ても無い推論なんだけど……もしかして、信じてくれるの？」

「私のほうも当ても無い推論だったからな。推論も2つ同じ結論が出たら確信に変わるかも知れないからな」

「確かにそうだけど……」

次の瞬間には彼女は立ち上がって手にロッドを持って先へ進み始めた。

「何処へ行く、エミリア！！」

「出口探すんでしょ！！ 休憩もいいから先に進もう！！」

彼女が先へと進み、私も立ち上がる。先程までと立場が逆転してると苦笑しつつ、彼女の後を追った。

奥に進むと先程の鮫の様な原生生物が従来の緑色の奴と紫色の奴の2種類が姿を現し、その奥には四足歩行型のスタリティアが鎮座していたりしたので、私たちはそれを排除しながら奥へ進む。

「うえええ……夢に見そう……なんなのよ、あの気持ち悪いスタリティアは……」

「そうか？ 私としてはヒトがSEEDフォームになる姿を見せられる方がひどいと思うが……」

アレはトラウマものだった。ヒトの体の変質していったり爆ぜたりしてSEEDフォームに変貌していく光景を間近で見た事も在るのだ。

「……流石にそれと比べちゃまずいと思うけどな……」

彼女の言葉も尤もだと思いつつも私たちは足を進める。センサーを飛び越えたり分岐路を右に行ったり無数の原生生物を撃ち貫いたりしているうちに、一際大きな扉の前に出た。

「ずいぶん奥まったところまで来たけど、まだ出口見つからないの？」

「それは私が知りたいぐらいだ……」

いつ発作が起こるか分からないせい、今すぐ外に出たい気持ち強い。扉には翼や心臓を握った手に足および尾を持った赤い蛇……いや、頭部が龍に似た形をしていたから龍なのだろう、その形をした刻印が刻まれていた。

「ふむ……」

周りに彫られた文字や絵も興味深い。何かを拝むヒトの絵を見るからにココは何かを祭る施設だったのだろうか、後で兄に依頼して調査団を結成して調べてもらおうと思う。

「あ、扉も開くみたい。入ってみよ」

エミリアがそう言うと同時に刻印が鈍く輝き、扉が開く。先に入って周囲を見渡したエミリアは何かに怯える様な声で私に向かって言った。

「うわ……ここにあって全部、大型の自律機動兵器だよ」

彼女の言うとおり周りは何かを護るかのように彼女の言う大型の兵器……キャストが居なかった頃の名残だろう二手二足の直立歩行型のスタリティアで囲まれている。そして、その周りに囲まれて在るものを見据えた時、私は心臓が高鳴るのを感じた。

「ん？ あそこにあるのを見てるの……？」

エミリアが私の視線に気付いたのか目線をそちらに向ける。それを見た彼女は怪訝そうな表情をした。

「うーん……他のと比べて黒くて紅い装飾が施されてるみたい。

それがどうかしたの？」

「あ、ああ……あれが気になってな……」

高鳴る鼓動を抑えながらエミリアが言う『紅い装飾が施された黒のスタリティア』を見据える。恐らく自分が求めているものは、あれをどうにかしない限り手に入らないだろう。

「ふーん……ま、この部屋で行き止まりみたいだし別の道に行きましよ。確かさっきの通路を右に曲がったから左の方に行ってみよ？」

私はエミリアの言葉に我に返る。もう既にマッピングは済ませてあるから、後は兄の下へ戻るだけだ。

(あわよくばここで回収と行きたかったが……)

どうせまた来る事になるのだから慌てる必要も無いだろう。何せこの所在を知っているのは私と彼女のみだ。

問題は彼女の言う『おっさん』と言う人物に言っただけで彼女らの組織と争奪戦になる可能性があるかもしれないと言う事だが、そうなら仕方が無い。正直にウォザーブルグ動乱の件を話すか金で解決するかどちらかだ。

“それ”の見た目は無害そうなので『“それ”は危険だ』などと言っただけは通用せず、強硬手段に出るのはこれ以上問題を起さしたくないので論外。それにこちら側の話を信用してくれなかったらおしまいだが、金で解決できるならそれに越した事はない。

彼女と行動しているのは緊急事態であるためなので、彼女の属している組織との接点も無いので今後の事についての相談も出来ない。今回は諦めるしかない。



「そう、だな……」

「ギユスターヴ……今のアンタ、ウルスラさんに禁酒令出されて目の前にお酒があるのに飲む事が出来ないおっさんの雰囲気似てただけど？」

その例えはどうかと思うが、ある意味的を得ているので反論できない。

「アンタが何を欲しがってるのか知らないけどさ……ただでさえこつちを見てて怖いのに、もし動き出したらって思うと……ねえ、早く戻ろつよ」

彼女の言葉に頷きつつ、引き返そうとする。欲に目が眩んでスタリティアを起動させてしまったのでは話にならない。そう考えた矢先のことだった。

「……」

一瞬だけ、最初の広間の時以上の発作が自分の身を襲い

『…………我が眠リヲ…………妨ゲタノハ主ヲカ…………』  
その刹那、黒と紅のスタリティアが起動した。

「ちよ！？ スタリティアが喋った！？ 今までこんな事って無かったのに…………！！ 大体、言った側から動き出さないでよ！！」

エミリアが驚愕の表情を浮かべたが、私は2つの事を考えていた。スタリティアが喋った原因は“あれ”が原因だと言う事だと言う事と、“あれ”を入手するためには目の前のスタリティアを倒さなければならぬということだ。

（恐らく戦うしかないか…………だがこれで“あれ”を堂々と手に入れることが出来る！！）

動いた事による驚愕よりも、“あれ”を手に入れることが出来るという歓喜に支配されながらも私はエミリアに向かって叫んだ。



「……わかつたよ、あたしも覚悟決める！！ あんたの実力……  
信じてるからね！！！」

「……任された。それでは……」

その言葉を合図に私は銃口を頭部に向けて放ち、声を上げて叫んだ。

「戦闘、開始！！！」

それを合図にエミリアも私から遠ざかりフォイエや雷系テクニク・ゾンテを放つ。彼女のマドウーグもそれに続いた。

『ホウ……二手二分カレタカ……』

私が銃を相手の間接や頭部に向けて放ち続ける。あの手のタイプは頭部か間接を破壊する事で無力化するタイプだ。まずはそこを狙う。

『小癩ナ！！』

だが相手も狙いが分かっているのか手にした武器を振るって銃弾を防ぐ。しかしこれで

「ほいっと！！！」

エミリアの叫びに呼応してロッドから炎、彼女の側に浮いていたマドウーグから雷がスタリティアの背後に直撃する。

『ナッ……！！』

「はあっ!!」

動きが止まった隙に再び銃撃、シャドウグの援護も忘れない。敵に遠距離攻撃は無いが武器を振り上げ、こっちに向かつて跳んできた。

「くっ!?!」

咄嗟に跳んで避けたが、シャドウグが攻撃に巻き込まれて粉々になってしまう。何とか立ち上がって斧状の武器を射抜く。斧は柄が二つに分かれ、刃がついてない方の柄が地面に転がった。

「やった!! これであの斧の攻撃は無くなった!! と言うわけです。景気付けにもう一発!!」

エミリアが喜ぶと再びフォイエを放って頭部に直撃させる。すると頭部が直撃した影響でぐらつき、地面に転がった。

「…………倒せたの?」

流石のエミリアも怪訝そうだが、私は息を呑んだ。スタリティアが徐々に罅割れていき、中から炎の渦が吹き溢れて来たのだ!!

『…………フン、所詮1万年近クノ骨董品力…………ホンノ少シノ攻撃デ首ガ落ちルトハナ…………』

罅割れた身体からまず悪魔の様な翼が生え、腕の装甲が碎け散ると一部が紅く染まった黒竜の腕が現れる。脚も同様で腰部からは黒き尾が姿を現し、頭部があった場所からは悪魔の角を持った竜の首が生える。

己が解放された歓喜の咆哮を上げ、スタリティアの装甲を完全に吹き飛ばす。脚を一步前へと進めて転がった頭部を踏み砕き、炎を伴い姿を現したその姿は正に

「炎魔竜……レッド・デーモンズ・ドラゴン……」

禍々しさとある種の神々しさを兼ね備えた炎魔竜が姿を現す。私がかつて星屑の竜を報告書で見た事はあったが、それとは別の……否、私にとって星屑の竜以上の美しさを持ち合わせていた。

嗚呼認めよう。私はその存在に心を奪われ魅了された。豊富な資産を全て投げ打ってまで手に入れたいと思ったのは生まれて初めてだった。

「あんたの顔……滅茶苦茶すごいんですけど!？」

エミリアも私の顔を見て引いていた。それを聞き、私は現実に戻って気を引き締めた。とは言え、やはり興奮は隠せない。

「炎魔竜の力……貰い受けるぞ!!」

私はそう叫ぶと同時に銃を炎魔竜に向けて放つが、竜が腕を振るとフォトンの弾丸を消し飛ばしてしまう。生半可な攻撃では攻撃は通らないという事か。

『次ハ我ノ攻撃ダ!!』

腕に炎を灯す炎魔竜だったが、すかさず鋭い爪と共に腕を私に向けて振り下ろす。

『アブソリユート・パワーフォー스!!』

その叫びと共に私はツインハンドガンを爪が触れる直前に交差させて防ぐ。しかしシールドではないとは言え攻撃の余波が私を襲い吹き飛ばす。

「!!」

壁に叩きつけられ、握っていたものを見ると驚愕した。ツインハンドガンの砲身が曲がっていたり装甲が罅割れていたりしていたのだ。フォトン溜め込むフォトンリアクターも損傷しジャンクパーツにも使えなくなったそれを放り捨てた代わりにセイバーを2本取り出す。セイバーは青い2枚刃の刀身を持つMAW製の試作武器『イグザム』の二刀流……言うなれば『イグニス』だ。

「炎は効きそうにないし、今度は氷!!」

背後でエミリアが氷系テクニクの初歩・バータを発動させて竜を襲うが、その竜の炎に阻まれて瞬く間に蒸発してしまう。

「やはり生半可な攻撃では通用しないか……その上守備も通用しない……」

「笑いながら言うなー!!」

エミリアの叫びに耳を貸さずに私は己の考えに没頭する。彼女の様に氷属性で戦うというのも悪くないが、それも強くないと炎によって溶けてしまうというおまけつきだ。

「だが……」

それでも口元に笑みが浮かぶ。最初からこの程度で倒れるはずが無いと確信していたからだ、それを乗り越えずにして炎魔竜の力を得ようなど甘いを通り越して愚かとしか言いようが無いからだ。

相手は1体であり街に押し寄せてきたSEEDの大群の様な数の暴力はない。相手はディ・ラガンと同様の竜型原生生物のような形をしており落下してくるGコロニーの様な人間ではどうしようもない理不尽な存在でもない。

まだ勝機は十分にある。

「それが分かっただけで、十分だ」

イグニスを振るって炎魔竜に襲い掛かる。まずは左のセイバーで縦に竜の右腕を斬りつけ、続けて右で同じようにして斬る。

止めはセイバーを交差させて突進、右腕を斬りつける。小型の敵には滅多に当たらないが、これだけ巨大な敵ならば当たる場所は好きだけある。



『ホウ……少しハヤルヨウダナ』

だがこれでも不十分。炎魔竜の身体は硬く、十文字の傷をつけるだけに留まった。それでも今の自分の武器の中でも最強の武器なのだが炎魔竜に通用しない事が分かってしまった。

シャドウグやツインハンドガンは壊され、シールドはツインハンドガンの例を見て役をなさない。手持ちの武器では倒す事は出来ないだろう。

ならば考えられる手は1つ。自分の持つ異能を解放させるのみだ。

「使うしかない、か……」

私はそう決意すると懐から“ある物”をハンドガンやセイバーの時以上に慣れた手つきで取り出す。“それ”を見た炎魔竜はニタリと笑い攻撃を一時中断した。

「え？ なに？ なんで攻撃を止めてるの……？」

エミリアは呆然としながらもテクニクを放ち続けたが、2、3発放った後に攻撃をやめて私の方へ向かった。

「何をしようって言うの……？」

「エミリア。私はこれから自分の異能を使わせてもらう」

エミリアが首をかしげる中、私は“あるもの”……カードの束から2枚取り出すと、まずは1枚目を振るう。

「いでよ、ビッグ・ピース・ゴーレム……」

私の声を合図にカードが輝くと、地面から巨大な手足を持った岩石兵が姿を現した。そう、これこそが我が一族に伝わる“異能”。カードに纏われた意思や歴史を読み取り、それを具現化させる能力だ。それを用いる力を持った集団こそが我が一族である。

「え？ ええ！？ でゆ、デュエルモンスターのカードが実体化したあ！？」

エミリアも呆然とするが、私は続けてもう一枚のカードを振るう。

「続けてフレア・リゾネーターを召喚する！！」

そう言っただけ姿を現したのは先程破壊されたシャドウグのモチーフとなった悪魔の背に炎を宿したモンスターだ。そして私は一族が持つ異能の中でも最強の術を発動させる。

「レベル5のビッグ・ピース・ゴーレムにレベル3のフレア・リゾネーターをチューニング！！」

その声を合図にフレア・リゾネーターが3つの輪に、ビッグ・ピース・ゴーレムが5つの星となる。輪が私を飲み込み星が身体に入り込み、星と自分の意識を同調<sup>シンクロ</sup>させた。

「王者の決断、今赤く滾る炎を宿す真紅の刃となる！ 熱き波濤を越え、現れよ！」

同調を高めるため、私は祝詞のように声を紡ぐ。その刹那、炎が身体を飲み込み自分を新たな姿に作り変える。

「我が身に纏え炎の鬼神、クリムゾン・ブレードー！！」

一瞬だけ炎が紅い鎧を纏い双振りの刃を持った騎士の姿が映し出され、私は鎧に纏われ剣は私の腕に握られる。

「な、なに！？ 何が起こったって言うのよ！？ デュエルモンスターズの実体化に、それを用いた融合！？ 何が何だかわからないわよ！？」

エミリアが驚愕の声を上げるが、私達の耳にはそれは届かない。互いの姿しか見えない、互いの声しか届かない。

クリムゾン・ブレルタド・デーモンズ・ドラゴン  
紅騎士と炎魔竜。今この場に2つの赤の名を持つ存在が姿を現した。

「ホウ……同調力……ソレガ貴様ノカト言ウワケカ……懐カシイナ……ダガ容赦シナイゾ！！」

炎魔竜（彼）は笑うと口に炎を溜め込む。それは正に地獄ヘルの業火フレアを思わせる炎の弾丸だった。

「ああ、これで決着をつけようか。お前を倒し、その力を貰い受ける！！」

紅騎士（私）もつられて笑うと剣に炎を宿す。炎を宿した剣、何度か炎属性のツインセイバーを振るった事はあったが、これに勝るものは無かった。

「……………」

エミリアは呆然としながらも既に私の後ろに居る。後は敵の攻撃を防ぎ、相手を切り伏せるのみだ。

『行クゾ……クリムゾン・ヘル・フレア!!』

炎魔竜の口から炎が濁流のように吹き荒れ、私と背後に居たエミリアを襲う。私は背後に居るエミリアが巻き添えを食らわないように剣を炎にかざし、それを受け止める。

「ぐぐぐ……」

だが徐々に炎が私の腕を侵食していく。鮮やかだった鎧が赤黒く染まっていく中で、私は剣に込める力を強くする。

「ここで終わるわけには行かない!!」

そう、私はかつて一族が誇ったチームの最後のメンバーとしてのプライドがある。プライドを無くした傭兵や政治家は、己の生業を淡々とこなす始末屋と政治屋に成り下がる。故に私は一回もプライドを捨てた事は無い。

だからこそ、ここで終わるわけにはいかない。私の名に……私の矜持に賭けて、全てを断ち切るわけには行かない!! ここで終わったら、私は彼らの名を汚す事になるからだ!!

故に炎の奔流ごとくで屈するわけには行かない……そう思った刹那、心臓が強く脈打つ。だがその鼓動は今までのものと違って自分に力を貸すような鼓動だった。

「はあああつ!!」

その鼓動に乗って腕を振るう。剣に纏わりついた炎は縦に両断さ

れ、両側の壁に叩きつけられた。

『!!』

「これで止めだ!!」

私は手にした双剣で炎魔竜を縦に切り裂き、続けざまに剣を交差させて突進する。先程のアーツと同じ構え……だが今回は剣に宿した炎で相手を切り裂く!!

「燃え滾れ、レッドマダー!!」

私の叫びを合図に交差させた剣を振るい、十字の傷を胴体に斬りつける。それと同時に私の身体に宿っていた紅騎士の鎧と剣も消滅した。

『…………見事ダ…………』

炎魔竜はただそれだけを言うと十文字の傷跡からあるものが姿を現す。その直後、炎が炎魔竜を飲み込み、それが消えたときには炎魔竜も姿を消していた。

「…………え？」

エミリアは呆然とする。恐らく彼女は信じられないものを見る様な眼で目の前のものを見ているのだろう。

無理も無い、彼女を怯えさせた存在の正体らしき物は…………一枚のカードなのだから。

『汝、我が力ヲ振ルウニ値スル。我が力、存分ニ振ルエ』

消えたはずの炎魔竜の音が響き、私は姿を現したカードに近づくと王から剣を受け取る騎士のようにそれを手に取った。

「分かった。炎魔竜…………レッド・デーモンズ・ドラゴンの力、しかと受け取った」

## 異能者（後書き）

さて、ようやくレモンを手に入れたギユスターヴですが本来のプロットではここでギユス死亡 ミカ登場となったわけですが、まだ転生者についてまだ悩んでいます。

そもそも現時点でアンケートに協力してくれたのが1人と言う有様なのです……と言うわけで延長します。

後なんでレリクスにカードが在るんだよ、と思った方に言います。

遺跡にカードなんて遊戯王じゃ珍しくないんです。



## 謎の襲撃者（前書き）

投票者一名でしたが、彼の意見の元小説を書いていたのもう出来てしまいました。

よってこれからはこの方針で行く事にします。

## 謎の襲撃者

先程の部屋を出て、分岐路の所に戻った私達。そこを左に曲がったところで私達が見たものは……

「……」

「……階段？」

どう見ても下に下りる階段だった。それを見たエミリアが盛大に溜息を吐いた。

「……これ以上奥へ行ったら遭難するわよ。出口も見当たらないみたいだし、そろそろ戻らない？」

エミリアの言葉に私は頷く。望みの品は既に手に入っている以上ここに居る理由はもう存在しないし、後は調査団の護衛などで再び来る事になるだろう。

「そうだな」

「それじゃ戻りましょ。一応マッピングはしてたんでしょう？」

私は携帯型マップを参考にして戻る事にする。幸い畏とかは既に解除ないし排除していたので行きと比べてスムーズに進行した。

「フーン、アンタの一族ってそう言う一族なのね……」

その道中、私たちは話しながら進んでいた。エミリアに見せた以上隠す必要は無いため、私は素直に自分の力について話した。

「デュエルモンスターズに描かれたモンスターや魔法を実体化させる事の出来る一族か……遊戯皇とかでよくある能力だけど、まさか実在してたなんてね……」

「ああ、確かサイコ決闘者だったな？」

遊戯皇とはグラールで大人気のデュエルモンスターズ販促アニメであり、様々なシリーズで放映されている。サイコ決闘者と言うのはその中でもカードを実体化させて自分の手足のように操る事の出来る我々異能者に似た設定の事だ。

「そうそれ。後はカードの精霊云々ね。まあ、眉唾だと思ってたけどそれもあるかもしれないわね……」

「ああ、存在するが？ 少なくとも私の一族では何人か見る事が出来たからな」

私の言葉に驚くエミリア。続けて私はあることを話す。

「一応話しておくが、私の本来の目的はレリクスに存在しているカードの入手もしくは確認だ。あるかないかまでは分からないからな」

「あー、そうでしたか……今更驚く事じゃ無いですけどねー」

ウオザールブルグ動乱の件については追々話すとして、これだけは言っておきたかった。

「あと我々は異能者であることはなるべく隠していきたい。デュエルモンスターズがこのグラールを生きる人々の支えになっている以上、表に出て脅かすわけには行かないんだ。すまないが……」

「あんた達の事は内緒にして欲しいって事でしょ？ 分かっているわよ」

エミリアの顔には『義理』と言うより『付き合いきれない』と言う感情の方が強かったが、むしろ後者の反応の方がうれしい位だ。義理感情で巻き込んでしまったらどうしようもない。

「ま、アンタが普通の武器使ってる時点で、内緒にしたかったつてのもあるんでしょ？」

「すまないな……」

私が礼を言うとエミリアも笑いながら言う。

「ま、あんたが居なきゃあたしも無事じゃなかったんだしいいわよ。これで貸し借りはなして事で」

にこやかに笑うエミリアに私も口元で笑みを浮かべる。そして腹ごしらえをしていた広間に差し掛かったとき、私は眉間に皺を寄せた。

「……!?!」

眼前に殺気が吹き荒れているのだ。しかも明らかに私だけに向けられているのにエミリアの身体も硬直する程の物だ。

『……コノ感覚……マサカ奴ラカ!? 気ヲツケロ!!』

「奴らだと? 一体どういうことだ……?」

炎魔竜の声が響き、私は奥の方に目を向けると同時に1人の男が姿を現す。耳の長さから言ってヒューマンだろう。SEEDフォームでもない以上、警戒する様子は無いと思うのだが……

「ようやく見つけたぜ……ロリシヨタキャストがいたし地震も起きたからテメエらを探していたんだが迷ってしまつてなあ……あのクソキヤスト、態々残ろうとしてたオレの邪魔しやがつてよお……しっかし『原作』と道も違つてるしどうなつてんだよ……?」

美の女神にわがまま言つたのではないかと思わせるほどの整つた顔立ちに紫色の髪、黒い鎧の様なものを纏つた上には赤いコートの様なものを羽織つた青年がそこに居た。だがその眼は今も私を見据え、射殺す様な雰囲気を持っている。

「お前は何者だ? 何故私をそのような眼で睨む? 私とお前は初対面のはずだが?」

「ああ初対面だぜ。でもよ、よりもよつてテメエファンタシースターポータブル2系の主人公の座にちやつかり収まつてるんじゃないか。ポータブル1とかユニバースとかだつたら百歩譲つて許してやつたけど、よりもよつてポータブル2だろ? 温厚なオレでもカチンと来ましたよお、テメエがそこに居たんじゃオレの目的が果たせないじゃねえか」

『ファンタシースターポータブル2系』? 『ポータブル1』?  
『ユニバース』? 私が居たら彼の目的が果たせなくなる? 先程言つていた『原作』と言う言葉といい、さつぱり訳が分からないな。

「で、あたし達になんかよう? 出口教えてくれるの?」

「教えたいたいのには山々だがなあ、俺が知つてる海底レリクスと道が違つてるんだからこつちが知りてえよ、ツーかここで鉢合わせだしミカからテテイの花の匂いがしたからそれを追つてきたから良かったけどよ……」

また知らない単語が出てきた。『ミカ』はヒトの名前だと思われ名称だからいいとしても、『テティ』と言う花の名前は聞いた事が無い。私が考え事をしてしていると、エミリアが眼を鋭くさせながら声を上げた。

「ミカ？ 誰の事言ってるの？」

エミリアの疑問も尤もだが、目の前の男はエミリアの答えに対して子供でもわかる様な問題に答えられないモノを見る様な顔つきで呆然としている。何がおかしいのだろうか？

「はあ？ 何を言ってるんだ、自分の事なのに……ああ悪い悪い、今はまだ見えてなかったんだよな！！ 見えてないものを認めろって言いすぎたわオレ！！」

すると男は勝手に自己完結して答えをはぐらかす。すると彼は話をするのも飽きたのか私に向かって声を上げた。

「ああ、エミリアは俺が責任を持って連れて帰る。だからテメエはココでのた打ち回ってる、安心な殺しはしねえって」

私を物でも見るかのような眼で腕を上げると無数の武器が姿を現す。武器を見ただけでも分かる、あれは強大な武器だという事に！！

「さて、このチート宝具『王の財宝』の力を見せてやるよ！！」

男が指を弾く音が響くと同時に武器が弾丸となって私に襲い掛かってきた。私は手にしたイグニスでそれを捌くが、しばらくするとイグニスの方にも限界が訪れたのか刃を形成しているフォトンが消えうせてしまう。

「イグニスのリアクターまで!? よりによってこんなところで!?」

「ヒヤッハア!!! 武器が釈迦になっちまったようだな!!! オレの宝具はまだまだ弾切れにや程遠いぜ!!!」

男がそのようなことを言って私に向かって武器の弾丸を投げつけて私を壁の方へ吹き飛ばし、ついでに剣が弾丸となって私の両腕を縫い付ける。

「ぐっ!!!」

「ギユスターヴ!?」

エミリアがパニックになるが男は私に近づき、左腕に刺さった剣で私の傷口を抉ってくる。

「!!!」

「はいおしまいっと、テメエ殺したらあのスタリティアと同じ目に遭っちまうからこの辺で勘弁してやるよ。良かったな、オレが優しすぎる奴だよ?」

今もなお傷口を抉るお前が優しいだと? これで優しかったら『優しい』と言う概念自体が疑われるのがオチだ。

「ま、これでオレがこの物語の主人公になるって訳だ。エミリアもナギサも女連中はオレが幸せにしてやるから、ここで一生過ごしてな。運がよければ誰か来るって、多分な」

もう興味を失ったのか、奴は私に後ろを向ける。私が武器を失ったからといって後ろを向くとはなんて愚かな行動を取ったのだろう。私は即座に右腕のナノトランサーからカードを1枚取り出す。そ

のカードを見た私は小さく声を紡ぐだけにとどめた。

「出る、ダーク・リゾネーター」

そう言っただけ姿を現したのは私が子供の頃から愛用しているカードであり、私で使用していたシャドウグのモチーフとなったモンスターだった。暇な時には周囲の目が無い時にこのカードを実体化させ、実体化や同調の練習にも付き合わせた程だ。

私が右腕を見てからリゾネーターに目を向けると、即座にリゾネーターは頷いて右腕に刺さった剣を引き抜こうと躍起になって汗を出しながら行動した。

剣が抜け落ちて右腕が自由になると、即座に右腕で左腕に刺さった剣を引き抜く。抉られた痛みからか激痛が走るが音が響いたのか男はこちらを見て驚いていた。

「テメエ!! どうやって剣を抜いたんだ!？」

「勝手に抜け落ちたんだろう? 私のせいにするな!!」

リゾネーターは剣に押しつぶされていたが抜けた時点で消しているため、姿は見えていないだろう。私は抜いた剣を握り締め、男に襲い掛かった。

「おい!! 勝手に人の宝具を使ってんじゃねえぞ卑怯者!!」

「だったら人を突き刺す道具にしなければいいだけだろ? 私のせいにするな!!」

片手で持てる細剣の様な剣だったのが幸いしたが、もしこれが両手剣だったらまずかった。今私の左腕は傷口を抉られていてまともには動かし難く握ったりできる状態ではない。

「くそっ!! なんだって言うんだよ!? エミリアにはニコポもナデポも通用しねえし、なのはやネギませ口魔は転生できないっ



て言われて、しゃあねえからココにきたら既に主人公の座は埋まってるし！！　ココで負けたら転生した意味なんかねえじゃねえか！！」

喚きながら剣や槍の弾丸を放つ男。しかしエミリアが横からフォイエを男に放つと、それを避けれずバランスを崩す。

「なっ………テメ………なんでオレを攻撃したんだよ………！？」

「いきなりあたしを口説こうとしたアンタより、ギユスターヴの方が信用できただけよ！！　そもそもあんな状況でにこやかに笑ってくる奴なんか信用できるか！！」

エミリアが作ったチャンスが無駄にはしない。私はすかさず男に接近し、突き刺そうとした。

「甘いんだよ！！」

だが男は両手剣を取り出すと私に向かって振り下ろすが私はそれを横に避ける。そうなれば後は互いに細剣を振るうだけの間合いだった。

「はっ！！　たあっ！！」

私は一族の中でも本家に近い出身だったため、嗜みとしてのフェンシングに心得はある。異能がメインであるため基礎しかやらなかったため、あれほどの武器を雨のように放った人間には叶わないだろうとも思っていた。

「くっ！！　くそっ！！」

だが蓋を開けてみれば男は力もあつて動く速度も速いが、細剣を持つ構えや残心が素人のそれに近い。まるで強い武器があれば達人に勝てると思つてゐる節もあつたし、気のせいかこちらを見下してゐるといふ雰囲気にも思える。私は相手の剣先をいなし、起動を逸らして

「これで止めだ!!」

更に一步踏み込んで剣先で心臓を貫く。男が仰向けになつて倒れると、私は男が手にしていた剣と男が撒き散らした武器の山を拾つてナノトランサーに収納する。当然自分が使つてゐた細剣も収容しようとしたが既に許容量を超えてしまつたので溜息をついた。

「い、いいの?」

追いはぎもしくは火事場泥棒同然の私の行動にエミリアが責める様な声で言い出す。とは言え最近はフォトンの量も減少傾向だし、従来のフォトン溜め込むカートリッジの製造が禁じられたため、このような実剣の需要は高まつてゐるのだ。闇市で売つてもよし、自分で使つてもよし、多くて困る事は今の様な歪曲空間に収容できる限界量だけだ。

「資源枯渇の影響で、武器とかも無駄遣いできないんだ。イグニスが壊されたのは痛かつたぞ」

炎魔竜との攻防で破壊されたツインハンドガンやシャドウグは必要経費だと割り切るが、目の前の男に破壊されたイグニスは予想外の出費になる。幸いデータは無事だから後でMAW社に提出しておこつ。

「そ、そう言うもの……？ まさかSEED事変とかでもやってたんじゃ……」

「やってたが？」

そもそも死人に金銭や武具は必要あるまい。それが大金や強い武器なら尚更だ。事後処理などで提出するものとはかく、それ以外のものは物々交換で交渉する道具にもなる。

「……本当にアンタって傭兵なんだね……」

「生きていくためだから……」

私たちはスポンサーが居たからまだマシだったが……と心の中で呟く。ここに居ても意味は無いので脱出させてもらおう。

だがそう思った矢先の事、私は信じられないものを見た。エミリアも私の雰囲気気付いたのか、私が見ている方を見ると同じ様な表情を浮かべる。

「え……うそ？」

彼女の言葉も頷ける、何せあの男が立ち上がっているのだから。私はあの時確かに心臓を貫いたのだから生きているはずは無い。だが目の前の男は怒りを露にした表情でこちらを見据えていた。

「あークソツ！！ テメエ、オレの宝具何勝手にかっぱらってんだよ……！」

「何故だ！？ SEEDフォームですら致命傷を負わせたら消滅した！！ なのに何故お前は生きているんだ！？」

男の怒りも聞こえず私は狼狽していた。当然だ、心臓を貫かれて生きている生命体は存在しないし、キャストですら中枢部を射抜か

れたらそこでおしまいだ。なのに目の前の男は生きている、どういうことだ!?

「バツカじゃねえの!?! 誰がんなこと教えるか!?! オレから主人公の座だけじゃなく宝具まで奪おうたあいい度胸してんじゃねえか!?! オレを本気にさせたこと、後悔するんだな!?!」

そうやって男は再び武器の弾丸を放つ。私はエミリアを投げ飛ばしたものの、今度は腕を縫い付けるだけに留まらず武器の弾丸は私を飲み込んだ。

「!?!」

不意に地面に倒れこむ。左腕と両足の感覚が無い。視界が紅く染まる。上手く呼吸が出来ない。誰が何を言っているのか聞こえない。

(私は……死ぬのか……)

意識が朦朧とする中、私はそんな事を思っていた。せつかく炎魔竜のカードを手に入れたというのに、ここから出る事も叶わず終わりを迎える事になるのか? 一度も炎魔竜の使わずに私はここで朽ちる事になるのか?

(ふざ、けるな……)

そう思った瞬間、心臓が激しく脈打つ。自然と私の腕は何枚かのカードを探り当てていた。幸い奴は私に興味を失ったのが、エミリアの方に近づきなにもやら話し込んでいるが、当の彼女は怯えたままだ。

奴の目線が私から離れている以上、好機は今しかない。

(……バイス・ドラゴンを特殊召喚し……ダーク・リゾネーター  
を召喚する……)

私は探り当てたカードに描かれた魔物を召喚し、千切れかけた右  
腕を高く掲げる。

(レベル5の……バイス・ドラゴンに……レベル3……ダーク・リゾネーターをチューニング……)

それは先程私が紅騎士を宿すのに用いた異能の中でも最強の術でもある同調。だが今から召喚するのはそれではない。その証拠にあるのは緑色の星と輪だったものが、今回は赤い火の玉と火の輪となっている。火の気配を感じ取ったのか男が驚いた表情でこちらを見据えるがもう遅い。

『王者ノ鼓動、今ココニ列ヲ成ス……天地鳴動ノカヲ見ルガイイ

……』

私以外の存在の声が唯一感じ取る事が出来る魂に響く。恐らく炎魔竜のものでろう声と同時に炎の玉と輪が私の身体を飲み込む。

『我、今ココニ復活セリ！！ 炎魔竜レッド・デーモンズ・ドラゴン……！』

炎が吹き荒れると同時に私の身体も変質していく。肉体が炎魔竜

の身体となり、爪も鋭く伸びる。米神から角が生え、背中から悪魔の様な翼も生える。エミリアの驚愕する顔と男の癩癩を起こした顔が見える。特に男はありえないものを見ているかのような表情となっている。

「な、何で250円竜が、遊戯王のカードがファンタシースターの世界にあるんだよ!? しかもなんで融合してんだよ!? あれか!? 遊戯王じゃよくある事だっけって言いたいのか!? だったら融合なんかしねえでハーレム要員のブラマジガールや霊使いをだしやいいじゃねえか!」

人間サイズに縮小された炎魔竜と化した『私』はかつて炎魔竜が行った様な腕に力を込める動作をする。男の背後から武器が再び姿を現す。

だが遅い。

『アブソリュート・パワーフォース!』

武器が出される前に私は腕を振るい、男を掴み上げる。そして男を放り投げて柱に叩きつけると、歪曲していた空間も消滅して武器は地面に落ちる。

(エミリアは……ああ、無事か。それに眠くなってきた……兄上には悪いが私はここまでか……それでも、あいつのせいで死ぬよりかは、いい結末だな……)

自分の近くで驚愕の表情を浮かべるエミリアを見据え、彼女の無事を確認したところで安堵した時、私の中の“ナニカ”が切れ



あたしは先程の戦いを呆然と見据えていた。自分を庇ったギユスターヴに致命傷を与えた男が、何事も無かったかのように笑顔を浮かべながら自分の頭をなでようとした時、ギユスターヴの身体が炎に包まれると以前戦った炎魔竜の姿となつて男を襲う。

男は武器の弾丸を放とうとしたがそれよりも早くギユスターヴ……いや、炎魔竜が男の顔を掴み上げ柱に向けて投げつける。それで戦いは終わり。ギユスターヴは元の姿に戻つて地面に倒れこんだ。両足は無く、左腕は肩から千切れている。右腕も倒れた衝撃で肘から先が完全に千切れ、身体から離れている。貴族の様な服も黒地に赤いのか赤地が黒いのか分からないくらい変色しており、金髪も紅く染まつたりしている。明らかにギユスターヴは息絶えていた。

「ねえ、起きて……起きてっばー!!」

声をかけているが身動きも言葉も出さず、声が虚しく響くだけ。いや、後ろの方で誰かが立った様な音がした。

「なんで……？ 何で皆あたしをおいてっちゃうの……？ あたしを一人にしないでよ！！」

しかしそんな事よりギュスターヴの惨状のせいであたしは涙で滲んで目の前が見えない。後ろから無数の武器の弾丸が迫る音が響く。

「誰か！！ 誰でもいいから……」

武器の弾丸があたし達を飲み込まんとした時

「助けてよおおお！！」

そしてあたしは目の前が真っ暗になった。

太陽の様な黄金の輝きが武器を包み、構成を分解していく。発生源となったエミリアから幾何学模様のような痣が浮かび上がり、背には太陽の様な光輪が姿を現す。

その光輪から放たれた光は周囲を飲み込み、自分達の周囲にいた存在を消滅させる。そしてエミリアは……否、エミリアの姿をした『ナニカ』は彼女の口を借りて囁いた。

『あなたを……死なせはしません……!!』

その言葉と同時に“彼女”は腕をかざし、ギュースターヴを黄金の光に包ませた

「…………クソツ!! どうなってやがる!!」

俺は脇腹を手で押さえながら通路に座り込んでいた。俺の傍らには緊急チームのメンバーになったバスケットとか言うキャストの治療を受けながら吠える。

『この治療が終わり次第、俺は奴の後を追う。アイツは危険だからな』

バスケットも無事じゃすまねえ状態だがな。とは言え奴の狙いはあのバカ…………いや、家の会社の乗っ取りだって事は知っている。本音を言っちまえば今こうしている時間も惜しいぐらいだ。

『…………すまない、一刻も早く追いたいのはお前の方だったな』

「んな面すんじゃないよ…………」

奴のせいで俺の過去を知っちまったバスケットがすまなさそうに顔を逸らして言うと、溜息を吐くしかなかった。

事の始まりは俺が…………いや、タダ飯喰らいのバカを含めた俺たち

が海底レリクスの調査の依頼を受けてランク別の依頼を調達しに依頼者の元へ向かっていた時からだ。

俺は奥深くにある“レリクスの遺物”の回収、あのバカには初心者にも出来るレリクスの生態系の調査を受けさせようとした時に地震が起こった。意外と大きく、俺も思わずバランスを崩しちまったもんだ。

昨日の酒が残ってたのかと考えていたんだが、今はそんなことはどうでもいい。今は依頼の調達が優先だ……そう思った矢先、後ろの方からドタバタと走る音が響いて振り向いたら逃げるヒトの群れがあった。俺を押しつけて一斉に喋りだすから五月蠅いの何の。

で、要約すると地震があつてレリクスが起動、扉が閉まりそうになったから一斉に走り出した……と言うわけだそうだ。その結果、何人かがキャンセルだなんだとかで騒ぎ出してココから離れちまった。

そんな時は『ギャラが増えるゼラツキー』程度だったが、傭兵の数が少なくなるに連れて俺はあのバカがいないことに気付いた。近くにいたキャストの男……バスクにあのバカの特徴を話した上で聞くと、そいつもパニックつたような声を上げた。

更に聞いてみれば取り残されたのはあのバカだけじゃないって事だ。依頼者にその事を話すと、急遽救助チームが組まれる事になった。つっても残ってるのはバスクともう1人……ヒトを見下した様な面をする紫色の髪に古臭いゲームに出てくる様な黒い鎧と赤いマントを着たブチギレそうな野郎とチームを組む事になった。

どうやらあのバカどもは何故か奥に進みやがったみたいで、俺ら

も奥へ向かって行った。奥に行っても奥に行っても追いつく気配がまるで無い。

「あのバカ、何処ほっつき歩いてやがる！！勝手にウロチヨロしやがって！！」

俺はそう叫ぶと同時に死骸を蹴りつける。スタリティアの残骸や原生生物の死骸、罾が破壊された跡を頼りに行動しても追いつきやしねえ。

『だが2人の実力は高いようだな。こうまで奥に進めるとは並大抵の傭兵では出来ない事だ』

俺は……何故か隣にいた奴もバスクの言葉を聞くと笑っちゃまった。何せあのバカは碌に働きやしねえロクデナシだ、となるとこの惨状を作ったのはもう一方の方になる。

『そうか……では奥に進むとしよう。ココで休んでいる暇は無い……』

バスクがそう言うのと奥に進む。ああ、その矢先だったんだよ。

「あーもう！！ほんつとに使えねえのんだくれのおっさんに口リシヨタキャストだなあ！！だからオレの事放っておけって言ったのによー！！」

指を弾くと同時に俺とバスクは奴に攻撃されちゃったって訳だ。そいつはナノトランサーを複数使ってんのかって叫びたくなるほどの武器の雨を降らせやがった。

しかもアイツは俺の思い出したくもねえ過去を知っていやがった。

その事を話しながら奴は俺に攻撃しやがったし、エミリアたちを自分の物にするってほざきやがったから、ナノブラストを暴走させてまでして奴と戦ったが、あいつは武器をとつかえひつかえしまくるわ、頭を砕いてもすぐに復活するわでキリがねえ。最後にや俺らをぶった切ってから奥の方へ逃げやがったってわけだ。

「つつつてもよ……奴は何者なんだ？」

俺はそんな事を言いながら立ち上がる。傷は痛むがそんな事なんざどつでもいい。それ以上に俺はいやな事を思い出させやがった奴が気に入らなかつた。

『その事を誰かに話したことは？』

「あるわきゃねえだろ！！ ウルスラとチエルシーにしか言つてねえし、言いふらす様な奴じゃねえ！！」

声を荒げる。一刻も早く追わなきゃならねえって言うのに、アイツが最後に使いやがった黄色の槍のせいで傷が治りやしねえ。

「行くぜ……」

一歩ずつ足を進めていく。傷口が疼き、回復薬を飲みながら前に



進む。そんなことの繰り返しだった。別の広間で蹲って最後の薬を飲んだ時、俺は目を瞬かせた。

「……は？」

全くもって信じられなかった。傷口が徐々にふさがり、痛みが引いてきたのだ。しかも手足の感覚も元に戻っている。

『どうした？』

「……傷が治ってやがる……どうなってんだ？」

俺自身何が起きたかなんてどうでもいい。今は一刻も早く追うだけだ。即座に走るがあのかのバカたちの行動が幸いして障害は何もなかった。俺らが別の広間にたどり着くと、そこにはぶっ倒れているあのかのバカ……エミリアとその近くで倒れている金髪の男、そして

『どうなっているんだ？ 何故奴が倒れている？』

俺らをコケにしやがった野郎が白目を剥いてぶっ倒れていやがった。何が起きたのかわかりやしねえがざまあみやがれて言うのが本音だ。一発殴ってやりたかったが、こうなりゃ後は知ったことじやねえ。奴が起きあがらねえ内に俺はエミリアを、バスケットは金髪の男を担いで逃げ出した。

## 謎の襲撃者（後書き）

本文のようにこれから敵としてチート転生者が跳梁跋扈します。

後転生者さんがブツちやけてくれたせいでクラウチの過去をバスケット先生が知ってしまいます。

前回登場できなかったミカさんを登場させました。次はようやくリトルウイングにご招待です。

## ようこそリトルウイングへ（前書き）

リトルウイングにご招待~~~~なお話です。  
後主人公の過去らしきものも載せておきました。

ようこそリトルウイングへ

懐かしい光景を見ていた……

それはまだSEED事変が起こる前日の事……

「ガーディアンズだと？ お前がか？」

私を含めた3人と1体が食事をしている中、私は青色がかったボディを持つキャストに向かって声を上げた。その一方では黒髪と白髪、2人のヒューマンが一族の異能に必要な不可欠な知る人ぞ知るカードゲームを行っていたが。

『ああ。ま、家って結構協会の上層部と関係深いって話じゃん？  
で、協会とガーディアンズとの技術交換が俺と姉御が行くってさ』

目の前のキャストがキャスト用の栄養ドリンクを飲みながら声を上げる。

「カードを1枚伏せてターンエンド……っと。姉御って……あの人が……エンドフェイズ時にリビングデッドの呼び声！？ しかも対象はメカニカル・ハウンド！？」

黒髪のとけない表情の青年が小さく苦笑いして相手の一手に驚愕する中、残った白髪の青年が声を上げた。

「カードを1枚セット、ハンドレス状態のメカニカル・ハウンドでロード・ランナーに攻撃……レオン、テメエ大丈夫なのか？ 組

織に入るって事は命令に従えって事だぜ？ 今までの様な自由行動は出来ねえぞ……ガード・ブロックか……しくじったな……」

『テムエに比べりゃ俺はまだマシな方だつての！！ 当主には反抗的、協会のお偉いさんとも折り合いが悪い、周囲とも溶け込もうとしない三拍子揃った誰かさんに比べたらよ！！』

私も彼が放った白髪のパルマンに対する酷評に納得がいったので軽く頷いた。確かに彼の行動は目に余るからだ。それを見たのかレオンと呼ばれたキャストは身体を乗り出して声を上げる。

『だろお？ ギユスは話分かるじゃん！！』

「僕のターン、ドロー……レオンさん、ギユスターヴさん、飛鳥だつて悪気があったわけじゃないし……カードを1枚伏せてターンエンドつと」

「カール、レオンとアスカの問題だし言い出したのはアスカの方だぞ」

カールと呼ばれた黒髪の青年を嗜める私だったが、ある事を思い出してレオンと呼ばれたキャストに向かって声を上げた。

「とは言えお前、キャストなのに計算苦手だったではないか。アスカの台詞ではないが大丈夫か？」

『あー。まあ、人には向き不向きがあるって事で』

レオンが顔をそらすとカールが突然頭を抱えて頂垂れる、どうやらアスカに軍配が上がったようだ。そんな時、別の方向から声がした。

「あ、ココにいたんだ。皆」

その声を聞いた途端、私とカールは姿勢を正すがアスカとレオンは正そうともしなかった。

「飛鳥!? レオンさん!?!」

カールがそんな2人を嗜める一方で奥から3人の人間が姿を現した。淡い紫色の髪を靡かせる女性ビーストに、ポケットに手を突っ込んでこちらへ向かう男性ニューマン、そして茶色の長髪を靡かせた柔和な笑みを持ったヒューマンが姿を現した。

「今更だよカール。ボクは気にしてないし、こういう反応見せてくれるヒトが欲しかったからさ」

『さすがボス!! 話分かってるう!!』

「確かにそうですね。レオっちゃんやアーちゃんはそれが持ち味ですから」

レオンとニューマンの男がそう言うと、女性ビーストが声を上げた。

「少なくともレオンは少し気を引き締めないとダメだろう。あたしとレオンはガーディアンズに行くんだからね」

そう言って目つきを鋭くさせる彼女に対して『ボス』と呼ばれた男は優しく言う。

「ま、そうだね。君の言いたい事もわかるよミサキ」

彼がそう言ってミサキが顔を赤らめる中、私は皆を代表して声を上げる。

「それで用件はなんでしょうか？」

「あ、そうそう。一週間後に同盟締結100周年記念式典が行われるからコロニーに行く支度してね。仕事とかは開けておくように」

「ああ、お偉いさんとのパーティーか。俺はいつもどおりパスするぜ、そんなもんに出てる暇なんざねえよ」

アスカがそう言う中、ニューマンの男が眠たげに声を上げた。

「ダメですよアーちゃん。今回は全員強制召集されてるんです」

「そそ、ゾディアの言うとおりさ。あの子もその話聞いてすごく張り切ってるんだからさ、君が彼女のために遊ぶ時間も眠る時間も惜しんでる事は知ってるけど……」

コイツ先程までカールとカードゲームで遊んでました、レオンはそう言いたげだったが私の視線を受けて口を閉ざした。基本的に飛鳥がデュエルモンスターズを行うのは誰かに挑まれた時のみなのだ。

「ま、パーティーは美味しいものがたくさんだ！！ 日頃の夕チの悪い異能者狩りも今日はお休み！！ それじゃ皆、コロニーに行く準備ヨロシク！！」

それでこの場の会話は終わり、私たちは各々コロニーへ向かう準備を始めた……

懐かしい記憶も徐々に色あせ、暗闇に慣れた私の目にとって眩い光が差し込んでくる。

「ぐ……む……」

私は思わず右腕で目元を押さえ、上半身を起こそうとする……だがそこで1つ疑問点が起き上がってきた。私の服はMAW社製のスーツ『エスプレンドスカラー』だったはずだ。それが質素なインナースーツになっている。

とは言え上半身を起こした時に見た両足と左腕の存在によって全て吹き飛んでしまったが。あの時私は明らかにその3つの感覚を失っていたはず。特に左腕にいたっては千切れ飛ぶ光景が目映っていたのだ。

思わず右腕に目を向けるが武器で射抜かれた傷も存在しない。ただただ倦怠感だけが体に残っているだけだ。これは一体……

『オウ、気がついたネー!!』

耳に響く甲高い合成音。キャストのものだろうが、ニュアンスから女性のものであることが分かる。

『始めましてお客サン。ワタシ、チエルシー。ヨロシクネ』

「……こちらこそよろしく頼む」

周囲を見回すとそこは医務室か何かなのかベッドが周りにいくつが存在し、私は声の主であるチエルシーと名乗ったキャストの方を見据える。

黄緑色の髪をした水商売系の服を模したパーツを着込んでいたが、



私の視線に気付いたのかわざとらしく両腕で胸元を隠して身体を捻りながら声を上げた。

『お客サン……見てもいいケド、がつつイテ見るのは感心しないヨー？』

「……すまない……ところでココは何処なんだ？」

私の声に対して彼女は優しく説明するかのように声を上げた。

『リラックスしててイイノヨ、ココはボツタクリの店じゃないからネ』

そう言う意味で聞いたのではないのだが……

『お客サンがレリクスで着てた服、ボロボロだったカラ脱がせちやったノヨ。見かけによらずいい身体つきだったカラお姉さんビツクリヨ』

「少し待ってくれ……服がボロボロだっただけか？ 腕とか千切れていなかったのか？」

左腕と両足が千切れ飛んだと言うのに、服だけがボロボロになったのかと言う疑問に対して彼女はやんわりと答えるのみ。

『五体満足大丈夫だったネ。一応CUBIC STAR製の最新ジャケットを用意したケドサイズは大丈夫？ コレはお姉さんから特別サービスヨ、気にしないで受け取ってネ』

ホラそこと指を指された先には青みがかったジャケットが畳まれてあった。インナーで歩き回る趣味はないし私はそれを手にしてカーテンで彼女の視界を遮ってからズボンを履き、シャツとジャケット

トに袖を通す。

着替え終わってからカーテンを開けると、チエルシーは商売用のスマイルらしきものを浮かべて声を上げた。

『似合ってるわよお客サン、ワタシ少しクラクラ〜つときたヨー。それじゃシャツチヨサンガ呼んでるネ。歩けルカシラ?』

ベッドから足を下ろして腰を上げるが、まだ新たに生えただろつ両足に慣れていなかったのか思わず膝を震わせてしまい、思わず尻餅をついてしまう。

『ホントに大丈夫? ユツクリでイイノヨ、お姉さんが教えてア・ゲ・ル』

「……そこまで……心配してもらつ必要は……無い……」

男として歩くくらいで甘えるわけには行かないので、無理矢理にでも腰を上げる。そして生まれたての小鹿の様な足取りで私は医務室から出て行った。

何度か転びかけてチエルシーに心配されながらようやくオフィスらしき扉にたどり着くと、1人の男性の声が聞こえた。

「おう、俺だ俺。今すぐ俺んトコまで来い……ああ? イヤだあ

？ 甘えてんじゃねえぞ！！」

どうやら彼の通信相手は機嫌が悪いのか来たがらないようだ。その様子にチエルシーは苦笑いし、私は少し溜息をつく。

近づくにつれて酒の臭いが漂ってくる。酒場にはよく出向いていたがこの臭いにはいまだに慣れないなど心の中で愚痴る。更に水着の女性がモニターに映し出されており、仕事をしていたのかとさえ感じられるほどだ。

「……………つと、来たか。その顔だとココが何処だか分かってるようだな？」

髪と髭で顔の大半を隠したビーストが声を上げると私は頷く。チエルシーからある程度の説明…………… M A W社のライバル会社の1つである『スカイクラッド社』が持つリゾート型コロニー『クラッド6』……………私はあの海底レリクスからココまで運ばれてきたと言うのだ。

まさかライバル会社の人間に命を救われる事になるとは……………私は溜息を吐くしかなかった。

「んなしけた顔してんじゃねえ。テムエの素性は聞いてるよギユスターヴ、M A W社代表取締役グラディウス『ウィンストンの弟さんだろ？』」

『エエ〜！？ 家のノウハウを盗むタメニやってきたスパイだつて言うノ〜〜！？ 大胆な手で潜入するなんて信じられナイ』

彼の言葉に私は息を呑む。一方でチエルシーは驚いた表情で的外れな言葉を出す。それを彼が制した。

「……………お前は知ってるはずだろ。M A W社トップの弟の看護を頼むってウルスラからも言われたわけだしな」

『お約束ネシャツチヨサン』

「……ああそうかい」

2人の漫才に思わず咳を出して話を促す。態々コレを見せるために連れて来られたのならばここに居る意味は無い。

「クレームが来ちまったな。俺はクラウチ「ミユラー、軍事会社  
『リトルウイング』を取り仕切ってるモンだ」

「リトルウイング……来るもの拒まず経歴問わずで有名な傭兵集  
団……ですか」

異能者の集団といえども表の情報はある程度仕入れている。以前  
行方不明になった仲間の情報を求め、こういった集団まで調べた事  
があったのだが結果は不発に終わった出来事を思い出していた。ク  
ラウチはそんな私の考えなどどうでもいいかのように言葉を紡ぐ。

「無理して敬語使わなくてもいいぜ。それとお前さんの知ってい  
るリトルウイングで間違いねえぜ。ま、軍事会社といっても肩書き  
だけでな……やってる事はそこらの便利屋と対して変わらねえよ。  
要人警護に廃棄プラントの調査とかシヨボいもんばかりさ」

基本的に大規模な軍事会社や同盟軍、そしてガーディアンズ等と  
言った有名所に大規模な仕事を持って行かれてしまっているのが現  
状だ。それにGコロニーが落下してから、私とウオザーブルグ動乱  
で行方不明になった2人で自警団の様なものを結成していた時期も  
あったから、それを大きくした様なものと自己完結していた。

「で、この前あった海底レリクスの調査にも偶々参加してたって  
訳だ……」

そこでクラウチの表情が見る見るうちに不機嫌そうになっていき、チエルシーは慌てて声を上げる。

『デモ、そこでトラブルがあったのよネ、突然地震が起こってレリクスの中に閉じ込められたうっかりサンがいたのヨ。デ、任務もうっかりサン救出作戦に変更って訳ネ』

「ああ、そのレリクス内に閉じ込められたバカなうっかりさんがお前さんって訳だ……」

やはり不機嫌そうな表情を隠さない中、彼が声を上げて瓶を手にして一気に中の液体を飲み込んだ。

「とは言え地震のせいで逃げやがった連中が出るわ、その上急遽組まれたチームの中にクソ野郎が一匹混じっていやがったわ、そのクソ野郎のせいで俺ともう1人が大怪我までしたわで大変な苦勞をしたんだがなあ……拳句の果てにようやく帰って来たらスポンサーまでトンズラと来たモンだ!!」

酒瓶を叩きつけ砕け散った破片が宙を舞う中で怒鳴るクラウチ。どうやら実入り無しの状態で自分を救助してくれたわけだ。

『無理しちやダメよシャツチヨさん。またボスに怒られるわヨ……』

優しくクラウチを嗜めるチエルシーだったが、私は嫌な予感しかしなかった。

「……さて、話を戻すが……お前、俺たちが『お金なんて要らない、君たちの笑顔があればそれで満足さ』とか言う正義の味方に見えるか？」

「いや全く見えないが……」

私は見た感じ正直に言うが、クラウチは若干顔を引きつらせた顔を近づける。正直言うが子供が泣きそうなくらいに迫力があってやはり酒臭い。

「いい度胸してんじゃねえか、正直な感想をありがとよ……予想通り俺らは常日頃から金がいる傭兵集団だ。スポンサーがいなくなつちまつた以上、誰が俺らに報酬払えばいいのかねえ……？」

クラウチの目は私を見据えている以上、矛先は私しかおるまい。まあ、私が集めた武器を売り払えばいいか……

「ココまでの運搬代金に目覚めるまでの護衛代金……しかもチエルシーの看護まで含めるとなると100万メセタ……おつと忘れてた、俺らの治療費や奴らが俺ら以外の傭兵の報酬にスポンサーがトングラした違約金を含めて500億メセタになつちまうな……おお怖い怖い」

その報酬と言うには天文学的な値段に私は眩暈を覚えた。武器を売ってどうにかなる金額でもないからだ。ウオザーブルグ動乱以来、必要なカードや調度品をいくらか売って漸く一族が慎ましく暮らせる様になったのだ。もしココで私が断つたらどうなる事か……

「ま、俺らも鬼じゃない。こんなバカ高い金をお前が払えない事は分かってる……だからコイツをMAW社に請求するさ」

「ま、待ってくれ！！流石にそれは不味い！！」

思わず身を乗り出して大声を上げるが、周りにいた面々はただ笑うだけで誰もクラウチを窘めようとはしない。確かに自分は金で解

決できれば御の字だという考えを持つが、それでも限度がある！！  
明らかにMAW社は……自分たちが運営している異能者集団は経営難に陥ってしまう！！

「ほう……じゃどうするんだ？ お前さんが家で働いて借金払うって言うのか？」

『田舎のお兄さんも苦勞するわヨ、ココは素直に頷いた方が身の為ネ』

以前カールがテレビで見ていた、古代ニューデイズをモチーフにした時代劇に出てくる悪代官よろしくの表情を浮かべるクラウチと、彼に寄りかかって負けず劣らずのあくどい表情を浮かべるチェルシ！。その顔を見て怒りを覚えたが答えは一つしかない

「……そうするしか、ないだろ……クラウチ……」  
「よっしゃ決まりだな！！ 言質取ったぜ！！」

諦め半分捨て鉢半分で声を振り絞って答えるとクラウチはあくどい雰囲気消し去って拍手を打つ。それを合図に他の面々も笑うのを止めて元の位置に戻って行った。

「実はお前の兄貴との交渉は既に済ませてんだ、流石に俺たちもMAW社と全面戦争する気はねえよ。報酬の方はMAW社がスポンサーになったって事で貰ってある。元スポンサー様にはキチンとお礼参りするつもりだがそれは俺の仕事じゃねえ……後、コレを渡してくれって頼まれてんだ」

その言葉に私は思わず脱力するが、兄の書状を受け取りそれを見据える。それにはこう書いてあった。

>>しばらくお前に仕事を言い渡せないからリトルウイングで世話になるように。一応クラウチ氏には仲介屋を通して仕事を依頼するので、仲介屋経由だったらMAW社からの依頼だと思ってくれ。  
グラディウスⅡウインストン<<

恐らく異能を悪用する連中や以前属していた“協会”が残した不始末の処理で忙しくなるのだろう。そこで私を救助したリトルウイングに白羽の矢が立った……そう思う事にして自分自身を納得させた。

「ま、本当は入社試験があるんだが、そこはMAW社から推薦状代わりにお前の経歴を見させてもらったぜ。Gコロニー落下事件までMAW社の私兵集団に所属、その事件でリーダーが死んでから残った仲間と一緒に自警団を結成……戦闘要員僅か3名の超少数精鋭でチーム名ともなった『三騎士』<sup>トライリッター</sup>とか言う経歴があるんだ……テーマエラ一応グラールの一部じゃ都市伝説みたいな事になってんだぜ？」

一応試験はあるのか……そう思った矢先、クラウチが言葉を進めた。

「当然試験なんざ必要ねえ即戦力だ、更に今ならいよいよマシン程度の自分色に染められるパートナーつき！！いい条件だろ？」

彼がそう言った矢先、扉が開く音がする。開いた扉から入ってきたのは、あの海底レリクスで行動した少女・エミリアだった。

「……あのさ、おっさん。今日ぐらいカンベンしてよ……あたしがどういふ状況だったか知ってるでしょ？」

そんな彼女もやる気も無い仕草でこちらに向かってくる。表情は



暗く目の下には隈が出来ていた。

「知らねえし興味もねえからカンベンしねえよ。んな事よりお前、客の前でそんなツラするんじゃないわねえ」

クラウチの声に対してエミリアは私の方を向く。最初こそ始めましてと言った彼女だったが、しばらくして私の顔に見覚えがあったのか驚愕の表情を浮かべ

「え……ええ！？ ええええええ！？」

正に幽霊でも見たかのような声を張り上げた。まあ、私自身も驚いているわけだが……

「い……生き……てる……？ ……なんで、生きつ……生きてるの！？ 何で？ どういう事！？ ギユスターヴにおっさん！？」

「私にも分からん」

「勝手に人を殺してんじゃないわねえよ……お前、ホント適当な事しか言わねえな。お前、ハマしたらとんでもねえ事になったぞ」

私達からの攻撃に思わず沈むエミリアだったが、彼女はとんでもない事を言う。

「生きてたこと教えてくれなかったおっさんには頭にきたけど……でもよかった……よかったあ……あたしも気を失ってて、気がついたらココの医務室にいたしさ……」

彼女は私が“生きていた”事に安堵したのか、とんでもない事を口走り始めた。

「あそこで起こった事って、全部夢だったんだ……そうだよ、心臓刺されても死ななかつたり、モンスターが実体化したり人と融合したりするなんて夢に決まってるよね……最近遊戯皇見てないんだけどな……」

その言葉を聞き私とクラウチは思わずエミリアをにらみ付けた。彼女の中では『夢の中の出来事』だと自己完結しているが、それでも私達の秘密を堂々と話されてはたまった物ではない。

「夢の話は後にしておけ!! それはともかく、お前らやっぱり知り合いだったか……よしよし、思った通りエミリアも懐いているみたいだし好都合だな」

「思った通り? 好都合?」

「……まさか!」

エミリアは首を傾げていたが、私は思い当る節があつたのを思い出す。あの時彼は試験も無し、パートナーつきだと言っていた筈だ。恐らくクラウチが言うパートナーの正体は……

「ああエミリア。一応紹介しておくがこいつはギユスターヴ、うちの会社の理念に共感して喜んで社員になってくれたぜ」

「……またいつもの悪代勧誘? まあ、コイツが有能だって事はあたしも知ってるけど……」

彼女は私の方を見てから胡散臭げな表情でクラウチに向かって言う。

「骨折ったもんだ。試験免除にないよりはマシ程度のパートナーをつけるって条件を出す事になっちゃったから……」

本当は身内にとんでもない請求書を送りつけると脅されたからなんだがな。しかもそれは実質騙まし討ちに等しいものだったが……

「へえ〜めずらしく太っ腹だね〜」

エミリアの発言に対してクラウチが呆れ返ったかのように腕を組んで声を上げた。

「何他人事みたいな顔してんだ。お前の事に決まってるんだろ」

やはり彼の言うパートナーとは私の思ったとおりの人間だった様だ。一方でパートナー認定を受けたエミリアが驚愕の声を上げる。

「ええっ!? おっさん!! 勝手にパートナーとか決めるな!

! 少しはあたしの意見を……」

「……ほお、お前それはつまり1人で働きたいって事か?」

その問いかけにエミリアは思わず口を閉ざしてしまう。更に彼は私たちに向かって声を上げた。

「さてギユスターヴ、実はお前さん用の部屋を既に用意してある。エミリア、ぼさっとしてないでコイツを案内してやれ。パートナーなんだから仲良くな」

彼の有無を言わせない言動にエミリアも遂に折れたのか、項垂れて声を上げた。

「はあ……分かったよ。それじゃ、あたしは先に居住区の入りに行ってから……」

そう言って彼女は諦めるとぼとぼとオフィスを後にした。クラウチが慌てて声を上げるがもう遅い。

「あのバカ……案内する奴ほっぽってどうするつもりなんだよ……それに返事ひとつマトモにできねえのか、アイツは」

そう言われるとバツが悪い。だがそこでチエルシーが声を上げた。

『シャツチヨサン、怖い顔するからネ。もっと優しくしてあげるとイイヨ』

彼女の言葉を持ってしても、クラウチには届かない。

「何でロクに働きもしねえ社員に優しくしてやんなきゃいけないんだよ。な、ギユスターヴ……お前もそう思うだろ？」

私にいきなり話を振らないでくれ。とは言え海底レリクスではあまりに耳を疑う言動を発していたのも事実な訳だ。

「まあ……確かに働いてくれと言っるのが本音だな……」

「そうだろ。やっぱお前さんは分かっただけやがる。あんぐらいのガキは甘やかすとつけあがるから厳しすぎぐれえが丁度いい」

「それでも言わせて貰うが……流石に仕事中に酒を飲んだりグラビア写真を見たりするのも、子供からしてみれば『お前が言っただけ』としか言えないが……」

彼女曰く『悪代勧誘』に対する嫌がらせ代わりに言ってやる。だがそこでクラウチが不機嫌そうに声を上げた。

「あ？ まさかテメエ俺とエミリアが親子関係だと思ってるのか？ 勘違いしてるようだから予め言っておくぞ。俺とエミリアは、家族でもなんでもねえ……ただの上司と部下の関係だ」

上司と部下を強調するかのようにつづが、チエルシーはそんな彼をたしなめるように言い放つ。

「そんな、ツレナイネー。シャツチヨサンは、あの子の保護者でもあるのに……」

「……ツケの代わりに、お前共々押し付けられただけじゃねえか。泣く真似止めろ、またクレームつけられるぞ」

ハンカチ片手に泣く真似をするチエルシーにクラウチは呆れながら頭を抱えた。

「資源枯渇のせいでお店がつぶれる直前まで来てくれたの、シャツチヨサンだけよ。私とエミリア、引き取ってくれて感謝感謝ネ。もし引き取ってくれなかったら私たち悪いオジサンたちに身売りしてたヨ……」

「……それで？ いい加減こつちも暇ではないんだが……」

流石にこれ以上三文芝居を続けられると呆れより怒りが強くなってくる。私の怒りに感じたのかクラウチが大きな声を上げた。

「と・も・か・く！！俺とエミリアは家族なんかじゃねえ！！書類上俺はエミリアの保護者になっちまってるっただけだ！！そうじゃなかったら、働かねえ五月蠅いだけのガキなんざとつくに放り出してんだ！！」

「仕方ないヨー。最初は誰でもわからない事だらけヨ……皆が皆最初から強いわけじゃないもんネー。あの英雄イーサンだって始め

てテクニク見た時はビツクリ仰天驚いたのヨ」

確かにそうだが、キャストはカタログスペックではないか？

「まあ、アイツの過去とかはどうでもいい。正直そんな事に興味は微塵もねえしな」

そのことに関しては異議を覚えた。人の過去はある程度は知っておいた方がいいと思うのがウォザールブルグ動乱の顛末を聞かされた時に思ったことだ。確かに地雷を踏む可能性は在るが、知らずの内にとんでもないものを踏まされるよりかは遙かにマシだ。

「まずお前さんがやる事はエミリアのお守りだ。タダ飯喰らいじやなくなる程度に鍛えてやってくれ。それでいい、後はお前の好きにしな」

話は終わりだと言わんばかりに席に座るクラウチ。それを見たチエルシーが私に向かって声を優しく上げた。

『シャツチヨサンはああ言うけどエミリアはいい子ヨ』

まあ、あれで悪党だったら私も即座に人間不信に陥るから彼女の言葉には首を縦に振る。それを見た彼女は顔を明るくさせて声を上げた。

『仲良くしてもらえると、ワタシもウレシイ、あの子もウレシイ、皆ウレシイ。お客サン、エミリアは居住区の入り口でお待ちヨ……レディを待たせちゃいけないネ』

彼女の言葉に後押しされて退出しようとした時、突然クラウチが

私を呼び止めた。

「ああそうだ。アイツは夢だと思ってたから渡せなかったんだよ、コレお前さんのだろ？」

そう言っただけは3種類の物を私に手渡す。まず一つ目は私達の本  
来の武器であるデュエルモンスターズのカードで私が入手した『レ  
ッド・デーモンズ・ドラゴン』、続けて赤と黒で彩られた私のナノ  
トランサー、そして……

「この細剣は……」

最後は私が収容しようとして結局出来なかった細剣だった。クラ  
ウチはそれを見据えて声を上げる。

「お前さんの近くに転がっていたんだ」

私は首を横に振る。元々この細剣はあの男が使用していた武器  
であり私のものではない。しかしクラウチは無理矢理私に押し付け  
ようとした。

「違うのか？ コイツは俺やバスクのモンじゃねえし、デザイン  
だってエミリアの趣味でもねえ。となるとお前さんのモンだって言  
うのが俺の推理だ」

どうやら彼はこの武器を無理矢理にでも私の物にしようとしてい  
る。イグニスを筆頭とした武器が破損ないし破壊されてしまった以  
上、私の武器はシールドしか存在しない事になっている。

「仮に違つとしてもだ。持ち主がここにいない以上誰のもんでも

ないが俺らはいらねえし、エミリアじゃ使えそうにねえ。つう訳でコレは今日からお前のもんだ」

この細剣は軽いし貫通力もある。捨てるには惜しいし、何故か手に馴染んでいる。炎魔竜とは比べ物にならないが私がコレを欲してしまっている以上、断る理由は無い、か……

「……まあいい。くれると言うのなら貰っておく」

あのような悪質な勧誘を受けたのだ、敬語を使う気など礼を言うためであろうと失せている。クラウチの方は厄介払いが出来たと思っているのか嬉しそうな表情をしていた。

私は細剣を腰に備え付けるとこの場から立ち去っていった。

「さて、居住区だったな……」

だが腑に落ちないことも在る。炎魔竜も腰に据えた細剣も現実に存在するが、不思議な事にナノトランサーの中にあつた武器は全て幻だったかのように消えうせていたのだ。しかしこの細剣だけは消えずに今も残っているのだ。

(……そうなると夢ではないのか……？ それにしては両足や左



腕が生えている事は……いや、そもそも今こうしている事すら……)

『む、お前は……』

私が考え事をしている中、聞き覚えの在る男性キャストの音が響いた。細身のパーツにフルフェイスメット……海底レリクスに訪れた際に会話をしていた傭兵だった。

「確か……私と海底レリクスであったな……」

『覚えていたか。俺の名はバスクだ。クラウチから名前は聞いているぞギユスターヴ、ここにいるということはお前もリトルウイングに入ったのか?』

入ったと言うか入らされたと言うか……答えに戸惑っていると、バスクの名に聞き覚えがあったので問いかけた。

「すまないが私達を海底レリクスから救助した『バスク』とはお前か?」

『……ああ、俺の事だ。レリクスでの救助活動と突然攻撃してきたヒューマンとの戦いが縁でクラウチにスカウトされてな』

やはりあの男と戦った事は夢ではないか。そう考えているとバスクが周りを見て声を上げた。

『入社するまでの経緯は問わずと聞いていたから、どんな奴らがいるのかと思っていたが……それほどひどい状態ってワケでもなさそうだな』

確かに言われてみれば周りを見ても、周りにいるのは荒くれ者だと思われるが一日中喧嘩をしているような奴らばかりではないとい

うことか。

「確かにそうだな……問題は取り仕切っている筈のクラウチの行動ぐらいか……」

昼間から酒は飲むわグラビアは見放題だわ問題しかない。特にあの勧誘を思い出すだけで怒りが込みあがってくる位だ。

『……………』

だが私の怒りとは他所にバスクは何か別のことを考えていた様に見えるが、声をかけると直ぐに嗜める様な声を上げる。

『そこまでだギユスターヴ。俺たちは雇われの傭兵よろしく仕事に精を出せばいいし、タダの酔っ払いならとつくの昔に解雇されている筈だろう？ クラウチだってここにいる以上実力はある方だぞ？』

そう言えばこの男はクラウチと共に行動していたはずだから実力は知っている訳か。確かに言いつぎだったかもしれないな。

『まあ一緒に仕事をする機会もあるかも知れんが、そのときはよろしく頼む』

「こつちもだ。ではな」

バスクと別れてしばらくすると今度は横から女性に声をかけられた。赤い扇情的なコートを着ている青い髪を靡かせた右目を隠している女性ヒューマンだ。

「見ない顔だな……と言う事は久々の新入社員か……しかもその

顔から見ると、クラウチとチエルシーが悪代勧誘をやったようだな」  
その事を聞きげんなりとする。目ぼしい人間には毎回コレをやっているのかとも思えた位だ。

「あれはなんなんだ？ 訴えられても文句は言えないと思うが……」  
「あれは既に引き抜き契約を済ませてある傭兵に対する冗談みたいなものだ、気にする必要は無い」

言ってもいい冗談と悪い冗談があるのは当然の事だと思っただが……あれが冗談だとは初耳だったぞ。

「おつと自己紹介が遅れたな。私の名はクノー、リトルウィング所属だから君達の先輩に当たる」

「……ギユスターヴゥウィンストンです。若輩者の身ですが、これからよろしくお願いします」

そう言っ互いに握手する。握手が終わったところでクノーと呼ばれた女性は目つきを鋭くさせて声を上げた。

「ココは入社までの経歴が問われない反面、入社後の実績で全てを評価される完全な実力主義の会社だ……」

なるほど、それで性根の腐った連中は軒並み排除されていると言っわけか。私は一応推薦状代わりに経歴を問われたわけだが即戦力だからいいと言っ事になったのだろう。

「ああ、腕に自信が無いのなら早々に去った方がいい。そして自信があるのなら好きにすればいい」

「……一応コレでも少数精鋭の自警団のメンバーを務めていたので自信はある方です。私が逃げれば残った2人の名を汚す事になるので……はい分かりました等とほざいて逃げはしない……」

最後の方は地を出して声を上げる。それを知ったのか彼女も小さく笑った。

「ふふ、今のは軽い脅しだったんだが、全く動じていないどころか反論までするか……流石は伝説の『三騎士』といったところか？ まあ君が私と敵対しない限り、私は君の味方だ。いつでも話しかけてくれ」

互いに会話を終わると私は漸く居住区の方へ差し掛かる。入り口を潜り抜けるとマンションの入り口フロアのような空間が広がっており、エミリアはソファアの背もたれに背を預けて眠っていた。

「エミリア。遅れてすまなかった」

「……あ、やっと来たの……んじゃさっさと終わらせるわよ……」

エミリアが目を擦りながら言うと、ソファアから立ち上がって移動を始めた。私も後に続き転送装置にたどり着く。

「ホイホイッと……」

エミリアが装置を操作すると、私達の身体は扉が並び立ってる廊下へ移動してその中の1つを開けて私たちは入る。質素だが落ち着ける部屋だ……まあ、家具がベッドとビジフォンを置いてある机しかないのは今まで誰もいなかった部屋だからだろう。

「……あ、一応会社から支給されてるパートナーマシナリーもリ

クエストあるなら今日中に言っておいてね。ルームグッズとかもスタイルショップとか生活用品店に行けばあるから……シャワー浴びたかったらドレッシングルームに備え付けられてるのがあるから」「了解した」

「んじゃ後はテキトーにやっててね……その間あたし休んでるから……ふあ~~~~あ……」

そう言っただけで彼女はベッドの上で眠り込む。掛け布団を彼女に被せると私はドレッシングルームへ向かい、鍵をかけた後で服を脱いだ。

(……)

備え付けられているシャワーを使い冷水を嫌と言うほど浴びながら私は考え事をしていた。

今日の……いや、昨日かも知れないし一昨日かもしれない海底レリクスの調査を思い出す。

彼女は夢だと言っていたが炎魔竜が封じられたカードもあの細剣も実在している。クラウチの表情から察するに恐らく彼もバスケットと共にあの男と戦っていたのだろう。よってあの男も実在している。

(どういふことだ……)

エミリアは夢だと思っているようだが証拠物件と証言がある以上

現実だと確信している。だが彼女の言葉に対して納得している自分もいるのだ。

何しろ彼女の言葉を裏付けているのは……他の誰でもない私自身なのだから。流石に冷たくなったからシャワーを止めて置かれてあったバスタオルで身体を拭く。

(左腕はある……両足もある……)

拳を強く握ると痛みが走る。

(痛みがある以上、夢ではない……)

チエルシーから渡された服に着替え、私は今も眠っているエミリアを横目で見据える。

(彼女は私と面識がある……彼女にとって何処までが夢なんだ……?)

彼女にとって全てが夢ならば私の事を『夢の中の人間』と言う可能性があった。だが私は現実の人間だ、フィクションの存在ではない。

考えれば考えるほど分からなくなってきた。出口の無い迷宮に迷い込んでしまったようだ。

(……考えるのは止めよう……バスクの言葉を借りるわけではないが、私は雇われの傭兵だ……命のあつての物種……それで十分だ……)

自己満足だといわれるだろうが、そう考えるしか突破口はなさそうなのだ。さて、そう結論付けたら後はMAW社にイグニスの手

夕を届けなければならない。

私がそう思ってた部屋から出ようとした瞬間

『待ってください……』

そんな声が耳に届くと、私は思わず声が出た方向に振り向く。しかしそこには誰もいない。この部屋には私とエミリアしかいない事は、彼女が鍵を開けたことで確認されている。

更に言えば声と口調はエミリアの物ではないし、当然だが私のものでもない。パートナーマシンナーはまだ支給されていないから動かないし、私がMAW社で使っていたのは遠距離主体の戦いを補うGH494型だ。

鼻を擦ったのはあまりにも心地よい匂いを持つ花の香り……この

花の匂いを嗅いでしまえば、今までの花が意味も無いモノになってしまうのではないかとも思えるものだった。  
そしてもう一つ……

「エミ……リア……？」

先程まで眠っていたエミリアが宙に浮かび上がっており、彼女の顔に幾何学的な文様が浮かび上がっていたのだ。そして彼女から金色のような輝きが放たれると、それが一箇所集まって1人の女性の形となった。

流れるような金髪。

露出度が高い服に豊富な肉体。

背に太陽のような光輪を背負い、そこから溢れる輝き。

そして何よりも……全てを慈しむ様な優しい表情。

正に『理想の女性』とも言つべき存在がエミリアの体から姿を現していた……



## ようこそリトルウイングへ（後書き）

クラウチがやったような冗談は止めておきましょう。話が通じなかったら洒落じゃすみません。後バスケットの会話を原作から変えてみました。

ギユスターヴのPMは……先にも書いてるようにアレですのでwww

そう言えば皆さんが思い浮かべるチートって他にどんなものがあるのでしょうか？

## 真実と新しいパートナー（前書き）

1 1月2日に車に轢かれかけたデボエンペラーです。  
漸くミカさん正式に初登場です。

2 話ではボツられ、3と4話じゃチヨイ役……  
第1章最終話、ぜひごらんください。

## 真実と新しいパートナー

エミリアの身体から姿を現した女性を前にした私は警戒心を抱き、身構えるように対峙する。エミリアを媒介として現界している以上、私の行動次第で彼女に危害を加えてしまう結果に繋がるからだ。

『……貴方が警戒するのは分かります。エミリアを人質にするつもりは私にはありませんので安心してください』

彼女が沈んだ表情で私に向かって敵意は無い言う。しかし完全に信用する事は出来ないため、警戒だけは解かない。

「……何者だ」

端的にしか言わないが、いつでも細剣を抜く事が出来るように柄に手をかける。一方で彼女は私を宥めるように声を上げた。

『私はミカ。訳あって、この子に宿る意識のみの存在です』

「ミカ……だと?」

私は彼女の名に聞き覚えがあった。海底レリクスで私たちを襲った男がその名と花の名らしきものを口走っていたからだ。故に私はある名詞を彼女に向かって呟いた。

「テティの花」

『!? 何故貴方がその花の名を知ってるのですか!? 既に存在しなくなっただけから久しいのに……』

やはり彼女があんな男が言っていた『ミカ』なのだと確信した私は

右手に込める力を強くした。

「海底レリクスで私達を襲った男がお前とその花の名を言った」

『そう……ですか……』

彼女が何処か納得したような沈んだような表情で俯いていたが、直ぐに顔を上げて声を出す。

『ですが……それでもお願いがあります、……今は私の話をどうか聞いてくれませんか？』

彼女にその気は無いとは言え、実質エミリアを人質に取られている以上どうする事も出来ない。私はただ話を続けると言う事しか出来なかった。

『ありがとうございます。今の私の姿も状態も、既に失われた古の技術のもの……失われた技術を旧文明のものと言うのなら、私たちは「旧文明人」となりますね』

「旧文明……だと？」

流石に旧文明の話になると、私も興味はそちらに向いてしまう。

少しは彼女の話に耳を傾けようと言う気にはなった。

『はい……途方もない過去に、この星を生きていた原初の文明を持ちこつる人類……それが私たちでした』

「……成る程……レリクスもそこに存在していたこの炎魔竜も旧文明の遺産と言う事か……」

そう言っつて私は一枚のカードを手にする。それは私を魅了した存

在が描かれていた。

『はい、それだけではありません……貴方が持つ本当の力も……かつては旧文明の者達が持つ力でした』

我々の持つ力が旧文明の遺産……それは異能者なら誰もが最初に教わる常識中の常識。彼らの存在があったからこそ、私たちは彼らの力を使う事が出来るのだ。

それを自分達が最初から持つ力だと勘違いしている奴らは外部から流れ込んできた者たちか、異能者が国を支配していた時代を取り戻そうとしていた存在位しかない。

『この時代では“デュエルモンスターズ”と呼ばれ人々の間で親しまれ流行していますが、元を糺せば決闘の儀と言っ悪しき存在を封じたり神々を祭り上げる王族が執り行う神聖な儀式……私たちも研究の合間を縫って祭りに参加したものです』

そう言っ彼女は過去を懐かしむような声で言っ一方で、私は決闘の儀で封じられたり祭り上げられた存在に興味を持った。旧文明の神……どういった存在だったのだろうか？

『……では本題に入ってもよろしいでしょうか？ この時代の背景はエミリアの記憶から把握させてもらいました』

彼女の言葉に私は息を呑む。彼女の表情も本気のものだ。

『3年前、グラール太陽系を襲った危機……覚えていますか？』  
「忘れるはずもない……SEEDの襲来だな？」

その言葉に彼女は頷き、その事を思い出すかのように顔を背けた。

『はい……それは、私達の時代でも起こったことなのです』

そこからは新事実とも言える証言が出てきて私は息を呑んだ。

旧文明を襲ったSEED……そこまではいい。レリクスやスタリティアが対SEED兵器でもある以上、分かっていた事だった。

だが旧文明を統べる王に対する反乱が起こっていたことには驚いた。当時の王……旧王を引き摺り下ろせば、今度は新王を名乗った者が旧王時代以上に酷い独裁が始まってからSEED事変が起きた……決闘の儀で封じられた存在はSEEDに汚染されたり封印が解かれたりして人々を襲い、更には旧王を指導者とした旧王軍が新王軍と戦争に入るわけで、旧文明は疲弊していったというのだ。

私は自然の内にビジフォンを起動してメモにとっていった。何しろ最大の情報提供者が私の目の前にいるのだ、既に彼女に対する警戒心など私には無かったとも言えた。

『それでも、私達はSEEDの元凶であるダーク・ファルスの封印に成功しました』

ダーク・ファルス……レオンがかの英雄・イーサン「ウェーバー」と、幻視の巫女・ミレイ「ミクナ」……もといその姉であるカレン「エラと共に倒した存在か……」

『新王軍も旧王軍も互いに指導者を失ってしまい、これ以上戦争を続けることも出来なくなりました……しかし、その頃には既に三惑星の大地は戦争の傷跡が深く、更にSEEDに汚染されており回復は不可能な状態でした……』

「……旧文明人の肉体も同様に、か……」

そこまでならただの旧文明人がどうして滅んだかの真相を聞いて

それきりなのだが……

「続きが、あるのか……？」

恐らく続きがあるのだろう。だったら態々エミリアの身体を借りて話す必要はないし、私達の前に姿を現すことすらない。

『……はい。このままでは人も星も滅亡するのは時間の問題でした……そこであの内乱で私たちに敵対した側の旧文明人達は賭けに出たのです』

「賭け、だと？」

『そう……その賭けの名は復活計画……大いなる時を超える自分達が蘇えるための計画です……』

復活計画。

その言葉に対して私は息を呑んだ。復活するだけの計画には無い不快なおぞましさを本能で感じ取ったかのように。

『コレから貴方にイメージを流します。私を含めた旧文明人はS E E D に対する強力な浄化をこのグラール全てに対して行い、三惑星を復活させ……』

彼女の言葉と同時に私の視界は闇に包まれ、まず真っ先に浄化され輝きを取り戻す三惑星が目映る。

『次に、新たな「ヒト」の素体を造り上げ、それを大地に放ちました』

続けて荒廃した大地に三組の男女がそれぞれの惑星に降り立つ光景が浮かぶ。

『……そして……汚染された自らの肉体を棄て、精神だけの存在となつて永い眠りに突いたのです』

ミカ……いや、ミカを模した者から自分自身の精神体が抜けていく光景が浮かび上がった。まるでエミリアから姿を現す彼女のように。

『そう……新たに造り上げた「ヒト」が高度な文明を築き上げた時……』

そして最後に今のグラール……パルムの町並みの中を歩く人々の姿が映し出され

『その身体を奪い、復活する時まで』  
その身体に黄金の光が吸い込まれ、かつてその肉体の主だった者の精神体が弾き出されて瞬く間に霧散した。



その光景を見せられた時、私の視界は瞬く間にマイルームに戻る。私はその光景に吞まれ、我に返ったときは額に手を当てて呼吸を荒くしていた。

『……忌まわしいイメージを見せてしまつて申し訳ありません。ですが現に計画は実行に移され、作り出された「ヒト」達は、高度な発展を遂げていきました。決闘の儀と我らの力を復活させ、旧文明人達の精神が眠る場所への繋げてはならない道を開く事が出来てしまつほどに……』

未だに驚愕している私を他所にミカは話を続ける。

『……もうお分かりだと思います。旧文明人達によって生み出されたヒトとはヒューマンの事です。私達の文明が持っていた技術とは雲泥の差ですが、それで十分だとみなされたのでしょう』

彼らが創り出したヒューマンがニューマン・キャスト・ビーストを生み出し文明を発達させ、『決闘の儀』を『デュエルモンスターズ』として復活させ、SEEDを退け亜空間研究を推進させて……

「要するに……私たちが築いたものを横から奪い取るというわけか……？ 自分たちは何一つ生み出していないというのに……？」  
『……お恥ずかしい話ですが、その通りです……今、このグラールは一部とは言え旧文明人達の生み出した罠に狙われているのです』

あくまで事を起こしたのは一部の旧文明人だと主張するミカ。そ

の表情から彼女の言う事は真実だろうとは言え信頼する理由が無い。何故なら彼女もまた旧文明人なのだから。

「この際真実かどうかはどうでもいいが1つだけ聞かせてくれ。何故旧文明人の貴女がそれを私に話す？ しかもその様な言い方は計画を阻止してくれと依頼しているようにしか聞こえないのだが……」

『はい、私は彼らの忌まわしい計画を阻止したいのです……』

私の問いに迷わず答えるミカ。その理由を問いただす前に彼女が口を開いた。

『確かに私は旧文明人ですが、現代への回帰は望んでいません……』

更に彼女は今まで以上に真剣な表情で、私に向かって答えを紡いだ。

『私達は滅ぶべくして滅んだ。世界は次の世代に任せるべきなのです』

他のヒト達ならともかく、その言葉は私達異能者にとって信じるに値するものだった。我々異能者も影で生きる者、いずれ消え行く存在なのだから。

「……分かった、『世界は次の世代に任せる』と言う言葉を信じよう」

『本当ですか！！ ありがとうございます！！』

ミカはそう言って感謝の言葉を言った。とは言えまだ私には分か

らない事が在る。

「とは言え……まずエミリアに話せばよかったのに何故私から話し掛けたのだ？」

そう、最後にして最大の疑問だ。私に話さずとも、エミリアに話せば信じてもらえるかどうかは別問題だとして真っ先に話してもよさそうだったのだが……

『ええ……ですがこの子は心を閉ざしきっていて、私の声を認識してくれないのです』

「なるほど……確かに認識していれば、あの男の言葉に反応したはずだ……」

『どのようにして彼が私の姿と声を認識していたのかは分かりません……それとあなたから話し掛けた理由ですが……』

彼女が沈みきった表情でその言葉を紡ぐと、私は思わず息を呑んだ。

『それは……貴方が一番わかるはずだと思います……』

炎魔竜 レッド・デーモンズ・ドラゴン

腰に据えた細剣とナノトランサーから姿を消した武器

あの男と戦ったというクラウチとバスクの言葉

エミリアが言う『夢』と『現実』の境界線の矛盾

千切れた筈の左腕と両足が今こうして繋がっている事  
そして

「……………夢ではなく……………私は……………死んだ……………」

その残酷なまでの真実

ようやく全ての点が線となって繋がり、1つの答えを導く。答えは至って簡単、全てが夢などではなく真実だったというわけだ。

『……………はい』

ミカもその答えに対して真剣な表情となって答えた。既に答えを出したとは言え、真実だと突きつけられると気が滅入る。

『……………貴方は一度……………炎魔竜を瀕死の身に宿し魂を込めた一撃を放って、その命を燃やし尽くし完全なる死を迎えました……………』

彼女も言葉を選んだのか間を置きながら真実を告げる。私があつた男によって死にかけたと言われるよりは幾分かました。

『その時、エミリアの強い願いによって発言した私のプログラムが貴方の身体を再構築しているのです……………』

つまり彼女のプログラムが途絶えた時、私は再び死を迎えるという事なのでは無いのだろうか。

「……………そう、か……………」

だが口に出したのは考え事ではなく先の自分は死んでいたと言う事実に対しての溜息のみ……………確かにエミリアが『夢』の一言で片付けようとするわけだ。

「……………ふぁ……………」

そんな気の抜けた欠伸声がエミリアの方からすると、ミカの身体が一瞬消えかかる。どうやらエミリアが起きている時はミカの身体は維持できない造りなのだろう。

『……そろそろこの子が目を覚まします。詳しくはまたいずれ……』

そう言った直後にエミリアがのっそりと起き上がり、ミカの身体は瞬く間に消える。エミリアが腕を高く伸ばし盛大な欠伸声を上げた。

「……ん~~~~……ちょっと寝ちゃったかな？」

だが彼女は私の方を見ると驚いたような表情をして声を荒げた。

「……ちょっと大丈夫!? 顔色がすごく悪いよ!? マイシツプの説明は明日にするけどいいよね!？」

「……分かった……ではもう1回シャワーを浴びてから寝るぞ……」

そんなに酷い顔をしていたのか……そう思いよろめきながらドレッシングルームへ向かい扉を閉める。そこで私は服を脱ぎ、限界まで冷やしきった冷水を頭から気が済むまで被り始めたのだった。

暗いマイルームのベッドの上に転がって私はただあの海底レリクスでの出来事を思い出していた。

（突然心臓が熱を持って蹲っている間に取り残され、エミリアと出会ってレリクスを進んで、炎魔竜を手に入れて得体の知れない男と戦い……そして……死んだ）

単純にその言葉が突き刺さる。SEED事変が終わって、ウオザーブルグ事変で協会の幹部や一族の当主たちが拳って失脚して、仲間たちがまたそこで行方不明になって、MAW社の再建に右往左往して土台を造り上げて今に至る、か……

（まさかこの様な形で死に、復活するか……それに旧文明の復活計画……）

話を聞いただけでは荒唐無稽だが、旧文明人本人からの証言とかつて協会の一部が自分達が復権すると言う野望を持っていた事を思い浮かべると、そのような計画があっても不思議ではない。

尤も、そのような暴挙は全て防がれ首謀者やその一味は全員粛清され、残った人員も単純な傭兵や訳ありの存在は拳って条件付無罪。そして全員が条件を満たし晴れて完全無罪だ。

（……それに……死んだ、か……）

思い浮かべるのはあの日……Gコロニーが突然落下してきた時、私たちは拳って街のシェルターに逃げる羽目になり、自分達のリーダーが殿を務め……死んだ。

今でも仲間たちに彼の死を告げた時の光景を思い出してしまう……

『マジかよ……あのボスが死んじまったって言うのかよ!?』  
カーツによってSEEDウイルスに感染してしまっていたレオンがMAW社のメンテナンスルームで驚愕の声をあげ

「そんな……嘘だ……そんなの嘘だ!! あたしは信じないよ!!」

当時ある事情で謹慎中だったミサキが報告しに来た私を掴み上げ

「クソツ……クソツ!! クソツ!! チツクシヨオオオオオオオ  
!!」

「飛鳥!! 落ち着けて!!」  
アスカが叫びながら壁を殴りつけ、それをカールが泣きそうな顔で押さえつけ



そして

「……僕は認めないよ……あの人を殺しておきながら被害者面しているガーディアンズを、あの人を殺したイルミナスを絶対に認めない!!」

彼をミサキと同じかそれ以上に慕っていたゾディアは端正な顔を憎悪に歪め、ガーディアンズとイルミナスに対して滅ぼすと叫ぶ

「あの日を境に、私たちは袂を分かった……」

SEEDに汚染されたキャストと言う事で白い目で見られながらもガーディアンズに残る事を選択したレオン

パートナーと共にイルミナスを追う選択をしたミサキ

私と共にMAW社に留まり『三騎士』として救助活動を行う事になったカールにアスカ

突如私達の前から姿を消したゾディア

「そしてウオザールブルグ動乱でカールとアスカは些細だが致命的な考えの違いが切欠で殺し合い、そして行方不明になった……」

あの七人の内、今や一族に残っているのは私のみ。そう考えると私は深く溜息を吐く。

「……とは言え……」

死んだ者は冥界に行くだとか、河を渡るだとかなんだかんだと言われていたが、結局は何も見えずただただ真つ暗だったただけだ。

「大体、あの人にも会えなかったからな……」

まあ、彼と会つとしたらミサキかゾディアぐらいだろう。そう考えた時、私の意識は暗闇の中へと沈む。

やはりそこには何も無かった。

そして翌朝、居住区のロビーフロアにて……

「おはよギユスターヴ……大丈夫？」

「……大丈夫だ……これ以上、わがままを言える立場でもないしな……」

朝見た時の表情は正に最悪といつてもいいほどの状態だった。昨日よりかはマシだとは言え、快調には程遠い。

「ま、まあギユスターヴがいいって言うならマイシップの説明に

入るわね。昨日のうちに認証登録されたっておっさんが言ってたし、さっさと行こ」

そう言っただけで彼女が転送装置を操作すると、私達は瞬く間に何処かの船の操縦室へと移動した。

「……………ほづ……………」

我がMAW社が持つ社用マイシップは殆どが系列会社が製造した船だが、我が社のエリート（一般的な）が持つものよりも高そうな代物だった。

何せ立体映像まで流れるモニターにエンジンや燃料装置が現同盟軍でも使っている代物。我が社でもココまでの出力を持ったエンジンは開発しきれないのが現状なのだ。

「どしたのギユスターヴ？」

「いや……………社用の船にしてはずいぶん立派だなと思っただけだ」

私の言葉に対して彼女も顎に手を当てるが、直ぐに答えを出した。

「……………ま、あたしも今まで仕事とかに興味なかったしね……………ココの中央端末で依頼を受けて、現場へ向かう時はコレを使えばいいってこと」

彼女の説明を聞く私だったが、その様子に対して彼女が怪訝そうな声を上げた。

「……………何かあったの？ あたしが昨日あなたの部屋で寝てから様子変だったじゃん」

「……………いや、海底レリクスでの件について考えていただけだ」

海底レリクスでの出来事について考えていたのは嘘ではないが、それを聞くとエミリアはすごく嫌そうな表情をした。

「あれ夢じゃん……いつまでも夢の中の出来事を考えてたってしようがないでしょ？」

「では聞くが私の存在は夢ではないのか？ お前の言葉が真実なら私も夢の中の登場人物だということになるぞ」

私がそう言うとエミリアは答えに詰まったのか、顔を俯かせて声を上げた。

「んー……まああたしとあんたっておっさん達に助けられたわけでしょ？ それがあんたも現実の人間だって言う証拠じゃん」

「……そうきたか」  
「それにデュエルモンスターズのモンスターと融合したり、多くの武器がいきなり現れて発射されたり、死なないヒトなんているわけないし！！ そんなヘンテコ出来事は全部夢よユ・メ！！」

一応筋は通っている。これ以上話を進めていったとしても水掛け論になってしまうな。

「まあ、これからあたし達って仕事仲間になるわけじゃん？ でもあたしの方が先輩なんだから敬うように……」

エミリアは私を見据えるが、直ぐに溜息をついて首を横に振った。どうしたのかと聞く前に彼女がいきなり声を上げた。

「でもま普通に接した方がいいか、うん」

彼女の声に納得はいかないが私も頷く。そして一通りこのリトルウイングの施設の説明を受けたところで、彼女がいきなり疲れたような声を上げた。

「それにしても疲れたわ〜昨日は初めての仕事だったし、地震に巻き込まれて取り残されるわ、ヘンテコな夢は見るし……」

「まあ、な……」

私は淡々と言葉を紡ぐ。私にしてみたら全て現実だったのだが、寝た子を起こすほど暇ではない。

「それにさ、あたしあんたには感謝してるんだよ……あんたがいなかったらおっさんが来るまで生きていなかったと思う」

「そこは過大評価しすぎだな」

「それに、なにより、あたしの言う事信じてくれたし……ま、殆ど夢だけどそこは本当のことでもいいよね……？」

否定する理由は何処にも無い。私は素直に頷く事にした。

「ま、これからは一緒に仕事する事になるんだろうし、あんたの話も聞かせてよね!!」

そう言って彼女はウインクをして、私に指を突き刺して笑いながら言った。

「なんたって、あたし達は『パートナー』なんだからね!!」

その言葉を聞き呆気に取られる。

そう言ってくれたのは一体いつ振りだっただろうか？

ウォザーブルグ動乱以来仲間は殆どいなくなり、対等な関係で話  
が出来るのはガーディアンズにいたレオンや兄を含めてMAW社で  
も両手で数えられる程だった。

そんな私に新しいパートナーだと宣言する人間が出来た。

対等な関係で接し、私に対して砕けた口調で物を言う。そんなヒ  
トなど殆どいなくなったのだ。

「そうか……」

そして私は彼女に向かって近づき、頭を叩きながら言った。

「だったら仕事が嫌だなんだとか言わずに精進しろ」

そう言いながらマイシツプから中央ロビーへ向かう……と言つよ  
りそこしか行き先を設定されてなかったから操作は楽だった。後ろ  
の方でエミリアが子ども扱いするなど叫んでいたが聞き流した。

クラウチに自分のパートナーマシナリーがあると言い、MAW社  
にいた部下に送ってもらおうよう通達する。その途中でバスクとパー  
トナーカードを交換し、カフェに行つて3人の男女と会話する。  
その道中、クラッド6内のショッピングエリアを散策する内にカ  
ードショップを見つけそこに入る。やはりそこは私にとって落ち  
着く空間だった。

「ふむ……」

グラスケースに収められたカードを見据え、私は掌からあのカ  
ードを取り出すと小さく笑った。

「たとえばケースの中に入ったカード全てと、このカードをトレ  
ードしてくれと言っても交換しないがな……」

グラスケースの中に入ったカードの内、『F・G・D』や『E・  
HERO アブソリュートZero』と言った何枚かは絶版物の高  
級品扱いされているカードだ。私にとってこのカードはそれら以上

の価値を持っているのだ。」

「やあやあ、この店は初めてですか？」

そう言っつて姿を現したのはエプロンを身に着けた1人のヒューマンだった。短い黒髪に黒目、美形と言わないがそれでも平均以上の顔立ちは持っている。

「ああ、貴方はこの店の？」

「ええ、この店の店員ですよ。まあ、店員としても新人さんですがよろしく願いますね」

手を差し出す店員に私も手を差し出して握手を行う。そして私は再び店の散策に入った。



## 真実と新しいパートナー（後書き）

さて、漸く第1章を終える事が出来ましたか……次回は幕間で彼のPM初登場です。

PMは他の人々と違ってギャグにしかありませんが……一応海底レリクスのその後も踏まえてやっていききたいと思います。

## 後日談と観光と邪気眼と（前書き）

すまん、完全なギャグは無理だったorz

本日は

フレツフレツ、邪気眼王

転生者1のその後

ギユスターヴさん家のご近所観光（表編）  
の三本です。

そのうち完全なギャグを……腹筋崩壊するかのよつなギャグを！！

## 後日談と観光と邪気眼と

あたし、あの日から本当にギユスターヴの事が身近に感じられる存在になったんだよね。

リトルウイング所属傭兵（古参だが見習い） エミリアーパース  
ヴァル

まあ、人それぞれと言うし誰もが同じような趣味を持っているわけではないからな……

リトルウイング所属傭兵（新入りだがベテラン） バスクーウギン

すまん、本当にこれ以上言わないでくれ。

リトルウイング所属傭兵（新入りだがMAW社私設特務部隊長兼任） ギユスターヴーウインストン

私がリトルウイング所属になってから早数日。既にレッド・デーモンズ・ドラゴンのデータと、そのついでに破損したイグニス及び改良案はMAW社本社に送りつけ……それと引き換えに私の手元にPMが届いてしまった。

「……………」

そして今日はMAW社の依頼で再びあの海底レリクスの調査に赴いていた。メンバーは私にエミリア、仕事が無かったと言っていたバスクと先日届いた私のPMの4人。私とバスクとPMが前衛、エミリアが後衛を勤めていた。

本当はPMを連れて行くときは私単独で仕事を行うのだが、エミリアたちも連れて行く羽目になってしまったのが運の尽きだった。

「……………」

バスクは無言のうちで私の方を見据えるが即座に視線を逸らした。とは言え、コレはまだSEED事変前から使用しているPMなのだ。SEED事変以前は単独行動を主としていたのでPMとのアシストを行っていたし、異能を隠す意味でのパートナーでもあったのだ。

有能なのは認める。だが私はそのPMをあまり多用しなくなかったのだ。

「奈落の火花が俺に呼応する……………破壊神の鉄槌に身を焼かれよ！」

そのPMの言葉を合図にその腕から炎系のテクニク・ファイエが放たれる。何やら奇妙な台詞が発せられたが発せられたがそこまではない。そこまでなら二一スなり個性なり気にする必要は無い。

「……………ぷっ」

エミリアも何だか我慢していた様だったが、遂に限界が訪れたのか左手で指を私に指しながら大声で笑い出した。

「アハハハハ！ 何それ、もう限界！！」

それを切欠にバスクも右手で顔を隠しながら小さく笑い声を上げる。私はあまりの羞恥心に顔を壁に向けて背けるしかなかった。

「ふむ……このレリクスも地上のレリクスと柱が同じだな……とは言えグラールで発見されたレリクスの建築パターンはほぼ同一……恐らく絶対君主制による治世だったかと推測されるな……」

私はミカに会う前から専門書で読み漁った知識を述べながら前へ進む。眼前から襲い掛かってくる原生生物も心臓を突き刺して絶命させ、タヴァラスと発表された高機動型のスタリティアはクラッド6で買ったランクC - のGRM製ハンドガンの『ハンドガン』で射抜く。

「……やはり威力は弱いか……リトルウイングでの私が持つランクは低いからな、レンタル品として支給されるものが弱くても仕方ないな」

元が炎魔竜との交戦で破壊された以上、文句を言うわけにも行かずハンドガンの感想を述べる。バスクも格闘術や実剣でエビルシャークと言う新種の変異生物を倒していき、エミリアもテクニックでアシストしていった。

「それにしてもリユクロスから手に入ったデータにも載っている生物が何故海底レリクスに出没しているんだ……？ ふむ、気になるな……」

私がエビルシャークの死骸を見据える。そんな中、再びPMの機械音声が響き渡った。

『闇夜の風に耳を傾けよ……届け、疾風の魔弾!!』

銃声が響き渡りしばらくしてから再び訪れる沈黙。そして間を置いてから盛大に響くのはエミリアの笑い声。

「アハハハハハハハ!! やっぱ面白い!! ギュスターヴってこんな趣味してたんだ!!」

『うむ、ヒトは見かけによらないと言うがまさかココで見られるとはな……』

「私の趣味ではない!! 断じて私の趣味ではない!!」

バスクも顔を俯かせ押し殺していた笑いを隠し切れずに漏らし、一瞬だけ異能を解放しようかとも考えたが直ぐに自制を聞かせる事に成功した。

「えー、結構かつこいいと思うけどなー『奈落の火花が俺に呼応する……破壊神の鉄槌に身を焼かれよ!!』とかさ」

私が反論するより先にエミリアが格好をつけながら右掌を開いて左から右へ移動させ、更に続けてナノトランサーから取り出したハンドガンの銃口を別の方向に突きつけながら続けた。

「『闇夜の風に耳を傾けよ……届け、疾風の魔弾!!』とか言ったり!!」

それを見たバスクが突然先程通った通路の方へ走り出すと、しばらくしてから何やら笑い声が響いてきた。

「……エミリアが止めを刺したな」

私は小さく今までの意趣返しに反撃をするが、一方のエミリアは含み笑いを浮かべながら私に向かって言い放った。

「えー？ 確かに止めはあたしが刺したけど、大部分ギユスターヴさんのせいですよー」

「なぜそうなる！！ そもそもあれを選んだのは私ではなく……」

「くっ……どうやらもう一人の俺が……暴れたがっているようだ……」

反論する私を他所に再び機械音声が響くとエミリアが盛大に爆笑し、私は頭を抱えPMを睨みつけた。

『ふっ……そこのおちびさんと黒き機械兵には力が足りなかったみたいだな……俺の言霊の意味を理解せず、ただただ笑い続けるしかないとは……』

本音を言えば私も彼ら同様こいつの言う『力が足りなかった存在』になりたかった。他の面々はある意味ではマトモなPMだった（アスルだけ何故か外見が全くの別物、人型ですらなかったが俗に言うアタリだった）のに、私だけこの様な大ハズレを引いたのだ。

『気にするなマイマスター、貴方は我が言霊を聞いても笑わなかった。つまり貴方にはそれだけの力があると言う事、むしろ誇るべきだ』

盛大に溜息をつく。全く分かっていないPMに呆れてしまったのだ。と言うより……

「……まずはその締まりの無い風体をどうにかしろラドル」

GH494型パートナーマシナリー・固体名ラドルで本人曰く精霊に与えられた真名を『ラドクリフ＝シュヴァイサー』と言う。

青い『リュックサック』と言う背負い鞆を模した骨董品を背負った黒いぬいぐるみのような外見を持つPM。

特徴は思春期に患う病気からくる独特の語彙力。

極めつけに言語機能を切れば即座に全機能に異常をきたす致命的なバグと、PMデバイスの上書き防止機能と言うありがたくない特典付だ。



閑話休題。

エミリアとバスクが爆笑し続けても仕事にはならないので、彼女達を黙らせ仕事を再開させる事にした。そしてその道中、私とエミリアがレリクス仕様について話し合い、あの男と戦った広間でスヴァルティアと言う斧を持った巨大な人型スタリティア……炎魔竜を封じていたモノと同型の敵が襲い掛かって来るのに対して戦闘を開始する。

「くっ!!」

私は手にしたシールドでタイミングよく防御してスヴァルティアが行った攻撃の余波を跳ね返し、すかさず懐に入って胴体部に傷を作らせる。

「はあっ!!」

「ここを超えて待つのは……未知なる強さの世界!! コスミツク・ソウル・レボリユーシヨンツツ!!」

バスクがドリルの突いたナックルで傷口を抉り、ラドルが手にしたソードで真上から両断する。

「とどめえ!!」

エミリアが最後の一発と言わんばかりにフォイエをロッドから放つ。傷口から炎が進入し、スヴァルティアが斧を取りこぼして甲高

い音を発すると、膝を屈して地面に倒れこんだ。

「よしエミリア、お前はMAW社の調査チームを呼んできてくれ。後護衛にラドルをつけておく」

「うん。わかった」

『フツ……光を消さぬのも俺の役目か……承知したぞマイマスタ  
ー』

笑いをこらえたエミリアとラドルは来た道を戻っていき、彼女らが見えなくなつたところで私はスタリティアの残骸を見据えて考える。

「やはり……手緩いな……」

そう思ってしまうのは、やはりあの時の炎魔竜とこの細剣を放つた男との戦いのせいなのだろう。確かにスヴァルティアも普通の傭兵が戦うにしては強敵だったが、どうしても見劣りしてしまうのだ。

『……ギユスターヴ……やはりお前もそう思ったか』

バスクも私の言葉の真意に感づいたのか顔をこちらに向けて話し込む。

「攻撃は斧を振り下ろす、斧を掲げて飛び掛る、突進する、斧を突き刺して地震を起こし雷光を放つ……コレぐらいしか思い浮かばんな……」

それでもエミリアにとっては脅威だ。先日聞いた話だが、1日で逃げ出したとは言え彼女はクノーによる鍛錬を行っており基礎は出来ていると聞いた。

「とは言え、だ……」

私は一枚のカードの事を思い出して考える。それは言うまでも無く炎魔竜ことレッド・デーモンズ・ドラゴンの事だ。

あのカードはこの海底レリクスで私が入手したカードであり、デュエルモンスターズの製造や販売を担っている一社でもあるMAW社のデータベースにもそのカードの名は載っていないかった。

まさかと思ひ蔑称であろうと思いたい『250円竜』と言う名称で調べても当たりもしなかつた事に胸をなでおろしたのはココだけの話だ。

だと言うのに、あの男は炎魔竜の事を知っていた。それだけではない、エミリアですら自覚していなかつたミカの事まで知っていたのだ。

情報通にしては異常な情報の質……一体何者なのだろうか？

『あの男の事で何か考えていたのか』

バスクがそう言うと私は頷く。私は手にしたカードの事やエミリアの事を話すと、バスクもそうかと言って私に情報を話した。

『ああ……お前と同じく面識こそ無いが、奴は俺やクラウチの事まで知っていたからな……クラウチはともかく俺は傭兵としては無名だが、お前は『三騎士』として有名だったはずだろ？』

一応そうなっているようだ。私もその事を知ったのはSEED事変の後でありレオンがその件でからかつていた事は覚えている。

……二度と三騎士時代の衣装を身に纏うと言う意思は無いがな。

『気にならないか？ リトルウィングを取り仕切っているクラウ

手はもちろん、無名の傭兵である俺にエミリアの事は知っていたが……都市伝説にもなっていた『三騎士』であるお前は知られていなかった事に』

その言葉に私は息を飲んだ。確かにあの男が情報通なら私や『三騎士』の事を知っていてもおかしくは無い筈だが何も答えなかった。

「……言われてみれば気になるが……」

いくら伝説とは言え、英雄・イーサン＝ウェーバーに比べたら私たちの名は霞んでしまう。

何しろ最初にHIVEに突入してそれを殲滅、続けて前総裁暗殺未遂に極め付けが幻視の巫女との恋愛劇だ。比較対象を間違っている。

「別に私を知らなくてもおかしくは無いだろう？ 言うてはなんだが、やってきた事はMAW社付近のSEEDを浄化していたり、犯罪者の取締りぐらいだ」

『……確かにそうだが……』

バスクも腑に落ちない表情を浮かべ、暇つぶしと言わんばかりに私たちは広間を散策する。その途中で異臭がしたので発生源を調べてみると、見覚えのある赤いコートと紫色の髪をした男がうつ伏せになって倒れていた。

「む……」

コイツに実質致命傷を負わされたのは記憶に新しいので細剣で足の裏あたりを突いてみても反応が見られない。思わず“それ”に近づいてみたが、私は思わず口元を手で覆い表情を顰めてしまった。

何故なら男の身体は何故か腐っており、目のあつた所は既に穴だけになっており、鼻もつぶれていた。よく見れば所々が何らかの原生生物に喰われた痕があり、腕に至っては骨までも見える始末。

最早生死を疑うまでもない。心臓を貫いても死ななかつた男が、何故この様な形で死んでいるのか……後でミカに聞く必要が出来てしまったな。

「……………」

よく見てみれば周囲には蠅らしきものが飛び交い、蛆も右目の下から湧いており傭兵業をやっているもきついものはきつい。吐き気もしたから口も押さえておく。

『……………大丈夫か？』

バスクも気分が悪いのが声色が普段と違っている。エミリアに見せるわけにもいかないが、タイミング悪く彼女が調査団を引き連れて戻ってきてしまった。

「ただいまー……………あれ？　どうかしたの？」

エミリアの怪訝そうな顔に対して、バスクが私に向かってエミリアの方へ行けと首を動かす。仕方がないと言わんばかりに私は彼女らに近づいた。

「エミリアか……………奥の方へ進むぞ」

「え？　ココで調査とかしないの？」

「一応ココの安全は確保されている。私としてはココから奥の方が気になってるんだ」

炎魔竜のあつた広間と逆方向にあつた階段があつた場所……そこを下りるのは遭難の可能性を踏まえ断念したが次に進むのはそちらしかない。

横目で確認するとバスケットと運悪く見つけてしまった調査団のメンバーが死体の処理をし、調査団の何名かが死体を運び去っていったのが見えた。

ラドルは私の様子を見て「やれやれ」と言わんばかりのポーズを決める。正直言つてそれが腹立たしい。

「ふーん……まあいいわ」

エミリアがそんな事を言つと私たちは奥へ進む事になった。そして彼女が離れた際にラドルがポツリと私にしか聞こえないように呟いた。

『いたいけな少女に死人の香りは相応しくない、とでも？』

「やかましい」

私はそんな事を言っていたが、調査団のリーダー格の青年がこちらへ向かつて声を上げた。

「あ……ギユスターヴ殿、奥へ向かうのですか？ あそこは途中で落盤が発生したのか、通路がふさがっていましたよ？」

「……何だと？」

私が彼……調査団のリーダー兼MAW社私設特務部隊の副隊長に向かつて声を上げた。今回の調査団は殆どが以前私が所属していた部隊の隊員であり、私の部下だった連中だ。

「ええ。貴方が所有していたデータを元に散策していましたが…

…途中の分岐路で何らかの戦闘行為があったのか戦闘行為による落盤で道がふさがっていました」

それを聞き私といつの間にかここにいたバスもあきれ返った表情をした。レリクスで破壊行為に及ぶ阿呆がいたとは驚きだったのだ。

「現在左の通路を中心に発掘作業を再開していますが……どちらにせよコレで貴方方の依頼は終了となります」

これ以上無理強いしても反感を買うだけ、か。今の私はMAW社の私設特務部隊長ではなくリトルウイングの……それも新人傭兵なのだからな。

「了解した。では終了手続きを取りたい」

「それは地上に出てからお願いします。今回は弊社のグラディウスの好意でホテルを用意しておりますので、そこでお休みになられてください」

部下であった男がそう言う和我々はホテルへと向かう事になった。エミリアはホテルに泊まれることを喜んでいたが、その道中で彼は私に向かってエミリアには聞こえないよう謝罪した。

「申し訳ありません隊長……」

「……気にするな。今の私は一介の傭兵であり、お前達への指揮権は無い……今はお前が部隊長なんだぞ？」

「いえ……時が来れば直ぐにお返ししますよ」

そんな会話を交わしながら私たちは転送装置で地上へと向かった。

そして地上……MAW社のお膝元でもある『フィランディア・シテイ』の高級ホテルの一室にて私はエミリア……正確に言えば私の部屋に遊びに来た彼女が眠りこけ、代わりに姿を現したミカに対して問いかけた。

「あの男が死んだ原因について何かわかるか？」

『貴方の話では彼は不死身だと言いましたね……もしかしたらですが、それは肉体に限ってはと言う場合かもしれませぬ』

彼女が言うには精神の不死と肉体の不死……そして不老は全くの別物であると言う考えだ。現にミカの肉体は滅んだが精神はこうして今も現存しているため納得がいく仮説だ。

ふと頭によぎったパルムに伝わる昔話の1つに神に対して死なない身体を要求した男の話を彼女に教える。

それは遙か遠いところのお話

美しい女神を罫に嵌めて捕まえた王様は『1度だけ願いが叶えてやるから私を汚すな』と言う彼女の話の聞き、「傷を負っても病を持っても死ぬ事のない体にしろ」と願って神はそれを躊躇いも無く承諾する。

男は歓喜し欲望の限りを尽くしたが、ふと手を見据えると皺だらけになっっている自分の手を見てしまう。慌てた男は女神を呼び出し、



自分の身体が老いていく事を問いたただいたが彼女はこう言った。

『お前が願ったのは「死ぬ事のない身体」であり、「老いる事のない身体」とは聞いてない』と。

その証拠にと女神は鏡を差し出して皺だらけになった男の顔を見せ付け、男は醜くなつた自分の顔に絶望してしまふ。命を絶とうとするが死なない身体のため死ぬ事ができない……『壊れる事の無い心』を渴望していながつたため心が壊れ考える事を止めても肉体はそのまま残り見世物にされ続けたが、徐々に腐っていき不快に思つた人々に燃やされたと言ふ。

『肉体の不老不死と精神の不死ですか……それらもかつては旧文明では研究されていたものです。恐らく貴方が知っている死なない王様の話も私達の研究の内容が漏れてしまい、その研究を良しとしなかつた方々が戒めのための話としたのでしようね』

「ふむ……」

『それと実はあの子が願つたプログラムは、敵対者に対する緊急迎撃用のプログラムでもあるので敵意を持った存在を1人残さず消滅させる事が出来るのです。ですが不死の肉体を持つていたのであれば、肉体は滅びず精神だけが滅んでしまつたのではないか……そして精神が滅び不死の契約が途切れたのではないかと私は考えているのです』

精神が滅んだだけで肉体が腐敗していくのはあるのか、と言う疑問もあつたが彼女が言うように不死の契約も精神が壊れた事によつて契約とやらが破棄されたのかどうかはわからない。だが1つだけ解る事がある。

「あの男は“死んだ”……二度と復活する事は無い……」

その単純なまでの事実……それだけだ。まあ、かつて死んだ私が

言うのもおかしい話だが……あれで復活したら今度こそ我々異能者の手で処分するしか道は無く、今の私には彼らを指揮する事など出来ないから上に任せておくしかない。

「まあ、その話はもういいだろう。それでももう一つ聞きたいことがある……お前はあいつの事を知っているのか？」

「……いえ、今の彼らと接点を持った事はありません。その者の肉体を乗っ取っているのではないかと考えた事もあったのですが、感じられた気配は1つだけ……それにグラールに残った旧文明人の大半は私と同じ考えを持っているのです……」

SEEDや敵対していた側に恨みを持っている者を除いて、ですが……彼女はそう締めくくる。

「となると……ますますわからん」

バスクやクラウチの事を知っており、ミカや彼女がエミリアに憑いている事をあの男が知っていたのは何故だろうか？

そう考えているうちにミカの身体が消滅し、入れ替わりにエミリアが目覚めました。

「ん〜……ベッドがふかふかで気持ちよかったな……」

「……第一声がそれかエミリア」

私は呆れながら彼女に向かってそう言ってやった。

その翌日……私たちはフィランディア・シティの一角にあるショッピングモールを中心に散策していた。

理由は観光……フィランディア・シティはMAW社の本社がある都市でありダグオラ・シティと比べると小規模だが、店は並んでいる方だ。

身も蓋もない話だが、本来私達の依頼はあの海底レリクスの奥深くまで調査する事だったのだが先の通行止めの影響もあってキャンセルになってしまった。

その結果、埋め合わせの為にフィランディア・シティの高級ホテルに泊り込み、今日は観光するためにここに来ているのだ。

とは言え、フィランディア・ショッピングモールは現在資源枯渇の影響もあって閉じている店が多く、残った店も何とか常連のおかげで営業できているという有様だ。

「まあ、最大の原因は資源枯渇なんかじゃないんだけどなあ……」

本日の副隊長は非番であり、服も私設特務部隊の制服ではなくジャケットにジーンズと言う完全な休日スタイルだ。言葉遣いも素の口調となっている。

『最大の原因？ それは一体なんだ？』

「……君たちに文句言ってもしょうがないがな……フィランディア・ステーションに俗に言う駅ビルが建っちゃったんだ……それで客足が遠のいてしまったんだよ……」

「本当にあたし達に文句言ってもしょうがないじゃない……」

各地を移動し、今はミュージックストアで買い物しているエミリ

アが言うが、その代わりと言わんばかりに私が言葉を進めた。

「最大の原因の駅ビル……そのオーナーがスカイクラッド社なんだがな……」

「スカイクラッド社って……うちの親会社じゃん!？」

『それは文句の一つや二つも言いたくなるな……』

私の暴露にエミリアは啞然とし、バスクも顔を抑える。まあ品揃えも豊富であり、値段も手が届く値段……どちらに流れるかは自然の理だ。

『まあこう言った寂れた商店街に掘り出し物があるのはよくある事だし悪い事だけではないぞ？ 俺の手に量産品と言う言葉は似合わないし、それなりの“格”は欲しいからな……』

「はいラドルくん、痛い事言わないでねー。ぶっちゃけフィランディア・ショッピングモールが寂れて大変な事になるのってM AW社だからねー」

本当に色々な意味で困るからな……とは言え、先程さらりと重要な秘密を言ってしまったなコイツ……

「？ 確かフィランディア・シティにはデパートとかあるんでしょ？ そこは潰れても大丈夫なの？」

早速食いついてきた。まあ、こういった事態の為に表向きの理由は既に用意してあるから問題ないが……

「大丈夫なわけが無いだろ。デパートで使えるポイントはショッピングモールで手に入るんだ」

『ふむ……とは言え我々が止めてくれと言ったところでな……』

エミリアの疑問に私が答え、バスクが今の現状を考える。とは言え止めると言ったところで関係が悪化するだけだ。

「流石にそこまでしてもらう事はないさ。大体MAW社はスカイクラッドと喧嘩売るところじゃ無いんだしな……」

まだトラブルが解決していないからな……先代め、身内のゴタゴタで隠居したくなったのはわかるが、後始末だけでもやってくれ……！！

「まあ、後は俺らで解決しますしね……っと、そろそろ時間が……」

そう言っつて副隊長が私に腕時計を見せる。一応会社の依頼と言っつ事にしてあるし、既に外泊すると言っつ報告はしてあるが、限度と言っつものもある。

「そうか……そろそろ戻るぞ、エミリア」  
「待つてて！！今メセタ払つてるから！！」

確かに今エミリアは会計を行っている最中だ。私も流れている曲を聴き、聞き覚えのある声を聴く。

激しい曲調に歌詞、ドラムやギターの奏でるロック。私が好きで聞く人々を静めるクラシックとは対極となる人々を熱狂させる曲だ。

「ふむ……」

しばらく聞き入っていたが、エミリアがこちらへ戻ってくると私も店を出る事にした。

『やはり俺にはこういった曲は合わないな……やはりこう、何か  
を呼び出さんとする曲の方が……』

ラドル、いい加減お前は黙ってる。

## 後日談と観光と邪気眼と（後書き）

瞬様を見習って今回からキャラや作品に関する質問及び“敵側の”転生者を受け付けます。

実は敵側の転生者もネタが尽きそうなので自分が「これはひどい」と言いたくなるような奴をお願いします（遊戯王をクロスさせた時点である意味トンでもキャラになっちゃったのが1名…）。

敵以外と指定した場合は、問答無用でモブキャラもしくは外伝キャラ（どっちかって言うと日常変）にまわしますのでご容赦を。

また採用不採用は作品で発表しますのでご容赦を。  
ではまた次回。

## 用語集その1

ビジフォンに用語が更新されました。

ネタバレになりますのでストーリーをお読みになってからこの項目をお読みください。

また、原作で出てきた人物や用語については割愛しますのでご了承ください。

## 【人物】

ギユスターヴ・ウィンストン

この物語の主人公。20歳。

パルムに本社を置くアミューズメントを中心とした総合会社であるMAW社の社員でもあり私設特務部隊の隊長を勤めている。



SEED事変では仲間と共に自警団『三騎士』を結成し、3人しかいない戦闘メンバーの一角を担っていた。

旧文明の研究が趣味で、SEED事変前までは旧文明テクノロジーの研究を主にしてきた。

服装はエスプレンドスカラー（黒地）を用いていたが海底レリクスでの戦いでズタズタにされて以来、リトルウイングにてCUBIC STAR製の新製品・パニッシュジャケットを譲ってもらいそれを着ている。

グラディウスⅡウインストン

ギユスターヴの実兄でMAW社代表取締役。37歳。

決闘中の問題になっていたデュエルディスクから投影された鮮明すぎる実体化の対策に身を乗り出し、ディスクからの情報を擬似的なVR空間でのみ実体化させそれを視認するための装置『VRゲイザー』を開発に成功した。

服装はエスプレンドスカラーをより豪華にしたもの。

【団体】

MAW社

パルムに本社を置くアミューズメントを中心とした総合企業。

元々は軍事企業だったがカードゲーム「デュエルモンスターズ」をプレイするための装置である「デュエルディスク」を開発して以来、アミューズメント事業に転向していった。

またデュエルモンスターズ販促アニメである「遊戯皇」シリーズを製作しているアニメ製作会社等多くの子会社を持っている。

『三騎士』

SEED事変の際、MAW社に組織された自警団。

本来『三騎士』とは戦闘を行っていた3人の総称だったが、それがそのまま組織名として浸透していった。

SEED事変が終結してからは活動も縮小化し、ウォザーブルグ動乱にて2人が行方不明になったのを切欠に自然消滅した。

【技術】

デュエルモンスターズ

グラール規模でブームとなっているカードゲーム。

かつては知る人ぞ知るカードゲームだったが、MAW社がVRを用いた投影システム搭載型の装置『デュエルディスク』を開発させて以来ブームとなった。

一説によると旧文明で行われた儀式がこれに似ていると言つ記述はあるが、SEED事変の影響もあり資料が少ないため学会から重要視されていない。

### 【旧文明】

“旧王”

かつてグラールを支配していた旧文明の王の一人。

独裁を強いていたがそれを憂いた“新王”が革命を起こし王位を追われた。

だが“新王”が王位についた途端、自分以上の独裁を行ったため自分を中核とする反抗勢力が生まれた。

SEED事変時に“新王”と相打つ形で死亡している。

“新王”

かつてグラールを支配していた旧文明の王の一人。

独裁をしていた“旧王”を廃立させたものの、今度は自分が旧王

以上の独裁を行った。

故に“旧王”を立てた反抗勢力と戦い、S E E D事変が起きた中でもそれは続いた。

彼もまた敵であった“旧王”と相打つ形で死亡している。

### 【異能者】

異能者

かつて旧文明で悪しき神々を封じたり祭りを盛り上げたりしたヒト達。

今ではデュエルモンスターズに描かれた魔物や魔術に罫を駆使して戦いを行う存在でもあるがその数は極僅か。

500年戦争の際はパルムを陰で操ると言われており、ウォザールブルグを本拠として活動していたが数の差で真つ先に敗れた勢力となつてしまい、『異能者狩り』と言つ事態を招いてしまう。

今では知るヒトも殆どおらず、異能者たちもそれを隠して生活しているため表舞台に出る事は殆ど無い。

【武器】

リゾネーター

シャドウーグ

クバラ製・ 5・B

MAW社製のものであり、デュエルモンスターズのモンスター『  
ダーク・リゾネーター』を模したシャドウーグ。

極稀に「リゾ」と鳴いている光景が見られる。

『細剣』（正式名称不明）

セイバー

クバラ製？・ 13・S

海底レリクスでギユスターヴを襲った男が弾丸の様に放った武器  
の一つ。

ギユスターヴの腕を射抜いたが、彼が召喚したダーク・リゾネー  
ターの尽力により引き抜かれた際、武器を失っていた彼によって利  
用される。

クラウチによって救助された際、彼によってこじつけに等しい理  
論で所有権を押し付けられた。

それ以来異能を使わない状態のギユスターヴの主武装になりつつ  
ある。

形は騎士達が使ったようなエストックの様な形をしており、貴族の  
ような風貌を持ったギユスターヴに似合った武器となっている。

また彼を襲った男はこの武器の事を『宝具』と呼んでいたが……？

【エネミー】

レッド・デーモンズ・ドラゴン

海底レリクスに封印されていた竜。

その腕はあらゆる守りも打ち砕き、冷たき氷をも溶かす。

157

紫髪の男

クラウチの過去を知っていたヒューマン。

不死身の肉体を持ち、武器を弾丸の様に撃つ力を利用してギユスタ―ヴを殺そうとした。

## 用語集その1（後書き）

これからは章の終わりごとにこの様な用語集を追加していきます。

入れない方がいいと言う方はぜひ掲示板の方へ来てください。

## 借金取り（前書き）

漸くメインで活躍する e . g o ! 作品のキャラを出せる……  
コレでギョスターヴの出身も分かるかも！？



## 借金取り

夢を見ている

それはまだSEED事変の時、まだ『三騎士』を結成する前のこと……

その日、私は他の異能者達と酒場でSEEDを退けた祝賀会に参加し、皆が酔いつぶれるなり疲れるなりして寝静まった時の事だった。

沈黙が支配する闇の中に悲しげな旋律が響く。その音に目を覚ます羽目になった私は発生源となつている外へ出向きしばらく歩くと壁に寄りかかっている白髪の男性ヒューマン……仲間の1人であったアスカを見つける。

彼の近くにあるのは今宵の戦いで死に浄化された人間達の……異能者も傭兵も巻き込まれただけの人間が眠る簡素な墓場でもあった。さしずめ今流れている曲はアスカが死した者達へ捧げる鎮魂歌といったところか。

曲が終わり、アスカがハーモニカから口を離すと漸く私の存在に気付いたのか驚いたような表情をした。

「ギユスターヴ……」

「意外だな……お前にこのような特技があつたとはな……」

私が覚えている限り、SEED事変が起きる前のアスカは我が一族の女性に罹る呪いを解くための研究を中心に自分の身体を鍛えるための鍛錬、カール達と共に行動していたか彼らにせがまれてデュエルに付き合っていたかのいずれかしかなかった。

そんな彼がハーモニカを吹けるという意外な特技があつた事に私

は驚いた。とは言え彼は私の方を見ずに淡々と言葉を紡ぐ。

「別に……ただガキの頃よく吹いてただけだ……この曲だって姉さんがよくフルートで吹いてたから覚えてただけだ。俺の作った曲じゃねえ」

「それでもな……私から見ればお前は無愛想な人間だからな……」  
「テムエから見た俺の事情なんざどうでもいいじゃねえか」

そう言つとアスカは私と墓場から遠ざかる。私が彼を呼びとめようとしたが、彼を手を振っただけだ。

「……興が冷めた、俺は寝させてもらうぜ。ホントは研究に費やしたいが明日も明後日もSEEDと戦うんじゃ出来ねえしよ……」

そう言つて彼が去ると、私は墓場を見る。その場には玩具やぬいぐるみ、酒の瓶に花束など統一されてない供え物が何故か置かれてあった。

我々が作ったときには何も置かれてなかったし、アスカは宴会にも参加しなかった。よく見れば近くにはカールが眠りこけている姿もあった。

「……」

ココで寝ていたら風邪を引くぞ。そう思いながら私はカールを担いでアスカの後を追った……

目を覚ますとそこはリトルウイングから与えられたマイルームであり、ラドルはビジフォンで何やら調べ物をしていた。本人曰く電子の海を漂いながら人魚と戯れているとのことらしい。

『眠りの神からの呪縛から解放されたかマイマスター。俺が電子の海に住まう人魚から聞いた情報を知りたいか？』

「……………」

普段なら（その言葉遣いが原因で）一蹴するが、今日は夢の影響もあつたのか仲間の情報が得られるかもしれない。そう思って私はラドルに続けろと促す。

『……………一番興味深かつたのは妙な石を集める少女の話だな』

現実是非情だつた……行方不明の仲間とは関係ない話だつたからだ。しかもその話題はこいつが一番好みそうなレベルの話だつたのもあつて頭を抱え込む羽目になつた。

『その石を見た者の話だとか闇の力を手に入れられそうだとか、集めている少女は見えない何かと会話していたとか、俺の魂を揺さぶる何かを感じ取つた……………』

期待した私が馬鹿だつたということか。既に興味を失つた私はベッドから立ち上がってリトルウイングの管轄区へと赴いた。

『待て待て待て！！ マイマスターも男だろ？ その女掲示板で

話題になってたぞ！！ 顔写真希望とか着せしめるとか胸がでかいとか  
」

私は近づいてきたラドルを掴み上げるとベッドに向けて投げつける。そして私は振り向きもせずには部屋から出て行った。

期待はずれのラドルの発言に私は頭を抑えながら管轄区へ行く。前回海底レリクスの再調査に赴いたり、その後でディ・ラガンの討伐も行いエミリアに経験を積ませる事に成功した。

それでも『三騎士』や『三騎士』以前の所属部隊であった『虹』レーゲンホルグに比べたらまだまだだと言っレベルだが、自分たちとは戦い方が違うのだからしょうがないと言ったところだ。

「……………」

落ち込んだエミリアが私の横を横切る。私が声をかけると彼女は再び溜息を吐いた。

「あゝ、ギユスターヴ……………？ どうかしたの？」

「ラドルが変なネタを掴んできただけだ……………お前こそどうかしたのか？」

「ん……………」

エミリアの話を知るところだ。朝起きたら通信ログが入ってて、開いてみるとその相手はクラウド行きつけの飲み屋だったのだ。どうやらツケで払っていたらしく、いい加減今月分のツケを払えとの事。

「家からの転送通信はツケの催促とかココ最近多くなってきた変質者からの電話ばかりだし……あたしに働けとか言うけどおっさんだって昼間から酒飲んでばかりだし……バリバリ働けとか言わないからせめて人並みの常識とか身に付けてほしいよ……」

エミリアの口からはクラウドへの怒りのみ。バスクが『ここにいる以上ただの酔っ払いではない』と擁護していたが、どうも怪しくなってきた。この前の海底レリクスで戦った男が死体で発見されたと報告したら、終業後バスクと共に宴会までやる始末だ。

「で、あなたが不機嫌だった理由は？」

「ラドルが変な情報を拾ってきた」

そう言つとエミリアも納得したのかこちらに向けて同情するような目で見据えてきた。

「……まあいい。さっさとクラウドの所へ向かうぞ……」

「そだね……」

お互い足取り重くりトルウイングの事務所までたどり着くと、チエルシーがニュース番組を見ていたところだった。

『着工より二年。先月、ついに完成した亜空間発生装置の完成式典がパルムの同盟軍本部で行われました』

亜空間発生装置が漸く完成したのか……あの研究には兄上も出資していたな。本来遊戯皇の映画に回されるはずだった予算をほぼ全額そちらに回した程優先していた。

その映画も元となったアニメが監督と脚本が好き勝手やってくれた結果、これはひどいと言わんばかりに滑ったから予算がだいぶ余ったと聞いた。

それにしても……

『式には、亜空間理論を確立した総合科学企業インヘルト社のナツメ・シユウ代表取締役をはじめ、開発に加わった軍関係者や多くの企業が参加しました。今回披露されたこの装置により亜空間発生実験が成功すれば、有人での亜空間航行計画へと大きく前進することとなります。現在グラールが抱える資源枯渇問題に光明をもたらすこの研究、絶対に成功してもらいたいものですね』

インヘルト社か……懐かしい名前を聞いたな。昔はよく社交界に一緒に行っていて、ナツメ代表と先代が話しているところを私たちは遠目で見ただけだったな。そう言えば、ここ最近アイツとは疎遠になってきていた……

『ノー!!! ニュースそれで終わりナノ? 納得いかないヨー!』

チエルシーの叫び声に私はハツとなり、エミリアも驚いた表情で彼女を見つめた。テレビの方はスポーツやデュエルモンスターズの話題になり、亜空間研究の話題は終わった様だ。

「なんでいきなり怒ってるの、チエルシー?」

『エミリアー、今のニューススカイクラッド社の名前が出てない

ネ！！ 亜空間航行の計画にイッパイ出資してるんだヨ！！ ウチのいい宣伝にナルと思つてたの二ー！！』

「スカイクラッド社はウチの本社じゃん。リトルウィングの宣伝にはならないって」

どちらにしてもM A W社も多額の出費をしているのだが名前すら出てなかったんだがな、と思つたがそれをここで言うのは憚られた。大体G R M社も出ていないんだから我慢してくれ。

今や亜空間研究のための出費はある種のスレータスとなっており、どれぐらい出したかで権利を得られるのか躍起になっている事業が多いのだ。

『次のニュースです。近年デュエルモンスターズ界存続の危機の元凶だったデュエルディスクから投影される鮮明すぎた実体化映像、それを解決させるための装置が開発されました。デュエルディスクを開発したアミューズメント事業の最大手M A W社のグラディウスⅡウィンストン代表取締役との会見です』

「よかつた……何とか開発に成功したみたいだな」

亜空間研究も重要だが、やはりM A W社の人間として近年の技術の進歩による投影映像の鮮明化は問題視されていた。突然現れたモンスターによつて運転を誤つて事故を起こした人間もあり、中には死傷者まで出る始末。

S E E D事変のお陰で矢面に出される事は無かつたが、それでもデュエルディスクを開発した身としては起こした事の重大さと責任に押しつぶされた。故に一時期予算の大部分をその解決策に割いたのだ。

その甲斐もあつて遂に開発に成功したと言う事はM A W社を離れている身としても嬉しい限りだ。自然と私の表情も明るくなる。異能者の問題だけでなくこういった事業もまた我々の役目でも在るの

だから。

会見場に舞台が移ったのか、グラディウスⅡウインストン……兄上が右目付近にバイザーのようなものを身に着けて笑みを浮かべながら会見に応じている。

『ええ、今回弊社が開発したのはデュエルディスクから得た映像データを擬似的なVR空間に映し出し、造られたVR空間を視認するための装置です。私はそれを『VRゲイザー』と名づけました』

映し出されるのは指で突付かれている片目を覆うデザイン性を重視したバイザーの様な装置だった。様々なデザインが映し出され、単純な擬似VR空間の説明に入っている。

『後蛇足ですが、くれぐれも運転中のVRゲイザーの使用はお止めください。何しろ今度はこれが原因で事故が起きた、などと言われても責任は問いかねますのであらかじめご了承を』

兄の苦笑じみた声を合図に記者達の笑い声が会見場を支配する。更に兄が何やら言葉を続けようとしたところで

『ク・ヤ・シィ~~~~~!!』

チエルシーが声を張り上げながらリモコンを操作してテレビの電源を切った。極めつけにハンカチーフを口に含んで噛みながら引張る芸当まで見せた。

『MAW社はデュエルモンスターズやらデュエルディスクやら今のVRゲイザーやらで、利益も話題もインヘルト社を除いて独り占めだヨ!? しかも今やデュエルモンスターズどころかアミューズメント界はあいつ等の天下だって話ネ!!』



「それでも、亜空間研究の件は表に出されていないわけだから案件はイーブンだと思うが……」

『ギユスウ!!! アナタはどっちの味方ナノヨー!!! それでもリトルウイングの社員ナノー!?!』

一応私はMAW社の人間なんだが……と言うよりチエルシー、お前もその件については知っているはずだが!?

「ともかくチエルシー!!! おっさんいるー!?!」

エミリアが声を張り上げたのを機に私は渡りに船とばかりに声を上げる。

「そうだったな。チエルシー、エミリアがクラウチに用があると  
の事だったが……」

流石にチエルシーも私情を挟むわけには行かなかったのか、泣きながら私たちに声を上げた。

『オウ……そう言えばシャツチヨサンが2人に用があるって言ったネ……シヨッキングなニュースのせいですっかり忘れてたヨ……』

「あんまりシヨッキングでも無かったけど……ま、いいわ。おっさんは奥にいるんだったよね」

エミリアと共に奥に行こうとした私達。するとそこへ

『お二人さん、シャツチヨサンのところへ行くならついでにコレもお願いネ』

チエルシーに渡されたのは電子媒体の……領収書？

「……『ランジェリースポット、リッチベルベルト、ダグオラ・シテイ店』……？」

私が読み上げるとエミリアが露骨に嫌そうな表情をした。気持ちは分かるので私も表情を変えようとはしない。

「……ねえチエルシー……このどう見てもいかがわしいお店の領収書って……なに？」

『経費じゃ落ちないカラ自腹ダヨって伝えてネ!!』

その言葉に対してエミリアの表情が強張った。私の手元に領収書が無ければ彼女が握りつぶしていたかもしれない。

「あのエロオヤジ……ツケの払い忘れだけじゃ飽き足らず経費の無駄遣いまでするか!!」

遂にエミリアが吼えた。私もチエルシーも気持ちは分かるので反論しないがココで吼えても仕方がないだろう。

「とにかく行くぞエミリア」

私の声に渋々と彼女はついて行く事になった。とは言えあれほどクラウチの悪口を言ったのならば反応の1つや2つを返してもおかしくないはずだが……

「うわっ!! 酒臭っ!!」

……なるほど。理由はコレか。要するに酔いつぶれていた、と。

「……起きろ。私は酔っ払いに敬語を使う気は無いからな」

怒りを込めて声を上げる。ココで辞表を叩きつけても文句は言わせないが、同時にエミリアを鍛え上げる依頼も放棄する事になるからな……

「……よお、来たか」

右手には酒瓶、足元には缶ビール。どう見ても酔っ払いスタイルに私は怒りを覚えた。バスクめ、コレでただの酔っ払いじゃないとどの口がほざくか……!!

「来たか、じゃないっての!! いつもの飲み屋からまた電話が来たんだよ!! いい加減ツケを払えって!!」

「後はコレだ。経費じゃ落せないから自腹を切れ、との事だ」

私の言葉に対して理解する力はあったのか、私に向かって反論した。

「なんだ、コレは資料とか根回しとかの経費じゃねえか」

「どう見ても乱行の見本市じゃない!! 落ちない理由も常識的に考えるっての!!」

「全くだ……」

よくコレで倒産しないな……ココで勤めて不安になってきたぞ。

「ま、んなことどうでもいい、後で俺の貯金から払ってやるよ……  
…っと、本題行くぜ」

その言葉に対して私の表情も真剣になる。クラウチも真剣な表情で私達に向けて声を上げた。

「コイツは緊急かつ重要な依頼だ。急ぎ探して欲しいヤツがいる」

真剣な表情から先程の酔っ払いの顔は見えない。エミリアも真剣な表情で彼に向けて声を上げる。

「人の搜索……？ 重要参考人とか、要人とか？」

「あるいは指名手配の犯罪者か、何らかの密売人か……」

エミリアと私が各々仮説を組むが、当のクラウチが笑みを浮かべながら声を上げた。

「ギユスの方が近いな。何しろそいつは俺が前に金を貸したヤツでな、借金踏み倒そうとしている極悪人だからよ」

その答えに対して私もエミリアも脱力してしまった。先程までの空気が空気だっただけにあまりのギャップに耐えられなくなってしまうのだ。

「ようするに依頼主おっさんじゃん！！ そんなの自分で探しに行け！！」

「やかましい！！ あの海底レリクスでのゴタゴタ以来、ウチにろくな仕事が回ってこねえんだよ！！」

「ぐ……」

まあ、借金の取立てならエミリアでも何とかなるかと言った所か

……

「で、その極悪人の情報はなんなんだ？」

皮肉を込めて私が言うところクラウドも忘れてたと言わんばかりに映し出していた水着姿の女性写真を最小化していき、厳しいビーストの男の写真を映し出させる。

「搜索対象者は『フレリー・ココフ』51歳、種族はビーストだ。ヤツの船はモトウブのクロウドッグ地方に在ると場所が特定されている」

「場所分かってるんなら自分で行けばいいじゃない……」

エミリアがポツリと言うがクラウドは彼女を睨み付けて情報を話し続けた。

「シティでもカジノでもねえ、ヤツには用事が無さそうなヘンピな場所だ。まあ、居場所が分かればこっちのもんだ、さっさと取り立てに行つて来い！！」

「……了解しましたー！！ こんな酒臭い場所にいたら飲んでないのこっちまで酔っ払つてきちゃうー！！ さっさと行こギユスターヴー！！」

エミリアが怒り心頭な様子で事務所を出て行く。私もそれについて行くとした時、クラウドが私を呼び止めた。

「なんのようだ……！！」

クラウドが無言で紙の書類を投げてきた。それを受け取り、私の目に映るのは紙を束ねていた帯を止めていた刻印に刻まれた伝説上の獣である天馬と一角獣の合成獣。

それは忘れるはずも無い『異能者』としての我が一族の紋章、そ

してそれを意味するのは『異能者』としての一族の長からの命令書  
……！！

「テメエの兄貴から情報屋経由で依頼だそうだ。俺も情報屋も奴から『お前以外の奴に読ませるな』の一点張りだから封すら開けてねえよ。まあ奴が言うには依頼の場所はクロウドッグ地方だって事ぐらいだ」

私は今度こそ無言で事務所を出る。途中でエミリアが愚痴りながら私の後について行ったが、私は途中で部屋に用があると言って戻って行った。

私の部屋にて、鍵を閉めた後に書類の封を開ける。封を解かれ広がった書類にはこう書かれてあった。

『モトウブのクロウドッグ地方にて妙な力を持った連中が屯している。あそこは文化保護地区でもあり、我々外部の人間が好き勝手に荒しい場所ではない。また異能者の可能性も高く事が露見したら五百年戦争の悲劇の二の舞を招くため“違法者”の仕業だと判断したら説得する必要は無い、優先的に処分するように』

書類をレンタルしたロッドを用いたフォイエで燃やすと私は溜息

を吐いた。クラウチは今回の借金取りを好都合と見たのか、私の任務と抱き合わせで行わせようと言っただ。

「こつという合理的な点は評価できるんだがな……」

いかんせん悪代勧誘やのんだくれ、経費や依頼の私的利用などで評価をマイナス面にまで下げてしまつ。大体エミリアが巻き込まれるとは考えていなかったのか？

『マイマスター、依頼か？』

「兄上……いや、当主からな」

気になる点はいくつかある。まずは『妙な力を持った連中』と言つ言い回し。最初から『異能者』だと言いつればいいのだが、何故この様な言い回しを……

『ふむ……俺と同じ力を持った精霊の祝福を得た連中と言つ事かな？』

「……お前のような奴が何体もいてたまるか」

私は一瞬ラドルと同系統のPMが何体も暴れまわる姿を想像して頭を痛めた。ああ、本当に頭が痛くなる。

「……まさかな」

頭が痛くなつたついでにふと思ひ至るのはあの海底レリクスで戦つたあの男だ。あの男の力は我々異能者とはまた別の異質な力だつた。

しかしあの男は海底レリクスで死亡が確認され、既にこの世の間ではない。

それを「ありえない」と言っただけ切り捨てる事は簡単だが、どうしてもあの男の姿が頭によぎってしまう。

「……最悪、また異能を使わねばならないか……」

かつて炎魔竜と戦つたために異能を発動させエミリアも目撃している。しかし彼女はあの事を夢だと断言してしまっているのだ。

大体現実だと自覚すると言う事は私が一度死んだと言う事実も自覚する事だ。とは言え、私自身の実力は異能を使った戦いを除くとそこらの傭兵達と対して変わらない。

そうなると答えは1つしかあるまい。

「……今回はデッキを持っていこう」

そうやって私は机の上に置いていた鍵をつけた箱に手を伸ばして指紋照合を行い、鍵を開けてデッキを取り出した。

エミリアと合流し、マイシップを運転させる。更に彼女がこの前のミュージックストアで買ってきた音楽を鳴らしながら運転する。

この曲は近年流行している音楽グループ『Vanguard』の曲なのだ。特にリーダー格の女性ボーカリストが一番人気だそうだ。曲も聴いてみたが、それは先の店で聴いたあの曲だった事を思い



出した。

閑話休題。

グラール太陽系第三惑星モトウブに到着し、目的地であるクロウドッグ地方へと船を運ぶ。そこで私たちが目にしたのは……

「な、何なのよこれー!？」

見渡す限りの船、船、船……どこぞの観光プラントも顔を青くさせんばかりに屯している乗り捨てられた船の行列だった。中には迷惑にしかないような止め方をしているのもおり、酷いものだと激突しているものもある。

「船、だな……」

「おっさんへんぴな場所だって言ってたじゃない!! 話違うわよ……」

こうして動くのにも一苦労だ。マイシップと言うものは思った以上に図体がでかく、その上に乗りながら移動するのはまず不可能なのだ。大体リモート操作で動かせるので動いた時点で最悪の事態を招く……こうしている今でも最悪の事態は招く事が出来るのだが。だからこうして狭い間と間を動きながら移動するのだが……こうも乱立されるとたまった物ではない。

「こんな連中の中からワレリーって人を探さなきゃいけないわけえ!?! 大体おっさんの借りてたものを何であたしたちが取り立てなきゃいけないのよお!!」

「……そこは、ノーコメントで頼む……」

本当に狭いし返す言葉も見つからない。と言うより動くのにも一

苦労だ。何度かぶつかりながら船の迷宮を抜けると息を大きく吐く。

「あー……経費だけじゃなくて依頼まで私物化し始めてるよあのおっさん……いい加減誰かガツンと言ってくれないかな……」

「お前から言ったらどうだ？」

かつて私が入社する際、クラウチに対して言った皮肉を覚えてやるがエミリアは首を横に振った。

「無駄無駄。あたしも言ったことあるけど何一つ聞いてくれなかったもん。それにおっさんに見直してみたら、あたしってお荷物に過ぎないしさ……どうしたら言う事聞いてくれるんだろ？」

盛大な溜息をエミリアは吐いた。とはいえ、エミリアの実績は無いに等しいからな……

「実績を作ればいい。少なくとも今回の依頼を成功させれば『タダ飯喰らい』から見直す筈だが？」

「えー？ そんな事でおっさんが急に態度を変えたりすると思う！？」

「今のまま過ごすよりはマシだと思うぞ？ ナツメ代表だってや亜空間理論と言う実績もあってインヘルト社を有名にしたんだ」

まあ、インヘルト社は亜空間研究のみならず海底都市開発と言う実績もあったんだが……大体それを確立したのはナツメ代表の息子であるアイツが……

「うーん……戦うのは苦手だし、調査とかも……」

そう言った瞬間、エミリアの空気が凍る。だが直ぐに彼女はポツ

リと言いなおした。

「……調査とか堅苦しい事も嫌いだしさ……」

その様子はまるで思いだしたくも無いものを思い出そうとしている雰囲気だった。とは言え、この付近に人は私達以外誰もおらず、どうしたものか……

「おい、お前達……こんなところで何してるんだ？」

子供のような声が響き、私は声がした方向に首を向ける。そして視線を下のほうに向けると、そこには浅黒い肌を持ったジュニアスクールに通うような背丈を持った男性のビーストがいた。だが雰囲気の子供のそれとは全く違う……話で聞いた小ビーストか。

「何をしていると言われてもな……」

「人を探しに来ただけだね……いくらなんでも船の量が異常だよ……」

エミリアが途方にくれた様な表情をする。まあ、あれほどの船の量だから絶望しきってしまっているのだろう。クラウチに船の特徴は聞いたが、残念なことによりふれたデザインだったらしく特徴が見当たらないのだ。

「ああ……確かに……ココ最近船の量が多くなってきてやがるな……まあ俺達もココに来たばかりだけどよ、いくらなんでも異常だろ……」

確かに彼の言うとおりだ。いくらなんでも船の量が異常すぎる。ココで祭りでもやっているのかと言う質問にも彼は首を横に振った。

「祭りもイベントも何もなし。リイナの話だとカーシユ族って言う連中しかいないはずだぜ？ まあ、この辺りには誰もいないみたいだな……」

「リイナ、だと？」

その名には聞き覚えがあった。私は咄嗟に質問の声を上げた。

「一つ聞くが、そのリイナは銀髪の女性ヒューマンか？」

「いや、俺と同じ小ビーストの女だぜ？ それに髪の色だって黒だしよ」

「ギユスターヴ、そのリイナって人と知り合い？」

エミリアの質問に対して私は首を小さく縦に振る。まあ同名の知り合いがいたって話だし、私の知り合いと彼の連れとは別人だと言う事が分かった。

「……お、噂をすれば来たぜ」

彼がそう言うのと同時に奥の方から女性の声……彼の言うリイナと言う人物の声だろう、それが響いてきた。

「あ、トニオ？ そっちも2人見つけたんだ？」

姿を現したのはトニオと呼ばれた小ビーストと同じぐらいの背丈を持った女性ビーストだった。だが彼女の背後にいた少女たちを見た瞬間、私は思わず目を見開いた。

「生憎だが来たばかりの人探ししてる奴らだとよ。で、『そっちも』って事はお前も2人見つけたって事でいいのかリイナ？」

「まあ、ね……実はあたいの名前でちょっと困ってるんだけど……」

そう言っつて頬をかく小ビーストのレイナ。彼女の言葉を合図にして彼女の後ろにいた2人組みの女性の内片方が声を上げた。

「あはは……まさか同じ名前の人がいたなんてね……」

活発そうな雰囲気を持った金髪の少女も頬をかく。すると彼女と手を繋いでいた瓜二つの顔を持った黒いコートを身に包んだ銀髪の少女が首を傾げながら言った。

「レイナのなまえはレイナだよ？ でもおねえさんのなまえもレイナだし……」

「銀髪のレイナか……そっちも噂してたら来ちまったよ……」

彼が呆れたような溜息を吐けば、私も盛大に溜息を吐く。当然だ、本当に噂をしていたら来たのだから。

「あー、自己紹介を始めるぞ。俺はトニオ＝リマ、フリーの傭兵だ」

トニオが頭を掻きながら言っつと小ビーストのレイナが声を上げた。

「一応あたいも言っつておくよ。あたいはレイナ＝リマ、さっきのトニオとは夫婦で傭兵をしているんだ」

彼女に続いて私が声を上げる。残った2人の……特に私に警戒心を持っている片方の目を気にしながら声を上げた。

「始めまして4人と。私はギユスターヴ・ウィンストンだ、しばらくの間よろしく頼む」

「あ、あたしはエミリア・パーシヴァル。ギユスターヴと同じリトルウイングの傭兵です、一応……」

エミリアが言葉を濁しながら言うと最後に双子姉妹の内、金髪の方が声を上げた。

「……ま、いいわ。あたしはレイナ・ワインバーグよ。で、この子が……」

「レイナ・ワインバーグです！！ おねえちゃんといっしょに“ようへい”のしごとをしてるので、よろしくおねがいします！！」

レイナが言い終わらないうちに銀髪の方のレイナが手を上げて声を上げた。だが私は彼女たちの自己紹介に違和感を覚えた。

(どういうことだ……！？)

レイナとリイナと言う双子姉妹は私の知り合い……私と同じ異能者であり、同じ一族の人間だ。恐らくレイナも私の素性に気付いているのだろう、凄い目つきで睨んできている。

そしてそれ以上に私が困惑している理由がある。それは

(なぜ先代当主の娘達がココにいる！？ いや、そこまではいい。だが……)

そう、彼女たちは先代当主の娘だ。ウォザーブルグ動乱以後一族を出奔したのは聞いているが、それ以上に私が驚愕したのは

(何故リイナがあそこまでおかしくなっているんだ!?)

そう、彼女たちも……特に銀髪のリイナの方はウォザーブルグ動乱の関係者……否、ある意味では“元凶”とも言える存在だ。

そして私は動乱以後の……カールとアスカが行方不明になってからの彼女達の事も知っているし、父親にすら牙を向ける荒れ様とコートを抱きかかえたまま動こうとしない落ち込み様は見ていられた。しかも本家筋の人間しか名乗る事が許されなかった姓を棄ててワインバーグ……カールの苗字を名乗るようになってからしばらくして、先代当主が大枚叩いて手に入れたレアカードを破り捨ててから出奔したのだ。

だが手にしたぬいぐるみで遊んで喜んでいる彼女はまるで……

(まるで何も知らない、普通の子供ではないか……!!)

私の驚愕の視線に気付きもせず、彼女はただただ人形遊びに興じていた。

同時刻



「くそっ！！ くそおっ！！ テメエ誰だ」

その言葉を最後に自分と同じ存在が斬り捨てられる。斬り捨てた存在はただただ何事も無かったかのように手にした武器をこちらに向けた。

「どうなってんだよ……遊戯王のモンスターは出てくるし、『原作』通りに炎を潜り抜けたら爆弾が爆発するし、プリン害児は妙に強くなってやがるしどうなってんだよ！！ ましてやテメエのようなデューマンがカーシュ族にいるなんて聞いてねえ！！」

そして目の前の『異物』はこっちに向かって襲い掛かってくる。その手に握られているのは日本刀そのもの。無数のシャドウグがこっちへ銃口を向け撃ち続けるわ、『原作』には無い攻撃方法の足蹴りまで繰り出してくるわ、拳句の果てには遊戯王のモンスターまで召喚するわで何が何だか分からない状況になりやがった！！

「ちきしょう……チキシヨウ！！ こっちに来るなあ！！」

話が違っじゃねえかあのクソ神！！ チートを好きなだけ手に入れたしニコポもナデポも常備した！！ 海底レリクスで死ぬのが嫌だったからミカも見れるようにした！！ なのになんでリトルウイングには入れなかった上にココで死ななきゃいけないんだよ！！ 超電磁砲を当てても何一つ動じてねえ！！ こんな人間いるわけねえだろ！！ くるな、くるなくなるな！！

「くるなああああ！！」

思わず叫ぶ。だがそいつは何も動じずにこっちにまで来て赤黒い何かを腕に纏わせる。

そのとき初めてそいつの顔を見た。そして体が震えた。

「あ、ああ……」

白く伸ばされた髪

その前髪の間隙と千切れた包帯から見え隠れする黒一色に赤い光が燈る眼に、生気を感じさせない白い肌

そしてそれ以上に 黒一色に光が燈る右眼以上に禍々しく、白い肌以上に生気を宿していない、普通の白目と血の様に紅い左眼

それは正に『死神』その者の姿

何かが漏れた感覚がしたが、そんな事よりも赤黒い手が自分の顔を掴み上げ、頭が痛くなつて

墮落しろ……無限獄へ……

が 地獄の底から響くような声がして、最後に何かが潰れるような音

## 借金取り（後書き）

……実は今回出した銀髪の方のリイナちゃんは原作とは性格が違います。

と言うより、性格を変えざるを得なかったと言うのが正しいですね。

原作の彼女は（人間不信とは言え）生真面目な性格の妹キャラでした（メインルートになればお兄ちゃんっ子に戻りますが）が……

生真面目な妹キャラと言えば、この作品では「ご愁傷様です」の対象で有名なあの子です。心を鬼にして言いますがそちらの方が知名度が高い上、登場させないと言う事も出来ません。更にリマ夫妻も削るには惜しい上にヘイトする気もありません、最初は削る気でしたがインフィニティのタイラー登場で却下しました。

故に銀髪リイナが性格改変な上、まさかのダブリイナ登場となってしまうしました。

実はコレが一人称視点での執筆をした最大の理由……ギユスターヴ視点ならコイツの性格上、リイナ＝リマをリマ夫人、銀髪リイナを呼び捨てで呼ぶことが可能になるからです。

まあ、もちろんトニオやタイラーは逆にリイナ＝リマを呼び捨て、銀髪リイナをトニオは「嬢ちゃん」、タイラーは「お嬢さん」と呼ばせませんが。

ではではまた次回

ところで遊戯王もクロスさせている以上、デュエルは入れたほうがいいのでしょうか？

A・おい、デュエルしろよ

B・まるで意味が分からんぞ！！

でアンケートにご協力ください。では。

## 自然の守人（前書き）

今回は中ボス戦なのでデュエルは無しデース。  
デュエルはボス戦になる予定デース。

今回はあの少年が本格登場です！！

## 自然の守人

驚いたな……まさかあの2人がココにいたとは……私の正体に気付いているレイナは妹を庇いながらこちらを睨んでいるため、ろくに話も出来ない。

「ねえ……あの2人、知り合い？　少なくともお姉さんの方は凄いい顔で睨んでるけど……」

当然の事ながらエミリアが聞いてくる。まあ、これ以上隠し立てするのも気が引けるからコレぐらいはいいだろう。

「……親戚だ。彼女が凄い顔で睨んできたから思わず『始めまして』と返したがな」

嘘は言っていない。確かに彼女も私も一族の本家筋であり、父親同士がかつて当主の座を争った事のある相手だと言うのも事実。

結果は彼女らの父親の軍配が上がり当主の座に座ることが出来た。尤も彼も自分の不始末が元凶で失脚したのだが、MAW社を発展させた功績はあるため一応悪く言うつもりは無い。

「……まあ、アンタに嘘をつく理由もメリットも無いか」

エミリアも納得してくれたようだ。一方でレイナも彼女の妹でもあるレイナと共に、トニオとレイナ……紛らわしいからトニオの妻であるレイナは『リマ夫人』と呼ばせてもらおう、彼女らは情報交換をしていた。その会話はこんな風だ。

「あー……レイナとその妹の嬢ちゃん、あんたらは何しに来たん

だ？」

「今日は依頼抜きで観光よ。ちょっとリイナに色々なところを見せてあげたかったしね。この子、体が弱くて外で歩けるようになったのってつい最近なのよ」

観光……か。その動機には彼らにしてみれば嘘は無さそうだが、私から見たら不自然すぎる。

「ふーん……ま、俺達は文化保護地区の見回りを頼まれてココに来たんだよ」

「ぶんかほごちく？」

リイナが首をかしげると同時にエミリアもどろどろという事かと聞いてきた。尤もエミリアの方はそんな事聞いてないと言う風だが、リイナの方は言葉の意味すらわかってないと言う風だ。

「ああ、クラウチの所から出たところで情報屋から連絡があつたな、最近文化保護地区を大勢の人間が訪れていると聞いたんだ」

「へえ……」

「ああ、そいつが私以外の人間に情報を提示するなど無理を言っていたからな。クラウチも知らなかったようだぞ？」

彼女からしてみれば『そっちを正式な依頼にすればよかったじゃないか』と言いたいのだろうが一応フォローしておくか。

「でもさ、どっち道ちよつと変じゃない？」

「何がだ？」

私は彼女の疑問に耳を貸す。彼女は海底レリクスでレリクスについて述べたように顎を手に乗せて自分の意見を言った。



「文化保護地区とかがある観光地にしては、その2人以外の観光客がいなくて事がさ。船はいやと言うほどあるけど……」

彼女の意見に対して、女性同士の会話になったのか輪から外れたトニオがこちらの会話に口を挟んだ。

「……なるほど、そっちの嬢ちゃんは勘は良いみたいだな」

「ああ、一応私でも驚くような事を言い出すからな……」

そんな中、会話に一区切りを終えたのかリマ夫人が声を上げた。

「さっきの子達にも言ったんだけど、これからどうするんだい？」

一応依頼書ではココ最近気配も異様だし原生生物もやけに凶暴だ  
って話だよ」

「奥で何か起こってるって事は間違いない、か……」

私がそう言うとレイナも溜息をつく。一方でトニオが場を仕切るように声を上げた。

「なにせよ、奥に進まねえと人探しも見回りも観光も出来ねえ

……ココは一つ、俺たち6人でチームを組むって言うのはどうだ？」

その言葉に対して私は考える……尤も、直ぐに回答が出てしまっ  
たがな。エミリアの方を見ると彼女も私と同じ意見だったのか頷き  
を返す。

「……いいだろう。我々リトルウイングはその提案を受け入れる」

「よっしゃ決まりだな！！レイナの話じゃこの奥に『カーシュ

族』って連中が住む村があるからな、まずはそこまで行くぞ」

トニオとリマ夫人、そしてレイナは喜ぶがレイナの方は表情が曇る。これから行動すると言うのにその表情は印象を悪くするだけだが……

「少し待ってくれ、レイナと話がしたい」

そもそも彼女の様子と一族側に“前科”がある以上、彼女が私に對して後ろから攻撃してもおかしくない。まずは彼女の“勘違い”を解いておかないといけないな……

「良いけど早く済ませてよね」

「分かっている。行くぞレイナ、あの船の陰でいいな？」

「え？ ちょっと待ってよ！！」

彼女の有無を言わず私は適当な船の陰まで移動する。彼女も観念したのか私の後を追うのが気配で分かった。

「……で？ 話ってなんなの？」

適当な船の陰で止まるとレイナが腕を組みながら私の方を睨みつける。まあ、警戒心を抱くのは当然の事だが……

「まずはじめに言うておく。あの男はお前達が家を出奔した直後、兄上に当主の座を譲った」

「へー、グラディウスさんに『あんた等のお父さんが念願だった当主になれておめでとさん』って言った方がいい？」

彼女が笑みを浮かべながら言う。昔は明るいのが取り得だったのだが、ウォザーブルグ以来よくもまあココまでやさぐれたな……

「私が伝えておく。それと兄上は“協会”と手を切った、お前の妹にはもう興味ないから何処で暮らそうが“異能”で好き勝手してかさない限りお前の勝手だ。お前達程度の戦闘者ならば代わりはいくらでもいるからな、いなくて困るといふ事は無い」

「……………それはどうも。お礼に売り上げに貢献してやってもいいわよ、一応新製品出したみたいだから帰りに買っておくわ」

「ありがとうございます。兄上も喜ぶでしょうな」

私がそう言うと彼女は声を上げた。彼女はあの時以来“協会”を嫌って……………否、憎んですらいる。どちらにせよ、“協会”と完全に手を切ったのは全員一致の考えだったがな。

「で、話はココで終わり？ まあ、あんたがリイナに妙なちよっかいを出そうとしたら倒す予定だったけど無駄になってよかったわ……………アンタは飛鳥とカールの仲間だったわけだし、両方の意味でね」

そう言っただけ彼女は右手のナノトランサーからハンドガンを取り出す。危ない危ない、真っ先に誤解を解いておいて正解だったな。

「それとコレは傭兵としての私の勘だが……………異能は直ぐに使える用意はしておけ」

その言葉には彼女も眼を見張ったのか声を張り上げて叫んだ。

「はあ！？ 異能を使える準備をしておけって……………あんた本気？ いつもは『異能者狩りを避けるため無駄に使うな』とか言ってた、勘なんてもの信用してないあんたが！？」

「SEED事変以来そうだった物も馬鹿に出来ないと学んだだけで、今回は異能をそれが告げているだけだ。さて、戻るぞ」

そう言って私は船の間を縫って移動を三度始める。レイナも再び私の後を追おうとして

「私はレイナがどうしてあんなったのかは興味無い。お前が言いたくないのならばそれでもいい」

私がポツリと言うとレイナから緊張が解れて行くのが分かった。最大の懸念はそこだったという事か。

（尤も……お前の本当の目的が何なのか、ゆっくりと推理させてもらうぞ）

レイナは本当に観光のつもりだろうが、彼女には別の目的があるのは明らかだった。漸く他の皆と合流できたところでエミリアが声を上げる。

「遅かったじゃないギユスターヴ、どうかしたの？」

「少し誤解を解いておいたただけだ。私が彼女の妹を狙っていると勘違いしていたみたいだったからな……」

おおむね事実だ。かつての一族には彼女を狙う理由もあったのは事実だが、今はどうでもいい事だ。だからこそその誤解は解いておかないといけなかったのだ。

「ふーん……」

「……何か勘違いしてないか？」

あの顔は明らかに勘違いしている顔だった。大方私がレイナを口説こうしていたと思っっているのだろうな……

「そう言えばトニオ、カーシユ族の村へはどう行けばいいか分かるのか？」

「テメ、話逸らしやがったな……まあ、リイナが言うにはカーシユ族は土地を転々と移動するから逸れた仲間が分かるように目印をつけておくんだよ」

「それとカーシユ族の文字についてはあたいは予め学んでいたからそれを元に辿ればすぐさ」

リマ夫人が自信ありげにそう言うと、レイナも負けじと声を上げる。

「リマさん、それだったらあたしも協力するわ。結構学んできたからね」

そうやって彼女も立候補する。私は旧文明専攻でそういった少数民族の暗号は学んでこなかったから解読役が複数いても困る事はない。

「……では2人とも、解読は頼んだぞ」

「わかったよ」

「りょーかいつと」

そうやって我々は森の奥へと進む事になった。

「あつたあつた！！　これがカーシュ族の文字だよ」

洞窟の壁を見据えていたりマ夫人の呼び声にエミリアとリイナが後ろから顔を覗かせる。私もしゃがんでそれを見るが、楔形文字に似た感じでありどれも一緒にしか見えない。

「わー、おもしろいかたちしてるねー！！」

リイナは珍しい文字を見て喜んでいるが、私にしてみれば何処が面白い形なのかさっぱり分からんのだがな。一方でリマ夫人とレイナはそれぞれ解読しているが、メモ帳を見ながら解読しているレイナよりもリマ夫人の方が早く解読できたようだ。

「旧文明の文字ならある程度分かるかな……？」

そう言った矢先、私は楔形文字を間近で見据える。この文字は何処かで見たことがある様な……だが旧文明の文字ではない、コレは一体……

「ところでリイナ……」

エミリアが彼女達の名前を言ったのがまずかった。リマ夫人は苦笑いをしたが、リイナがエミリアの方を見て首をかしげる。

「よんだ？　エミリアおねえちゃん？」

「あー……ゴメン、間違った……」

よくよく考えればエミリアはレイナやトニオと違って、どちらか一方の『レイナ』と親しくないのだ。それ以前にエミリアは両方も初対面だが。

……そもそも体格的にレイナとエミリアを並べた場合、後者の方が妹にしか見えないのだが……

「どう呼べばいいんだろ……」

「エミリア、どうしたんだ？」

ココは助け舟を出すか。エミリアから簡単に質問の内容を聞き、私は声を上げる。

「リマ夫人、解読の方は？」

「済んでるよ、『炎は全てを燃やす悪魔、何も無き道は墮落の象徴、鋭い針を越えていけ』ってあるから、針のある道を進んで行けって事じゃないの？」

「とげとげしてていたそう……」

レイナが沈んだ表情をするが気にしても始まらない。6人で行動してしばらくすると、三叉の分かれ道に出た。

「炎がある道に平坦な道、それに……」

レイナが指を指した先は針が出たり入ったりする罫がこれ見よがしにあった。他にも炎が吹き出る道もあったがそれは罫だと分かっている。

「確か針がある道に行けばいいんだよね？」

「どっちにしても悪趣味よね……」

トニオとエミリアが各々思ったことを口にする。まあ、カーシュ族はコレを越えていくのだろうから嫌がっても仕方がないのだが文句を言っても仕方が無い。

最初に私がシフタライドを飲んだ後でエミリアを連れて針を飛び越え、続けてレイナがタイミングを見計らい針が無くなった直後にレイナの手を握って走りぬけ、最後にトニオとリマ夫人が針が出る前に飛び越える。

その先を越えたところはやはり平坦な道筋、どうやら正解の道だったようだ。

「……一応武器は出した方がいいと思うぞ？」

「もう？ 早すぎじゃない？」

私が細剣を手にするとエミリアがそう言うが、私にしてみたらいつ襲われるか分からないのだ。森の中は原生生物にしろ人にしろ隠れる場所に困らないからだ。

「……ま、それもそうだね」

「じゃあねえなつと」

リマ夫妻も各々得意とする武器を取り出す。トニオがヨウメイ社製のツインクロー・ランミサキで、リマ夫人がテノラワークス製のツインハンドガンのアルブ・ボアだ。一方でレイナも得意とするヨウメイ社製のナツクル・ガレントクルを手に着させる。

「ねえねえおねえちゃん、レイナはどうすればいいの？」

「レイナはテクニックであたしたちのサポートをよろしく!!」

彼女がそう言うところレイナも何処かの玩具メーカーが売り出すようなデザイン性重視のウォンドを手にする。一方でエミリアも仕方が



ないと言わんばかりに普段から使っているクラーリタ・ヴィサスと言っロッドを手にした。

「来たか!!」

私の言葉を合図にヴァンダと言う原生物の群れが姿を現す。ベツガと言う同盟軍が使う小型マシナリーの様な大型昆虫の様な原生物やリーダー格らしきヴァンダ・メラもいたが最悪の事態ではなかったことに私は安堵の息を漏らした。

「はあっ!!」

まず私が一匹のヴァンダの心臓目掛けて踏み込んで細剣で突き刺すと、トニオもランミサキでベツガの複眼を突き刺す。

続けて遠く離れたところからエミリアとレイナが氷系の初級テクニク・バータで離れたところからヴァンダの炎を相殺すると、炎を吐き出したヴァンダの横に回ったレイナが右の拳で殴って動きを止めるとリマ夫人が撃ち倒す。

リーダー格のヴァンダ・メラについてはトニオがツインクローで切り裂いて動きが止まったところをリマ夫人がツインハンドガンで足止めしたところで

「ハッ!!」

私が先程のヴァンダと同じように足を踏み込ませ、口の中に細剣を突き刺した。剣先が後頭部を貫いて姿を現しているため、絶命させたのは明らかだった。

「さて……と……」

周囲を見回すと花の下あたりに文字が刻まれているのが見えた。レイナとト二オが倒した原生物の墓を作っている間、レイナとリマ夫人が解読を行っている。

「……………」

私とエミリアが二人の後ろから文字を覗く。所々掠れて読めないところがあるがやはり何処かで見たことがある文字だ、何処で見たのやら……

「えーつと……………」 『我ら』……………」 『人を造りし』……………」 『信じ』……………」

レイナが所々を読みながら声を上げる。その一方でリマ夫人が頭を掻く。

「『自然』……………」 『汚』……………」 『鉄槌』……………」 レイナ、あんたが解読したのは要するに人の造ったものを信じるとか信じないとか言う事だったね？ あたいが解読したのは自然を汚すものに鉄槌だから……………」  
「人の造ったものを信用すると言う事か？」

ト二オとレイナが戻ってきてそう言うことを言った。さて、次の道は人が造ったものを信用すると言う事だな……………」 少し進んだ先に看板らしきものが右矢印を向いている。そちらとは逆方向に進んでみるとするか。

さて、なんだかんだで解読が進んでいく。ある時は黒い炎を避け、またある時は滝がある道を進み、またある時は紫色の花を探して進んでいく。

「なんだかたからさがしゲームみたいだね」

リイナが笑いながら言った『宝探し』とは言いえて妙だ。差し詰めお宝はカーシュ族の村と言うところか。

「確かにそうだな……おっと、また暗号だ。頼んだぜお二人さん」

トニオがそう言うとレイナとリマ夫人がしゃがみ込み、その後ろからエミリアがまたもや覗き込んだ。最早いつもの光景だったのでトニオも気にしてはいないようだ。

「あゝ……こりゃ結構難しいわ……」

「そうみたいね……」

今度のはかなり難しい暗号だったのか2人とも頭を悩ませる。必死になって解読しようとする中、エミリアが声を上げた。

「あ、それ……この先の道のことについてだ」

『え？』

2人が驚くと、エミリアは頷きながら壁の文字を見据えて呟く。

「ああ……うんうん……今までと違って難しい文法で書いてるん

だね……更に詳しい道のりまで書いてるから、コレが最後の目印って事かな？」

そう言いながら彼女は解読を進めていく。2人よりも早く、そして文字だけを見据えて頷くと突然立ち上がった。

「よし、この先を進んで森を抜ければ直ぐだって……どうしたの？」

エミリアが呆然となっているリマ夫妻とレイナを見ながら目を瞬かせて答える。一方でリマ夫人が代表して声を上げた。

「あんた……何で読めるんだい？」

「何でって、さつきから2人が読んでたのを、後ろで見てたし……」

エミリアがそんな事を言うが、当然信じられるはずが無い。それに彼女は以前レリクスの存在意義についてを海底レリクスで述べた事もあるのだ。

「にしても俺はさっぱりだ。似たようなモンにしか見えねえんだがな……」

トニオの指摘にエミリアも眼を泳がせてしまう。

「そ、そんな事ないって！！誰だって出来るよこのぐらい！！現に奥さんやレイナも読めてるわけだし……」

「いや……実は一ヶ月かかったんだけどね……」

「あたしは一週間の付け焼き刃よ……」

リマ夫人が苦笑いを、レイナが溜息を吐きながらエミリアに反論する。すると彼女はこちらに顔を向けてきた。

「ギユスターヴ!! ギユスターヴはどうなの!? 興味あるみたいだけど……」

「いや、何処かで見ることがある文字だと言っ程度だ……それも旧文明の文字ではない……」

いきなり話を振られた私も声を出すが、一方でレイナが声を出す。

「でももつばしよわかるんだよね? はやくいったほうがよくない?」

「そうそうそのとおり!! ほらみんな、こっちだよ!! 早くいこー!!」

レイナの言葉に反応したエミリアが無駄に明るい声を出して彼女を連れて先に進もうとし、私たちがそれに続こうとした時だった。

「おまえたち、とまれっ!!」

そのような殺意が籠った声が響いた瞬間、私達は一齐に動いた。

「馬鹿っ！！ 危ねえっ！！」

「リイナツ、危ない！！」

トニオとレイナがそれぞれエミリアとリイナを押し倒した直後、オトンの矢が数本彼らの真上を通り過ぎ、続けて角度を修正して放たれた矢を私とリマ夫人がハンドガンで撃ち落とす。

彼らがエミリアとリイナを連れ戻したところで三度迫る矢を私が撃ち落とし、今度はトニオとリマ夫人が矢を放った張本人に迫る。

「もらっただぜ！！」

真っ先に飛び掛ったトニオがツインクローの片方を突きつけようとした刹那、突如赤い魔法陣が浮かび上がると炎を象った何かの姿を現しトニオに向けて拳を振りかぶると、その腕から放たれた炎が彼に襲い掛かる。

「なっ……！！」

トニオが驚愕の表情を浮かべる。彼は上空を飛んでおり、避ける事など最早不可能だ。そこをリマ夫人が真横から飛びつくとも炎の塊はトニオに当たることなくそのまま通り過ぎる。

炎は私が翳したシールドで残った2人……エミリアとリイナに当

たることなく霧散したが代償はあった。先程の炎でシールドが溶けてしまったのである。

「くっ……！！」

これで私がMAW社から持ってきた武器は全滅。トニオたちが私たちとは別の場所で体勢を整えなおすと、矢と炎を象った何かを呼び出した存在の正体が姿を現した。

オレンジや黄色を主体とした派手な民族衣装を身に纏った、羽飾りのついたバンダナをつけた端正な顔立ちをしたニューマンの少年……顔立ちからして下手をしたらエミリア以下の年齢だ。その手には羽飾りがつけられた一文字の槍が握られており、表情は怒りと憎しみに歪んでいた。

「先へは行かせないっ！！ 村は、皆はぼくが護るんだ！！」

叫ぶ少年に対して私は己の武器を確認する。踏み込んでこそ真価を發揮する細剣と同じ条件の槍では間合いで負けてしまう。先程のシールドは炎によって溶かされたため除外する。更に残ったハンドガンなどは殆どが自衛目的のレンタル品だ。

となると今回の私の立ち位置はエミリアとリイナの護衛だ。戦闘は情けないがレイナとリマ夫妻に任せるしかない。

「レイナ、すまないが戦ってもらえるか！？」

「……はいはい、わかったわよ！！」

彼女が叫ぶとリマ夫妻と共に少年に襲い掛かる。この乱戦では下手に援護しようものなら誤射を招きかねない。現にリマ夫人もダガーに取り替えて接近戦を行っているのだ。

かと言って私も乱戦に参加しては彼女らに対する流れ弾の処理が

遅れてしまう。先程の炎が彼女らに襲い掛からないとは限らないし、先程の剣幕ではこちらにも攻撃するだろう。

尤もこのままだったら数の差と、SEED事変を潜り抜けたリマ夫妻の経験の差で少年を倒す事は出来る。

「くっ！！ こうなったら！！」

少年が距離をとると、一枚のカードを手にする。それを見た瞬間、私は声を周囲の目を忘れて張り上げてしまった。

「まずい！！ 早く奴を倒すんだ！！」

ハンドガンを出して撃とうにもココまで距離を離されたらロングレンジショットでも届かない。リマ夫妻は少年が取った行動を理解していないが彼らを責める事は出来ない。叫んだ理由を察したレイナが彼に向かうがもう遅い……！！

「ぼくはナチュル・パンピンを召喚！！ 更に条件を満たした上での召喚に成功したので、ナチュル・ナーブを特殊召喚する！！」



彼の声を合図に顔と手足のついた南瓜の原生生物らしきものが姿を現すと間髪いれずに植物の葉を重ねたような魔物が姿を現す。

「な、何だいあれは！？ ミミラージュ・ブラストじゃ無さそうだが……」

リマ夫人が呆然とする中、エミリアが驚きの声を上げた。

「ちよっ！？ 何！？ 何でデュエルモンスターのモンスターが……」

エミリアも驚愕の表情を浮かべたが、直ぐに首を傾げる。恐らくあの顔は海底レリクスでの事を考えているのだろう。更に続けて少年が声を上げた。

「レベル4のナチュラル・パンプキンにレベル1のナチュラル・ナー

ブをチューニングー！！」

ナチュル・ナーブが1つの輪になり、それをナチュル・パンプキ  
ンがくぐる。その直後、ナチュル・パンプキンが4つの星になり直  
線状に並ぶ。

「偉大なる自然の四地王が一角が今目覚める！！ その安らぎを  
持って魔を打ち払え！！」

その叫びと同時に無数の葉が散らばり、我々の視界を覆う。しばらくしてから葉は全て地面に落ちたが、既に相手の同調は完了してしまった。

緑色の虎に年代の入った樹木で覆われた手足と頭部に生えている角。そして所々で生えている葉がそれが自然界で現存している虎ではないと自覚させる。

「四地王が一角……安らぎの緑虎『ナチュル・ビースト』!!」

それと同時に少年の声が響き渡る。それを聞いた瞬間、私はある事を思い出した。

「ナチュル……!?!? そうか、『ナチュル族』か!!」

先程見たカーシユ族の文字の正体、それは500年戦争時代に存在していた異能者の部族・ナチュル族が使っていた文字だったのだ。自然を愛し500年戦争の末期になつて暴走した3体の氷竜の猛攻を受けてもなお生存し歴史の影に消えた部族……名前を変えて存在し続けたというのか……!!

「ナチュル族だかなんだか知らねえが、どうなつてんだよありや!?! デュエルモンスターのモンスターがディスクも無しに実体化しやがったつて言うのかよ!?!」

トニオが驚くが、目の前のナチュル・ビーストも怒りの表情をこちらに向けてくる。そして再び少年の声が響き渡った。

「村には行かせない！！ お前達の狙いはぼくの筈だろ！！ ぼくだけを狙えばいいじゃないか！！」

「しかも何かと勘違いしてるみたいだね……どうなってんだい！？」

リマ夫人も驚愕の表情を浮かべ、トニオも呆れながら頭をかく。

「俺が知るかよ……」

しかし疑問を他所にナチュル・ビーストが突然襲い掛かってくる。これ以上暴れまわられては異能者の存在自体が露見してしまう可能性がある……それだけは断じて防がねばならない。

「こうなれば仕方がない、発覚する前に倒させてもらおう！！」

最早スピード勝負になってきている。私は先頭に出て2枚のカードを取り出す。

「私はバイス・ドラゴンを特殊召喚し、フォース・リゾネーターを召喚する！！」

そう言っつて姿を現したのは紫色の竜と普段から使っているリゾネーターの背中は何らかの球体に乗せた悪魔だった。そして私は腕を交差させて宣言した。

「レベル5のバイス・ドラゴンにレベル2のフォース・リゾネーターをチューニング！」

バイス・ドラゴンが5つの星になりフォース・リゾネーターから作り出された2つの輪を潜り抜ける。

「王者の叫びがこだまする！！ 勝利の鉄槌よ、大地を碎け！！」

その声を合図に爆音が響き渡りその中から1体の紫竜が姿を現す。

「羽ばたけ爆炎竜！！ エクスプロード・ウィング・ドラゴン！！」

その声を合図に竜が咆哮を上げる。そして紫竜が息を吸い込み、私が叫びを上げる。

「吹き飛ばせ、エクスプロード・ストーム！！」

その声を合図に爆炎竜が爆炎を伴った炎の息吹をナチュラル・ビーストに目掛けて吹きかける。しかしナチュラル・ビーストはそれを必死になって避けるが、それでも炎の息吹が着弾した余波での爆発によって大きく吹き飛ばされた。

「うわあああー！！」

少年がナチュラル・ビーストから弾き出され、地面に叩きつけられる。ナチュラル・ビーストも傷は浅くなく、即座に消滅し私も爆炎竜に対して礼を言って消し去る。

「……………ぼくは……………まけられない……………むらは……………ぼくがまもるんだ……………」

そう言ったのを最後に少年は気絶する。所々に私が着けてしまっ

た火傷がある為、手にしたウォンドでのレスタをかけて治療を開始した。

「すまねえな、手間をかけちまってよ……」

ト二オがそう言うが、今回は相手が相手だったし、彼自身異能者と戦ったのは初めてだろう。私も気にしないでくれと言ってから彼の容態を見る。

「ねえねえ、このひとが『カーシュぞく』？ ふつつのひとだよ？」

リイナがそう言うのとリマ夫人も頷きながら彼女の問いに答えた。

「そうさ、カーシュ族って言うのは『種族』じゃない。あたい達のような文明を持たず原始的な生活をしていた『部族』なのさ。もちろん、ナチュル族って言うのは初耳だけどね……」

そう言っただけ私の方を見据える。ト二オもエミリアも怪訝そうな表情でこちらを見据えてくる。最早隠せる段階ではない……正直に話すしかないか……

異能者に関して私が話し終えると、ト二オが訳が分からないと言いたげな表情でこちらに向かって問いかけた。

「異能者、ねえ……となると、そっちの嬢ちゃん達もそうなのか？」

彼の視線の先にはレイナとリイナがいた。レイナも渋々とだが頷き、エミリアの表情が曇る。まあ当然だ、彼女にとってはあの出来

事は『夢』なのだから。

「まあ、よくよく考えればミラージユ・ブラストって元々カーシユ族が持ってた技術なんだからこう言った力を持ってても不思議じゃないか……」

リマ夫人がそう言うと、レイナが声を上げた。

「でもこの子、あたし達の事を何かと勘違いしてなかった？」

レイナの言うとおりだ。私たちはここには始めて来たのだし、カーシユ族に至っては初めて知ったのだ。大体村を襲う動機も無いし、この少年を狙うなど論外だ。

「……ねえギユスターヴ……聞きたいことがあるんだけど……」

エミリアが沈んだ表情で私に問いかける。話したいことは果たして異能者のことか……？

「それは後回しにするけど、さっきのカーシユ族の事……どう思うっ？」

「どうも何も、何かが起きているんだろう？ カーシユ族の村で何かが起きたのは間違いないだろうな……」

どうやら彼女も気にしていたらしく通路らしきものを見据えている。まさか兄の書類にあった異能者とはカーシユ族のことか？ それにしても今まで隠しおおせていたものが突然露見してしまうなど、一体何が……

「じゃあねえ、二手に分かれるぞ」



私が考えている中でト二才が声を上げた。

「俺達は一旦こいつを連れて手当てに戻る。お前達は先に進んで様子を探ってくれ」

ト二才の提案に対してエミリアが異を唱えた。

「え……！？ あたし達が先に進むの！？ 足手まといなのが確実なあたしやあの子の方がよくない！？」

「あんたたちの船に医療用のポッドとか、この子を手当てできるような設備ってあるかい？ それにあんた達だけで来た道に戻る自信は？」

エミリアの異議に対してリマ夫人が逆に問いかける。残念だが社用の船にはそのような設備は無い。

「両方ともない……」

「あたしたちの船も広いけどね……たとえ設備があってもあたし達は今回ばかりは奥へ進ませてもらうわよ」

レイナもココから帰れと話を振られたリイナを宥めながら彼女の言葉を否定する。となるとやはり彼らが戻るしかないか……

「それにコイツのような奴が相手だと俺らじゃ慣れてねえしよ……異能者だって言うあんたらの方が奥に進むのに適してるって訳だ」

ト二才が済まなさそうに言うが、直ぐに明るく声を上げた。

「ま、そう心配するなって。俺らも早く追いつけるように急ぐさ」

「それじゃ頼んだよ」

リマ夫妻がそう言っただけで少年と共に来た道に戻っていく。これで奥へは私にエミリア、レイナとリイナの4人で進むしかなくなったと言っわけか……

意気消沈としている暇は無い。私は考え事をしているエミリアに声をかけると4人で再び奥へ向かった。

森も奥深くまで進んだ。今度は畏れも目印も目立たなかったが、その代わりに視界などが狭く急ごうにも急げない状況が続いた。

「もうそろそろカーシュ族の村に近づくけど……」

エミリアの声に対して私は頷くとレイナとリイナの方を見据えた。

「……そろそろいいだろ。レイナ、1つだけ聞きたいことがある」

その声に対してレイナの表情が強張る。それでもなお私は聞かなければならなかった。

「何を……？」

それは私が彼女らと会ってから感じていた疑問がある。ここで聞くしかない。

「私が言いたいののは1つだけだ」

そう言って先程の少年と戦ったような広い場所に出ると、私はレイナに向き直って目つきを鋭くさせて問いかけた。

「今一度聞かせてもらおう……お前の本当の目的は何だ……？」

## 自然の守人（後書き）

さて、今回も難産だったな……何しろ今回はデュエル無しだったの  
で何を召喚させようか悩みに悩んだから……

ユート君にはナチュルを与えようと最初から決めていたのですが、  
今回は何を召喚しようかと言う事は考えていませんでした。  
ギユスの方は決めていたのですが、そうなたら効果がかみ合わない  
のではと思いい変更次ぐ変更……漸く決めた時には6時間の死闘  
になっていたという……

## 異能者としての矜持と決闘者としての誇り（前書き）

皆さんお待ちせしました！！

今回でとうとう遊戯王恒例のあのシーンが出ます！！

単純な流れ作業デュエルですがそこはご容赦を……

後このサイトでは常識になってる全カード所持者に対するアンチもしくはアンチ管理局信者がよくやる管理局に対する悪意を持った解釈と似たような内容になってしまっていますがそこはご容赦を……

それでは皆さん一緒に……

ノ（、（ゞ デュエツ！

## 異能者としての矜持と決闘者としての誇り

私が発した言葉を合図にレイナの雰囲気が一変した。目つきを鋭くさせ、レイナを護りながら私を睨みつける。

「……どういう意味？ 本当も何も観光以外にココに来る理由であるのかしらね？」

その問いかけに対して私は憶測だが答えを得ている。そして彼女の矛盾点も2つ存在したのでそこから突かせてもらった。

「まず最初にレイナだ。体が弱っていて漸く外に出られるようになったと言ったな？」

「そうよ？ だから観光。その何が悪いって言うのよ？」

別に悪くは無い。むしろアスカやカールの事を考えれば嬉しいくらいだが、だからこそおかしいのだ。

「だったら絶景で有名なニューデイズ……いや、それこそ我々の故郷であるパルムでもよかったのではないか？ 彼女にしてみたら何処でも新鮮なものだ、態々寒暖の気候が激しいモトウブを選ぶ理由など無い」

その言葉に納得するエミリア。一方でレイナは苦虫を潰したような表情になるが続けて2本目を立てさせてもらう。

「仮にパルム及びニューデイズを既に訪れていたとしても……2つ目の疑問点だが何故カーシュ族の文字を学んだんだ？」

「適当に選んだ森が実は罾とかがあったって話よ。それで学んで

もおかしくない？」

「ああ、おかしいな。ならば何故一週間の付け焼き刃でカーシユ族のテリトリーに入ろうとした？ しかも解読に四苦八苦していた状態で、だ」

その言葉に対して口ごもるレイナ。さてココからが私の憶測だ。

「もしかしたらだが……ココ最近異能者がこの森で多く見られるようなんだ。私はその調査ないし違法者の駆除に赴いている」

「……それがどうかしたの？」

「ココからは私の憶測なのだが……お前の本当の目的も人探しではないか？ そしてお前がそうまでして探そうとしたその対象は……」

言い切ろうとした瞬間、強大な殺意と強き風が吹き荒れる。この気配は紛れも無い……あの時海底レリクスで感じ取ったものだ！！

「……！！！」

私は細剣を手にし、周囲に気を配る。周りは木々と草で覆われており、隠れるにしろ奇襲にしろ都合がいい場所だ……

「……なんなの！？」

次の瞬間、一機の戦闘機が上空を舞う。重厚なシルエットは戦闘機と言うより爆撃機に相応しい存在感、その橙もしくは茶の色彩を持った爆撃機は突如人の形を成していき、我々の眼前に立ちはだか

「……！！！」

その姿を見て私は息を飲んだ。その重厚なシルエットは忘れるはずが無い……あの機体は、否、あの“モンスター”はかつてデュエルモンスターズ界を荒らしたため造られてから僅か一ヶ月で使用が禁止され生産が止まったデュエルモンスターズ界の問題カードが1枚……！！

「ダーク・ダイブ・ボンバー、だと!？」

仮に買おうとしたら1枚20億メセタは軽く超える言っなれば資産にも等しいカードだ。あれをモチーフにした兵器と言う可能性もあったが、二手二足の直立歩行型マシナリーはいかなる用途でも製造が禁じられており、キャストが大多数の同盟軍が製造しそれを投入するなどありえない。

だが続けて再び上空から今度は何らかの吐息が放たれた。炎・津波・突風・土石流・そして黒い波動だ。

「な、何なのよ!？」

そして姿を現したのは五つの首を持つ竜……それを見た瞬間、私は頭を抱えなくなった。

「今度はF・G・Dだと!？」

F・G・Dもまた限定生産されたカードであり、高レートで取引される物だ。その値段は禁止指定を受けたダーク・ダイブ・ボンバーよりも高いと聞く。

「ちよ、何処の金持ちよ、そんなカードをぼんぼん手に入れることが出来るなんて!？」



エミリアが叫び声を上げるが、今もなお上空にはダーク・ダイブ・ボンバーが、背後にはF・G・Dが控えているため、進むことも逃げる事も出来ない。

『ハツハツハツハツハ！！ どうだい僕に主人公を譲る気にはなつたかな？』

ダーク・ダイブ・ボンバーの中から声が響く。 声質からして男だろう。

「お前は……何者だ！！」  
「……」

敵意を込めて声を発する私に対してレイナは言葉を出さずに雰囲気を変えさせる。それは先程私に向けた物以上の怒り……否、憎悪だった。

『何者か、だって？ 僕は言うなればこの物語の主人公様だよピンチヒッター君？』

「主人公……？ ピンチヒッター……？」

主人公だのピンチヒッターだのどういう事だ？ 海底レリクスでの出来事は私の記憶にも新しいが、ますます意味が分からなくなつて来ている……

『そうさ。カーシュ族のガキはゲームをプレイしてた時からウザつたかつたからね、さっそくで悪いけど退場してもらおうかと思つてたんだ。よくあるだろ、淫獣とかKYとか薬味とか鈍感野郎を殺して退場させて自分でハーレム作るって言う話だよ』

『ゲームをプレイ』？ どういうことだ！？ まるでこの世界がゲームであるかのような言い方ではないか！？

「ふうん……」

困惑する私を他所にレイナが憎悪を隠さずに一步前が出る。すると再び声が響いてきた。

『んん？ 君は『PSP02』に出てない人間だよねえ？ まあいいさ、僕のものにならないかい？』

そう言っただけでコクピットらしき部分から出てきたのは左腕に何らかの装置を身に着けた細身の優男で、容姿は絵に描いた様な美形の男だった。その男は緑色の髪をしており、黒のロングコートを羽織っている。

「そんな怖い顔しないでリラックスしなよ、ね？」

場違いなほどに明るい笑顔で言い放つ彼だったが、即座にレイナが慣れない腕でハンドガンを乱射する。私たちはレイナの奇行に眼を見張るしかなかった。

「うわっ！！ な、何を……！！」

「やかましいわよ！！ 言っちゃ何だけど、F・G・Dならともかくよくもあたしの前でそんなもの出したわね！！ 大体そうやって女を食い物にしようって根性が見え隠れするような奴なんか誰が信用するか！！」

憎しみに支配されて攻撃するレイナ。気持ちは分からなくないが、いくらなんでもやりすぎではないか！？ 男も男で避け続けている

が、限界に来たのか遂に大声を張り上げる。

「五月蠅い!!! こうなったらコレで決着をつけるぞ!!! 行くぞ篤志い!!!」

その言葉を合図に奴の様子が一变し……何とF・G・Dの影から瓜二つの人間が姿を現した。違う点は髪の色が橙色の点のみ……恐らく彼が『アツシ』なる人物だろう。

「え!? ど、何処に隠れてたのよ!?!」

エミリアの驚愕を合図にしたかのように彼らは一斉に左腕を構える。すると突如プレートが動き出し、起動状態に入る……って少し待て!!!

「デュエルディスクだと!?!」

私の驚愕を無視して彼らは自慢話を始めた。

「僕と忠志兄さんは他の野蛮人どもと違って謙虚でね……」

「武器を手にしてチャンバラごっこなんて必要無いんだよ……」

『僕たちが手にしたのはコイツさあ!!!』

奴らから紫色の光が放たれると同時に伸びた光が私とレイナを貫き、光の腕が私の心臓を掴み上げてくる!!!

「なっ!?!」

「え!?!」

驚くのもつかの間、私から伸びた光はF・G・Dの影に隠れてい

た男・アツシと……レイナの方はダーク・ダープ・ボンバーから出てきた男・タダシの腕と繋がってしまった！！

「ギユスターヴ!？」

「おねえちゃん!？」

エミリアとリイナが狼狽し、男達は声を上げる。

「はっはっは!!! この世界は何故か遊戯王の設定も入っているみたいだしね!!!」

「一回こういった何でもありのデュエルを試してみたんだ、使わない手はないよなあ!!!」

流石に彼らを野放しにしていたら最悪の事態……五百年戦争の二の舞だ!!

「お前達、異能をこれ見よがしに使って露見したらどうするつもりだ!?! 五百年戦争で引き起こされた異能者狩りを再び招きたいのか!?!」

異能者たちにとって最悪の事態を私たちは心の奥底から恐れている。しかし彼らはそれがどうしたと言わんばかりの表情をして我々を馬鹿にしきつた表情で言い放つた。

「『異能者』あ? なんだいそれ? 僕たちは主人公側の立ち位置だからそういったのは関係ないね!! 僕たちが気に入ったキャラは生かすし気に入らないのは殺すさ、今までと同じようにね!!」

「ま、女は罰ゲームで僕らの玩具にしてやるから感謝しろよ!! 殺されないだけでもありがたく思っただね!!」

その言葉を聞いた瞬間、私は彼らを生かしておく必要性を無くした。何故あのような凶行に走ったのかどうでもいい。今は最悪の事態を起こさせないため、ココで始末しておく!!

「……もういい。それ以上口を開くな」

「……あなたの切り札はそいつ、野良試合だから使いたい放題つて訳ね……上等よ!!」

私とレイナは左腕を高く掲げ、異能者としてのデュエルを開始する宣言を同時に発する!!

『デュエルトランサー、起動!!』

その言葉を合図に左腕に装着されたナノトランサーが起動し、体

の外側部分にプレートが出現する。更にナノトランサーの基盤が変形しその中にデッキが収められた。

コレこそが異能者専用のデュエルディスク『デュエルトランサー』であり、普段はナノトランサーに擬態させている。

更にデュエルトランサーには異能者が技術の粋を集めて作った認識障害の機能が備わっており、使用者の半径50メートルは外部の人間には認識されない為、処刑などにはうってつけの道具だ。

「違法者とみなす……お前たちを駆除させてもらおうぞ」

「はっ！！ 君は所詮どこかの傲慢な管理局と同じ考えかい！？」

「あたしの前でそのカードを使った事、後悔しなさい！！」

「上等だ！！ 妹共々可愛がつてやる！！」

一触即発の気配が漂う中、誰もが次に叫ぶ言葉を決めていた。そして、それは現実のものになる！！

『デュエル！！』

ギユスターヴ

LP：8000

篤志

LP：8000

このデュエルはタッグデュエルではなく私とアツシ、レイナとタダシで行われるシングルマッチ……互いの助けは期待できそうに無いか。

「先攻は僕だあ！！ ドロー！！」

そう言ってアツシがカードをドローすると即座にカードを叩きつける。

「僕は『未来融合 フューチャー・フュージョン』を発動！！  
僕が選択するのは1体目の『F・G・D』、『伝説の白石』3枚に  
『エクリプス・ワイバーン』2枚を墓地へ送る！！」

未来融合 フューチャー・フュージョン

永続魔法

自分のエクストラデッキに存在する融合モンスター1体をお互いに確認し、決められた融合素材モンスターを自分のデッキから墓地へ送る。

発動後2回目の自分のスタンバイフェイズ時に、確認した融合モンスター1体を融合召喚扱いとしてエクストラデッキから特殊召喚する。

このカードがフィールド上に存在しなくなった時、そのモンスターを破壊する。そのモンスターが破壊された時このカードを破壊する。

伝説の白石

チューナー（効果モンスター）

星1 / 光属性 / ドラゴン族 / 攻 300 / 守 250

このカードが墓地へ送られた時、デッキから「青眼の白龍」1体を手札に加える。

エクリプス・ワイバーン

効果モンスター

星4 / 光属性 / ドラゴン族 / 攻1600 / 守1000

このカードが墓地へ送られた場合、デッキから光属性または闇属性の

ドラゴン族・レベル7以上のモンスター1体をゲームから除外する。

その後、墓地のこのカードがゲームから除外された場合、このカードの効果で除外したモンスターを手札に加える事ができる。



「この時、墓地へ送られた伝説の白石とエクリップス・ワイバーンの効果発動！！ 前者はデッキから『青眼の白龍』を手札に加えることができるし、後者はデッキから光属性または闇属性のドラゴン族かつレベル7以上のモンスター1体をゲームから除外する！！ 僕は『レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴン』2枚を除外する！！」

そう言っただけでアツシが手札に加えたのは3枚の青眼の白龍……デュエルモンスターズの黎明期に作られた今もなお造られているモンスターであり、入手していてもおかしくはない。だがエクリップス・ワイバーンはまだデータしか存在していないカードではないか。

（流出したデータを利用して偽造したのか……？ いやカードデータのセキュリティは厳重だから漏洩は無いと思いたいが……しかし、偽造カードはディスクが反応してデッキごと切り裂く仕組みなのだが……）

とは言えデュエルは待つてくれやしない。それにレッドアイズ・ダークネスメタルドラゴンもまた高額カードだ。ダーク・ダイブ・ボンバーにF・G・Dといいどうなっている！？ 普通に買おうとしたら家が傾くどころでは無いぞ！！

（何が、どうなっているんだ……！？）

青眼の白龍

通常モンスター

星8 / 光属性 / ドラゴン族 / 攻3000 / 守2500

高い攻撃力を誇る伝説のドラゴン。

どんな相手でも粉碎する、その破壊力は計り知れない。

レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴン

効果モンスター

星10/闇属性/ドラゴン族/攻2800/守2400

このカードは自分フィールド上に表側表示で存在するドラゴン族モンスター1体を

ゲームから除外し、手札から特殊召喚する事ができる。

1ターンに1度、自分のメインフェイズ時に手札または自分の墓地から

「レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴン」以外のドラゴン族モンスター1体を

自分フィールド上に特殊召喚する事ができる。

「そして『龍の鏡』と『融合』を発動!! 『龍の鏡』の効果によつて墓地へ送られた5体のドラゴン族モンスターを除外して2枚目のF・G・Dを、融合によつて手札に加わつた青眼を3体使つて『青眼の究極竜』を特殊召喚する!!!」

それを合図にしたかのように1枚の巨大な鏡が姿を現し5つの首を持った邪竜を、何らかの渦が広がりそれが収束していくと三つ首を持った神の様な威圧感を持つ白竜が姿を現した。

龍の鏡

通常魔法

自分のフィールド上または墓地から、

融合モンスターカードによつて決められたモンスターをゲームから除外し、

ドラゴン族の融合モンスター1体を融合デッキから特殊召喚する。

(この特殊召喚は融合召喚扱いとする)

融合

## 通常魔法

手札・自分フィールド上から、融合モンスターカードによって決められた

融合素材モンスターを墓地へ送り、その融合モンスター1体をエクストラデッキから特殊召喚する。

F・G・D

融合・効果モンスター

星12 / 闇属性 / ドラゴン族 / 攻5000 / 守5000

ドラゴン族モンスター×5

このカードは融合召喚でしか特殊召喚できない。

このカードは闇・地・水・炎・風属性モンスターとの戦闘では破壊されない。

青眼の究極竜

融合モンスター

星12 / 光属性 / ドラゴン族 / 攻4500 / 守3800

「青眼の白龍」 + 「青眼の白龍」 + 「青眼の白龍」

たった3枚のカードでココまでの布陣を整えるとは……カードの引きも質も伊達ではないということか。しかもそれだけではない!!

「さらに効果で除外されていた2枚を手札に加えさせてもらうよ!!」

エクリプス・ワイバーンの効果で除外されていた2枚のカードを手札に加える事に成功したか!! コレで奴の手札は5枚……実質ノーコストで強力なモンスターを2体召喚する事に成功した……!!

「おっと、まだまだいくよ!! 僕はポケ・ドラを通常召喚!!」

更にポケ・ドラを手札に加える事が出来る！！ 続けてそいつを除外して手札に加えたレッドアイズ・ダークネスメタルドラゴンを特殊召喚！！」

姿を現したのは硬質の身体を持った真紅眼の闇竜……！！ しかもあのモンスターの効果は……！！

「コイツの効果で手札の真紅眼の黒竜を特殊召喚！！」

僅か1ターンで4体の高攻撃力を有するモンスターを召喚したと  
いうのか……！！

ポケ・ドラ

効果モンスター 星3/炎属性/ドラゴン族/攻 2000/守  
1000

このカードが召喚に成功した時、  
自分のデッキから「ポケ・ドラ」1体を手札に加える事ができる。

真紅眼の黒竜

通常モンスター

星7/闇属性/ドラゴン族/攻2400/守2000

真紅の眼を持つ黒竜。怒りの黒き炎はその眼に映る者全てを焼き  
尽くす。

「さらに手札から『黒炎弾』を発動！！」

黒炎弾……真紅眼の黒竜専用の魔法カード！！ 元々の攻撃力分のダメージを与えるが真紅眼の黒竜は使用したターン中、攻撃出来ないと言うデメリットが存在するが……！！

「その顔を見ると分かっているようだね？ そう、最初の1ターン目はバトル出来ないからどうでもいいよねえ!!」

そう言う事だ。私は何も出来ない歯がゆさを感じながらも黒竜が放つ炎の弾丸を避けるしかなかった。

「くっ!!」

それでも余波となった熱を感じ取ってしまった。熱い、もし当たったら二度目の死を迎えるところだったかもしれない。

ギユスターヴ

LP：8000 5600

黒炎弾

通常魔法

自分フィールド上の「真紅眼の黒竜」1体を選択して発動する。選択した「真紅眼の黒竜」の元々の攻撃力分のダメージを相手ライフに与える。

このカードを発動するターン「真紅眼の黒竜」は攻撃できない。

「これでターン終了っ」と

まさか先攻1ターン目でココまで削られるとは……相手の場のモンスターはF・G・Dを筆頭に青眼の究極竜、レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴンに真紅眼の黒竜……最低でも2400ライン、更に2ターン後には2体目のF・G・Dが呼び出されてしまう!!

「終わりじゃん……普通の戦いならまだしも、こんな状況覆せるわけ無いじゃん……」

エミリアはそんな諦めたような表情を浮かべ、男はニタニタと笑う。言葉にしなくとも分かる。

「どうだ、僕の力は」

そう、奴はそう言っている。異能を自分の好き勝手に使い、自分が絶対的な上位者だと言わんとしているあの表情……

『フェツフェツフェ……！！ 小僧どもが、好き勝手吼えるでないわ！！ この力さえあればワシがグラールの支配者になるのだ！』

あの時、ウオザーブルグ動乱で取り押さえようとした当時の“協会”副代表を思い出す！！

「ふざけるな……」

「は？」

そう……私利私欲で人体実験を行ったあの男がいたからこそ、本来絶たれる筈の無い絆が切れてしまい、彼女の心に闇が出来てそこを潰け込まれ、最後の最後での無意味な戦いが引き起こされた！！

「ふざけるなと言ったのだ！！ 私は貴様たちのような違法者など断じて認めん！！ お前たちの思い通りになど誰がさせるか！！」

私のターン、ドロロー！！」

1ターンキルが出来れば理想だが、この手札ではそこまで出来ない。故にまずやるべきことは……！！

「まずはそのフィールドを一掃させて貰おう！！ アウエイクン・ザ・マジックカード、アースクエイク！！」

アースクエイク

通常魔法

フィールド上に表側表示で存在するモンスターを全て守備表示にする。

その直後に強い地震がおき、眼前の竜たちがそろって攻撃態勢を解除してしまう。

「更に私はバイス・ドラゴンを攻撃力と守備力を半分にして特殊召喚する！！」

そう叫ぶと同時に私の場からバイス・ドラゴンが姿を現し咆哮を上げる。

バイス・ドラゴン

効果モンスター

星5 / 闇属性 / ドラゴン族 / 攻2000 / 守2400

相手フィールド上にモンスターが存在し、

自分フィールド上にモンスターが存在しない場合、

このカードは手札から特殊召喚できる。

この効果で特殊召喚したこのカードの元々の攻撃力・守備力は半分になる。

「ちよ、ちよつと待て！！ この展開つてまさか！！」

どうやら奴も理解できたようだな、だがまだ甘い！！

「アウェイクン・ザ・マジックカード、スタンピング・クラッシュユー！！ その未来融合を破壊させてもらう！！」

断固として未来融合を破壊して2体目のF・G・Dの召喚を阻止させてもらう。バイス・ドラゴンが飛翔し、即座に急降下して未来融合のカードを踏み碎き破壊する！！

スタンピング・クラッシュ

通常魔法

自分フィールド上にドラゴン族モンスターが

表側表示で存在する場合のみ発動する事ができる。

フィールド上に存在する魔法・罠カード1枚を選択して破壊し、そのコントローラーに500ポイントダメージを与える。

「くうっ！！」

篤志 LP：8000 7500

「続けてフレア・リゾネーターを召喚！！」

そう叫ぶと同時に炎を背に纏ったリゾネーターが姿を現す。

フレア・リゾネーター

チューナー（効果モンスター）

星3 / 炎属性 / 悪魔族 / 攻 300 / 守 1300

このカードをシンクロ素材とした

シンクロモンスターの攻撃力は300ポイントアップする。

「行くぞ……」



その声を合図に心臓が激しく脈打つ。やはりかつて私の命を喰らいし炎魔竜を従えるにはココまでの代償が必要だというのが……！！  
だが、自然と私の口元に笑みが宿る。あのカードを手にすると自分が自分で無くなっていく様なあの鼓動……ああ、漸くあのカードを出せるのか……デュエルと言っ神聖な戦場で！！

「私はレベル5のバイス・ドラゴンにレベル3のフレア・リゾネーターをチューニング！！」

バイス・ドラゴンが5つの炎の玉となり、フレア・リゾネーターは3つの火の輪となる。炎の玉が私に吸い込まれ火の輪が私の周囲に纏わりつく。さあ、ココからが本番だ……！！

『王者ノ鼓動、今ココニ列ヲナス！！ 天地鳴動ノカラ見ルガ  
イイ！！ シンクロ召喚！！』

あの時と同じように私以外の存在……否、最早疑うまでも無い。  
炎魔竜の声が私の声と重なり響きあい、我が体が炎に包まれる。身  
体が燃える、心臓が脈打つほど熱い、コレこそが炎魔竜の熱さと鼓  
動……！！

『我が半身……』  
「我が誇り……」

『「炎魔竜、レッド・デーモンズ・ドラゴン……」』

レッド・デーモンズ・ドラゴン

シンクロ・効果モンスター

星8 / 闇属性 / ドラゴン族 / 攻3000 / 守2000

チューナー+チューナー以外のモンスター1体以上

このカードが相手フィールド上に存在する守備表示モンスターを攻撃した場合、

ダメージ計算後相手フィールド上に存在する守備表示モンスターを全て破壊する。

このカードが自分のエンドフェイズ時に表側表示で存在する場合、

このターン攻撃宣言をしていない自分フィールド上の

このカード以外のモンスターを全て破壊する。

次の瞬間には炎が吹き荒れ、あの時と同じように私の身体は炎魔竜と化していた。

「や、やっぱりレモンか!!! よりによってこんな時に!!!」

『フレア・リゾネーターノ効果発動!!! コノカードガシンク

口素材ニナツタ時、シンクロモンスターノ攻撃力ヲ300ポイント  
アップスル!!」

レッド・デーモンズ・ドラゴン    ATK:3000    3300

この男も炎魔竜を知っている………どういうことだ? 『250円  
竜』と違って今回の略称はレッド・デーモンズを略した記号だから  
分かるのだが………どちらにせよ不快だという事には違いないが。

『………行カセテ貰ウ!! 我自身デ真紅眼ノ黒竜ヲ攻撃スル!  
! アブソリユート・パワーフォース!!』

炎を腕に纏わせ、紅き眼を持った黒竜に襲い掛かる!! 炎の腕  
は黒竜の鱗をも焼き尽くし、その肉体を焼き尽くした。

『ソシテ、守備表示ノモンスターヲ攻撃シタ時、ダメージ計算  
後相手フィールド上ニ存在スル全テノ守備表示モンスターヲ破壊ス  
ル!! デモンメテオ!!』

その直後翼を広げ、炎の隕石を呼び出す。炎の隕石を破壊する手  
段を持たない竜たちは隕石に飲まれていき、悉く燃え尽きていく。

「そんな………僕のモンスターが………だ、だが次のお前のターンを  
凌いで僕が勝つ!!」

『ヤレルモノナラヤツテミルガイイ………我ハ2枚伏せ、コノタ  
ーンヲ終了サセテ貰ウ………』

何とかこの場は凌いだか………だが次のターン次第では逆転される  
可能性だって存在する。2枚のカードが正しく発動できなければ……  
…私は負ける。だがあえて言わせてもらおう。

「……見ているエミリア。私が伏せた2枚のカードで逆転してみせる。出来なかつたらそのときは私の負けだ」

炎魔竜に頼み込み、この時ばかりは私自身の声で話させてもらう。だがアツシはそれが気に入らなかつたのか大声を張り上げて叫んだ。

「なめるなよカマセ犬！！ 僕のターン、ドロー！！」

そう言つて彼が引いたとき、私はそれをまず制した。

『「オープン・ザ・トラップカード！！ バトルマニア！！」』

バトルマニア

通常罠

相手ターンのスタンバイフェイズ時に発動する事ができる。

相手フィールド上に表側表示で存在するモンスターは全て攻撃表示になり、

このターン表示形式を変更する事はできない。

また、このターン攻撃可能な相手モンスターは攻撃しなければならぬ。

バトルマニア……今回はデッキを調整していたが為あえて入っていたカードだが、もう1枚伏せられたカードを組み込む事によって調和されるカードだ……問題は奴がそれに乗るかどうかだ！！

「それがどうした！！ 僕はポケ・ドラを召喚！！ 手札にポケ・ドラを加え直して召喚したこいつを除外！！ いでよ、レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴン！！」

2枚目のレッドアイズ・ダークネスメタルドラゴン……そう言え  
ば持っていたな。

「コイツの効果で僕は青眼の究極竜を特殊召喚する！！ 蘇えれ、  
究極竜！！ 更に手札に入った死者蘇生の効果でもう一体のレダメ  
を特殊召喚！！ 効果で真紅眼の黒竜を蘇生！！」

死者蘇生

通常魔法（制限カード）

自分または相手の墓地に存在するモンスター1体を選択して発動  
する。

選択したモンスターを自分フィールド上に特殊召喚する。

紅き眼をした黒銀竜と青き六眼を持った三つ首の白竜が再臨した  
か……

「これで貴様も終わりだ！！ 青眼の究極竜でレッド・デーモン  
ズ・ドラゴンを攻撃！！ アルティメットバーストお！！」

奴が吼え、究極竜に備わった三つ首から光の波動がこちらへ向か  
ってくる。

……そう、この瞬間を待っていた！！

『「オープン・ザ・トラップカード！！ プライドノ咆哮！！」』

プライドの咆哮

通常罫

戦闘ダメージ計算時、自分のモンスターの攻撃力が相手モンスタ  
ーより低い場合、

その攻撃力の差分のライフポイントを払って発動する。  
ダメージ計算時のみ、自分のモンスターの攻撃力は  
相手モンスターとの攻撃力の差の数値+300ポイントアップす  
る。

これは自分自身の誇りの象徴……我が誇りの叫びだ。貴様たち違  
法者を裁くため、私の異能者の誇りを乗せた、魂のカード!!

『オオオオオオオオオオオオ!!』

ギユスターヴ

LP:5600 4400

そして光の波動を我が身で受け、その力を吸収する……少しばか  
り苦痛を感じたが、な……

レッド・デーモンズ・ドラゴン ATK:3300 4500  
4800

『「クリムゾン・ロア・フレアバーストオ!!」』

紅き咆哮の灼熱波が三つ首竜を飲み込む。炎に焼かれ、光に溶かされ、究極の名を閉じた白竜は今度こそ我が手で倒す事に成功した。

「あ、ああ……」

篤志

LP：7500 7200

レッド・デーモンズ・ドラゴン ATK：4800 3300

『「サテ、バトルマニアノ効果ダ。他ノ者ドモモ我ラト戦ツテモラウゾ」』

その言葉を聞き、アツシの顔が青くなり、残った3体の紅き眼をした黒竜が一斉に襲い掛かる。だが

『「一体目！」』

右腕を振るい1体目のレッドアイズ・ダークネスメタルドラゴンを葬り……

『「一体目！……」』



続けて左腕を振るい2体目を破壊し……

『「三体目エ!!!!」』

我が咆哮とともに炎の濁流で最後の黒竜を焼き払う!!

篤志

LP: 7200 6700 6200 5300

「うそ……本当にあの状況をそっくりそのままひっくり返しちや  
った……」

ライフ差こそ狭まったただけだが、最早ボードアドバンテージは決  
定的。既に手札を消耗しつくした彼に何も出来るはずが無く、ター  
ン終了を宣言した。

『「行くゾ……ファイナルターン、ドロー!!!」』

そして手にしたカード……それは奇しくも先程のアツシと同じカ  
ード……死者蘇生だった。

『「……」』

このカードで青眼の究極竜を召喚する事も考えたが、私はあのカ  
ードたちの出所を疑っている。本当に彼ら自身の手で手に入れたカ  
ードなのか……それすらも危うい。

データしかないエクリプス・ワイバーンに高級レアカードのF・  
G・Dにレッドアイズ・ダークネスメタルドラゴン……しかもレッ  
ドアイズは少なくとも2枚あるのだ、疑わない方が無理だ。

「……1つだけ聞かせる、そのカードはお前たち自身で手に入れたものか……？」

炎魔竜に頼み、しばらくは眠ってもらおう。どうしてもそれだけは聞きたかったのだ。だが彼はそれを無視し、癩癩を出して喚きだした。

「なんだよ……お前何なんだよ！？ 兄さんと違って僕は他の転生者と同じようにGXでシンクロやエクシーズつかってデュエルバカや水色におじゃ万丈目を見下したかっただけなのに、何でこんな世界に放り込まれたんだ！！ しかもあのクソジジイにカードを作らせて、さあ行くぞと言うところであのバカ世界を間違えてこんな所に放り込んで！！ 折角主人公になれたのに、こんな仕打ちあんまりだ！！」

……今なんと言った！？ カードを……『作らせた』だと！？

「……どういうことだ！？」

「五月蠅いな、転生者特権を使っただけだよ！！ 全カードを所帯して遊戯王の世界に入り込んで、要らないカードを売りまくってガチデツキ組んで無双しまくってやりたい放題ハーレムマンセー、気に入らない奴は徹底的に叩き潰す！！ それが転生者ってやつだろが！！ 何だよお前、僕のささやかな理想を踏み躪りやがって！！ 僕を誰だと思ってるんだよお！！」

……喚きたてているようだが、もう関係ない。最早私の心は決まった。ちようどライフも削りきれぬし問題ない。

『「モウイイ、ダメレ。アウェイクン・ザ・マジックカード、死者蘇生！！」』

さて、私のカードを蘇生させてもらおうか。頭上に煌びやかな剣を模した十字架が聳え立つ。

「な、なんだよ……僕の究極竜を召喚しようって言うのか……？」

とうとう奴は私の逆鱗に触れた。

私はアンテイも同意の上ならば何も言うつもりは無い。強奪同然ならば即座に制裁して奪還するのみ。

私自身がM A W社代表の弟であるからこそ、家の財産でカードを買うという事を否定するつもりも資格も無い。子供がなけなしの金銭で、富豪が湯水のように金銭を使ってカードを買うのも、私にしてみたら大差ない。同じ金銭を使つての戦力増強に貧富の差など存在しない。

だが偽造カードで好き勝手行う事や密売を奨励したつもりは一度も、否、一瞬たりとも無い。

それで私服を肥やし、決闘を踏み躪り汚すというのだけは……私の誇りが許さん！！

コイツは異能者としての矜持も決闘者としての誇りも踏み躪った……これ以上顔を見るだけで不快だ！！

「コイツマデ私ヲ愚弄スルカ……フザケルナ凡愚メ、誰ガソノヨウナ紙屑ヲ使ウカ！！ 私ハ死者蘇生ノ効果デ、バイス・ドラゴンヲ特殊召喚スル！！ 蘇エレ、バイス・ドラゴン！！」

バイス・ドラゴン ATK:2000

私の怒りを表したかのようにバイス・ドラゴンも再び飛翔する。

その力は先程のような制限されたものではない！！

「ま、待つてくれ！！ サレンダーだ！！ サレンダーするうううう！！ よくある話だろ！？ 自分の敗北を認めてそれをバネにして……」

言うに事欠いてサレンダーだと！？ この男は、いつまで自分中心で世界が回っていると思っっているのだ！！

『「焼き払エ、バイス・ドラゴン！！」』

最早存在させる義理もあるまい。私の殺意を知ったのか逃げ出そうとした奴にまずはバイス・ドラゴンの火炎の息で足を焼き払い……

『「消エウセロ阿呆！！ 今こそ裁キノ時ダ、アブソリユート・パワーフォース！！」』

炎を灯した右腕で転がり込んだあの阿呆を焼きつくしてくれ……！！

「あ、ああ……うわあああああ……！！」

右腕がそいつを飲み込んだ時、その場には焼き焦げた跡しか残さなかった。例えばライフが残されていようと、奴はもうこれ以上デュエルは出来ないだろう……

篤志

LP：5300 3300 0

炎魔竜との融合が解除され、エミリアが恐れながら私を見据える……当然だ、あのような激昂振りを見せた上、人を一人焼き払ったのだ。

「……私が怖いか？」

「……怖いに決まってるじゃない」

それが自然な反応だ。私はデュエル中に人を殺したのだ。いくら決闘を汚したとは言え、最後の最後で異能を使い相手を焼き払ったのだ……どちらにせよ最悪の行為だ。

「……この依頼が終わったらパートナーを解消してもいいんだぞ？」

「……考えさせて……自分で考えて決着つけたいから……一回パートナーだつて宣言した以上は、ね……」

意外な反応だったがまあ、いい……コレで後はレイナのデュエルが終わるのを待つだけか……

## 異能者としての矜持と決闘者としての誇り（後書き）

以前現実主義だったというギユスターヴ……偽造カードの存在を決して許さない、所詮彼も遊戯王側の人間だったという事だ……

転生者ってオベリスクブルーの成金に対しては平然と見下すくせに自分は神様からカード貰ってるんですよ？ その成金くんと何処が違うのか私が納得できるよう説明してください。

自分もお金をやりくりしてカードを買ってますし、パックで買っただけレアカードが当たった時は嬉しいです。

特にトリシューラのターミナルを15回やってトリシューラのシークレットが出た時は喜んだものですよ。交換持ちかけられたけど当然却下で、代替案を出して双方満足な結果に終わりました。

その人として当然の喜びを奴らは平然と踏み躪る。湯水のように出てくるカードの海、それを使って平然と複数のデッキを使って気分次第でコロコロ変える……それでデッキとの絆と平然と抜かし、GXのキャラを水色だのなんだの見下し放題……そんな奴らこそ世界の歪みだと私はあえて言わせてもらいます。

後勘違いされても困るのですが、GXでも主人公の特権ではないシンクロとか5D'sキャラが使うのならいいんですよ。

現に自分も「お話上手になりたいよ！」をお気に入り登録してますから。

## 姉としての戦い（前書き）

難産とリテイクを描き続けて漸く完成です。

この作品初オリカが出ます。

また、レイアウトが見づらいなどの意見がありましたらこうしたほうが言いと発言してください。後感想もプリーズデス……

## 姉としての戦い

あたしはあの時何も分かってなかった。

レイナが十年間どんな思いで過ごしてきたのか、人の醜さって奴とか、アイツの過去とかも……

だけどそんな事悔いても時間の針を巻き戻す事なんて出来ない。

「レイナ、少しばかり話を……」

ウオザーブルグでの戦いが終わり休学届けを出して実家に戻った時、あたしは塞ぎこんだレイナを抱きかかえながら怒りを隠しきれずに叫んだ。

「うるさいうるさいうるさい！！ もうあたし達に構うな！！」

子供の頃に異能の暴発を防ぐため施設って言う機関に預けられたレイナとそこで再開した。でも再開したあの子は人を信じなくなつて、タチの悪いクソ野郎に騙されて、レイナの処罰を巡って飛鳥とカールが殺しあつて、結果的に2人とも行方不明になった。

そこまでなら、まだ呼びかけている父だった男と分かり合おうと努力できた。

自分が頑なに機関に預けるのを断り続けたせいで異能が暴走して妻を……つまりあたし達の母さんを喪い、今度はレイナが異能に呪われた。今度は過程がどうであれ助けようと努力した。そこまですら百歩譲って苦渋の判断だったと感じられる。

あたし達は何度か預けられたと聞いたレイナに手紙を送った事がある。その手紙も届けられたと聞いた。

でも、あの男は手紙を届けていなかった……それどころかレイナの見舞いにも行きやしなかった。拳銃の果てにレイナがあそこでも



んな目にあつたのか知っていた。

『二度とあのような事を犯しはしない、今度こそ親の義務を果たす』

封を切られていない手紙を出しながら言い訳じみた言葉まで放つ。しかも聞いた話だと信じられない事に、リイナを差し出したときにこの屋敷が買えるって言う金額を誇るレアカードと潤沢な資金を貰ったって聞いた。

そこであたしはキレた。あたしからしてみたらアイツにとってリイナはそれ位の価値しか無いって事？ それなのに親としての義務を果たすって今更何のつもり？

「……………」

あの時から生きているだけのリイナを抱いて考えた。ココにいてリイナの心の傷が癒えるのを待つのも1つの手だ。もしかしたら一族の情報網にあの2人が引つかかる可能性だってある。

だけどそれじゃあたしは与えられたものを享受してただけの子供だった頃と何一つ変わらない。それに前科がある以上もう一族なんざ信用する事が出来ない、確実に肝心な情報を隠されるだろう。

もう何も知らないのはゴメンだ。ならば自分の目で見て、自分の耳で聞いて、自分の足で歩く。

「そう決まったら準備ね……………」

替えの下着やあたし達の全財産、後は換金用のカードや武器の数々。靴とかは現地で買えばいいから今は動きやすい靴でいいか。

後はリイナを連れて行くための移動手段ね……………まあフィランディア・シテイに着くまでの足だから後は何とでもなるか……………

そうなつてから日々用意を整えてリイナを連れて屋敷を移動する。後は今では使われていない車に乗れば……

「何をしているんだ、レイナ!!」

その声はあたしが聞き慣れた男の声……十年間あたし達を騙し続けた、あのクソ野郎や副代表以上にあたしが憎んでいる男の声だ!!

「……あなた、ココでなにしてんのよ？」

「……最近妙な動きをしていると聞いた。馬鹿な真似はよして大人しくしているんだ、あの2人を探すのならば協力しよう」

「馬鹿な真似、ねえ……」

本当に馬鹿げた話。あなたの言うようにして『お利口さん』にした結果が、あの状況じゃない。あの時以上の『馬鹿な真似』があるんなら、あたしの方から教えてもらいたいわね。それに協力するも何も、最初に裏切ったのはアンタの方じゃない。

「ホントはこうしてる時間も惜しいけどね……ココはデュエルで決着つけましょう？ あなたが実の娘以上に大好きな大好きなあのカード、あれも入れていいわよ？」

これは賭けだ。自分が一族の助けなど不要だという賭け。ココで負けていたらあの2人の代わりにリイナを守る事なんて出来やしない。

「……何を考えているんだ!？」

「別に。あなたに……あのカードに負ける程度しかないならあなたの力は外じゃ通用しない。そう考えただけよ？ それにあんたが勝てたらいいだけじゃない」

そう言ってあたし達はデュエル・トランサーを起動する。コレに備わった認識障害の装置で当分の間は誰もココには来れない。

後はこの男を倒すだけ　　！！

「いい加減にしろレイナ！！」

「あたしはあんたを倒す！！　この……クソ親父！！」

『決闘！！』

あの時と同じ言葉を紡いだ瞬間、あたしの視界はかつていた屋敷からモトウブの原生林に場所を変え、あの男のそばにいたダーク・ダイブ・ボンバーは消滅した。

レイナ

LP：8000

忠志

LP：8000

「ああ、一応言い忘れてたわ。それ、エクストラデッキに入れてもいいわよ?」

「いいのかい? 後悔するよ?」

ま、こうでも言わないと禁止カードだからデッキには入れられない。あのカードを倒した上であたしが勝つ……それがあたしのこの決闘における完全勝利条件……と言えばかつこいいんだけど私怨に等しいわね。

でもレイナはレイナでのんびりあたしの応援をしながら決闘の様子を見ている。それでも今の様子でもあたしは満足だ。あの時のあたしとあの男の決闘ではあの子は応援どころか塞ぎこんでいたからだ。

「ま、代わりに先攻はあたしが貰うけどね。あたしのターン、ドロー!!!」

そう言っであたしはカードを1枚手にする。まあまあの手ね……

「あたしはモンスターとカードを1枚ずつセットしてターンエン  
「……」

まずは様子見……と言うよりキーカードが来なかったのよね……

「僕のタアアアン!!! ドロー!!! 僕は魔法カード『調律』」

を発動する！！」

調律

通常魔法

自分のデッキから「シンクロン」と名のついたチューナー1体を手札に加えてデッキをシャッフルする。

その後、自分のデッキの上からカードを1枚墓地へ送る。

調律……カールと同じようなデッキね。あのカードはシンクロンなら何でも手札に加えられるカード……何を加える気？

「僕は調律の効果でクイック・シンクロンを手札に加え、デッキの上から一枚墓地へ送る！！」

クイック・シンクロン

チューナー（効果モンスター）

星5 / 風属性 / 機械族 / 攻 700 / 守 1400

このカードは手札のモンスター1体を墓地へ送り、手札から特殊召喚する事ができる。

このカードは「シンクロン」と名のついたチューナーの代わりにシンクロ素材とする事ができる。

このカードをシンクロ素材とする場合、「シンクロン」と名のついた

チューナーをシンクロ素材とするモンスターのシンクロ召喚にしか使用できない。

クイック・シンクロン……か。カールはジャンク・シンクロン主体だったけどこのカードも使っていたから、コレはまずいかな？

「更に手札から黄泉ガエルを墓地へ送ってクイック・シンクロン

を特殊召喚だあ！！」

黄泉ガエル

効果モンスター

星1 / 水属性 / 水族 / 攻 1000 / 守 1000

自分のスタンバイフェイズ時にこのカードが墓地に存在し、自分フィールド上に魔法・罨カードが存在しない場合、

このカードを自分フィールド上に特殊召喚する事ができる。

この効果は自分フィールド上に「黄泉ガエル」が表側表示で存在する場合は発動できない。

「あ、カールおにいちゃんのカード！！」

アイツが召喚したのは頭にウエスタンハットを被った二丁拳銃を持った機械人形だった。リイナは可愛いと喜んでいたが、こっちはそれどころじゃないっての！！

「そして僕は通常召喚でこのカードをリリースして氷帝メビウスをアドバンス召喚！！」

氷帝メビウス

効果モンスター

星6 / 水属性 / 水族 / 攻 2400 / 守 1000

このカードがアドバンス召喚に成功した時、

フィールド上に存在する魔法・罨カードを2枚まで選択して破壊する事ができる。

その言葉を宣言してから吹雪があたしの視界を遮って1体の巨人が姿を現す……って狙いはそっち！？ それに確かメビウスって……！！！！

「メビウスの効果発動！！ アドバンス召喚に成功した時、フィールドに存在する魔法・罫を2枚まで破壊する！！ 君のカードを破壊させてもらおうよ、フリーズ・バースト！！」

その声を合図にあたしのカードが凍り付いていく。こうなったらココで使うしかないか……！！

「リバーズカードオープン！！ 罫カード『輝石融合』！！」

輝石融合

通常罫

手札・自分フィールド上から、融合モンスターカードによって決められた融合素材モンスターを墓地へ送り、

「ジェムナイト」と名のついたその融合モンスター1体を融合召喚扱いとしてエクストラデッキから特殊召喚する。

このカードはあたしがモトウブで手に入れたカテゴリーカード……平穩を望み自分の核を傷つけてまで仲間の輝きを護る宝玉騎士『ジェムナイト』のためのカード！！

「あたしは手札のジェムナイト・オブシディアとジェムナイト・サファイアを墓地へ送って、エクストラデッキからジェムナイト・ジルコニアを特殊召喚するわ！！」

地面を突き破り指の無い巨大な両手に翻されたマントを羽織った白い宝玉騎士・ジルコニアが雄叫びを上げながら姿を現した。

ジェムナイト・オブシディア

効果モンスター

星3 / 地属性 / 岩石族 / 攻1500 / 守1200

このカードが手札から墓地へ送られた場合、

自分の墓地に存在するレベル4以下の通常モンスター1体を  
選択して特殊召喚する事ができる。

ジェムナイト・サファイア

通常モンスター

星4 / 地属性 / 水族 / 攻 0 / 守2100

サファイアのパワーで水を自在に操り、

敵からの攻撃をやさしく包み込んでしまう。

その静かなる守りは仲間から信頼されているらしい。

ジェムナイト・ジルコニア

融合モンスター

星8 / 地属性 / 岩石族 / 攻2900 / 守2500

「ジェムナイト」と名のついたモンスター+岩石族モンスター

「ジェムナイト・オブシディアの効果を発動！！ このカードが  
手札から墓地へ送られた時、自分の墓地に存在するレベル4以下の  
モンスターを特殊召喚することが出来る！！ 蘇えれ、ジェムナイ  
ト・サファイア！！」

あたしが叫ぶと同時にサファイアが姿を現す。その腕に宿った水で  
あたしを護ってくれるのはいいんだけど……

「コイツも守備表示よ……頼んだわよ皆！！」

あたしが激励すると、2体のジェムナイトはあたしの方を振り向  
き、そして頷いた。



『我……姫夕子……護ル』

『僕とジルコニアがいる限り、貴女には傷1つ触れさせませんよ……』

ジルコニアが片言口調で淡々と頷いて、サファイアが気障ったらしく言い放つ。このデッキは彼らの魂も含まれたデッキで精霊として宿っているみたいで、移動している時とかはリィナの話し相手にもなってもらっている。その一方でアイツは小さく笑いだした。

「なるほどね……ジエムナイトか……」

……え？ 今なんて言ったの！？

「……あなた、ジエムナイトの事知ってるの？」

「知ってるよ。それがどうかしたのかい？ それにこいつらってカードの精霊だろ？」

それを聞きあたし達は驚いた。カードの精霊はあたしだけの特権じゃないからいいとしても、ジエムナイトはあたしがモトウブの秘境で手に入れたカードであり、MAW社のカードデータに存在しなかったカードなのよ！？ あたしだってジエムナイトはココに来て始めて知ったって言うのに……！！

『ドウイウ……事ダ？』

『僕に聞かれたって分からないよ！！ 姫様は分かりますか！？』

あたしに聞いても分からないわよ。でもただじゃすまなさそうね

……

「うーん……となるとサファイアを狙うって言うのも怖いなあ……」

手札にマーチャントがいたら悲惨だしね、かと言ってあのモンスターがメタモルポッドじゃないって言う可能性も無い。メビウスじゃジルコニアを倒せそうにないしミスったなあ……」

暢気にそんな事を言っている。でもそいつは自分の手札を見据え、と意を決したのか攻撃を宣言した。

「ま、いいか。んじゃそのリバースモンスターに攻撃ね、アイス・ランスー!!」

そう言っつて氷の槍を手にして襲い掛かってくるメビウス。あたしのリバースモンスターはなす術もなく貫かれたけど……

「あれ？ ジェム・タートル？」

そう、あたしが伏せていたのはジェム・タートル……壁兼キーカードでもあるジェムナイト・フュージョンを手札に加えるカードなんだけどね……!!

ジェム・タートル

効果モンスター

星4 / 地属性 / 岩石族 / 攻 0 / 守 2000

リバース：自分のデッキから

「ジェムナイト・フュージョン」1枚を手札に加える事ができる。

「効果を発動させてもらっわ。あたしはデッキからジェムナイト・フュージョンを手札に加えるわよ」

「まあいいよ。どうせ勝つのは僕なんだから。僕のターンは終了、つと」

そりゃまあ、あれを加えてもいいといった以上はね……でもあれはどうしても倒しておかないとあたしの気が済まないのよ!!

「あたしのターン、ドロー!!」

手札に加わったのは……まああの引きね。新しいジェムナイトを融合召喚しようかとも考えたけど、既にジルコニアは召喚した後だし黄泉ガエルがある以上アメジスは却下……となると残すは1つしかない。

「あたしはジェムナイト・アレキサンドを召喚!!」

ジェムナイト・アレキサンド

効果モンスター

星4 / 地属性 / 岩石族 / 攻1800 / 守1200

このカードをリリースして発動する。

自分のデッキから「ジェムナイト」と名のついた

通常モンスター1体を自分フィールド上に特殊召喚する。

そう言ってあたしが呼び出したのは赤・緑・青に輝くアレキサンドライト……そこから打ち破って姿を現すのは白い鎧を身に纏った騎士・アレキサンドだった。

『姫、私の効果を使ってください!!』

「もちろん!! あたしはこのカードをリリースして……」

呼び出すのは彼らのまとめ役……このデッキのエース!!

「出なさい、ジェムナイト・クリスタ!!」

ジェムナイト・クリスタ  
通常モンスター

星7 / 地属性 / 岩石族 / 攻2450 / 守1950

クリスタルパワーを最適化し、戦闘力に変えて戦うジェムナイトの  
上級戦士。

その高い攻撃力で敵を圧倒するぞ。

しかし、その最適化には限界を感じる事も多く、仲間たちとの結  
束を大切にしている。

姿を現したのは扇形のクリスタル、それを打ち破ってあたしのデ  
ッキのエースが姿を現した。

『レイナ…… 奴のカードは我々の知るカードとは違つかもしれな  
い……』

あたしに対して呼び捨てで接するクリスタが警戒しながらそう言  
う。彼は他の面々と違ってあたしと対等の関係を築いているからコ  
イツはレイナのデッキのあの人と同じ、あたしたちにとっていい相  
談役でもあるのよ。

「どういう意味……?」

『カードの中には概念や意思に歴史といった重みがあり、君達は  
その概念を実体化させている……だが奴らのカードからは概念も意  
思も何も感じられないのだ……もしかしたら、あのカードたちはグ  
ラールに存在しないものかもしれない』

「グラールに、存在しないですって……じゃあ何でそんなものが  
あるって言うのよ?」

『……すまない、私にも分からないんだ……』

クリスタが謝罪する中、アイツが声を上げて挑発する。今はこの

決闘に集中しないとね。

「……サファイア、悪いけどいい？」

『当然です。仲間と共に戦うのが我らの定め。その為に墓地へ行く事に何のためらいがありませんようか』

サファイアの意思を受け取ってあたしはカードを1枚手にする！！  
それは先程手にしたこのデッキのキーカード！！

「あたしはジェムナイト・フュージョンを発動するわ！！ フィールド上の『ジェムナイト・サファイア』と手札のジェムナイトと名のついたモンスター『ジェムナイト・アンバー』を素材にして……」

サファイアの宝玉とアンバー……琥珀が混じりあい、1つの巨大な宝玉になる。そしてその中から水を操る騎士が姿を現した！！

「出なさい、『ジェムナイト・アクアマリナ』！！」

ジェムナイト・アクアマリナ

融合・効果モンスター

星6 / 地属性 / 水族 / 攻1400 / 守2600

「ジェムナイト・サファイア」+「ジェムナイト」と名のついたモンスター

このカードは上記のカードを融合素材にした融合召喚でのみ  
エクストラデッキから特殊召喚する事ができる。

このカードは攻撃した場合、バトルフェイズ終了時に守備表示になる。

このカードがフィールド上から墓地へ送られた時、

相手フィールド上に存在するカード1枚を選択して持ち主の手札に戻す。

あたしの叫びと共にアクアマリンの宝石が罅割れ、中からアクアマリナが突き破って姿を現した。だけどそれを見たタダシが怪訝そうな声を上げた。

「アクアマリナ……プリズムオーラじゃなくて？」

怪訝そうな声に対してあたしは思わずクリスタに顔を向ける。プリズムオーラって、以前あたし達が倒した……

『我らだけではなく、我らが戦ったヴァイロンまで知ってるだど！?』

「どう言う事……?」

聞いた話だとあたし達がウォザールブルグで戦ったインヴェルズ……その本隊がモトウブで行動してて、ヴァイロン達と同盟を結んで戦った事があつたみたい。その時クリスタが手にした力こそがプリズムオーラなのよ。

でもあたし達が来た頃には既にヴァイロン達と戦い始めて、その力も無くしたみたい。そしてあたし達はヴァイロン・プリズムオーラと戦い、それに打ち勝った。

それにヴァイロンも大元が何者かに倒されたため、既に滅び去った存在に成り果てている。どうしてモトウブの異能者たちの間でしか知らないものが……?」

「おねえちゃん、どうかしたの?」

そうだ。今はリイナを護るために戦うんだ。考えるのは終わってからも問題ない……!」

「……アレキサンドを除外して手札にジェムナイト・フュージョンを加えなおすわ」

アレキサンドが姿を消し、あたしの手にはジェムナイト・フュージョンのカードが握られる。これで全ての準備は整った！！

「バトルよ！！ まずはクリスタでメビウスに攻撃！！ ラス・オブ・クリスタ！！」

『ハアアアツ！！』

クリスタの持つ宝玉が輝きを増し、その手刀がビウスの腹部を貫き……

「続けてアクアマリナでダイレクトアタック！！ アクアストリーム！！」

アクアマリナから放たれた水流があいつを飲み込まんとい詰り

……

「最後にジルコニアでダイレクトアタック！！ ジルコニア・プレッシャー！！」

その巨大な腕をタダシの真上から拳で殴るように叩きつける！！

「ぐあっ……！！」

忠志

LP：8000 7950 6550 3650

「コレであたしのターンは終了……攻撃した時、アクアマリナは

守備表示に変更させてもらっわ。」

水流を呼び出した腕でそのまま守備体制を整えるアクアマリナ……  
コレでアイツがあノモンスターを呼び出しても戦闘破壊できない……！！  
仮にクリスタを狙ったところで返しのターンでジル  
コニアを使ってぶっ潰す……！！

「ボクのタアアアン！！ ドロー！！」

そう言っつて奴が乱暴にカードを引き抜き、ニタリと笑っつてカードを宣言した。

「スタンバイフェイズ時に黄泉ガエルの効果を発動！！ このカードが墓地に存在し、魔法・罫カードが僕のフィールドに存在しない場合僕はこのカードを特殊召喚する！！ 蘇えれ、黄泉ガエル！！」

そう言っつて天使が舞い降りるかのようにカエルが姿を現す……次はどういった手を使うのやら……

「更に僕は『死者転生』の効果を発動！！ ダンディライオンを墓地へ落してクイック・シンクロンを手札に加え直す！！」

死者転生

通常魔法

手札を1枚捨て、自分の墓地に存在するモンスター1体を選択して発動する。

選択したモンスターを手札に加える。

ダンディライオン



効果モンスター（制限カード）

星3 / 地属性 / 植物族 / 攻 300 / 守 300

このカードが墓地へ送られた時、自分フィールド上に「綿毛トクン」

（植物族・風・星1・攻/守0）2体を守備表示で特殊召喚する。  
このトクンは特殊召喚されたターン、アドバンス召喚のためにはリリースできない。

アイツがダンディライオンを墓地に落した瞬間、綿毛のようなモンスターが姿を現す……となると、ココからが本番ね……！！

「そして僕は手札からもう1体の黄泉ガエルを墓地へ送ってクイツク・シンクロンを特殊召喚！！」

再び姿を見せるクイツク・シンクロン……今度はシンク口召喚が狙いね！！

「レベル1の黄泉ガエルと綿毛トクン2体にレベル5のクイツク・シンクロンをチューニング！！」

そう叫んであいつのモンスターが3つの星と5つの輪になって回りだし、あいつは声を上げて叫んだ。

「集いし闘志が怒号の魔神を呼び覚ます……光さす道となれ！！シンク口召喚！！ 粉碎せよ、ジャンク・デストロイヤー！！」

ジャンク・デストロイヤー……カールが愛用していたジャンクシンク口モンスターの1体！！シンク口口上もカールと同じだなんて癪に障るわ……！！

ジャンク・デストロイヤー  
シンクロ・効果モンスター

星8/地属性/戦士族/攻2600/守2500

「ジャンク・シンクロン」+チューナー以外のモンスター1体以上  
このカードがシンクロ召喚に成功した時、

このカードのシンクロ素材としたチューナー以外のモンスターの  
数まで

フィールド上に存在するカードを選択して破壊する事ができる。

「ジャンク・デストロイヤーの効果発動!! このカードがシンクロ召喚に成功した時、素材にしたチューナーモンスター以外のモンスターの数までフィールド上のカードを破壊する!! 喰らえ、タイダル・エナジー!!」

その声を合図に胸部の球体からエネルギー波が放たれてジルコニアとアクアマリナにクリスタが破壊される……!!

『すまない、レイナ……!!』

気にしないでクリスタ、アイツは明らかに判断を誤った!!

「アクアマリナがフィールドから墓地へ送られた時、効果を発動!! 相手フィールド上のカードを1枚手札に……この場合はエクストラデッキに戻ってもらうよデストロイヤー!! アクアリターン!!」

アクアマリナ最後の秘術が発動し、泡に包まれたジャンク・デストロイヤーがそのままアイツのエクストラデッキに戻っていく。これでフィールドは事実上リセットって訳ね……

「……コレで僕はターンエンド、さあチャンスだよ……かかってくるんだね!!」

フィールドが空状態でターン終了……ですって!? まだ通常召喚も出来たのに、どうして……!!

「何を考えてるの……あたしのターン、ドロー!!」

そう言っ手札に来たのは……助かったわ。

「あたしは手札から魔法カード貪欲な壺を発動するわ!!」 貪欲な壺

通常魔法（制限カード）

自分の墓地に存在するモンスター5体を選択し、デッキに加えてシャッフルする。

その後、自分のデッキからカードを2枚ドローする。

「サファイア、ジルコニア、クリスタ、オブシディア、アクアマリナをデッキに戻して2枚ドローするわ!!」

現れた変な壺が仲間達を飲み込んでいって2枚のカードを吐き出した。この場合、ドローって言うのかしら……

「……よし!!」

この手札なら一気に総攻撃を仕掛けられる!! あからさまな罠もあるみたいだしね……ココはこいつで行かせて貰うわ!!

「ジェムナイト・フュージョンを発動!! 手札のジェムナイト・ガネットとジェムナイト・ルマリンを墓地へ送ってジェムナイト・

マデイラを融合召喚！！」 ジェムナイト・ガネット

通常モンスター

通常モンスター

星4 / 地属性 / 炎族 / 攻1900 / 守 0

ガネットの力を宿すジェムナイトの戦士。

炎の鉄拳はあらゆる敵を粉碎するぞ

ジェムナイト・ルマリン

通常モンスター

星4 / 地属性 / 雷族 / 攻1600 / 守1800

イエロートルマリンの力で不思議なエナジーを創りだし、

戦力に変えて戦うぞ。

彼の刺激的な生き方に共感するジェムは多い。

ジェムナイト・マデイラ

融合・効果モンスター

星7 / 地属性 / 炎族 / 攻2200 / 守1950

「ジェムナイト」と名のついたモンスター+炎族モンスター

このカードは融合召喚でのみエクストラデッキから特殊召喚する事ができる。

このカードが戦闘を行う場合、相手はダメージステップ終了時まで魔法・罠・効果モンスターの効果を発動する事はできない。

ガネットとトルマリンの宝玉が交じり合い、赤熱している腕と剣が特徴的な赤みが強いマデイラシトリンの宝玉騎士が姿を現す。

『姫様よお、戦いの時間かあ！？』

彼はジェムナイトの中では珍しく好戦的な性格をしている。今まで戦ってきた溶岩の戦闘民族の影響だつてクリスタが言ってたけど

……  
「続けてジェムナイト・エメラルを召喚!!」

ジェムナイト・エメラル

効果モンスター

星4 / 地属性 / 岩石族 / 攻1800 / 守 800

自分フィールド上に表側表示で存在する通常モンスター1体とこのカードをゲームから除外し、自分の墓地に存在する

「ジェムナイト」と名のついた融合モンスター1体を選択して発動する。

選択したモンスターを墓地から特殊召喚する。

そう言つて姿を現したのは翠色のジェムナイト……エメラルだった。両腕に円盤状の武器を装備した彼が弱々しく言う。

『 姫え……どう見ても罨ですよ〜〜』

「だからマディラも召喚したのよ!! マディラ、エメラルの順で総攻撃!! 言つとくけど、マディラにはダメーシ終了時まで魔法・罨・効果モンスターの効果を発動する事出来ないのだからず!!」

あたしの命令に対してマディラが待つてましたといわんばかりに剣と拳を振りかざして攻撃を仕掛ける。『 行つくぜえ!! マディラヒートニクス!!』

「ぐああああ!!」

忠志

LP: 3650 1450

「出番よエメラル！！ エメラルソーサー！！」

『一応撃ちますね……』

エメラルの円盤がアイツを捉えた瞬間、あいつがニタリと笑ったのが見えた。やっぱり攻撃を防ぐ手段を手札に忍ばせていたわね……！！！！

「速攻のかかしの効果発動！！ 相手が直接攻撃を宣言した時、こいつを手札から捨てることでバトルフェイズを終了する！！」

そう叫んだ時、あいつの手札からかかしの様なモンスターが姿を現しエメラルの攻撃を防ぐ。カールの調整用デッキケースに入ってたモンスター……それがあったからこそ、から空き覚悟ジャンク・デストロイヤーを召喚したって訳ね……

速攻のかかし

効果モンスター

星1/地属性/機械族/攻 0/守 0

相手モンスターの直接攻撃宣言時、このカードを手札から捨てて発動する。

その攻撃を無効にし、バトルフェイズを終了する。

「……まあいいわ。ルマリンを除外してジェムナイト・フュージョンを手札に加え直してターンエンド……」

そしてあいつがカードを引くと、黄泉ガエルが再び召喚されてまたリリース要員にされた。

「黄泉ガエルをリリースして光帝クライスを召喚する！！」

光帝クライス

効果モンスター

星6 / 光属性 / 戦士族 / 攻2400 / 守1000

このカードが召喚・特殊召喚に成功した時、

フィールド上に存在するカードを2枚まで破壊する事ができる。

破壊されたカードのコントローラーは、破壊された数だけ

デッキからカードをドロウする事ができる。

このカードは召喚・特殊召喚したターンには攻撃する事ができない。

姿を現したのは金色の帝……他の帝と違って特殊召喚でも効果を  
使える代わりにそのターンの攻撃を封じる闇帝ディルグの対を成す  
『双帝』と謳われるモンスター……！！

「光帝クライスが召喚された時、2枚カードを破壊する……マデ  
イラとエメラルを破壊！！クライスフラッシュュ！！」

クライスから放たれた眩い光があたしの仲間を弾き消す……！！  
そしてあいつは強く言い放った。

「後破壊された分だけカードをドロウできる効果がある……喜べ  
よお、2枚ドロウできるんだからさあ！！それに今回僕は戦闘で  
きないしねえ！！ターンエンドだあ！！」

そう言っただけは手札に加える……まずい、今手札にモンスター  
が無い……！！あそこでクライスが来るなんて思わなかったし  
……

「あたしのターン、ドロー!!」

そう言ってドローしたのは壺の中の魔術書……これに賭けるしかないわね……

「魔法カード、壺の中の魔術書を発動!!」

壺の中の魔術書（漫画版GX登場カード）

通常魔法（制限カード）

互いのプレイヤーは3枚ドローする。

このカードを使用したターン、自分は特殊召喚する事ができない。

「んん？ このカードって漫画版に出てきた……」

「お互いに3枚ドロー!!」

何か言ってる様だけど無視!! あたしの手札には……よし、モンスターカードが来た!!

「あたしはジェムナイト・サニクスを召喚!!」

ジェムナイト・サニクス

デュアルモンスター

星4/地属性/炎族/攻1800/守 900

このカードは墓地またはフィールド上に表側表示で存在する場合、通常モンスターとして扱う。

フィールド上に表側表示で存在するこのカードを通常召喚扱いとして再度召喚する事で、

このカードは効果モンスター扱いとなり以下の効果を得る。

このカードが戦闘によって相手モンスターを破壊し墓地へ送った時、

自分のデッキから「ジェムナイト」と名のついたカード1枚を手



札に加える事ができる。

今度は鉄球のようなものを持った赤と白の縞瑪瑙の宝玉騎士が姿を現した。

『…………』

あたしがジエムナイトと共に戦うようになってからも何一つ喋らない寡黙な戦士、だけど明らかにあたし達と共に進むことを決意した眼でクライスを見据える……攻撃しろってこと？

「いいわよ、サニクスでクライスを攻撃！！ サードニクスフレイル！！」

フレイルでクライスに襲い掛かる、でもクライスはそれを光で受け止める。そしてアイツはたかが下級モンスターに何が出来ると笑っている。

でもね……その油断が命取りよ！！ 絶対的な上位者だろうがなんだだろうが、あいつらはSEED事変でもウオザーブルグ動乱でも圧倒的な存在を打ち破ってきた！！

この程度の壁なんて、あたしだけでも……あたし達だけでも超えられる！！

「ダメージステップ時に手札のジエム・マーチャントの効果発動！！」

ジエム・マーチャント

効果モンスター

星3 / 地属性 / 魔法使い族 / 攻1000 / 守1000

自分フィールド上に表側表示で存在する

地属性の通常モンスターが戦闘を行うダメージステップ時に

このカードを手札から墓地へ送る事で、  
そのモンスターの攻撃力・守備力は  
このターンのエンドフェイズ時まで1000ポイントアップする。

あたしがサニクスと一緒に手札に加えたモンスターの効果を発動  
させる！！

1体の帽子を被った両手だけがついたモンスターが纏っていた宝  
玉が、サニクスの鉄球に纏わりつく。そして輝きを増した鉄球が遂  
に光の壁を砕き、それを操っていた光帝クライスをも打ち砕いた！！

忠志

LP：1450 1050

「更に1枚セットしてターンエンドよ。帝なんて前座出してない  
でさつさとあのカードを出しなさいよ！！」

「おねえちゃんがまつてるカードってあれのこと？ リイナこな  
くてもいいとおもっけど……」

リイナが尤もな台詞を言う。まあ、あればかりはあたしのわがま  
まだからねえ……

「で、お話は終わり？ 僕のターンだよ？」

そしてアイツのターン……ドローしたカードを見据えた瞬間、奴  
は仕方がないといわんばかりに声を上げた。

「まずは黄泉ガエルを特殊召喚！！」

またカエルが蘇ってきた時、あたしは表情を強張らせた。その顔

にはある種の確信……自分の勝利を疑っていない、見下したような顔が張り付いていた!!

「そいつをリリースして風帝ライザーを召喚!!」

カエルを巨大な竜巻が覆い、その中から1体の緑色の魔物が姿を現す……!!

風帝ライザー

効果モンスター

星6 / 風属性 / 鳥獣族 / 攻2400 / 守1000

このカードがアドバンス召喚に成功した時、

フィールド上に存在するカード1枚を持ち主のデッキの一番上に戻す。

姿を現したとき、サニクスの体が浮かび上がる。ジルコニアほどじゃないにしても重量級のジェムナイトであるコイツが浮かび上がるほどなんてどんだけよ……!!

「ライザーのアドバンス召喚に成功した時、フィールド上のカードを1枚デッキトップに戻す!! 吹き飛ばサニクス、ハリケーンバースト!!」

その叫びと同時にサニクスが風であたしの左腕目掛けて吹き飛ばされてきた。するとコイツは嫌な笑みを浮かべて笑ってきた。

「さてと、あいつと戦いたがってたよな。だったらお望みどおりアイツを出してやる!!」

その発言を聞き、あたしの表情が強く強張る。当然だ、あのカー

ドはある意味あたし達の運命を狂わせた……この世界で一番あたしが憎いカード……！！

「デッキから1枚墓地へ落す事で墓地からグローアップ・バルブを特殊召喚する！！ 出る、グローアップ・バルブ！！」

グローアップ・バルブ

チューナー（効果モンスター）

星1/地属性/植物族/攻 1000/守 1000

自分のデッキの一番上のカードを墓地へ送り、

墓地に存在するこのカードを自分フィールド上に特殊召喚する事ができる。

「グローアップ・バルブ」の効果はデュエル中に1度しか使用できない。

そうやって地面から姿を現す球根の様なモンスター……それを見た瞬間、リイナが疑問を声にした。

「でもそのカード……いつかいもだしてないのに、どうして……？」

「一回だけあるわよリイナ……アイツがそのカードを墓地に落す事が出来た状況が……！！」

リイナの疑問にあたしが答える。そう、あのカードは……アイツの最初のターンで使った調律で墓地へ送られたカードだ……！！

「そしてバルブの効果でデッキから1枚墓地に落す……」

そう言った矢先、アイツの表情が呆然となる。そしてアイツは何がおかしいのか、狂ったかのような大声で笑い出してきた。

「な、何がおかしいのよ!？」

「ヒヤハハハハ!! おかしくもなるさ!! まさかさっきドロ―したこのカードが召喚できる条件が整うなんて滅茶苦茶面白いギャグだよ!!」

どういう事……デッキトップのカードが墓地へ送られた事で特殊召喚が可能になるモンスターなんて一体何処に……

「光属性のクライスと闇属性の魂を削る死霊を除外してカオス・ソルジャー - 開闢の使者 - を特殊召喚!!」

魂を削る死霊

効果モンスター

星3 / 闇属性 / アンデット族 / 攻 300 / 守 200

このカードは戦闘では破壊されない。

このカードが魔法・罫・効果モンスターの効果の対象になった時、このカードを破壊する。

このカードが直接攻撃によって相手ライフに戦闘ダメージを与えた時、

相手の手札をランダムに1枚捨てる。

カオス・ソルジャー - 開闢の使者 -

効果モンスター（制限カード）

星8 / 光属性 / 戦士族 / 攻3000 / 守2500

このカードは通常召喚できない。

自分の墓地の光属性と闇属性モンスターを1体ずつゲームから除外した場合に特殊召喚できる。

1ターンに1度、以下の効果から1つを選択して発動できる。

フィールド上のモンスター1体を選択してゲームから除外する。

この効果を発動するターン、このカードは攻撃できない。

このカードの攻撃によって相手モンスターを破壊した場合、もう1度だけ続けて攻撃を行う事ができる。

「……………え？」

……………ちよつと待って？ よりによってそれ！？ 最初期に出てきた混沌帝龍と同じプレミア級の、それこそF・G・Dやダーク・ダイブ・ボンバーなんて目じゃない超がいくつ付いてもおかしくないレアカードじゃない！？ しかも閻属性モンスターもあの時墓地へ送る事に成功してたなんて……………！！

「1つの魂は光を導き、1つの魂は闇を誘う！！ 光と闇は交じり合い混沌となり、開闢の力は今ココに現れる！！ 現れる開闢の使者、カオス・ソルジャー！！」

そう言つて姿を見せたのは蒼い鎧を身に纏つた、伝説になった混沌の力を得た最強の剣士だった……………最悪、ダーク・ダイブ・ボンバーだけじゃなくてそいつもいたなんて……………！！

「まだだぜえ！！ レベル6の風帝ライザーにレベル1のグローアップバルブをチューニングウウウ！！」

ライザーが6つの星になり、グローアップバルブが1つの輪になる。その瞬間、あたしは奴の口上に重なる形で“あの男”の声を聞いた……………

『我が身に宿る鉄血の翼！！ 黒き暴風となりて、全ての敵を打ち払わん！！ シンクロ召喚！！』

「禁じられた力、今こそ解放しろ！！ 貴様を解放した愚者に裁きを下せ！！ シンクロ召喚！！」

『「いでよ！！ ダーク・ダイブ・ボンバー！！」』

ダーク・ダイブ・ボンバー

シンクロ・効果モンスター（禁止カード）

星7 / 闇属性 / 機械族 / 攻2600 / 守1800

チューナー + チューナー以外のモンスター1体以上

自分フィールド上に存在するモンスター1体をリリースして発動する。

リリースしたモンスターのレベル×200ポイントダメージを相手ライフに与える。

あたしはあのモンスターを倒す事を考え行動してきた。戦うこと

を望んでいた。でも、こんな事になるなんて思いもしなかった。

状況はあの時より悪い。恐らくあのカオス・ソルジャーこそがアイツのデッキの本場のエースモンスター。本来ならあのモンスターだけを相手にしてればよかったのに、あたしがあ言ったからあのようなモンスターまで出てきてしまった。

「バカな女だね君は！！　ダーク・ダイブ・ボンバーなんかを使わせなかったら勝てたって言うのにさあ！！」

分かってる。自分が一番バカな行動を犯したと言う事は……カオス・ソルジャーは1枚だけと言う制限があるけど値段さえ無視したらまだ使えるカード。

だけどダーク・ダイブ・ボンバーは違う。あのカードはあたし達が生まれる前に禁止を受けたカードであり、本来ならデッキに加える事が出来ないカード。それをあたしが破ったため、訴えてもあたしが負けるのは決定的だ。

「俺はカオス・ソルジャーで攻撃イ！！」

カオス・ソルジャーがあたしに向かって襲い掛かる。あのカードは伝説にもなったカード、効果はあたしも知っている。だからセツトしたカードの使い道はココじゃない……！！

「開闢双破斬！！」

カオス・ソルジャーの剣があたしの服を切り裂き、吹き飛ばす。

「きゃあああつ！！」

レイナ



「おねえちゃん!!」

リイナが泣きそうになりながら慌てて近づく。結構痛むわ……今でも斬られた傷が深いせいで意識が朦朧としてる……

でもあいつらはこんな傷をいつも負って帰ってきてた……中には死んだ人もいた……

だから……そんな顔しないでよ、リイナ……

「大丈夫よ……そもそも、モンスターを蘇生させてたらそれこそあたしが負けてたんだから……」

そう。あの時ライザーがサニクスを戻さなかったら、さっきの攻撃がサニクスを破壊して第二刃があたしを切り裂いた。

そしてダーク・ダイブ・ボンバーのダイレクトアタックが決まって、ダーク・ダイブ・ボンバーの効果であたしのライフは0……

だったらカオス・ソルジャーの攻撃は甘んじて受けた方がまだ傷は浅くて済む……

「僕も召喚の手順をミスったよホント……さっさとバルブ使えばよかつただけだね……まさかこんなカード来るなんて思わなかったからさあ!!」

そう言って高笑いを放つ。その表情は既に自分の勝利を確信し、あたし達でどう遊ぼうか企んでいる人でなしの顔……その顔を見てリイナは怯え、あたしも女としての嫌悪感を露にした。

「ダーク・ダイブ・ボンバーでダイレクトアタックだ!! マックス・ダイブ・ボム!!」

あのモンスターが変形してあたしに向かって襲い掛かる。そう、あのカードを使うタイミングはココー!!

「リバーズカードオープン!! 正統なる血統!! 墓地の通常モンスター・ガネットを攻撃表示で特殊召喚よ!!」

正統なる血統

永続罫

自分の墓地に存在する通常モンスター1体を選択し、攻撃表示で特殊召喚する。

このカードがフィールド上に存在しなくなった時、そのモンスターを破壊する。

そのモンスターがフィールド上に存在しなくなった時、このカードを破壊する。

姿を現したガネットだったけど、ダーク・ダイブ・ボンバーの攻撃であえなく飲まれ、粉々に砕け散る。ゴメン、ガネット……!!

レイナ

LP:5000 4300

「……俺はコレでターンエンドさせてもらっぜ。流石に直接攻撃は怖いからな……」

ライフは4倍近く上回っていてもボードアドバンテージは圧倒的に不利。たとえサニクスを引いても守備表示にしたそいつをカオス・ソルジャーで除外してダーク・ダイブ・ボンバーで直接攻撃、その後でカオス・ソルジャーをリリースするだけで2600と1600のダメージであたしの負け……!!

「言っておくけどよ、手札には風帝ライザーがいるよ。何もしなくたって黄泉ガエルからライザーを召喚してジ・エンドってわけさ」

そう言っで見せびらかすように仕向ける。確かに風帝ライザーのカードだ……攻撃できなくても正真正銘敗北の危機って奴じゃない……！！

「あ……」

その時思い出した。あの時、あの男もまたこの状況下で自分の勝利を確信していた。もう勝てるはずが無い、あいつはそうも言っていた。

でもあの時のあたしは最後の最後で1枚のカードをドローして、その状況を覆した。あの時とはフィールドが違う、手札も違う、デッキすら違う。

それにあの時のアイツは、あたしなんか比べ物にならないような絶対的不利な状況を覆した。まあキーカードはデッキに入れた覚えの無いカードだって言っただけど、あの時はお互い様だ。

何だ……怖気づく心配なんて無いじゃない。でも横を見るとリイナが今にも泣きそうな顔でこっちを見てくる。

「……大丈夫よりイナ。あたしは負けないから」

そう言っ彼女を元氣付ける。でもあの子はやっぱりどこか怯えた表情でダーク・ダイブ・ボンバーとカオス・ソルジャーを見据えている。

「どっちにしてもあたしは退けない状況なのよ……」

上等……見せてやるわよ！！ ウォザーブルグでの最終決戦に比

べたらこの程度の敵なんか怖くないわ!!

デッキトップのカードに指をかけて目を瞑る。そこにいたのはモトウブに来てから世話になつてゐる2つのグループに、三騎士の……特に行方不明になつたあの2人の姿……

あたしは意を決して声を張り上げた。あいつらが、三騎士がここぞとばかりに宣言した勝利のための咆哮を!!

「ファイナルターン!! ドロー!!」

そう言つてあたしはカードを引き抜く。即座にあたしは引き当てたサニクスを召喚する。

「あたしはサニクスを召喚して手札から魔法カード『馬の骨の代価』を発動させるわ!!」

馬の骨の代価

通常魔法

効果モンスター以外の自分フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体を墓地へ送つて発動する。  
自分のデッキからカードを2枚ドローする。

サニクスの姿が消えて行き、あたしはデッキに手を伸ばす。恐らくコレが最後のチャンス……ココを逃せばあたしは負ける。

だけど、それがどうした!! SEED事変を生き抜いた人類舐めるな!!

「ドロー!!」

2枚のカードを見据える……1枚はあの時のデュエルを決めた力

ードだけで召喚条件を満たしていないのでフィールドには出せない。だけでもう1枚のカード……そして手札に残った2枚のうち1枚であたしのデッキ最強のモンスターを召喚する事が出来る!!

「……なんだよ？ 何ドローしたんだよ！？ 何でそんな顔してんだよお!!」

狼狽するのも当然よね、あの男はこのターンを凌いだら勝てる状況だから。でも残念でした、あんたの『次のターン』は永遠に訪れない!!

「手札から魔法カード融合を発動!!」

融合

通常魔法

手札・自分フィールド上から、融合モンスターカードによって決められた

融合素材モンスターを墓地へ送り、その融合モンスター1体をエクストラデッキから特殊召喚する。

「融合!？ バカな、何で『融合』なんだよ!？ お前の手札にはジェムナイト・フュージョンがあるだろうがあああ!!」

アイツはうるたえる。そう、既にあたしの手札にはジェムナイト・フュージョンのカードは存在する。でもこれから呼び出すのは少しばかり特別なカード……

「おあいにく様、あたしの最強モンスターはそれじゃ呼び出せないのよね。さあ出番よ!!」

あの男に引導を降した“母さんの形見”と、あたしのデッキのエースを交わらせる！！

「七色の虹よ、水晶の宝玉騎士よ！！ 今こそ交わり、その輝きを持って闇を打ち払え！！」

そして2体のあたしのデッキのエースは交じり合い、1体の虹の名を有するエースが姿を現す！！

「ジェムナイト・クリスタと……究極宝玉神レインボードラゴンを融合素材にしてレインボー・クリスタを特殊召喚！！」

今ココに虹色の宝玉と白銀の翼を持ったクリスタが姿を現した。

レインボー・クリスタ（オリジナルカード）

融合・効果モンスター

星10/地属性/岩石族/攻4450/守2950

「ジェムナイト・クリスタ」+「究極宝玉神」と名のついたモンスター1体

このモンスターの融合召喚は、上記のカードでしか行えず、融合召喚でしか特殊召喚できない。

手札の「ジェムナイト・フュージョン」を除外する事で1ターンに1度だけ以下の効果から1つを発動できる。

このカードの効果はそれぞれデュエル中1回しか使用できない。

相手フィールド上のモンスターを全てデッキに戻す。

相手フィールド上の魔法・罫カードを全てデッキに戻す。

相手の墓地のカードを全てデッキに戻す。

「レインボー、クリスタだって！？ そんなカードなんて無いぞ！！ なんだそりゃ！？」

効果はあるけど使わないで置くわ。何せ今回のデュエルの勝利条件は“アイツ”を倒す事。生かしておく理由は無い！！

「行くわよレインボー・クリスタ！！　ダーク・ダイブ・ボンバーを攻撃！！」

『了解したぞレイナ！！　ハアアアア！！』

クリスタの腕から七色の輝きが増していく。そしてその拳でダーク・ダイブ・ボンバー目掛けて打ち進む！！

どうだ、あたしは絶望的な壁をまた越えてやったぞ。

あの時とは違えど、父親だった男を倒した時と同じ台詞をあたしはココで言い放った。

「進む道を塞ぐヤツがいたら、何者だろうと乗り越えて進むまでよ！！　オーバー・ザ・レインボー！！」

レインボー・クリスタの拳がダーク・ダイブ・ボンバーを打ち砕き、カオス・ソルジャーを巻き込んで盛大に爆発し、その拳はアイツを見事に捕らえた。

「ぐああああああ！！」

忠志

LP：10500

あいつは倒れ、あたしが従っていたモンスターも用が終わったといわんばかりに姿を消す。そのデュエルディスクから1枚のカードが零れ落ちた。

そのカードはダーク・ダイブ・ボンバー……あたしにとって最も

憎むべきカード……どんなに呪われたカードでも、“これ”以上に怒りも憎しみも湧き上がってこないだろう事は明らかだった。

そいつのお陰であたし達の絆は滅茶苦茶になって、あのような結末を迎えた。

「このカードのせいで……あたし達は……!!」

そう。これは決定付けられた結末。高値で取引されてるレアカードだろうがなんだろうが知った事じゃない。

あたしは何の躊躇いも躊躇も後悔もなく……

「!!」

元が何だったのか分からなくなるまでズタズタに引きちぎってやった。



## 姉としての戦い（後書き）

少しオリカの効果が強すぎましたか……？

ただ、レインボー・ドラゴンを含めた攻撃＋ダーク・ダイブ・ボンバーを破壊してのフィニッシュをしたかったので調整までしてこの有様……

まだ中二病患者末期が出ない……ネタはあるが、今度は敵対敵の決闘があるんです……まあ、そっちはテキパキと終わらせたいです……ホントに切実に今年中に。

## 燃える集落（前書き）

この話で皆大好きあのキャラが初登場！！

また、今回のデュエルもオリカがチートじゃないかどうか不安で仕方がない……

## 燃える集落

私があのお客様を裁いてから会話もなくただただ目を瞑ってから数分後、ふと視線を右に向けるとそこには肩で息をしていたレイナの姿があつた。近くには先程葬つた違法者と似た顔をした男が転がっていたので恐らく彼女は勝つたのだろう。

「……………」

驚いた事には彼女の肩の辺りに紙屑がこびり付いている。それは白い棒を持ったカードであり、何故そのような行動に出たのか悟つた。

「……………」

そして倒れている男の片割れ……………つかつかと歩み寄り、デュエルディスクに備わっていたデッキをむしりとる。更にプレートには驚いた事に伝説級のレアカードであるカオス・ソルジャーが存在していた。

疑うまでも無い。この男も偽造カードを使っていたと言う事だ。

「……………この男もか」

「どういう意味……………」

レイナが私に問いかけるが、代わりにエミリアが声を上げた。

「うん、アイツ神様に造らせたとか言ってたから、偽造カードを手にしたんじゃないかってギユスターヴがキレちゃって……………」

それを聞きレイナも怒りの表情をあらわにした。当然だ、異能者にとってデュエルモンスターのカードの偽造など許される話ではないし、彼女も出奔したとは言え一族の人間……そう言った犯罪に怒りを燃やすのは当然だ。

「ぎぞうつて……かつてにつくつちやつたつてこと？ それってたいへんなんじゃ……！！」

レイナが驚く。当然だ、このようなカードが乱立されてしまつてはMAW社どころかデュエルモンスターズに参加している会社の信用が失われプロリーグやアニメも即座に打ち切られ、最悪デュエルモンスターズそのものが途絶えてしまう。

「レイナ、この偽造カードは私が証拠物件として預らせてもらう。いいな？」

「いいけど……そうになるとダーク・ダイブ・ボンバー破つたのミスつたかしら……」

本物だろうと破り捨てたお前が言うか。プレートからカオス・ソルジャーのカードを手にしてこの男が持っていた紙束に差し込み、男が持っていたナノトランサーを調べると驚いた事にカードの海があふれ出てきた。

「うわっ……」

レイナとエミリアがあふれ出たカードの量に驚き、レイナがカードを手にしながらか愛いだの可愛くないだの言い出した。私も咄嗟に強制停止させ、ナノトランサーに押し込みなおす。

「何コレ、見たこともないカードまであるじゃん！？ 偽造どこ

るか勝手にオリカまで作ってるの!？」

エミリアが溢れたカードの一部を拾い啞然とする。話を聞き私も愕然とした。

「……見せてみる」

エミリアからカードを渡してもらい確認する。確かに『代行者』と名の付いたモンスター郡と『E・HERO ジ・アース』、『N O』と名の付いたモンスター等聞いたことが無い。偽造して密売する者はよく見てきたが、流石にココまでやらかす阿呆は初めてだ!!

「何処まで我らを愚弄すれば気が済むのだ!!」

コイツのナノトランサーを全て引きちぎると私達は奥へと進みなおす。本当ならば今も無様に転がっているヤツの首を切り落としたかったが幼児化しているリイナの手前惨劇を起こすわけに行かず、感情に任せて殺してしまった結果を踏まえ手足を縛るだけに留まった。

「……なんかエミリアの様子変じゃない？」

レイナがそんな事を言う。私がああ阿呆を感情に任せて葬った事を話すと彼女もあきれ返ってしまった。当然だ、自分の感情を抑えきれずに暴走する事など愚の骨頂だというのに……

「で、どうすんの？ あのままじゃまずくない？」

「終わったらパートナー解消させるかどうか相談する。原因は私の戦い方にあつたからな、クラウチにもそうやって説明するさ」

さて、あそこから大分歩いたし、もうそろそろ集落が見えてもおかしくないはずなのだが……

「もうそろそろカーシュ族の村だけど……何か焦げ臭くない？」

エミリアが怪訝そうに辺りを見回す。そして私も何やら異様な臭いを感じ鼻を覆ってしまう。

「おさかなさんとかおにくとかやいてこがしちゃったのかな……？」

「違うわレイナ……この臭いはそんなものじゃない……！！」

レイナの言うとおりだ……私が嗅ぎ取ったのは、物や人が焼かれた様な醜悪な臭い……

「……戦闘用意だ。警戒しながら進むぞ」

そう言っただけ私達は戦える準備をしてから奥へ進む。何かを焼く臭いは留まるところを知らず、それどころか増すばかり。

「……え？」

そして目的の場所にたどり着き、私達は凍りついた。

「なに……これ……？」

そこは“集落”ではない。集落はあそこまで燃え盛らない。家屋が燃えたりしない。周りだって赤くない。そして何より、“人の形をした炭”など転がってるはずが無い。

「……………！！」

目の前に広がる光景……それはまさに絵に描いた様な“地獄”だった。

「ひっ……」

レイナが恐怖で声を上げようとするが、レイナが妹の口を覆うことで制する。恐らく先程の少年は、カーシュ族の村を襲った者たちと戦い、敗れ、逃走した所で私達と遭遇したのだろう。

「しかし……」

あの時彼は言っていた。『村は関係ない。自分が狙いなら襲うのは自分だけにしろ』と。そこがどうにも腑に落ちない。私が疑問点を話すとレイナは啞然とした表情で声を上げた。

「その何をいじめるためだけにやいたっていうの？」

「多分な。どうやら戦っていたのはカモフラージュ……いや、それにしても本気で奴は彼を殺すと言っていたが……」

周りを見ても逃げ惑っている人は見受けられない。どうやら

襲撃から逃げ延びたカーシュ族がいるのか、それとも彼以外のカーシュ族は全滅したのか……それすら見当も付かない……

「ん？ みんなあそこ見て」

エミリアが指差した方角を見ると、そこには人だかりが出来ていた。しかし妙なところがある。

虚ろな眼をした人間が多く存在し、服装もシティで見かけるような服なのだ。先程のカーシュ族の少年とは違うのは明らかであり、外から来た人間たちなのだろう。

更に誰かが場違いにもデュエルをしていた。片方は先程戦った阿呆どもや海底レリクスで戦ったような顔が端正な男で、もう片方はフードやマントで顔や身体を隠していた。

しかし戦況は顔と身体を隠した存在が有利……両腕が狼の頭部と なっている蒼い毛並みを持った狼男と黒い死神のようなモンスターを有しており、もう片方はモンスターも伏せられたカードも手札も無い状態……。

最早勝負は火を見るより明らかだった。

「ちきしょう、俺の が、こんなところで終わるのかよ！  
？ 折角あの害兇殺して、 を場合によっちゃ壊して  
の目的をぶっ壊すはずだったのに……！」

「……消え失せる、造られた存在以下のクズが！！ 死肉を貪れ、  
我が僕たちよ！！」

フードを被った存在 声からして男だろう、多分の台詞と  
同時に狼男と死神が一斉に攻撃を仕掛けてくる。優男は悲鳴を上げ、  
二組の魔物に襲われ鮮血と断末魔の声を上げて絶命する。

「さて、探すとするか……」



そう言って何事も無かったかのように奥へと進む。さて、我々は  
どうするべきか……

「ちくしょう！！ 話が違う！！ 俺らはチートのはずなのにな  
んであんな中二病に負けなきゃいけないんだ！！ もう原作なんざ  
知った事か！！」

すると何人かの人間がこちらに向かって走り出してきた。何事か  
と思いつら誰だよ！？ 原作じゃ2人だけだったのに4人もいる  
と思いつら誰だよ！？ 原作じゃ2人だけだったのに4人もいる  
と思いつら誰だよ！？ 原作じゃ2人だけだったのに4人もいる

「テメエ、エミリア！？ クソツもうココまで来たのかよ！？」

「そいつら誰だよ！？ 原作じゃ2人だけだったのに4人もいる  
！？ どうします、兄貴！？」

「へえ、結構可愛いじゃねえか……ま、連れて帰ってのお楽しみ  
だな。オイテメエら、そいつら連れて帰るぞ、もちろん野郎はブツ  
殺確定で帰ったらアジトでパーティーだ！！」

『ヒヤッハア！！ さすが毛飛漢の兄貴は話が分かるぜ！！』

好き勝手ほざく面々を他所に何人かが私以外の3人を見て邪な笑  
みを浮かべる。咄嗟に細剣に手を伸ばしたが、それよりも早く奴ら  
のまとめ役だったモヒカンヘアの男……モウ〃ヒカンが襲い掛かっ  
てきた。

「おらよっ！！」

奴は私が細剣を構える前に速く蹴りつけ、私はそれに耐え切れず  
バランスを崩してしまふ。そしてすかさず別の誰かがコインを弾く  
と何かが私の右肩を撃ち貫いてきた！！

「なっ!?!」  
「ギユスターヴ!!」

私が焼け落ちる家屋に背をぶつけてしまい声にならない悲鳴を上げてしまう。しかしその一方で奴らはエミリアやレイナ達に手を伸ばし、そのまま抱きかかえて逃げようとしていた。

「こらっ!! 離せ変態!!」

「あ、レイナに変な手で触るな!!」

「やだやだ!! へんなてでさわらないで!! だれかたすけて

よお!!」

「くそっ……待て!!」

私が叫ぶがそれよりも早く奴らは逃げて行く。私は数枚のカードに手を伸ばし、大声で叫び声を上げた。

「いでよ、エクスプロード・ウィング・ドラゴン!! クリムゾン・ブリーダー!! ストロング・ウィンド・ドラゴン!! ビッグ・ピース・ゴーレム!!」

私が持ちうる限りのモンスターを召喚して奴らを襲うよう命ずる。このカードは私の切り札級のモンスター達であり、炎魔竜以外で信頼する魔物たちだ。

炎魔竜は私を核として降臨するため今は使えない状況だが今は一刻を争う状況だ、全力で行かせて貰う!!

「行け!! 我が僕たちよ!!」

エクスプロード・ウィング・ドラゴンがエミリアを連れ去った男に向かって飛び掛って奴の足を挟り空を舞ったエミリアを抱きか

かえ、ビッグ・ピース・ゴーレムがレイナを連れ去った男の前に立ちほだかりクリムゾン・ブリーダーがその隙に彼女を奪還する。

しかし残ったレイナを連れ去った男は意外と素早いのか決定打にならない。今も泣き喚くレイナを他所に距離が開く一方。

私も走るが追いつこうにも追いつけない。このまま逃がしてしまうのでは……そう思ったとき、突然何やら音が響いた。

「え？」

燃え盛るこの場には似ても似つかわしくない音……ハーモニカの音が響き渡る。この音……いや、鎮魂歌を思わせるもの悲しげな旋律には聞き覚えがあった。それは今朝の夢、そしてそれが元となった過去に……

「この、曲は……！！」

そして私はレイナの目的を悟った。ココ最近クラウドッグ地方には異能者が集結していると報告があった。更に彼女のあからさまな不自然な行動の数々……そうまでして彼女が探そうとしていたのは私には2人しか思い浮かばない。

その解答を裏付けるかのように1人の人間が姿を現す。一步、また一步と近づくに連れてハーモニカの旋律が響き渡る。そして吹き終えたのか顔を上げるとその顔はやはり私が考えた2人のうちの1人だった。だが、一瞬それが誰だか私には分からなかった。

いや……長さは違えど摩く白髪は私が知っている“彼”そのままなのだが、それ以外がかつての彼と結びつかなかったのだ。

その白磁の様な肌どころか生気を宿さない真白な肌がそうだ。

乱雑に伸ばした前髪と千切れた包帯から見え隠れする黒く濁った眼に紅き光を持った右目もそうだ。

だがそれ以上に肌よりも生気が宿っておらず、黒く濁った眼に燈る紅き光以上に禍々しい、白い眼と虚ろな赤い左眼がかつての“彼”と結びつかなかった。

「お前は……!!」

“彼”は私を見据え驚いたような表情を見せるが、直ぐに私の側にいるレイナと連れ攪われようとしているリイナを見据えると、私を見た時以上に驚愕の表情を浮かべた。そしてレイナはその人物の名を上げる。

「生きていたのね……」

それはかつて私ともう1人と同じ『三騎士』の一角にしてその前身である『虹』の1人……

ウォザーブルグ動乱の中心となった存在……

そしてウォザーブルグで発見された『星屑の竜』と『無限獄の民』  
の内片方を持ち出してリイナを      ウとした男……

「……不知火……飛鳥……」

その男　アスカは驚愕の表情を浮かべたが、直ぐに虚ろな表情に戻った。

「て、テメエ！！　よくも俺らの楽しみを！！」

「ぶっ潰してやる！！」

「汚物は消毒だああああ！！」

一斉に襲い掛かる男達だったが、それよりもアスカが速く、鋭く、そして無慈悲に手にしたニューデイズの伝統工芸品である刀で斬り捨てる。

風雪の速さの如く踏み込んだ足で1人を縦に両断し、続けてもう1人を三日月状に弓なりに斬り捨て、更に1人横薙ぎに切りつけ鮮血を散り逝く花びらのように舞わせ、何事も無かったかのように刀を納めるその姿は最早芸術の域に達している。

あそこまで鍛え上げるのに、どれほどの月日を掛けたのだろうか……私には想像する事すら困難だ。

「……隙だらけだ」

「なっ……！！　テメエ、いつの間に!？」

すかさずアスカが泣きじゃくっていたリイナを男の魔の手から奪いなおし、レイナのところまで運ぶ。

「……」

リイナをレイナに渡すと直ぐにアスカは再び男の元へ駆け抜ける。だがその直後、彼が左腕を前に突き出して紫色の糸をアスカの心臓

に打ち込んだ……

「コレってさっきの……！！！」

エミリアが驚いた表情を見せる一方で、アスカはそのまま男の方へ走るが男が上ずった声で叫んだ。

「む、無駄だあ！！ そいつはデュエル以外の行動をする事が出来ない！！ この技がお前に使えたって事はテムエもデュエリストって事だろ！？ テムエがいくら強くてもデュエルじゃどうだあ！！」

奴の言葉を合図にアスカが男の腹部を赤黒いフォトンを纏った右腕で貫こうとしたが、それよりも早く紫の糸がアスカの腕に絡みつく。左腕で外そうと試みているが見かけによらず頑丈なのかびくともしない。

「……まあいい」

アスカが淡々と言うと、距離を離し右腕が束縛から解放される。そして左腕を翳して果し合いの承諾を宣言する。

「……デュエルトランサー、起動……」

その言葉と同時に左腕のナノトランサーが変形していき、黒を基調としたプレートが出現する。ナノトランサーとしての基部が展開され、その中に納まる形でデッキが出現する。

「……へっ、俺のデッキに敵うものかよ……！！」

モウも自分の左腕にデュエルディスクを装着させ、距離を離す。  
そして炎の中でアスカは淡々と、モウは声高らかにと対照的に声を上げた。

「…………デュエル…………」  
「デュエルだあ！！」

飛鳥

LP：8000

毛飛漢

LP：8000



「先攻は俺が貰う……俺のターン、ドロ―」

幽鬼さながらにカードを淡々と引くアスカ。彼が最初に行った行動は至って単純だった。

「モンスター1枚とカードを2枚セットしてターンエンド」

覇気を感じさせずに行動するアスカ。続けてモウが声を張り上げて己のターンを始めた。

「俺の……タアアアアアアン！！ ドロオオオオ！！」

そう叫ぶが動作は大きさである事以外アスカと大して変わらない。アスカは口調が淡々としていたのもあったためか幽鬼さながらの雰囲気を出していたが、奴の場合は口調と動作の所為もあって滑稽に見えた。

「俺は手札のインフェルニティ・デストロイヤーを墓地へ送り、ダーク・グレファア―を特殊召喚するぜ！！」

インフェルニティ・デストロイヤー

効果モンスター

星6 / 闇属性 / 悪魔族 / 攻2300 / 守1000

自分の手札が0枚の場合、

このカードが戦闘によって相手モンスターを破壊し墓地へ送った時、

相手ライフに1600ポイントダメージを与える。

ダーク・グレファア

効果モンスター

星4 / 闇属性 / 戦士族 / 攻1700 / 守1600

このカードは手札からレベル5以上の闇属性モンスター1体を捨てて、

手札から特殊召喚する事ができる。

1ターンに1度、手札から闇属性モンスター1体を捨てる事で、自分のデッキから闇属性モンスター1体を墓地へ送る。

奴の場から闇に堕ちたのか肌が灰色に染まり、目が血の様に紅くなった筋骨隆々とした戦士が姿を現す。

しかし私とレイナは奴が特殊召喚のコストにしたモンスターの名前を聞き啞然となった。

「馬鹿な……インフェルニティだと!？」

「ま、待ってよ……なんでアイツがそれ使ってるわけ!？」

そう、ダーク・グレファア自体は然程問題ではないし、このカードの元となったカードがある意味話題をもったお陰で安値で取引されている為問題ない。

だがインフェルニティ・デストロイヤー……あのカードは違う、あのカードは……『インフェルニティ』はアイツ以外の人間が手にしていること事態が異常なんだ……!!

「ど、どうしたのよ2人も!？ 今度のカードはどれぐらいの

価値があるカードなの!？」

エミリアがそう言うが、私ばかりうじて声を振り絞って声を出るのがやっとだった。レイナもリイナを抱きかかえながら啞然となった表情で頷く。

「……私が戦ったF・G・Dやレッドアイズ・メタルダークネスドラゴン、レイナが戦ったダーク・ダイブ・ボンバーやカオス・ソルジャーは高額レアカード……エクリプス・ワイバーンはまだ生産されていないカードだ……」

「でもね、裏を返せば予算を無視したら組む事は可能よ。それに……エクリプス・ワイバーンとかだってデータが流出したんなら造れるわ」

「だったら、そのイン何とかってカードも同じなんじゃ……」

エミリアが的を外れな意見を言うと、私は首を横に振って答えた。

「……インフェルニティ……またの名を『無限獄の民』と呼ばれるカードはウォザールブルグ・レリクスで発掘されたカードだ……偽造しようにもデータを取る前に持ち出されてそれつきりだ」

「つまり殆どのインフェルニティは真正銘『世界に1枚しかないカード』って訳よ……ギユスターヴの言う炎魔竜や、あれと対になる『星屑の竜』と同じようにね……」

私達が啞然としている中、優男は次々とフィールドを制圧していく。

「続けてインフェルニティ・ネクロマンサーを召喚!! ダーク・グレファアの効果で手札からインフェルニティ・ビートルを墓地へ送ってデッキからインフェルニティ・デーモンを墓地へ送る!!」

更にカードを1枚セットして……」

続けて姿を現した外套を纏った骸骨……インフェルニティ・ネクロマンサーが姿を現し、闇に堕ちた戦士から放たれる闇の瘴気が奴の手札とデッキからカードを1枚ずつ消していく。そして……

「止めにインフェルニティガンを発動だあ!!」

“聞いた覚えの無い”インフェルニティ系のカードを発動させ、奴の背後に巨大な砲台が姿を現した。

インフェルニティ・ネクロマンサー

効果モンスター

星3 / 闇属性 / 悪魔族 / 攻 0 / 守 2000

このカードは召喚に成功した時、守備表示になる。

自分の手札が0枚の場合、以下の効果を得る。

1ターンに1度、自分の墓地に存在する「インフェルニティ・ネクロマンサー」以外の

「インフェルニティ」と名のついたモンスター1体を特殊召喚する事ができる。

インフェルニティ・ビートル

チューナー（効果モンスター）

星2 / 闇属性 / 昆虫族 / 攻1200 / 守 0 自分の手札が0

枚の場合、このカードをリリースする事で自分のデッキから「インフェルニティ・ビートル」を2体まで特殊召喚する。

インフェルニティ・デーモン

効果モンスター

星4 / 闇属性 / 悪魔族 / 攻1800 / 守1200

自分の手札が0枚の場合にこのカードをドロ―した時、このカードを相手に見せる事で自分フィールド上に特殊召喚する。また、このカードが特殊召喚に成功した時、自分の手札が0枚の場合、

自分のデッキから「インフェルニティ」と名のついたカード1枚を手札に加える事ができる。

インフェルニティガン

永続魔法（制限カード）

1ターンに1度、手札から「インフェルニティ」と名のついたモンスター1体を墓地へ送る事ができる。

また、自分の手札が0枚の場合、

フィールド上に存在するこのカードを墓地へ送る事で、

自分の墓地に存在する「インフェルニティ」と名のついた

モンスターを2体まで選択して自分フィールド上に特殊召喚する。

「インフェルニティ、ガン？」

私とレイナは聞き覚えの無いカードの名を鸚鵡の様に返すことがやっとだった。一方で奴は自分の右手を見せびらかすように動かす。

「これで俺の手札は0だぁ……………！！！」

そう、奴は一足先にインフェルニティが最も有利になる条件を満たしてしまった。そして奴は声高らかに叫び声を上げる。

「インフェルニティガンが持つ真の効果を発動！！ 手札が0枚の時、フィールド上のコイツを墓地へ送る事で墓地からインフェルニティモンスターを2体まで特殊召喚することが出来る！！ 出てこい、インフェルニティ・デストロイヤー！！ インフェルニティ・

ビートル!!!」

その声を合図に巨大な砲台が発射され、弾丸と化していたヘラクレス・オオカブトの姿をしたモンスター……インフェルニティ・ビートルと複眼を持った巨大な悪魔……インフェルニティ・デストロイヤーが姿を現す。

「おっと、俺はビートルの効果でコイツをリリースしてデッキから同じモンスターを2体特殊召喚するぜ!!!」

そしてインフェルニティ・ビートルの姿が分裂し、同じ形をしたモンスターが姿を現す。

「さあ、これで準備万端って訳よ……!!!」

「たった1ターンでココまで一気にモンスターが5体も!?!」

「しかもビートルはチューナーモンスター……確実に来るわね!」

エミリアとレイナが驚く中、モウが自慢げに声を上げる。

「さあいくぜえ!!! レベル6のインフェルニティ・デストロイヤーにレベル2のインフェルニティ・ビートルをチューニングウ!!!」

デストロイヤーが6つの星に、ビートルが2つの輪になり新たな力を生み出そうとしている……!!!

「死者と生者、ゼロにて交わりしとき、永劫の檻より魔の竜は放たれる!シンクロ召喚! いでよ、インフェルニティ・デス・ドラ

「ゴンー!!」

そして姿を現すは脳を露にした不気味な竜……無限獄の死を司る魔竜が降臨した。

インフェルニティ・デス・ドラゴン

シンクロ・効果モンスター

星8 / 闇属性 / ドラゴン族 / 攻3000 / 守2400

闇属性チューナー+チューナー以外のモンスター1体以上

1ターンに1度、自分の手札が0枚の場合に相手フィールド上に存在する

モンスター1体を選択して発動することができる。

選択した相手モンスターを破壊し、

破壊したモンスターの攻撃力の半分のダメージを相手ライフに与える。

この効果を発動するターンこのカードは攻撃する事ができない。

「……………ギユスターヴのレッド・デーモンズと同じ攻撃力じゃない……………!!」

エミリアが驚愕する中、モウはコレでも満足していないのか更なる行動に出た。

「インフェルニティ・ネクロマンサーの効果で墓地からインフェルニティ・デストロイヤーを特殊召喚するぜえ!! 出な、インフェルニティ・デストロイヤー!!」

その声を合図にインフェルニティ・ネクロマンサーが呪文を唱え、現れた魔法陣から再びインフェルニティ・デストロイヤーが姿を現す。

「さて、このデッキの真のエースを呼ぶ時間だあ！！ レベル4のダーク・グレファアとレベル3のインフェルニティ・ネクロマンサーにレベル2のインフェルニティ・ビートルをチューニングウー！！」

インフェルニティ・ネクロマンサーとダーク・グレファアが星になり、再び輪を潜る。今度はレベル9のシンクロモンスター……！！

「破壊神より放たれし聖なる槍よ、今こそ魔の都を貫け！！ シンクロ召喚！！ 氷結界の龍 トリシューラア！！」

その言葉と同時に吹雪が炎すらも凍てつかし、三つ首の龍を持った氷結界最強にして最悪の龍が今降臨した……！！

氷結界の龍 トリシューラ

シンクロ・効果モンスター（制限カード）

星9 / 水属性 / ドラゴン族 / 攻2700 / 守2000

チューナー+チューナー以外のモンスター2体以上

このカードがシンクロ召喚に成功した時、

相手の手札・フィールド上・墓地のカードを

それぞれ1枚までゲームから除外する事ができる。

「氷……結界の、龍……トリシューラ……だと……」

私はそのモンスターを見て何度目になるか分からない驚愕の表情を浮かべ、恐怖に支配された。手足が振るえ、私の顔も恐怖に歪んでいるのかもしれない。

……当然だ。氷結界はモトウブの寒冷区域に存在する隠れ里……すなわち『氷結界の里』に鎮座している守り神……そしてかつて五



百年戦争で我々異能者が解き放った最強の龍……一度解き放たれたが最後、敵も味方も凍てつかせ生命を持たぬ氷像に作り変えてしまっただ。

当然今の長であるお方が封印など解くはずも無い。しかし、何故、トリシューラが……

「ギユス……トリシューラが相手だろうが何だろうが、どうでもいいだろ？ たかがデュエル……それも言ってみれば、ただのカード遊びだ……何を組もうが勝てばいいだけだろ？」

アスカは異能者にとって言うてはならない単語を紡いだ。カード遊び……我々はデュエルをその様に扱ったことなど一度も無い。我々にとってデュエルは常に知略を競い合い、使役した配下をいかに己が手足のように扱うかを探り合う……自分自身の誇りを賭けた文字通りの“決闘”だ。

あいつの発言は我々に対する宣戦布告にも等しい言葉なのだ。しかしアイツは異能者としての常識をカールと共に学んだはずなのに、何故その様な言葉を……！！

「よく分かってんなあオメエ……んじゃトリシューラの効果でテーマの手札、フィールド、墓地から一枚ずつ除外させてもらっぜ……凍てつけや、エターナルフォースブリザードオオ！！」

叫び声と同時に三つ首が一斉に吹雪を放つ。私やレイナが即座に異能を使ってエミリアとリイナを護ったのはいいが、アスカのフィールド上のモンスターと手札の一枚が凍り付いてしまい、使い物にならなくなってしまう。

「ヒヤッヒヤッヒヤ！！ コレで一斉攻撃して全部通ればワンターンキルがご成立だあ！！」

そうか……トリシューラは2700（正直言ってそれ以上だと思うが……）、デストロイヤーは2300、そしてデス・ドラゴンは3000……

「決まっちゃったなら……飛鳥の負けじゃない!!」

「バトルウ!! インフェルニティ・デス・ドラゴンでダイレクトアタックウウ!!」

インフェルニティ・デス・ドラゴンの口から放たれた死霊の奔流がアス力を貫こうとした瞬間、腕を前に翳して叫んだ。

「トラップカードオープン、全弾発射発動。更にサイクロン発動し、お前が伏せたセットカードを破壊させてもらう」

全弾発射

通常罠

このカードの発動後、手札を全て墓地へ送る。

墓地に送ったカードの枚数×200ポイントダメージを相手ライフに与える。

サイクロン

速攻魔法

フィールド上に存在する魔法・罠カード1枚を選択して破壊する。

突如竜巻が姿を現しモウの元へ向かい、奴の場に伏せられたセットカード……インフェルニティ・ブレイクを破壊する。あれは墓地のインフェルニティカードを除外して場のカードを1枚破壊する効果を持ったカード……確かにセットされたターンに破壊するのが定石だが……

「全弾、発射だあ……しかもこのタイミングでサイクロン……？  
テメエ、何考えてんだ？」

怪訝そうなモウの言葉を無視してアスカは淡々と言葉を紡ぐ。

「俺は手札のカードを全て墓地へ送って、その枚数200倍のダメージを与える……」

そう言っアスカの場から弾丸が2発放たれモウにダメージを与える。その直後、アスカも攻撃の波に飲まれダメージを受けた。

飛鳥

LP：8000 5000

毛飛漢

LP：8000 7600

「悪あがきしてんじゃねぞゴルア！！ テメエ、俺のノーダメージ勝利を台無しにしゃがって！！ ぶっ殺してやるぞああ！？」

モウの叫びに対してもアスカは動じもしない。それどころかアスカの体から何やら濁った紫色の炎らしき物が浮かび上がってきていく……！！

「……な、何だよそれ？ ゴーズにしる手札が無いんじゃ出来ねえだろうが！！」

「手札が0枚の時、相手がコントロールするカードによってダメージを受けた際、俺は除外されたコイツを特殊召喚することが出来

る……ワンターンキル、果たせなくて残念だったな」

そう言って紫色の炎が徐々に形を成していく。そしてアスカは自分が召喚した魔物の名を告げた。

「無限獄の守護者の力を借りて再臨せよ、無限獄の亡霊……インフェルニティ・ファントム」

インフェルニティ・ファントム（オリジナルカード）

効果モンスター

星5 / 闇属性 / 悪魔族 / 攻1000 / 守 0

自分の手札が0枚で相手がコントロールするカードによってダメージを受けた時、

除外されているこのカードを特殊召喚する事ができる。

この方法で特殊召喚に成功した時、除外されている「インフェルニティ」と名の付いたモンスターカードを1枚このカードに装備する事ができ、

装備したモンスターの攻撃力分だけ攻撃力がアップし、効果を得る。

インフェルニティ・ファントムの効果はデュエル中1回しか使用できない。

「このカードの効果で特殊召喚されたインフェルニティ・ファントムは同じ次元を彷徨っていた同族の魂を喰らい、己の力にする……俺はインフェルニティ・ガーディアンしか存在しないな……コレでこのカードの攻撃力と効果を得る事に成功したぞ。しかも守備表示でな」

インフェルニティ・ガーディアン

効果モンスター

星4 / 闇属性 / 悪魔族 / 攻1200 / 守1700  
自分の手札が0枚の場合、フィールド上に表側表示で存在する  
このカードは戦闘及びカードの効果では破壊されない。

紫色の炎が先程凍て付かされたカード……インフェルニティ・ガ  
ーディアン of の姿となってアスカを護るように立ちはだかる。それを  
見たモウは大声で喚きだした。

「い、インフェルニティ、フロントムウ!? 卑怯だぞ、インチ  
キだ、オリカ使ってんじゃねえ!!!」

「言いがかり付けんじやないわよ!!! アンタの使ったインフェ  
ルニティガンだってあたし達からしてみたら十分よ!!!」

レイナとモウが言い争う中、エミリアが私に向かって声を上げた。

「え? インフェルニティってさっきの……まさかアンタの言っ  
てたインフェルニティを持ち出した犯人って……」

エミリアが問いかけると私も頷く。そう……インフェルニティは  
ウオザールブルグ動乱の際、アスカが持ち出したカードだ。そしてカ  
ールが星屑の竜を手にして無意味な戦いを行った。

だからこそアスカ以外の人間がインフェルニティカードを持つこ  
と自体が異常なのだ。しかも聞いた事の無いカードまで引っさげて

……

「ちい……!!! テメエも満足使いかよ!!! ハーモニカ吹きな  
がら登場したり全弾発射といい不満足先生気取りかよ、ええ!?!」

「満足……ね、今の俺には遠い言葉だな。ああ、まだお前のバト  
ルフェイズだがどうする?」

「満足ガーディアン of の効果持ち相手じゃ意味ねえだろが……俺は

ココでターンエンドさせてもらっぜ」

その言葉と同時に今度はアスカが動こうとする。しかし先の戦術に疑問が残る。既にアスカの場にはサイクロンが伏せられていたのなら最も効果的なタイミングはインフェルニティガンを発動させた時しかない。

そこで発動させておけばデストロイヤーやビートルを復活させる事は出来ず、ただただ相手の場にネクロマンサーが残り、特殊召喚できるモンスターも1体だけだった。

ましてやインフェルニティは本来アスカしか所有していないカードであり、インフェルニティガンの効果も知ってないとおかしい。それをしなかったという事は……考えられる事態は1つしかない。

「飛鳥……アンタ、まさかさっきのインフェルニティガンってカード……」

私の代わりにレイナが質問する。そしてアスカは淡々と言葉を紡いだ。

「ああ。俺のデッキにそんなカードは入っちゃいねえし存在すら知らねえ」

やはりそうか……！！ アスカのデッキにインフェルニティガンは無い。だからこそサイクロンを発動させなかった……！！

しかしその事を知った奴はアスカを侮蔑するような声を上げた。

「はあ！？ アンタ、満足使いなのにガン入れてないわけ？ そんな常識でしょ、じょ・う・し・き！！ ガンの入ってない満足デッキなんざ福神漬けの無いカレーみたいなもんですう！！」

「……さっきも言ったよな？ たかがデュエル、勝てばいいだ

る』って」

その言葉に対してモウは額に青筋を浮かべながらアスカに向かつて吐き捨てる。

「へえ……俺に勝てる気にいるんだあ……ガンの無い満足デツキで？」

挑発と言う行動に対してもアスカは微動だにしない。更にあるう事かアスカはモウを無視して私達3人に向かって声を上げてきた。

「ギユス、俺の言葉が気に入らねえんなら今からでも俺と闘るか……一族や三騎士の名を汚した俺を倒す絶好のチャンスだしな」

私に対して淡々と決闘を誘うアスカ。私が答えようとする間もなくレイナに視線を向けた。

「ああレイナ、お前達からカールを奪った俺を憎む動機はあるんだからお前でもいいぜ」

そして最後に彼女から離れようとしてもしないレイナに眼を向け、今までと比べて感情が若干籠った声で呟く。

「それともレイナ……俺達との因縁を自分の手で決着つけるか？」

その仕草を見て私は思わず足を後ろに下げた。アスカの眼に今のデュエルは入っていない。ただただカードを捲り、伏せ、指示を出し、伏せたものを翻す。それだけしかしていない。

先程のターンで除外されたのが、インフェルニティ・ファントムで無かったならあいつは負けていたのだ。そのことに関する恐怖や

安堵も感じられなかった。

更にその眼はかつてのような野心に溢れた光は無く、闇よりも深い虚無しかない。しかしない者扱いされたモウは痼癢を起こしたかのように声を荒げる。

「テメエ、何俺を無視してやがる！！ さつさとデュエルを続けるおー！！」

「……そうだったな。わかったよ、俺のターン、ドロー……」

そう言っアスカがカードを1枚引く。そして手にしたカードを晒した。

「俺が引いたのは……インフェルニティ・デーモン。よってこのカードを特殊召喚する」

その声を合図に角の生えた山羊の頭部を持った悪魔……インフェルニティ・デーモンが姿を現す。

「このカードがハンドレス状態の時に特殊召喚された場合、俺はデッキからインフェルニティの名が付いたカードを1枚手札に加える事が出来る……俺はインフェルニティ・ネクロマンサーを手札に加え、そいつを召喚する」

先程モウの場に召喚された外套を纏った骸骨が姿を現し、即座に守りの体制に入る。

「インフェルニティ・ネクロマンサーは召喚された時、即座に守備表示になる。ネクロマンサーの効果で俺は墓地に存在するインフェルニティ・ビートルを特殊召喚する……蘇えれ、インフェルニティ・リバイバル」



アスカの言葉を合図に魔法陣が描かれてインフェルニティ・ビートルが姿を現す。更に続けて指を弾いて言葉を続けた。

「更にインフェルニティ・ビートルの効果でコイツをリリースし、デッキに眠る同名モンスターを2体特殊召喚する」

先程のモウと同じようにアスカの場にインフェルニティ・ビートルが分裂して2体出現した。

「テメエも、シンクロする気が！？ 止めとけ止めとけ！！ トリシュ召喚しようにも持つて無さそうだもんなあ！！」

「レベル4のインフェルニティ・デーモンにレベル2のインフェルニティ・ビートルをチューニング」

モウの言葉を無視して祝詞を紡ぐアスカの周囲に4つの黒い星と2つの黒い輪が展開され、星が輪の中を潜る。

「冥府の骸折り重なる時、死肉貪る邪なる虎が姿を見せる。舞い降りる闇よ……シンクロ召喚」

その言葉と同時にいつの間にか死人の山が出現する。そしてそこから顔の半分が腐り堕ちた黒い虎が姿を現した。

「全てを喰らい飲み干せ、インフェルニティ・ヘル・タイガー」

インフェルニティ・ヘル・タイガー（オリジナルカード）

シンクロ・効果モンスター

星6 / 闇属性 / 獣族 / 攻2400 / 守1900

闇属性チューナー + チューナー以外のモンスター1体以上

このカードがシンクロ召喚による特殊召喚に成功した時、自分の手札が0枚の場合、自分のデッキの上から1枚墓地へ送る事で

相手フィールド上のカード1枚を除外することが出来る。

「またオリカかよ……イカサマデュエルしてんじゃねえ!!」

「意味が分からんな。このカードも俺がコイツを手にしたときから存在していた……俺が作ったわけじゃねえんだがな……それとコイツの効果を発動させてもらうぜ」

その瞬間虎の頭部がポトリと落ち、そして頭部が一気にトリシューラへ襲い掛かる!!

「インフェルニティ・ヘル・タイガーがシンクロ召喚に成功し、俺の手札が存在しない場合……相手フィールド上のカードを1枚除外することが出来る」

「なっ!?!」

「喜べよヘル・タイガー、エサは紛い物とは言え伝説に謳われる氷結界の龍だ……食い尽くせ、インフェルニティ・ヘル・バイト」

次の刹那、虎の頭部がトリシューラの上体部分を飲み込み……首が腐りきったためか液状となって残った下半身を飲み込む。地面に完全に落ちきった時には氷結界の龍の姿は影も形も存在しなかった。

「え……俺の、トリシューラが……」

驚愕する男を尻目にアスカが声を上げて指示を下した。

「この効果を使用したとき、俺はデッキトップのカードを墓地へ落す。続けてインフェルニティ・ヘル・タイガーでデストロイヤーを攻撃、ヘル・クロー・スラッシュ」

首無しとなった黒虎がインフェルニティ・デストロイヤーをその爪で挟り取る。そして動いた時に飛び散った腐肉に触れてしまったデストロイヤーは腐り落ちていき、そして液状になって消えた。

毛飛漢

LP：7600 7500

「……こいつにするか。続けてレベル6のインフェルニティ・ヘル・タイガーにレベル2のインフェルニティ・ビートルをチューニング」

最早用無しといわんばかりにシンクロ召喚したヘル・タイガーをシンクロ素材にし、更なるモンスターを呼び出すと言うのか……

インフェルニティ・ヘル・タイガーが6つの黒い星に、ビートルが先程と同じように輪を描く。

「冥府の魂彷徨う時、亡霊喰らいし死の竜が蘇える。舞い降りろ闇よ……シンクロ召喚」

続けてアスカが呼び出したのは男の場に残されたカードと同じ名と姿を持つ無限獄の死竜……濁った紫色の雲らしき物が混ざり合って1体の竜を呼び出した。

「全てを焼き尽くせ、インフェルニティ・デス・ドラゴン」

同じ攻撃力と名を持つインフェルニティ・デス・ドラゴン……だがアスカの方が何故か大きく見える。前々からアスカはハンドレス系のカードを愛用していたが、インフェルニティを手にしたときか

ら水を得た魚のように強くなつて来ている……！！

「てめえ、まさか俺のデス・ドラゴンを残したのは……！」

「多分お前が考えてる仮説は正しいな。俺はコイツの効果でお前のインフェルニティ・デス・ドラゴンを破壊する……インフェルニティ・デス・ブレス」

その声を合図にインフェルニティ・デス・ドラゴンの口から紫色の奔流が飛び出し、もう1体のインフェルニティ・デス・ドラゴンを飲み込む。それが消えた後には何も残つてない……

毛飛漢

L：7500 6000

「あ、ああ……」

瞬く間に形勢は逆転される。先程まで存在を圧倒していた3体のモンスターは僅か2体の腐虎と死竜で駆逐された。その絶望は計り知れないものだろう。

しかしアスカは落胆したかのような表情を見せ溜息をつく。まるで期待はずれだったかのように。

「まあ、これで俺のターンは終わりだ……お前のターンだ」

そしてモウはデッキからカードを1枚引く。先のターンと違って覇気が無く、大げさな動作をしている素振りも無い。しかしそれでも手にしたカードを突きつけ、声高らかに叫んだ。

「インフェルニティ・ネクロマンサーを召喚……ネクロマンサーの効果で俺は墓地のインフェルニティ・デス・ドラゴンを」

「それに対して墓地のインフェルニティ・グールの効果を発動。インフェルニティモンスターがフィールド上に存在しかつ手札が無い場合、俺は墓地のコイツを除外して相手の墓地からの特殊召喚を無効にして破壊する」

インフェルニティ・グール（オリジナルカード）

効果モンスター

星1 / 闇属性 / アンデット族 / 攻 0 / 守 0

自分フィールド上に「インフェルニティ」と名のついた

モンスターが表側表示で存在し、

自分の手札が0枚の場合に発動する事ができる。

自分の墓地に存在するこのカードを除外する事で

相手の墓地からの特殊召喚を無効にし破壊する。

地面に描かれた魔法陣から姿を現した死竜も突如出現した焼け爛れた肌を持った死者の群れに足を掴まされる。そして死者も死竜も地面に吸い込まれて消えていった。

「……………なんだよ…………… オリカオリカオリカ！！ オリカばつかのデツキに敵う訳ねえだろが、このイカサマ野郎！！ 卑怯だ！！ 俺だってテメエのカードを持ってりゃ勝負は分からなかったはずだ！！ 正々堂々勝負しろよお！！」

地団駄を踏み癩癩を起こして叫ぶモウに対してもアスカは表情を変えようとはしない。そしてアスカはこのデュエルの最後になるであろう言葉を紡いだ。

「ファイナルターン、ドロー」

そして先程引いたカードをモンスターゾーンに叩きつける。

「インフェルニティ・ナイトを召喚する」

それがアスカの勝利が明らかになった瞬間でもあった。

インフェルニティ・ナイト

効果モンスター

星3 / 闇属性 / 悪魔族 / 攻1400 / 守 400

フィールド上に存在するこのカードが破壊され墓地へ送られた時、手札を2枚捨てる事でこのカードを墓地から特殊召喚する。

姿を現したのは明らかに他のインフェルニティとは違う意匠のインフェルニティモンスターだ。短い剣を持ち、黒を主にした騎士と言うより兵と言った方が相応しい姿を持つ姿にモウは大声で見苦しい叫びを上げた。

「ちくしょう!! ちくしょう!! ちくしょう!! ちくしょう!! ちくしょう!!」

「更にインフェルニティ・ネクロマンサーの効果でインフェルニティ・デストロイヤーを蘇生する」

姿を現すは強大なる悪鬼……ビートル同様、全弾発射で墓地へ送られたカードか。相手の墓地にネクロ・ガードナーは存在せず、手札も無いためゴーズやバトルフェーダーもありえない。どのような行動を取ってもアスカの勝ち揺るがない……後はどう行動するかだ。

「……まずはインフェルニティ・デストロイヤーでインフェルニティ・ネクロマンサーを攻撃する。インフェルノ・フィスト」

その声を合図にインフェルニティ・デストロイヤーがネクロマン

サーを貫き破壊する。

「デストロイヤーの効果発動。手札が無い状態でこのカードが戦闘で相手を破壊した時、相手に1600ポイントのダメージを与える事が出来る。インフェルニティ・バーン」

その瞬間、インフェルニティ・デストロイヤーの胸部から熱線が放たれモウの右手を吹き飛ばした。

「ぐあああああああ!!」

毛飛漢

LP：6000 4400

「続けてインフェルニティ・デス・ドラゴンでダイレクトアタック、デス・ファイア・ブラスト」

死竜の口から紫色の吐息が放たれ、地面に着弾してモウは大きく吹き飛ばされる。

「ぎゃあああああ!!」

毛飛漢

LP：4400 1400

「止めだ。インフェルニティ・ナイトでダイレクトアタック」

上空へ吹き飛ばされたモウに飛び掛るインフェルニティ・ナイト。叫び声を上げるモウを見据え、アスカはポツリと呟いた。

「墮落しろ……無限獄へ……インフェルニティ・エッジ」

その刃は無常にもモウの心臓を貫き、モウは頭から地面に激突した

毛飛漢

LP：14000

……終わってみればアスカの圧勝だった。受けたダメージは最初のダイレクトアタックのみ。しかしそれでもアスカに運があったのは否めない。

天運こそデュエリストにとって最も重用されるもの。才能も努力も天運の前にはただただ平伏すのみ。

アスカはデュエルトランサーを収納し、デッキをナノトランスさせる。そして……

「あ、飛鳥おにいちゃんだ……!!」

いつの間にか泣き止んだリイナがレイナから離れ、アスカの方に向かう。それを見たアスカは今度こそ驚愕の表情を浮かべた。

「リイ、ナ……?」

アスカにとって彼女の変貌は2回目とは言え私ですら啞然となったほどだ、当事者でもあった彼はその比ではない。泣きつかれたとは言え、屈託の無い笑顔と明るい声で彼女はアスカに近づこうとする。

「ひさしぶり飛鳥おにいちゃん!! きょうはなにであそぶの?」

「……!!」



そしてアスカは先のデュエルでは決して見せなかつた怯えた表情を浮かべ、思わず私達から逃げるように走り去っていく。リイナはそれを呆然とした顔で眺めたがすぐに泣きそうな顔で声を上げる。

「ねえおねえちゃん……飛鳥おにいちゃん、どうしたの……？」  
リイナ、なにかわるいことでもやったの……？」

涙がポタポタと流れ落ちるリイナに対して私達は何も答えることが出来ない。しかし、その一方で再び後ろの方から叫び声が響き渡った。

「ちよつと、何なのよ!？」

「何なのも何も、行くしかないな……お前達は好きにしろ」

「分かったわ……それじゃ行くわよ、リイナ!！」

その声を合図に私達は叫び声をした方へ、レイナ達はアスカが逃げた方へ走り始める。そして一番広い空間に出ると、そこには先程の男が何人かの優男達と戦っているのが見えた。私達は燃え移つてない草陰に身を隠しその様子を見る。

「ふん!！」

腕を振るうと姿を現すのは無数の刃に銃。男はそれを手にして男達に飛び掛り、次々と殲滅していく。そして最後の1人を撃つた時、男が地面に転がっていた物を拾い上げる。それは赤いノートのようなものだつた。

「……愚かだな。まあいい、過程は違えど我が手に収まつたか……  
……いつまで呆けている、貴様達に用は無い……いずこなりとも消え

うせる」

今もなお呆然と立っている人間達に向かって呼びかけると、彼らは緩慢な動作でこの場から歩き出した。エミリアが赤いノートのよ  
うな物を見据えていると驚いたような声を上げた。

「あああああ！！ アイツ！！」

私がエミリアが指差した方に視線を向けると、こちらに向かって歩いてくる男の姿があった。その男の種族はビーストで、年齢は40代後半から50代前半……そしてそれは今回の任務の検索対象……！！！！

「ワレリー＝ココフ……！！」

搜索の対象が思わぬところで見つかったためか、私達は呆然とした表情でワレリーを見据え、思わず彼の身を取り押さえ、再び草陰に隠れようとした。

「お前達……ここで何をしている？ カーシュ族では無いようだが……」

しかし騒いでいた影響もあつてか見つかってしまい、私達は細剣とロッドを手にして前に出る。そしてフードを被った男は淡々とこちらを見据えていただけだ。

「それはこっちの台詞！！ こんな酷い事をして……コレ全部あなた達がやったの!?」

「……私とあのようなクズどもと一緒にしては困るな。それとも、脆弱な力で私と刃を交えるか？ それとも……」

男は私を見据え、底冷えがするような声で言い放った。

「そこのお前……私と決闘の儀を行うか？　それでもいいんだぞ？」

決闘の儀……ミカが言っていたデュエルモンスターの原型にもなった儀式の事……それを知っているという事はこの男は旧文明人か！？

「……む」

その瞬間、男は視線を横にずらす。そこに先程撃たれた1人の優男がいた。その表情は醜く歪み、牙を向けて叫び声を上げる。

「……ふん、生きていたか……」

「テムエ……調子に乗るんじゃないぞ！！　どうせテムエは負ける側の作り物じゃねえか！！　プレイヤー様に逆らうんじゃない！！」

男もまた無数の刃と銃を持って襲い掛かる。しかし男は淡々と声を紡ぎ手にしたカードでいじり遊ぶ。

「まあいい。コレを見ても同じ事が言えるか……私は幻影王ハイド・ライドを召喚する。続けて灰燼王アッシュ・ガッシュを召喚、そして紅蓮王フレイム・クライムを召喚する」

男の場には騎士の姿をしたモンスターと、刃を手にした灰で出来た悪魔と炎に身を包んだ悪魔、3体のモンスターが姿を現し、そして男は声高らかに宣言する。

「私はレベル4の灰燼王アッシュ・ガッシュとレベル3の紅蓮王  
フレイム・クライムにレベル3の幻影王ハイド・ライドをチューニ  
ング……！！！」

そして7つの金色の星と3つの輪が姿を現し、男は声高らかに声  
を上げる。

「絶対なる支配者、今ココに降臨する！！ 万物を司る太陽に挑  
む愚か者に裁きを下せ！！」

そして姿を現すのは……黒い、太陽……？ 太陽は、あそこまで  
黒いものなのか……？ 己以外を焼きつくさんとするぐらいに……  
！！

「いでよ、この私自身……」

男が腕を広げ、絶対なる支配者の降臨を宣言した。

「太陽王！！ カムハーン！！」

黒い太陽…… 奴のエースモンスター『太陽王カムハーン』から放たれた光が私達を飲み込み、燃え盛る炎もろとも男の身体を蒸発させた。エミリアとワレリーを庇った私もまた、吹き飛ばされ近くの大樹に身を打ち付ける。

「ぐ……!!」

「しまったな…… 奴の身体を粉微塵にするつもりは無かったのだが…… まあいい。次は…… お前達か？」

そう言っつて銃口とカムハーンをエミリアの方へ向ける。恐らく奴は本気でエミリアを殺そうとしている……!!

「やだ…… やだあ…… イヤアアアアア!!」

次の瞬間、エミリアの体から金色の奔流が吹き荒れ、彼女の中にいたミカが姿を現す。

「……この輝き…… 私が忘れるはずも無い…… 貴様が…… 何と言う  
う皮肉よな……」

『その力…… まさかアナタは!! 何故アナタがココに!?!』

ミカが驚愕の表情を浮かべるが、即座に彼女も自分の持ちうる力を使って白い太陽を出現させ、カムハーンにぶつけて対消滅させる。

「ふん、『業火獣』『激流魔』『風塵鬼』を喰らってもまだこの程度か……しかし喰らうべき力は残り2つ……」

「待ちなさい……アナタは何を……!!」

「……ああ、私はグラールがどうなるうと知った事ではない。造られた存在にくれてやっても構わんが、私の邪魔だけはするなよ？ 貴様にとっても喜ばしいのだから」

その言葉を残し、男はあり得ないほどの脚力で跳躍し姿を消した。それで最後、私もまた意識を失い、その場に倒れこんだ。

「死ねや豆粒ドチビいい!!」

「たく、なんだってんだ!? 船までたどり着けるかどうかってところで得体の知れねえ連中に追われるなんざどうかしてるぜ!!」

「喰らいやがれ!!」

そう言って手にしたハンドガンで撃つてもビクともしねえ。ナノプラストもとづくに使っちまったから洒落にならねえ!!

「そのプリン害兇とテメエぶつ殺して鬱憤晴らすぜ、何だよあの

チートフハーン！！」

叫びながら手を合わせそれを地面につけて土から出来た槍を俺の足目掛けて放ちやがる！！ やべえ、今で足をやられちまった！！

「トニオ！！」

「早く逃げろリイナ！！ コイツ洒落にならねえ！！」

撃つても死なない、手を合わせて地面に手を置いただけであらゆるものを造り上げるってどんな能力だ！！ こいつらに比べたらSEEDが可愛く思えちまうじゃねえか！！

「あばよクソガキ！！」

そう言つて槍で突き刺そうとした瞬間、草むらから1人の女が姿を現して男を真横から蹴りつけた。

「ぐあっ！！」

そして即座に指を弾くと空からデケエ鳥の化け物が姿を現す……  
つておい、あの女つてまさか最近有名なVanguardのボーカリスト『MISA』じゃねえか！！

「そいつに乗りな。何だかこいつらのような連中が彷徨ってる森よりこつちの方が安全さ」

しかたねえか……俺達も乗せてもらうつきゃねえ……一応コイツは応急処置は済ませたから速いスピードじゃなきゃ大丈夫だけだよ。

「後、コイツを船に運んでからでいいが、カーシュ族の集落の方

へ行ってくれねえか？ あそこマジでやばいんだ……」

「……だったらあんたらの船はリモートで操作してくるんだね。あたしもカーシュ族の集落には用があるからな」

M I S S Aの言葉を聞き、俺達は一気にカーシュ族の村にまで移動する羽目になっちまった。そこで見たのは……

「村が……燃えてる……誰がこんな事を……」

リイナの言うように燃え盛ってる集落だったものがそこにあつた。更に突然鳥の化け物が奇声を上げて喚きだす。どうなってんだと思つて飼い主の女に聞いてみたら、そいつは頭上を見上げて唾然となつていた。

「黒い……太陽？ まずい、今すぐ急降下してくれ！！ あんた達、そいつ抑えてなよ！！」

「何を言つて……うわあっ！！」

一気にジェットコースターのように下ってから黒い光が辺りを包み込んだ。そして急いで集落にたどり着いた俺達が見たのは横たわつてるエミリアとギユスターヴに顔もしらねえオッサンだった。

「おいおいおい！！ どうなつてんだよコリヤ！！ オイギユスターヴ、あの嬢ちゃんたちは何処行つた！！」

「ギユスターヴだつて……？ マジでやばい怪我してんな……一刻も早く治さなきゃ不味いぞ」

「エミリアの方は怪我無さそうだけど……うん、気を失つてるだけで命に別状は無いみたい」

だが次の瞬間、突然船が頭上を飛び交う。恐らくあの船はあいつ



らの船か……文化保護地区を荒しまくってテムエはトンスラってか……

「上等だ！！ あの馬鹿どもを1人残らず捕まえてやる！！」

そんな中、突然エミリアの通信機が鳴り出し髭面のオッサンの顔が出てきやがる。

『オイテムエら、無事か！？ さつきからニュースでクロウドツグ地方がヤベ工事なってるって話だぞ！！ ワレリー捕まえたんならさつきと戻って来い！！』

「るっさいよアンタ！！ 通信なんだから喚かなくても聞こえるつての！！」

M I S S Aが怒鳴り声を上げるとオッサンも目つきを鋭くさせる。

『その言葉そっくりそのままあなたに返す……って、まさか人気芸能人のアンタが出てくるたあな……で、後ろの2人は誰だよ？』

「偶々一緒に行動していたフリーの傭兵だよ。エミリアと男性ビーストの怪我は軽いみたいだけど、ギユスターヴの方は大怪我してるから病院に運ぶけどいいかい？」

『怪我だと……あのバカ！！ それに男性ビーストって……おいおい、コイツワレリーじゃねえか！！ よし、その病院教える。俺も飛んできてやる』

それを最後に通信も途切れ、トニオが溜息をつく。

「近くに病院あったかな……俺はあのバカどもを捕まえてやるぜ、落とし前はつけさせねえとなー！！」

「手配はあたしの方がやっつくよ。まさかプロモ撮ろうとしてた

らこんな目に遭うなんてね……プロデューサーの方もあたしが話をつけておくさ」

「それじゃ頼んだよ、あたしもMISAと一緒に残ってるからさ」

それを最後に俺は漸く来た船に乗って奴らを捕まえる作業に出た。覚悟しやがれよあのバカども！！

## 燃える集落（後書き）

…… やつちまったぜコンチクショウ……  
まさかのカムハーン早期登場……

前々から漫画版の5D・sを見て暖めていた 王と言うジャックの使用カードをネタにする日が来るとは思いもしなかった。

ちなみにフハーンのデッキの推移  
代行者の対になるオリカ作るお！！ 舞台グラールだからアウト、  
同じ理由でプラネットシリーズもアウト  
シズルの日本趣味で六武デッキにするお！！ 当時大幅クロスしていた影響もあり、クロス先のキャラが使用してたからアウト

王を使う漫画版ジャックの傲慢ぶりがカムハーンに言わせても  
不自然じゃ無さそう……

じゃあ太陽王カムハーンをカードにしちまえ。 ついでに 王デッキにしちまえ

…… 一瞬で悩みが氷解した瞬間だった。

後ミラーマッチも一回やってみたかった。 今回の自分のデッキがモチーフ。

今回のカマセ犬であるモヒカンキャラの毛飛漢も漫画5D・sの鬼柳さんが最初に戦った相手であるアフロキャラの安風狼のオマージュです。

そっぴや今回登場した飛鳥のデッキにダークモンスターは必要でし

よ  
う  
か？

A・それで満足するしかないじゃないか……

B・こんなじゃ満足できねえぜ……

ではまた次回！！

## エミリアの決意（前書き）

今回の章で第2章本編終幕です。

舞台が原作とは違いますがその点を踏まえてどうぞ。

ギユス視点とエミリア視点の二種類あります。

## エミリアの決意

病院に運ばれ早3日……あれほど騒がせたクロウドッグ地方で起きた火災のニュースも鳴りを潜め、再び亜空間研究やココ最近話題になっているヒトの突然変異のニュースが飛び交うようになった。

私はあの後パルムの総合病院に運ばれ、集中的な治療を受け今に至る。エミリアとワレリーは入院しないで済んだが、私は大事をとって一週間の間入院を取ることにしたのだ。あの少年も相当傷が深く、集中治療室にいる状態だ。

先日MAW社の私設特務部隊のメンバーが病室に集まり、様々な報告を残してくれた。炎魔竜を手に入れた海底レリクスの塞がれた道が漸く開通した事、また新しい遊戯皇のアニメが製作される事、玉石混合様々な情報が手に入った。

「よお。生きてたかギユス」

そう言ってやって来たのはクラウチだった。流石に病院で酒を飲むつもりは無いのかその様子は普段見ているときよりも健康そうに見えた。

「生きてるぞ……そもそも今回の大怪我はエミリアとワレリーを庇って出来た傷と、簡単な報告書に記した同行者とエミリアを誘拐しようとした傭兵崩れに負わされた傷が原因だ、死ぬほどではない」

尤も、一回死んだがな……それだけは信じてもらえないのが関の山なので私の心だけに秘めておく。

「そうかい。まあ、俺としてもMAW社代表の弟を死なせて矢面に立たされたくねえから死なれちゃ困るんだよ。それにお前さんに

や期待してるんだぜ？」

「……………意外だな。そう思ってたのか？」

「何せテムエがいればエミリアの子守やお小言からも解放されるし、俺も気分よく酒が飲める。いい事尽くめって奴さ」

最後の言葉には呆れたが、気のせいだろうか……………その顔からは安堵と自嘲の笑みすら見て取れる。しかし私としてはそれどころではない。

「……………先のカーシユ族の少年についてはどうなる？」

流石にその話題になると彼も真剣な表情を浮かべ、腕を組んで声を上げる。

「テムエらの話じゃそいつ、何者かに追われてるって話だったな……………当分ココに置いておくが、傷が治りそうになってきたらクラックト6に運ぶぜ」

流石にココに奴らが襲撃をかけないとは思うが……………一応病院だからな、騒ぎの元は離しておくに越した事は無い。

「それと、ワレリーの方にも取り立てついでにチツとばかり話を聞いておいた。流石に移動のログが残ってたから無罪放免とは行かなかったがな」

「……………結果は？」

事情が事情なので私も息を飲む。しばらくの沈黙の後、クラウチが真剣な表情を浮かべ重い声を上げた。

「めんどくせえから結論だけ話すぜ……………ログに残ってたとは言え

ワレリーはクロウドッグ地方に行ったと言う記憶が無いみたいだ。で、気付いたらお前さんに下敷きにされて集落が吹き飛んでた、だとよ」

あの黒い太陽も夢ではなかったということか……あの異常者とい、黒い太陽といい、行方をくらませていたアスカといい問題は山積みだな……

「……嘘を言ってる可能性は？」

「奴とは長い付き合いだ、嘘は吐いてねえ……他の連中も似たような感覚だったから、洗脳を受けたんじゃないかって専門家の話だ。後、妙な事も起きてるみたいだって話だぜ……」

あれほどの洗脳を異常者が……？ 『太陽王カムハーン』の召喚者が洗脳したのならもっと上手くするはずだし、証拠も残らないようにするはず。大体あれを率いていたのは誰だったのだ？ それに妙なことは一体……

「カーシュ族の集落付近に、頭が潰されたりバラバラになった死体が散らばってた。服からしてカーシュ族じゃねえのは確定だ」

クラウチはまるで狐に化かされたような表情をして声を上げる。

「今回逮捕された連中は全員船に乗って逃亡しようとした。事前に抑えられていたワレリーやテムエラの船を除いた船が一齐に動いたんだ」

それと一体どういう関係が……！！ 待て……全員船に乗って逃亡しようとしていて、動かなかったのは私達やリマ夫妻、レイナとレイナにワレリーの船だけ……それが全員逮捕されたとなると……



「数が……合わない!？」

そう。先の阿呆兄弟とモウ・ヒカンの一味を含めてクロウドッグ地方にいた人間が多い。しかも全員が全員カーシユ族ではないのだ。更にカムハーンを操っていた男が倒した者の数を含めると異常なことになる。

「ああ。綺麗な死体から顔写真を撮って見せても知らねえの一点張りだ。そいつらは何人が逃亡しやがってな……どのように星間移動したのかも不明、目的も不明だ。その上戦闘能力がバカ高いし心臓撃つても死なねえ……あのクソ野郎と同じ武器を放ったり死なねえ奴もいたって話だ」

最後の方は憎しみすら込めた声で言い放つ。伸ばされた前髪から覗く眼は鋭く、まるで居合わせたら即座に殺すと言わんばかりの表情で、だ。

「……とは言え、俺としちゃ貸してたモンも回収できたし、それ以上特に言う事もねえ」

クラウドが普段のような碎けた口調に戻ったため、張り詰めていた空気が弛緩してしまった。この話はここまでだと言う事が……

「テメエが気にしていた同行者の嬢ちゃん達も無事だそうだぜ？  
太陽系警察の奴らが森を抜けていくそいつらを見かけたんだとよ」  
「一応親戚だったからな……安心した」

安堵の溜息を吐いてからアスカがどうなったか気になったが、間もなく最後に一言クラウドが言い放った。

「足手まといを抱えていた割にはいい仕事っぷりだと思っぜ。ま、これからも頑張ってくれよ」

「エミリアは足手まといではなかったな……少なくとも、暗号の解読では役に立ったぞ」

「へえそうかい。ま、身内びいきも程ほどにしとけよ?」

そう言つてこの場から去るクラウチ。退屈しのぎにテレビをつけ偶々映つた芸能関係のニュースを見てしばらくした時、再び病室の扉が開いた。

「生きてたみたいだねギユスターヴ。果物とか置いとくよ」

そう言つて姿を現すのは淡い紫色の髪をポニーテール状に纏め上げサングラスを着けたビーストの女性だった。彼女がサングラスを外すと私も小さく笑つた。

『さあ、今週のオリコンチャート!! 栄えある第1位は『MISA』を筆頭とした新進気鋭のロックバンドVanguardの『WILD FANG』だあああ!!』

「久しぶりと言つべきかな……ミサキ」

激しい曲調と曲が流れ出すと同時にかつて私やアスカと共に戦場を駆け抜けた異能者……『虹』の1人・ミサキ。オラクルの名を紡ぐ。彼女の顔は今テレビに映っている女性ポーカー『MISA』と瓜二つでもあった。

「その後ガーディアンズを抜けたお前が芸能界に入っていたとはな……こういったニュースはあまり聞かないし、音楽もクラシック

しか聴いてなかったからな……」

「イルミナスを潰した後はあたし達も退屈だったしね。路上で歌を歌ってたらスカウトされたんだよ」

彼女はやれやれと腕を振る。まあ、平和になった以上彼女のような生き方もまた1つの答えなのだろう。

「新作プロモの撮影中に相棒が『カーシユ族の集落が襲われてます』って言い出してね……ま、流石に撮影は中止だったし皆で協力して救助作業したり、あのドクスどもを捕まえたりしてたんだ」

「すまないな。手間をかけた」

「あの黒い太陽にやられたんじゃ仕方ないさ。それにアイツが生きてたなんてね……」

ミサキの言葉に私も真剣な表情で頷く。私もまさかアスカが生きていたとは思っても見なかった。

そうなるとカールもグラールの何処かで生きていると言う事になるのか？ それにしてはアスカの様子がまるで変だったな……

アイツの肌は生気を失っていたし、右目も白目が黒く染まっていた。ココ最近のヒトに起こる突然変異のように。

しかしそれとは関係ない気がしてしょうがないのだ。大体奴は肌が変色したり片目が人のものでなくなっただ程度で落ち込むような人間ではない。

「まあ、あいつの話は置いておいてもいいだろ。それと最近変な奴らが増えてるみたいだね……あたしも一回犯されそうになったよ」「そうだな……」

流石にその話題になると私も表情を真剣な物に変える。奴らの行動は一体なんなんだ？ それにあの力は一体……

「……そいつらも好き勝手やったりしてるし、警察やガーディアンズも手を焼いてるって話さ。逆にガーディアンズも質が低下してるって話も聞いたけど、レオンの話じゃそのバカの親戚みたいな奴が原因だとさ」

しかも聞いた話だとガーディアンズは『テンマ計画』だとかで人体実験やってるだとかコロニー内にSEEDを進入させて実験しようとしたとか好き勝手言い出す始末。そもそも名前からしてよくないなどと言う奴もいる具合だ。

「コイツはあたしの勘だが……何かやばい事でも起きてるんじゃないか？ それこそSEED事変と同じか……それ以上にな」

これは最早旧文明がどうの言ってる場合でも無さそうだ。資源枯渇はもちろん、デュエルモンスターの偽造問題に先の連中のようなトラブルなどグラールが抱える問題が増える始末だ。

「さて、そろそろ帰るとするよ。これからパルムの森でプロモの撮影し直しだからね」

「……態々時間を割いてもらってすまなかつたな」

私に対して彼女は気にするな、だったらMUSIC DISKの売り上げに貢献して返してくれと言って病室から出て行く。流石に窓から飛び降りたら騒ぎになるだろうから懸命な判断だったと言える。とは言えまた暇な時間が訪れたわけだが……

「よお、お互い生きてたみたいだな」

「大丈夫かい？」

第三の来訪者としてトニオと彼の妻であるリマ夫人がココに来た。

「2人とも、大丈夫だったか？ トニオは足をやられたと聞いたが……」

「気にすんなって。ま、障害が残らなかつただけでも恩の字さ」

「まさかM I S Aとアンタが知り合いだったなんてね……世間って狭いもんだね。ひよっとして彼女も？」

先程の聞かれたのか、それともミサキが話したのかは分からないが……その問いに関しては肯定の答えを返しておく。

「そうかよ。ま、俺らにしてみりゃ関係ない話だな」

とは言え傭兵であるトニオにしてみたら異能などはどうでもいいもののだろう。

「それより、こいつを渡しておくぜ」

そう言つてトニオが1枚のカードを私に投げつける。手にしたのはパートナーカード……傭兵や軍関係者にとって名詞同然の代物だ。とは言え私は驚いた。彼らはフリーの傭兵だと言っていたのに、所属の欄が『リトルウイング』と書かれていたからである。

「カーシユ族の集落を襲つた奴らを捕まえるため、あちこち動き回つたり変な連中に『洗脳されてただけなんだ』とかほざいた奴らに追われたりしてる内にクラウチとバスクってキャストに会つてな」

洗脳されてただけ……？ その結果があのような様子だ。カーシユ族の前で同じことが言えるのかと憤りを感じていた時にリマ夫人が声を上

げた。

「そこでトニオとあの2人が意気投合しちゃってね……まあ、あたかも『元海賊』って経歴があったから、殆ど門前払いだったけどココじゃ実力があればオツケーだって話だしね」

「それにフリーのままじゃ自由に調査できない事もあったしな。リイナの事もあったしそのスカウトを受ける事にしたって訳だ……ぶっちゃけた話、今日からお仲間って訳だ……よろしく頼むぜ!!」  
「こちらこそよろしく頼む。コレが私のパートナーカードだ」

そう言っつて私のパートナーカードを出しておく。そんな中、リマ夫人が声を上げる。

「ところでエミリアはどうしたんだい？ 見舞いに来てないみたいだけど……」

「一回私がミスをしてしまった……頭に血が上ってしまったって敵を1匹、もとい1人殺してしまったからな……」

それ以来空気が悪い事になってしまった……そう言っつて私はこの話題を打ち切った。

「……そうか。ま、元気になったら顔出しぐらいはしておけよ」  
「善処しておく。解消案出されても文句言えない立場だがな……」

その言葉を最後にトニオたちも依頼があるとかで病室から去っていった。さて、先程芸能ニューースも終わった事で更に暇になったな

……

デッキ調整は暇になって痛みも失せてきた先日と炎魔竜主体のデッキに組み替えた。テスト用に組んでたバトルマニアを抜いて炎魔竜の効果に対して『効果を無効にして破壊する』類のカード対策の

対策もリストアップした。

後はレベル5〜6の上級モンスターでシンクロを阻害せずに特殊召喚が出来るカードだな……バイス・ドラゴン以外で何があったことやら……

「チエルシー……その……」

『ダメヨ、エミリア。話すナラキチンと話さないと後で絶対後悔するヨ〜』

あの声はチエルシーとエミリアか……何をもめている事やら……

「どうしたんだ2人とも、入るのなら入ってくれ」

『ホラエミリア、ギユスもそう言ってることダシ入りなさいナ〜』

私の声を合図に扉が開かれ、エミリアがチエルシーに背中を押されながら入ってくる。しかもご丁寧に扉まで閉める始末だ。

「あ……あの……」

そう言えばエミリアとこうして話し合うのは久しぶりだな……そう思いながら私は彼女の言葉の続きを待った。

あれから3日経って、今日始めてギユスターヴの見舞いに行く事になった。最近あたしが避けてるから見舞いに行っておっさんが言ってたし、バスクさんやチエルシーも心配そうだった。

あたしがアイツを避けるようになった理由は分かってる。クロウドッグ地方でのあのデュエルが原因だ。確かにギユスターヴって『現実的な傭兵』って感じもあるけど、それ以前に『1人のデュエリ



スト』でもあるんだって改めて思い知らされた。

ああ見えてデュエルモンスターズに関することは凄く純粹だし、レッド・デーモンズ・ドラゴンを始めてみた時のイツなんか本当にヒーローショーのヒーローの活躍を間近で見te感動してる子供の様な表情だった。

「なんて話せばいいんだろ……」

アイツが悪党じゃないって事は分かってるんだけど……どう話せばいいのかなあ……アイツがいる病室を前にしても、あたしは踏ん切りがつかなかった。

「チエルシー……その……」

一緒に来てくれない？ そう期待して声を掛けるけど、チエルシーはにこやかに笑って否定してきた。

『ダメヨ、エミリア。話すナラキチンと話さないと後で絶対後悔するヨ〜』

う……やっぱり否定されたか……流石に気まずいし……何言えばいいのか分からないし……

「どうしたんだ2人とも、入るのなら入ってくれ」

ギユスターヴの声が聞こえてくる。さっきまでの話が聞こえてたみたいだ。どうしたものかと考えてると……

『ホラエミリア、ギユスもそう言ってることダシ入りなさいナ〜』

いきなり扉を開け、背中を押しながらアイツの部屋に入れ込むチエルシー。しかもチエルシーは扉まで閉めると言う徹底振りだ。3日ぶりにギユスターヴと話そうとしても何を言えばいいのかわからないし、機嫌を損ねたらあれの二の舞になりそうだし……

「あ……あの……」

あたしかしばらく何を話そうか考えているとアイツの机の上にも帳みたいなのが置かれてあったから、それを見て私は声を上げた。

「あ、デツキ変えるんだ」

そう言うてからあたしは心の中で頭を抱えた。何でそうなるのと思ったからだ、大体どうでもいいし!!

「ああ、今まではエクスプロード・ウィング・ドラゴンやクリームゾン・ブレードを主体としたデツキだったが、炎魔竜……レッド・デーモンズ・ドラゴンを主体としたデツキにしようと考えたらな……」

その話だと特殊召喚主体のデツキにしようかトークン系のデツキにしようかって考えてるみたい。デツキも見たけど、あいつはリゾネーターって言うチューナーが殆どだったから種類に乏しくないかと提案もしてみる。

「そこは考えたんだが……デブリ・ドラゴンはフレベルが精々だし、召喚できるのもエクスプロードだけになってしまっただ……」

でも特殊召喚できるのがバイス・ドラゴンだけだとどうしても決

定力に乏しいし……

「あたしもデュエル詳しくないしな……」

そう考える一方で、あたしはふと気になったことを声に上げた。

「ねえ……あのカーシユ族の村で起きた事なんだけどさ……」

「……何だ？」

流石にギユスターヴの表情も真剣な物になる。まあ、あのアツシにタダシ、モヒカンにアスカの事もあつたしね……アスカ以外の連中には偽造の疑いもかかっているって話だし……アスカはギユスターヴと知り合いだつて事も聞いてる。

「あたし……あの黒服に殺されそうになつて……変なモンスターを召喚したんだよねえ……」

その言葉に対してギユスターヴは肯定の合図のように首を縦に動かす。

「そうだ。私も見ていたがお前がいきなりカムハーンを倒すために、白い太陽のようなモンスターを召喚させていたぞ」

「そうだよねえ……あの身体が勝手に動いた感じも、あたしがあれを召喚したつて言うのも夢じゃないんだよね……」

だけど現実にはフードに黒マントの男はいて、カーシユ族襲撃事件もあつて、村を襲った連中も死んだ奴だつている……全部が全部夢の分けないし……

「それに、このカード……」

そう言っであたしは一枚のカードを差し出す。そのカードは紛れも無く『あたし』があの時召喚した白い太陽のようなカードだった。

「名前が書かれてないな……」

「いつの間にか持ってたの。それにギユスターヴがカードを实体化させたって話……あれって海底レリクスであたしが見た夢と同じだし……本当にあれって夢だったのかな……まさか、現実……」  
あたしがそう言った瞬間だった。

『そうです、夢ではありません』

そんな声が聞こえた。ギユスターヴもその声に対して分かっていると聞いたげに軽く頷いたけど、それすら気にもなれなかった。

「うえっ!?!? だ、誰!?!?」

あたしのその言葉を聞くとギユスターヴが驚愕したような表情でこちらを見据えてくる。何か知ってるのと聞こうとしたけど、突然光り輝いてあたしの中から綺麗な女の人が幽体離脱するかのような姿を現した。

「ミカ……何故エミリアが眠ってもいないのに!?!?」

「ミカって……それ海底レリクスで……!!」

ギユスターヴの呟いた名前には聞き覚えがあった。海底レリクスで戦った男が言っていた女性の名前……

『エミリア……ようやく私の存在に気付いてくれたのですね……  
私はミカ。あなたの中に存在する旧文明の民……』

「あ、あなた……一体……あたしの中から出てきて……」

あたしが問いたただそうとした瞬間、急に頭の中に何かが流れ込んでくる……多分コレってミカってヒトの記憶……それだけじゃない、旧文明人が復活しようって言う計画が流れ込んでくる……その方法や動機までも……

「ミカ、お前は一体何を……!!」

『記憶の共有です……私の事は改めて説明するよりも、こうして伝えた方が早いので……』

嘘……なにこれ……こんな事が……人の中に何かが入ってきて、元々いた人を追い出して、何かがニタリと笑って……コレじゃまるで……

「コレって、言ってしまうえばあたし達の抹殺計画って事でしょ……?」

あたしが『復活計画』……身も蓋もない話を言えば『抹殺計画』について話すとミカって人も頷いてきた。

『肉体を器、精神を命と例えるならその通りになりますね……』

ミカがそう言う中、あたしはふとある事を思い出した。最初の日、ギユスターヴをマイルームに連れて行った時、あたしはアイツのベッドで寝て、眼がさめたらアイツは今にも倒れそうな位顔色が悪かった……

もし、ミカがその事をギユスターヴに話してて、アレが本当は現実だったって知ったんなら……

あの海底レリクスで……アイツが　のなら……

「ねえ……ギユスターヴ……アンタまさか……」

出来れば違うと言って欲しい。他の事が全て真実だとしても、あの事だけは夢の中での出来事だって呆れ果てながら言って欲しい。

「……」

ギユスターヴの顔は沈痛な表情……あからさまにあたしの願いを否定して、ただ黙って首を横に振った。

『……強引な伝達方法ですみません。心の整理がつくまで、私は姿を消します。落ち着いたら呼んでください』

ミカはそう言って姿を消すけど、あたしはもう立っていられなかった。

アレは全部夢じゃなくて現実だった事。海底レリクスでの出来事も、あの得体の知れない男との戦いも……

ギユスターヴが死んだって事も、全部現実

「……全部夢じゃなかった……アンタは、あたしを守って戦って、一度死んだんだ……」

「……」

ギユスターヴの表情も暗く沈んでいる。それともう一つ、思い出した事があった。

「……何かあったの？　あたしが昨日あなたの部屋で寝てから様子変だったじゃん」

「……いや、海底レリクスでの件について考えていただけだ」

「あれ夢じゃん……いつまでも夢の中の出来事を考えてたってしよつがないでしょ？」

あの時のあたしは夢の中の出来事だって心の中で笑ってた。でも、実際には現実でアイツはミカからその事を聞いていた……

「ホントあたしって最低な奴だ……戦うのも面倒なのは人任せ、人が悩んでる時にバカみたいに振舞ってさ……勝手に怯えたりしてホントわがままだけの最低な奴じゃん……」

ギユスターヴが犯した凶行なんて眼じゃないぐらいの最悪ぶりじゃん……むしろあたしの方が見限られる側じゃん……

「気にするな。そもそも私がお前でも同じような行動を取る事だ

って……」

「それでもあたしが気にするの！！　あたしはもう、自分の所為で人が死ぬのがもう、ヤだったのに……」

時計の針しか聞こえないぐらいに黙り込む。そしてあたしは意を決して顔を向けた。

「ギユスターヴ……あたし……こういう仕事は向いてないし戦うのも好きじゃない……」

「戦うのが好きな奴は戦闘狂か単なる阿呆ぐらいだ。戦うのが好きでは無いと言う事は恥じる事じゃない」

ギユスターヴの言ってる事は分かる……でも、それだけじゃダメなんだって今思い知った。あの時あたしもギユスターヴと一緒に戦えてたらって今は考えてる。

「うん。でも、それじゃダメなんだ……向いてなくても耐えるから……それにあのようなインチキ臭い力を持つてる奴が相手だからって怯える事は無いって教えてくれた……」

ちょうどあたしの手にはギユスターヴ達のような“力”がある。多分ギユスターヴ達やあの子の様な人間もいるって考えると特別な力じゃないって思う。

「エミリア……何を考えている？」

「ギユスターヴ……異能って誰でも使えたりするんでしょ？　そうじゃ無かったらあいつ等を『違法者』だなんて言わないもんね」

あたしの言葉にギユスターヴも息を飲む。心構えだけでも前に進まないダメだ、決意が変わらないうちにあたしは声を上げた。



「だから……迷惑を掛けるかもしれないけどお願い。あたしに戦い方とかデュエルとか教えてよ」

今度こそギユスターヴは沈黙し、そしてあたしの決意が強い事を知ると静かに頷いた。

## エミリアの決意（後書き）

第2章終幕とエミリアのデュエリスト化計画開始。

一応カムハーンがカード化しているのでミカのカもカード化させます。次回は幕間をやってビジフォンを更新させるだけかもしれませんが。後ビジフォンを使ってオリカの紹介もやっていこうかと思えます。ではまた次回。

ミカのカ、どのような名前にしようかな……多分ティの花がチューナーになりそうな気が……

## フィランディア・シティ『裏』観光案内(前書き)

今回はエミリアのデッキの選抜と異能者の設定の説明会です。  
デュエルは簡略化しているのでご了承ください。

## フィランディア・シティ『裏』観光案内

エミリアがデュエリストになりたいと言い出してから早4日……つまり私の退院当日だ。今私達が何をしているかと言つと……

ギユスターヴ

LP：4000

エミリア

LP：1900

デュエルをやっていた。机の上に存在する私の場にはクリムゾン・ブレードを中心としたモンスターたちが、エミリアの場には無情だが何も存在しない。

「ファイナルターン、ドロー」

私は手にしたカードを見もせずに、クリムゾン・ブレードに触れて前へ進むように動かす。

「クリムゾン・ブレードでダイレクトアタック」

その言葉を合図にエミリアが項垂れ自分の負けを行動で示した。

エミリア

LP：1900 0

「私の勝ちだ」

私がそう言ってデッキと私のカードを集め、エミリアも買ったデッキを回収する作業に移った。まあ、彼女のデッキはスターターデッキ……遊戯皇のアニメの年度の節目に販売される、既存のカードで構成されたデッキに若干の改造を施したデッキだ。

「うう……また負けた……」

仮にも私はMAW社の代表の弟だ。デュエルをやり始めた初心者……スターターデッキに若干の改造を行っただけのものに負けるほど耄碌していない。今回のデュエルでライフが初期値の半分なのも私が神の宣告を使って特殊召喚を封じた結果だ。

「これで大丈夫なのかな……何だか自信無くなりそう……」

「まあ、デュエルは基本的に負けて勝つたりするものだ。負けた事のない人間など、それこそアニメの中にしかないぞ」

最初にエミリアが入手していたミカのカムハーンを相殺した白い太陽を宿したカードはそのカード自体も召喚条件も光属性で統一されている以上それで統一した方がいいのだろうが……

「……ふむ」

私は若干考える。光属性と言う統一されたカテゴリーを有したモンスターで、容易く手に入る事が出来るのはエレキや電池メンなどだ。

しかしアスカならばともかく、あの阿呆どもはその事を知っている可能性もある。以前レイナが倒したタダシのナノトランサーから溢れさせてしまった偽造カードの海の中にエレキと電池メン系のカードがあったのだ。

そうなると出したところで策を看破され封殺される可能性もある。

それに奴の弟は私が出そうとしたカードを言い当てた事もあるのだ。そいつらが見たこともないカード、もしくは彼女が容易にそろえられるカテゴリー……そんなものがあるのか？

「……どうかしたの？」

「……ああ、どのようなカードでそろえた方がいいのか、考えたらキリが無くてな……」

ライトロードは裁きの龍を筆頭に必須カードが高価で制限指定を受けている。それにライトロードも見受けられたため知っているだろう。それにあのカードはシンクロモンスター、チューナーが墓地へ送られたら目も当てられない。

いっその事光属性を捨てて考えたらどうかと考えても、彼女に向いてなかったり好みに合わなければ豚に真珠、猫に小判……ニユーデイズに伝わる『コトワザ』の通りになってしまう。

まあ、どちらにせよフィランディア・シティに寄って様々な支度をせねばなるまい。その時に彼女にあったカードを手に入れようか……

「ああ、エミリア。今日で退院だが、一旦フィランディア・シティに寄るぞ。そこでお前の異能者登録をせねばならんからな」

「分かったけど……ギユスターヴたちが使うようなデュエルトランサーとかって何処で売ってるの？ 話聞いていると一品ものってイメージが強いんだけど……」

エミリアが沈んだ表情で言う。なるほど、確かにデュエルトランサーはかつてデュエルディスクが生まれる前に異能者たちによって生み出されたデュエル用の拡張ツールだ。

ナノトランサーに擬態させるための機能を持ち、更に一般人の目に触れさせないよう認識阻害のための装置をつけている。更に映像

を実体化させ攻撃などの衝撃を現実のものに変える『フィールシステム』を備えており文字通りの『処刑道具』として使用する。

先のデュエルで私が黒炎弾を避けた最大の理由もそこにある。フィールシステムもまたフィールド形成に必要なものであるため、ダメージが自分に跳ね返る事だつてあるのだ。

当然の事ながらS E E D事変後に造られた『デュエルディスク』は一般人用に調整し、フィールド形成もフィールシステムも排除しコストを跳ね上げる元凶になっていた擬態も除いた物だ。その所為で事故などの副作用も出たがV Rゲイザーを造った事によって解決する事になった。

閑話休題。

「だからこそフィランディア・シティへ向かうのだ」

「確かにM A W社のお膝元だけど……」

「デュエルトランサーの購入も異能者登録もフィランディアで行うからだ。そして……」

私は意を決してエミリアに向き直つてあることを伝えた。

「異能者と言うシステムを教えるためにな」

病院を出てその足でフィランディア・シティへと向かう。そして向かったのは以前バススクラと共に訪れたショッピングモールだった。

「あれ？ そっちに行くの？ MAW社やあそこにあるデパートじゃなくて？」

「……ああそつだ。デュエルトランサーも、カードのデータも私達が利用しているのはフィランディア・ショッピングモールに集まっているからな」

エミリアが驚愕の表情を浮かべ、啞然としている。以前副隊長が言った『フィランディア・ショッピングモールが寂れて大変な事になる』と言う最大の理由がココにあるからだ。

フィランディアにあるデパートの存在意義はココを寂れさせないようにするための措置であり、言うなれば『ショッピングモールのためにデパートがある』のである。

「まずはデュエルトランサーを入手するぞ」

そう言っつて私は足を進める。そんな中カードショップを通り過ぎた際、エミリアが声を上げる。

「おい、カード屋通り過ぎただけどー！！」

「デュエルトランサーはカードショップじゃないぞ。その三軒先だ」

そう言っつて目的地へ指を指すと、そこにあったのは服の看板が立てかけられたスタイルショップ……見るからにデュエルと関係無さそうな施設であった。

「え？」



呆然とするエミリアに呼びかけ私達は店内に入る。店内は布や服が多いものの客足が遠のいているためか人がまばらと言う有様だった。店長らしき太った中年の女性ヒューマンが私の服を見て驚いたような表情をする。

「おや……アンタかい。珍しい組み合わせだね……」

「海底レリクスで服が台無しになってしまったんだ。で、だ……」

右手の人差し指と中指を伸ばし、カウンターに載せてから裏返しまた元に戻す動作をする。それを見た店長は私の後ろにいたエミリアを見て納得したような表情をする。

「なるほど、ね……坊主、おチビちゃん連れてついてきな」

「え？」

そう言っただけ彼女は店の奥へと向かい、私達もそれに続く。店の奥へ向かうと机の上に置かれた箱があり、蓋を開けるとそこには様々なデザインのナノトランサーが姿を現した。

「おチビちゃん、どういったデザインがいいかい？」

デザイン性が高いものから無骨なものまで様々な種類が存在するナノトランサー……否、デュエルトランサーの基盤が存在していた。

「え？ コレって……」

「デュエルトランサーの基盤だ。尤も、コレだけでは『ナノトランサーへの擬態が可能なデュエルディスク』としての機能しか無いがな」

目を瞬かせるエミリアに対して私が補足を加える。更に店長が呆れながらぶっきらぼうに言った。

「あたしに出来んのはこの程度さね。後は他ん連中のお仕事さ」

エミリアがデュエルランサーとしばらくにらみ合い、意を決してあるものを指差す。それは翼を象ったデザインのものであった。

「……んじゃためしに起動してみな」

彼女の言葉に従ってエミリアが左腕に装着させ、そして意を決して肘を曲げて声を上げる。

「こっ、かな……デュエルランサー、起動……！」

その声を合図に彼女のデュエルランサーが動き出しプレートが展開され、基盤が口を開く。今の彼女は左腕から翼を生やした様な姿をしている。

「へえ、結構様になってんじゃないの」

「んじゃコレにする」

まあ、基本的にデュエルディスクもデュエルランサーも気に入ったデザインのものを使うからな……

「店長、邪魔をしたな。コイツは代金だ」

そう言って私は代金のメセタを彼女に渡す。そして彼女も大らかに笑って手を振った。

「まいどあり、こん次はデータ登録だっけね？ あのカソガキにヨロシクな！！」

「次の店ではデータと基本ソフトをインストールをするぞ……ああ見えた、あそこだ」

そう言って指差した先はネットカフェだ。またもやデュエルとは関係ない場所にエミリアも頭を抑える。

「……そもそも何で何軒もはしごしないといけない訳？ 大きいところでパパツと済ませられないの？」

彼女の尤もな指摘に対して私も言葉を詰まらせる。まあ、気持ちには分からなくてもコレには深いわけがあるんだが……

「まあ、大企業の権威が失墜して中小企業が目立ち始めた、とも言うておこうか。後ココは店長とデータ入力係以外は異能者のことを知らないから話さないように」

「ん。了解つと」

会話もそこそこにしておいてネットカフェの中に入る。男性の店員に店長を呼んできてくれとチップを渡して頼み込み、しばらくす

るところいった店より、図書館の司書の方が似合いそうな眼鏡をかけた女性が出てくる。

「いらっしやいませ。どのようなお部屋を希望ですか？」

彼女の問いに対して私は先ほどと同じように2本指を伸ばして裏返してまた戻す動作をする。それを見た彼女は一瞬だけ目を細めるとすぐに声を上げて言った。

「承りました、では3階でよろしいですね？」

「ああ。一応彼女は始めての客だが……」

「では私も説明の為に同行します」

流石に初心者であるエミリアが分かるように彼女の説明は必要不可欠だろう。断る理由もないし、受け付け業務は彼女でなくとも出来る事だ。トランスポーターで3階までたどり着くと、私達は目的の部屋まで移動を始める。

「あのー、さっきのスタイルショップとかココとかあんまりデュエルに関係ないところなんですけど、デュエルトランサーの基本インストールとかってここですか？」

「すみません……出来ればこういった話は小声でして欲しいんですけど……」

店長の注意にエミリアも思わず口を閉ざすが、目的の部屋に着くと店長が声を出して言う。

「はい。こちらがデュエルトランサーの基本ソフトのインストール及び登録データ照会を行う部屋です。あの子はここに住んでるんですよ」

「え？ 『住んでる』？」

エミリアの疑問に私と店長がそろって溜息を吐く。そう、奴は文字通り利用料金を払いながらココに『住んでいる』のだ。そして私は2回ノックをした後、声を上げていった。

「少しゲームの相談があるんだ。乗ってくれないか？」

私の言葉から10秒後、扉が開く。見た目は短い茶髪のニューマ  
ンで年齢は12歳前後、そんな彼が欠伸を上げながら言う。

「あれ？ ギュスターヴ兄ちゃん？ どうかしたの？」

「新しくゲームに興味のある人間を連れてきた。少しばかりイン  
ストールと私の分のアップロードを行って欲しい」

その言葉と同時に彼は私達に個室に入るよう言いつける。そして  
個室の扉が閉められてから彼が声を上げる。

「で、エミリアちゃんの基本ソフトのインストールとギュスター  
ヴ兄ちゃんのデータツールのアップロードでいいんだよね……？  
でも確か兄ちゃんのデータって……」

「ああ。一ヶ月前、修理のついでにアップロードしてもらってる。  
それでも済まないが……頼めるか？」

私の疑問に対して彼も訝しげだが頷く。彼は手馴れた手つきでエ  
ミリアから貰ったデュエルランサーに基本ソフトをインストール  
し、更に続けて私の分のデータのアップロードを行う。

「ま、アップロード自体はすぐ済むよ……はい出来た」

そう言っただけは私のデュエルランサーを手取る。私もそれを受け取り、即座に検索機能を起動させる。

「『代行者』『E・HERO ジ・アース』『NO.39 希望皇ホープ』『レッド・デーモンズ・ドラゴン』で検索開始……」

そう言っただけ私は先のクラウドグ地方で入手したカードの情報を入力して検索を行う。しかし最後の炎魔竜を除いて該当件数は無く、私は頭を抱える結果になってしまった。

「あの……さっき言った『代行者』とか『NO』とかって何？ 僕そんなカード知らないよ？ レッド何とかってカードは最近登録されたって話だけどE・HEROにジ・アースなんてカードは無いし……」

「私も知りたいくらいだ……後信じられない事なんだが……」

クラウドグでの事を話すと彼も表情を青くさせた。彼もまたデュエルモンスタースで生活を繋いでいる人間だ、あのような事態を歓迎しない為当然の反応だと言える。

「マジそれ！？ F・G・Dにレッドアイズ・ダークネスメタルドラゴンなんか、どっちか一枚積みめれば大ラッキー級のカードじゃん！！ それにダーク・ダイブ・ボンバーに開闢の使者まで使ってるなんてどうなってんの！？」

彼の反応が自然だ。ましてやモウヒカンが使ったインフェルニティは本来ならアスカ以外の人間が使うこと自体が不自然なのだ。

「異能者が悪用している……とは考えないの？ カードも『神様に造らせた』とか言う偽造だって話だし……」

「最初はそう思ったんだが……アイツが異能者かどうかも疑問だな。咄嗟に違法者だと判断したが……」

「流行ってなかった昔はともかく、今じゃグラール規模だからね……発覚したら昔は協会が粛清、今じゃ様々な組織からフルボッコだしね。強奪ならまだしも偽造なんてデメリット高い方法はまず取らないね」

そう言っただけで私達は頭を抱える。店長が少年にインストールできたと報告すると彼もエミリアにデュエルトランサーを渡す。

「はいデュエルトランサーだよ。初心者向けに調整しておいたから渡しておくね」

「初心者用って事は……ギユスターヴの様なベテラン用もあるって事？」

エミリアの質問に対して少年は顎に手を乗せて考えてから頷く。

「あるよ。モンスターの精霊って人型じゃない限り頑固な連中ばかりだからね。そういうった精霊と戦うためのシステムもあるんだ。もちろんコレもデュエルトランサーオリジナルの機能だよ」

正確に言えばそれら一般人に不要なものを取り除いたのがデュエルディスクと言うわけだ。流石に認識障害機能は擬似VR空間とVRゲイザーと言う形で復活を遂げたが。

「んー……ちょっと話を変えるけどさ、異能を使うのにデュエルトランサーって必要なの？ 海底レリクスでのギユスターヴやカーシュ族の子が使ってたのを見ると必要無さそうに感じるんだけど……」

彼女の指摘に対して私達は指摘の鋭さに息を飲んだ。そして少年はエミリアに向かって笑いかける。

「……痛いところ突かれたね。異能そのものは旧文明時代から使われてた物って話なんだ。大体レリクスにカードが置かれてる時点で旧文明にもあったって言われてるくらいだしね」

「私は専門的なことは知りませんが、デュエルトランサーは異能を使う際の儀式や呪文を簡略化させたものだと言われました」

「そのお陰で異能の才能が無くてもデュエルモンスターの力を手にする事が出来た。昔より敷居は下がったな」

だが、いい事ばかりではない。その証拠に私を除いた2人も表情を暗くさせる。

「尤も、別の問題も発生してしまいました……」

「そこはしょうがないよ……」敷居が下がった」んだから……」

「敷居が下がったお陰で古くからの異能者も反発、結果が協会内の大不祥事と権威失墜だから……」

それを聞いたエミリアが真剣な表情で声を上げる。

「つまり、その弊害で好き勝手やっている人間が『違法者』って訳？」

「そうなるな。デュエルトランサー自体は五百年戦争時代から使われているものだから新しい技術と言うわけではない。今までは知る人ぞ知るゲームで十分だったが、今のグラールに希望を持たせるためにあえて広めさせた」

「それが今のデュエルモンスターズ……」

エミリアが神妙な表情をすると、彼は背筋を伸ばしてキーボード



を出現させる。

「さ、これからプログラミングのお仕事だ。さっさと遊戯皇タッグフォースの最新作を造らないといけないもんね、忙しくなるぞー  
!」

「え？ 仕事やってるの？」

エミリアが唖然とした表情で少年を見据える。彼は若干12歳だがプログラミングに関しては天才的で、何本ものゲームソフトを生み出している。

そしてエミリアは16歳だが……リトルウイングが抱える問題児が1人で『不働』と言う不名誉極まりない称号を得ていたりする。ちなみにクラウチの称号は『酒乱』である。

「……さて、次は違法者を取り締まっている所だ」

「またデュエルとは関係ないところなんだよね、わかります。でも、デュエルトランサーについてはコレで終わりなんだよね？ 行く必要があるの？」

正解を出したエミリアには拍手を送りたい。しかし今回ばかりはデュエルトランサーとは関係なくてもあえて話しておく必要がある。

「……お前には今の異能者の形態がどうなっているのかを説明が必要だからな」

そう言っただけの店……と言うより事務所の門を潜る。そこにいたのは一人の中年男性だった。

「おや……君か。こんな所に何のようだい？」

そして私は机の上に指を乗せて裏返してまた机を叩く。それを見た男はなるほどと言った後、エミリアに向かって問いかけた。

「お嬢さん……われわれがどうしてこのような形態をとって行動しているかわかりますか？」

「え？ このようになつて……わざわざ分散してたりとかの事？  
一箇所にまとめたほうがいいかな？ って思ったんだけど……」

エミリアの言葉に私たちは表情を暗くし、そして彼から口を開いた。

「かつて“協会”という組織があつたんだよ。私や彼の様な異能者を集め、管理する組織がね……」

「“協会”も表向きは旧文明の研究をしている機関でな。レリクスの調査やそれにかこつけたカードの入手や解析、テストプレイも行っているんだ」

そう、かつては我々MAW社……否、その母体となっている一族もまた“協会”の構成員だった。尤も、先代は異能者として弱かつたから幹部といつても数合わせであるが。

とは言え、幹部や代表理事を選出していった一族だけあつて発言権はあつた。“協会”も権威を保っていた。違法者たちを罰し続け

ていった。

あのウォザーブルグ動乱が起こるまでは……

「我々が関わったウォザーブルグ動乱が起きてから異能者の環境が一変したんだ」

「ギユスターヴくんが関わったのは一番近い事件だが、私は20年近く前に起こったウォザーブルグ動乱を一回経験してるがね……」

20年前のウォザーブルグ動乱は置いておき、「協会」の威信が失墜した。本来異能者の治療を行ってきた部署が違法な人体実験を行っていたのだ。

しかも副代表理事のお膝元で実験やれ洗脳やれしてきたのである。さらに性質が悪いことに自分の子飼いの部下たちを利用して、SEED事変の傷が癒えていないグラールを支配しようと企んだのだ。もちろん我々は代表理事側として暴挙を止めようと戦ってきた。

とは言えレイナたちは我々とも距離を置いたため独立して行動した。それが幸いしてアスカとカールの戦いで犠牲が最小限に収まったのだが……

副代表たちは　　が召喚した魔物の生贄にされ体と魂が喰われ消滅したが、結局“協会”の権威が失墜したことには変わりない。何しろ副代表の不祥事だ、表側の太陽系警察やガーディアンズに同盟軍まで関わるほどのだ。

当然だが副代表は永久除名処分して代表理事が辞職し、“協会”傘下の組織も大半が離反して大小様々な組織が独立。結果小規模の組織は一個の寄り合いを形成し、新たな同盟を結んで今にいたる。

「……要するに、今の異能者組織は小規模な組織が一個の組織を作ってるって事？ ひよつとしたらスタイルシヨップのおばさんやネットカフェの店長も元々は別の組織にいたって事だよな？」

人体実験の話から不機嫌そうだったエミリアの質問に私たちはあっさり頷く。現にスタイルシヨップの店長は夫が異能者であったし、ネットカフェの店長も元々は“協会”に属するエージェントだ。それに私達も一族の人間であったから様々な組織の集合体というのも嘘ではない。

「後これは我々異能者間の暗黙のルールだが、表側の人間に迷惑はかけないようにする事だ。君達リトルウイングの傭兵もそこはきっちりしているだろう？」

「あ、はい……」

「一般人からしてみたら我々も傭兵達もれっきとした『裏側』の人間だ。命を弄んだ罪は命で購え、そういうことだ」

そして彼は話を変えて話し出した。

「あと、ここでは違法者……異能を悪用して犯罪に走った者の討伐やレアカードの密売や偽造取り締まり関係の仕事が主になるぞ。大規模な任務は我々の上部から通達が来るがね……」

「まあ私のように上層部直々の依頼が来ることもあるが、基本はココや最後に案内する所から受けるんだ」

「ふーん……窓口みたいなのところか……」

エミリアが納得すると、私も声を上げた。

「まあいいだろう。今回は我々のあり方を知ってもらったためにココに来たんだ。お前に回るとしても精々が依然私がしたようなレリクス調査だ、基本的にお前はココでの仕事は回ってこない」

「ふーん……」

彼女がそういうと我々も事務所を後にする。さて、となると上層

部を除いて案内するのは最後の一箇所と言つことになるな……

「最後の一箇所はココだ」

私がそういうとエミリアは呆然とした表情になった。今までもス  
タイルショップやネットカフェなどと言つたデュエルと関係ない店  
を回ってきたが、さすがの彼女も最後の一軒が以前来たことのある  
場所だとは思わなかったのだろう。

「ココって……ミュージックショップじゃん!!」

そう、彼女が言ったのは以前彼女がVanguard……もといミ  
サキのCDを買った店だったのだ。そう言えば彼女に売り上げに貢  
献してくれと言われていたのを思い出してMUSIC DISKを  
買うことにする。もちろん指を裏返しまた叩くと言う動作は忘れず  
にだ。

「承りました……では奥の視聴室へどうぞ」

そういつて店員が案内したのは何らかの装置とイヤホンが置かれ  
ている個室だった。正直に言えば先ほどのネットカフェの個室と大  
して変わらない設備だ。

「ココではカードの調査依頼の窓口となっております。また上層部から依頼が来ることもありませんが基本的にトップランカー様専用のご依頼となりますのでご了承ください」

店員の対応にエミリアも頷くしかない。事実エミリアはデュエルを今はじめようとしている素人でしかないのだから。逆に私は生まれついでに異能者であり、こういったことは慣れている。

「また、ココではカテゴリーシリーズの所有者の認証を行います。異能者の方々はカテゴリーを基本的に統一してしますので……」

「カテゴリー？」

エミリアの為に私が伝えておく。

「要するにカードの名前だ。例えば私だと『リゾネーター』、アスカだと『インフェルニティ』と言った具合に同じ名称を持つモンスターを集めるんだ。他には『ジャンク』や『E・HERO』が有名だぞ」

「ふーん……」

「まあ、結局好きなカードを使うのが主流だが……私も今ではレッド・デーモンズ・ドラゴンが主体だから……」

さて、バイス・ドラゴンに次ぐ妥協召喚ができるモンスターを考えるか。有名どころだとサイバー・ドラゴンだが、あれはあれで専用デッキを組んだほうがいいカードだからな……

「結構異能者ってデッキに気を使ってるんだね……あたしはてっきりあいつらのようにレアカードをバカスカつき込む構築だと考え

てただけど……」

エミリアの言う案が一番現実的だが、どうしても予算で足を引っ張るからな……

「あんな借金製造カードなど1枚あれば十分だ」

そう言ってこの話題を無理やり終わらせた。さて、正真正銘最後の店に行くか。

「さて、異能者にとって一番重要な武器を買いに行くぞ」

そう言ってたどり着いたのはカード屋だった。それを見た瞬間、エミリアは声を荒げて言った。

「結局カード屋寄るんじゃない!」

「カードを使うのだから当然だろう? さて、一応カテゴリー別に置かれているから好きなものを選び。私もカードを探すからココにいるぞ」

エミリアがふて腐れながらカードを見ていくが、私もカードを手にとって調べ始める。やはりレベル5かつ条件がほぼなしの特殊召

喚ができるモンスターは少ないか……簡易融合を使ってもエクストラデッキを圧迫するだけだからな……

カールのようにジャンク・シンクロンを使うか？ そうなるとレベル2のモンスターまで入れるから火力が低くなるし……

やはりバイス・ドラゴンを積み込むか？ いや、それでも結局は

……

「むう……」

私が唸っている中

「これだああああ！！」

エミリアの叫びが聞こえた。私は思わずエミリアの方を振り向く



と、彼女は複数のサンプルカードを持ってこちらへやって来た。

「どうしたエミリア。ココは店内だから声を小さくしてくれないか？」

私が厳しく言うと、彼女は興奮しきった表情でまくし立てる。

「あたしが使うカードが決まったのよ！！ 一目見た瞬間にこれだってオーラが漂ってきて……！！」

そう言っただけで彼女が差し出したカードを見据え、私はしばし目を見張る。一見エミリアの考えを理解できなかったが、このカードの基本レベルは4、あのカードとの相性もよく全てが光属性……さらにはエミリアもこのカードを気に入っている……！！

「そうか……その手があったか！！」

彼女が気に入ったことをさておいて、このカードを主軸としたデッキならでの運用法も意外と多い。なるほど、これならばミカのパワーを借りずとも真つ向から戦えるかもしれない……！！

「ところでエミリア、ひとつだけ聞かせてくれ……」

「何？」

「どうしてこのカードを選んだんだ？ 意外な趣味だと思ったんだが……」

彼女が選んだモンスターは私にとって彼女のイメージとは違う意外なものだったが、それに対してエミリアはそんな事かと言わんばかりに自身ありげに答えた。

「かつこいいじゃん」

……所詮人のデツキと感性……

自分のイメージだけが絶対ではない……

今は亡き『虹』のリーダーの言葉を不意に思い出した。

## フィランディア・シティ『裏』観光案内（後書き）

一応異能者の組織について説明しましたが、ギユスターヴの所属のみならず幾多の異能者集団もこの様な感じですよ。

まずディスクを用意して、データをインストールしてデッキを作る。後は異能者のあり方を説きます。グラールに喧嘩売ったとしても負けるのは数の少ない異能者たちなのです。

2人のトップランカー（コラボ枠）（前書き）

今回は雑炊様とジュラルミンダンボール様の作品の主人公とのコラボレーションです。

ぜひともごらんになって感想をください！！

## 2人のトップランカー（コラボ枠）

ギユスターヴ

LP：2000

エミリア

LP：300

私とエミリアはクラッド6内のカードショップでエミリアのデュエルの指導を行っていた。今回はデュエルトランサーはおるかデュエルディスクも使用していない机上のデュエルでありミニチュアサイズのソリッドヴィジョンが浮かび上がるのみに留まっている。ちなみに私の場にはエクスプロード・ウイング・ドラゴンが存在し、エミリアの場には伏せられたカードのみが存在していたが彼女はそれでも表情を曇らせようとはしない。

「あたしのターン、ドロー……」

エミリアがカードを見据えると即座に机に差し込む。

「X-ヘッド・キャノンを召喚して手札から永続魔法『前線基地』を発動させて手札からY-ドラゴンヘッドを特殊召喚、更にリバーストラップカード『ゲットライド!』を発動させてZ-メタル・キヤタピラーをX-ヘッド・キャノンに装備させる!!」

X-ヘッド・キャノン

通常モンスター

星4 / 光属性 / 機械族 / 攻1800 / 守1500

強力なキャノン砲を装備した、合体能力を持つモンスター。

合体と分離を駆使して様々な攻撃を繰り返す。

Y・ドラゴン・ヘッド

星4 / 光属性 / 機械族 / 攻1500 / 守1600

1ターンに1度だけ自分のメインフェイズに装備カード扱いとして自分の「X・ヘッド・キャノン」に装備、または装備を解除して表側攻撃表示で特殊召喚する事ができる。

この効果で装備カード扱いになっている時のみ、

装備モンスターの攻撃力・守備力は400ポイントアップする。

(1体のモンスターが装備できるユニオンは1枚まで。

装備モンスターが戦闘によって破壊される場合は、代わりにこのカードを破壊する。)

Z・メタル・キャタピラー

ユニオンモンスター

星4 / 光属性 / 機械族 / 攻1500 / 守1300

1ターンに1度だけ自分のメインフェイズに装備カード扱いとして自分の「X・ヘッド・キャノン」「Y・ドラゴン・ヘッド」に  
装備、

または装備を解除して表側攻撃表示で特殊召喚する事ができる。

この効果で装備カード扱いになっている時のみ、

装備モンスターの攻撃力・守備力は600ポイントアップする。

(1体のモンスターが装備できるユニオンは1枚まで。

装備モンスターが戦闘によって破壊される場合は、代わりにこのカードを破壊する。)

前線基地

永続魔法

1ターンに1度、自分のメインフェイズ時に

手札からレベル4以下のユニオンモンスター1体を特殊召喚する

事ができる。

ゲットライド！

通常罾

自分の墓地に存在するユニオンモンスター1体を選択し、

自分フィールド上に表側表示で存在する装備可能なモンスターに  
装備する。

エミリアの場に青を基調とした肩部にキャノン砲を装備した戦闘  
機械が黄色を主としたキャタピラを携えた単眼の戦車と融合し、更  
に赤を基調とした竜を模した戦闘機が姿を現す。

「……ほっ」

結局エミリアが選んだのは光属性機械族モンスターを中心に構成  
されたユニオンデッキだった。これならミカの持つカードの召喚条  
件のある程度満たすし、使わない場合も機械族のサポートカードの  
種類も豊富だから使わなくても問題ない。

何より彼女が選び構築した始めてのデッキ、そういったものは大  
切にさせていきたいものだ。とは言えまだ荒削りの段階であり、私  
も炎魔竜を省いたデッキで立ち向かうが今回は徐々に追い込まれて  
いく。

さて、彼女は続けてどのような手に出るか……

「今フィールド上にX・ヘッド・キャノン、Y・ドラゴン・ヘッ  
ド、Z・メタル・キャタピラーの三種類が存在する！！ よってあ  
たしは3枚のカードを除外してエクストラデッキからXYZ・ドラ  
ゴン・キャノンを特殊召喚する！！」

XYZ・ドラゴン・キャノン

融合・効果モンスター

星8 / 光属性 / 機械族 / 攻2800 / 守2600

「X-ヘッド・キャノン」+「Y-ドラゴン・ヘッド」+「Z-メタル・キャタピラー」

自分フィールド上に存在する上記のカードを

ゲームから除外した場合のみ、エクストラデッキから

特殊召喚する事ができる（「融合」魔法カードは必要としない）。

このカードは墓地からの特殊召喚はできない。

自分のメインフェイズ時に手札を1枚捨てる事で、

相手フィールド上に存在するカード1枚を破壊する。

彼女の声を合図にミニチュアサイズのXZ-キャタピラー・キャノン（厳密に言えば違うがあえてそう呼称させて貰う）が分離し、その間に挟まるよう翼と脚をたたんだY-ドラゴン・ヘッドが融合される。

コレこそがXYZユニオンモンスターの最強融合体・XYZ-ドラゴン・キャノンである。

「あたしは残った手札2枚を捨ててエクスプロード・ウイング・ドラゴンとリバーズカードを破壊するわ、ハイパー・デストラクション！！」

その声を合図にX-ヘッド・キャノンに備わったキャノン砲がエクスプロード・ウイング・ドラゴンとセットしていたカード……プライドの咆哮を粉微塵に砕く。流石にこの攻撃には私も焦りの表情を浮かべた。

「……むー！」

「んでもってそのまま直接攻撃！！ X・Y・Zハイパー・キャ



ノンー!!」

続けてキャノン砲とドラゴンの口、キャタピラーに備わった単眼から光の弾丸が放たれる。だが即座に私は手札から1枚のカードをエミリアに突きつけた。

「手札からバトルフェーダーの効果を発動!! このカードを特殊召喚し、相手の直接攻撃を無効にしてバトルフェイズを終了させるー!!」

バトルフェーダー

効果モンスター

星1 / 闇属性 / 悪魔族 / 攻 0 / 守 0

相手モンスターの直接攻撃宣言時に発動する事ができる。

このカードを手札から特殊召喚し、バトルフェイズを終了する。

この効果で特殊召喚したこのカードは、

フィールド上から離れた場合ゲームから除外される。

そして響き渡る鐘の音にエミリアが頭を項垂れさせる。手札が無い以上何も出来ないかと判断したのかターン終了を宣言した。

「では行かせて貰うぞ……ファイナルターン。ドローー!!」

そして私は手札から2枚のカードを手にして声に出す。

「私は手札からレベル2のフォース・リゾネーターを墓地へ送り、パワー・ジャイアントを特殊召喚する」

パワー・ジャイアント

効果モンスター

星6 / 地属性 / 岩石族 / 攻2200 / 守 0

このカードは手札からレベル4以下のモンスター1体を墓地へ送り、

手札から特殊召喚する事ができる。

この方法で特殊召喚した場合、手札から墓地へ送った

モンスターのレベルの数だけこのカードのレベルを下げる。

また、このカードが戦闘を行う場合、そのダメージステップ終了時まで

自分が受ける効果ダメージは0になる。

フォース・リゾネーター

チューナー（効果モンスター）

星2 / 水属性 / 悪魔族 / 攻 500 / 守 500

自分フィールド上に表側表示で存在するこのカードを墓地へ送り、自分フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体を選択して発動する。

このターン、選択したモンスターが攻撃する場合、

相手はダメージステップ終了時までモンスターを対象にする魔法・罫・

効果モンスターの効果を発動する事ができない。

その声を合図に宝石を身体にちりばめた巨人兵が姿を現し、続けて私は愛用しているカードを手にして声に上げた。

「続けて私はフレア・リゾネーターを召喚する」

そう言って姿を現したのはフレア・リゾネーター……先の阿呆との戦いでも炎魔竜の攻撃を強化した立役者だった。

「パワー・ジャイアントは己の効果でレベルが2下がって4とな

っている……よってレベル4として扱われているパワー・ジャイアントとレベル1のバトルフェーダーにレベル3のフレア・リゾネーターをチューニング、クリムゾン・ブレイダーをシンクロ召喚する」

クリムゾン・ブレイダー

シンクロ・効果モンスター

星8 / 炎属性 / 戦士族 / 攻2800 / 守2600

チューナー+チューナー以外のモンスター1体以上

このカードが戦闘によって相手モンスターを破壊し墓地へ送った時、

次の相手ターン、相手はレベル5以上のモンスターを召喚・特殊召喚する事ができない。

姿を現したのは紅騎士。奇しくも攻撃力と守備力は彼女の場に存在するXYZ-ドラゴン・キャノンと同じ値を持ったモンスターだった。

「そしてフレア・リゾネーターをシンクロ素材にしたことで攻撃力が300ポイント上昇する」

それを見た瞬間、エミリアは意気消沈とした表情で頭を下げる。クリムゾン・ブレイダーの攻撃はXYZ-ドラゴン・キャノンを十文字に切り裂き、大きな爆音と共に消滅していった。

エミリア

LP：3000

「また負けたああー!!」

エミリアが声を張り上げて叫ぶのを聞きながら、私はエミリアの戦術を思い返していた。

(X・ヘッド・キャノンを召喚し、Y・ドラゴン・ヘッド及びZ・メタル・キャタピラーを装備して攻撃力の上昇及び戦闘破壊耐性を付与させるが基本。エースモンスターはXYZ・ドラゴン・キャノンで効果でカードを破壊させる戦略が基本か……)

となるとサイバー・ドラゴンを特殊召喚し前線基地でユニオンモンスターを特殊召喚、そしてミカが持っていた光属性レベル1のチューナーモンスターを通常召喚させてシンクロ召喚させるか、レベル4同士でエクシーズ召喚……しかしエクシーズ召喚しようにも相性がいいモンスターはいたか？

(オネストも高価格、仮に入れたとしても一族の結束の足を引っ張りかねない。ならばオネストは切り捨てて機械族特化した方がいいのか？ それに……)

「あらあら？ エミリアじゃない、珍しいところで会うわね」

間延びした女性の声が響き渡った。その隣にはバスクが立っており、私を見据えると声を上げてきた。

『ギユスターヴか……退院できたようで何よりだ』

「ああ。そうだな……それで隣の女性は誰だ？ エミリアの事を知ってみたいだが……」

そう言っただけで私は改めて彼女を見据える。上下共に黒のストリーアを着込んだ髪の短い女性で、病的に白い肌や露出している右目は黄色と言うより金色の瞳で白目の部分が黒く染まっている部分は、かつてクロウドッグ地方で見たアスカの変化を思い出す。

ちなみに左目はヘッドマウントディスプレイで隠されており、そ

んな彼女の手には知る人ぞ知るマスコット……あまりにも不謹慎であるという理由でヌイミシリーズでは不人気のパノン・ヌイミが握られていた。

『彼女はリアIIゲート。リトルウイングのトップランカーの1人だ』

「あ、リアじゃん……どうかしたの？」

「いえいえ。ただココでエミリアに会ったのが珍しいなってね」

『カードショップだからギユスターヴはいるだろうと思ってたが、まさか君までココにいるとは思わなかったからな。それにデュエルモンスターズに興味を持ったというのも初耳だしな』

バスクがそう言うってエミリアの疑問を終えさせると、続けて私に向かって質問した。

『入院中不謹慎だったから言わなかったが聞かせてくれ……カーシュ族の村が焼き討ちされたというのは本当か？』

バスクの問いに対して私は頷く。『太陽王カムハーン』を召喚した男と複数の阿呆どもは敵対していたし、前者は焼き討ちを否定していた。

それに阿呆兄弟はカーシュ族の少年を殺そうとしていたし、何らかの目的があったのかどうかすら今となっては不明だ。それにカーシュ族が彼以外に生存者がいるのかどうかすら……

『そうか……本当か……文化保護地区を燃やす……愚かなー！』

バスクは顔も知らぬ、ココに存在しない犯人達に罵詈雑言を浴びせ続ける。どうやら何か思うところがあったのか、キャストらしか

ぬ激昂振りを見せ私達が思わず身体を半歩下げてしまうほどだ。

『……失礼、少し興奮してしまった。だがそれだけ愚かな行いだということも理解して欲しい』

少しどころの話ではないように思えたが、ココで突っ込むほど野暮な話でもない。

「やけに興奮してたけど、どうしてそんな事を言うの？」

『エミリア……カーシュ族の文化から学ぶ事は多いぞ。フォトンの扱い方から自然との接し方まで俺達では発想出来ない事を平然とやってのける』

「そこに痺れる憧れるってやつよ。それに狩猟とかも結構参考になるって話だしね」

リアがそう言うと、バスクが咳払いをする。そして彼は溜息をついて声を漏らした。

『それに我々の知らないグラールの歴史を知っている素振りもある……現にモトウブでの都市伝説『氷結界』について知っていると聞いた……我々の知らぬ歴史諸共その礎となる村を焼き払うなど愚の骨頂！！文化保護地区を何だと思っているんだ！！』

「確かに……奴らにしてみたら自分がよければ他はどうでもいいのだろう……犯人達も女性を連れ去ろうとしてたぐらいだから……」

思い出すのはモウヒカン率いる一派の愚行。もしアスカがいなかったらエミリア達が連れ攫われ、どうなっていたか想像したくも無い。

「バスクさん、興奮してたどころか叫び声まで上げてたわよ」  
『……すまない、つい怒鳴ってしまった。昔そう言う学問を少々かじっていたものでな……』

「まあ、私も旧文明の学問を趣味でかじっているからな……今度海底レリクスでの再調査隊に立候補しようとしていたところだ」

瓦礫も撤去されているみたいだし、今のスポンサーであるMAW社なら信用が置ける。踏み倒される事もあるまい。私の報酬自身内価格で安くならないかどうか不安だったが、前回の不手際の際に高級ホテルで泊まったから問題は無いだろう。

「ところで……その手に持っているのは？」

「ああ、この子ね」

そして彼女は片手で器用に小型のパン・ヌイミの片腕を上げると

「Over my head! Better off dead!  
」

かなり物騒な事を言い放った。その言葉は確かグラール共用言語と違いパルムの一地方の言語であり、要約すると……

「『為す術が無い! 死んだ方が良い!』……何故それを選んだんだ……?』」

「まあ、リアだし……」  
『むう……』

流石にエミリアは慣れているのか苦笑するだけだが、バスクも私と同様手にしたヌイミの印象が悪いためいい気分がしない。

「……ノリ悪いわね〜」

リアは不満そうだったが思い出したといわんばかりにパノン・ヌイミをナノトランスすると声を上げる。

「ところでエミリア、新人さんにクラッド6の案内はしておいたのかしら〜」

「……あ。すっかり忘れてた」

まあ、私が入院したり外で泊まったりしていた事もあってクラッド6内にどういった施設があるのかは聞いていないな……精々がカードシヨップぐらいだし、ちょうどいいか。

「では頼めるか?」

「はいはい〜」

リアがそう言うと私とエミリアはデッキを集めてナノトランスし、彼女の後についていく事にした。

クラッド6はリゾートコロニーであり、何泊かする者のための宿泊施設も存在する。更にいえば観光地でもある為土産屋も多数存在



するし、社員用のスーパーや娯楽施設などもある。

現に私が屯しているカードショップでも私以外のリトルウイング社員が来店し、更にはレストラン街や24時間営業の量販店まで存在するのだ。

カフェにバトルショップにゲームショップなど巡り巡って最後に訪れたのは……

「トレーニングルーム……？」

「ええそうよ。うちの社員達も結構愛用しているのよ。」

何人かがちらほらとランニングマシンや筋力トレーニングをやっている光景が目に入る。中にはゴロツキ同然の風体をした者達と見るからに事務系の人間が談笑している妙な光景まで目に入った。

「まあ、ココの会社って結構変わってるでしょ。前歴問わずに入社許可するなんてうちぐらいなものよ。」

最初こそ前歴問わずと言う破格以前の問題で不安だったが、何度かココで仕事していくうちに分かった事がある。

普通の軍事会社では依頼料は高く設定されており、子供の小遣い程度では誰一人動こうとはしない。更に給料もかかるためどうしても依頼料は高くなってしまっし、身元も確かでないと入る事すら出来ない。

だがリトルウイングではその『信用』をあえて度外視し、その分依頼料を安く済ませているのだ。それでも倒産しないのは傭兵達の質のお陰か、それともココが表社会から爪弾きにされた者たちの最後の居場所であるという事なのか定かではないが、悪事を働かないという事だろう。

確かにココから弾き出されたら『あのリトルウイングからも追い出された』と言う烙印がつくため、今度こそ表からも裏からも抹殺

されるだろう。

例えば私の横を通り過ぎた青髪のサングラスを掛けた青年は無実の罪で表社会から追い出された傭兵だが、ココではそんな事など気にしていない素振りを見せている。

『以前クノーが誰にも助けてもらえないヒトが、最後に駆け込む場所にもなると言っていたが正にそう思えてしまっな』

最後の楽園……と言った所か。

「と言っわけで、私達もここでトレーニングしましょ〜」

確かに入院したり最近デュエルばかりで身体を動かしてないな……ココはお言葉に甘えておくべきか……そう考えた瞬間、バスクヤチエルシーのものではない合成音声が響き渡った。

『アレ、エミリア？』

そう言っ姿を現したのはレオンと同じ青を基調としたボディを持ったキャストだった。彼(?)は私達の方へ近づくと、私に向かって声を上げた。

「あ、NT-X。アンタもココにいたの？」

『エエマア。デモ、メズラシイ、ジャナイデスカ。エミリアガ、ホカノヒトト、イツシヨニ、イルナンテ』

「ちよつと!! それってどういう意味よ!？」

「そうよね〜私に〜クラウチさんに〜チエルシーさんに〜NT-Xさん〜……アナタが接した人って私を知る限りじゃこのぐらいよ〜」

リアにそう言われるとエミリアも口ごもるが、話題を変えんとはかりに声を張り上げる。

「ふ、2人とも!! 彼……かな、とにかく彼はNT-X、リアと同じトップランカーの1人よ!!」

「凄くあせってるわね、図星かしら」

リアがそう言う中、NT-Xがエミリアに向かって更に声を出す。

『メズラシイ、デスネ。エミリアが、ソナコトヲ、イウナンテ』

「珍しいといえば、この子ってカード屋にいたのよ」

3人がそう言うが私とバスクは話しに追いついていけない。そもそもトップランカーとはどういう意味なのだろうか？

「エミリア……トップランカーとはどういう意味だ？」

「そ……そうそう!! トップランカーって言うのはね、リトルウイングの傭兵の中でも強い人たちのことなの!! うちって実力主義だから傭兵同士の質を高めるためにこういった競争じみた事やってるのよ!!」

『ほう……つまり2人はリトルウイング最強のメンバーだと言うのか?』

バスクの問いに対してNT-Xから声を上げてきた。

『ソウイウワケ、ジャンイデス。ココサイキン、ワタシタチヨリ、ツヨイヒトガ、イッパイ、ニューシャ、シテルノデ。ゲンニ、ヒツトウダッタ、クノーサンガ、トップファイブ、カラ、ハズレテマシ』

彼らより強い……？ それは一体……

「でもね、何か変なのよ」

「変とは一体……？」

『ナント、イイマスカ…… ハヤサトカ、チカラハアル、ケドソレ  
ダケ…… ガムシャラニ、タタカツテルト、イイマスカ……』

「要はスペックは高いが戦い方がなっていない、そう言うことか？」

私の疑問に対してリアが肯定して頷く。一瞬だけ、私はあの海底レリクスでの戦いを思い出していた。エミリアやバスクも表情と雰囲気からして同様だろう。

「まあ中には戦い方がしっかりしている人もいますけど、基本的にはそう言う感じよ」

『アトツイデニ、ジョセイカラノ、ヒョウバンガ、ワルイコトモ、  
キョウツウシテ、マス』

「ああ…… そう言えばあたしを口説こうとしてた奴もいたわね……

… やたらおっさんの事を馬鹿にしてた感じだけ……」

エミリアの言葉に対して私は今までの事もあって目つきを鋭くさせる中、リアが暢気に手を叩く。

「でも大丈夫よ、中にはまともな人たちもいるからね、そう言った人たちと親しくする機会あるかもしれないわ」

そう言うものか……

「まあ折角のトレーニングルームですし、少し身体を動かしてみたらどうかしら」

『タシカ、アタラシイ、クンレンヨウ、ソフトガ、インストール、

サレタツテ、キキマシタ。ソレニ、シマシヨウ』

2人の提案に私達は頷く。トレーニングルームでは模擬戦形式のバトルルームの他に、同盟軍やガーディアンからの依頼で訓練用のプログラムを製作しテスターを勤める事もあるくらいだ。

ちょうどいい……トップランカーだった面々の実力をかせてもらういい機会だ。

「ではその言葉に甘えましょう」

私は何の躊躇いも無く頷いた。

私達の身体はある廃棄プラントに移される。そこでは破壊活動が行われたのか所かしこに瓦礫が積もれてある。

そして眼前に存在するのは歩行型のSEEDフォーム・デルジャバンが右往左往している。既に存在しないSEEDフォームが私達の目の前に存在する理由はひとつしかない。VR空間だ。

VR空間で用意された舞台で誰が一番SEEDフォームを倒せるか競う競争で、一番少なかった者が今日の夕食を全員分支払う事になった。本来これはSEEDフォームに占拠された廃棄プラントの浄化が目的だが、それだけでは不十分だとリアが言い出したのでこう言ったルールになった。

「さて……」

私は細剣に手を伸ばしながらリアとNT-Xの状態を見据えて呟く。リアの右手にはテナラ製のショットガンが握られているため遠距離主体だと分かる。だがNT-Xには武器らしいものが見当たらないのだ、彼はどのようにして戦うと言うのだろうか……

「一応ルールの確認だ。倒したSEEDフォームは種類によって別々の点数がスコアに換算される、射撃系統の弾の補充およびスケープドールの使用は不可、戦闘が不可能状態になった時点でその者の自腹が確定、SEEDの侵食率が許容範囲を突破もしくは自爆までの制限時間を超過した時点で全員が自腹、以上でいいな？」

「そうよ、NT-Xさんは大丈夫かしら？」  
『ダイジョウブ、デス』

リアとNT-Xも頷く。そして後は我々がスタートラインに立つのみ。そして3人がスタートラインに立つ。

まず最初に頭上に浮かぶ3つの赤いランプの内1つが点灯する。リアは手にしたショットガンを持って腰を低く構える。

赤いランプの中央が点灯する。NT-Xも身体を動かしていつでも動けるように体勢を整える。

最後の赤いランプが点灯する。私は細剣をいつでも引き抜けるように柄に手を伸ばした。

そして

ランプの色が全て赤から緑へと変わると、一斉に前に走り出す。まず出現したのは先程述べたデルジャバンに砲台型のデルプ・スラミイ、四足歩行型のオルクディランだ。

私はすかさずデルジャバンの心臓を細剣で貫く。すかさず左腕に出現させたハンドガンで奥の方にいたデルジャバンの複眼を悉く貫いていく。中にはデルプ・スラミイの砲台部分を貫く事もあった。

一方でリアも手にしたショットガンを持ってSEEDフォームを撃ち貫く。あれほどの威力は市販のショットガンではまず出せない。そうなるアレは間違いなく改造品だろう。

続けてNT-Xだが……横目で彼を見たとき、私は思わず動きを止めてしまった。何故なら彼の両腕の装甲が動き、中から内蔵されたガトリングガンが出現していたのだから。

「なっ……!？」

NT-Xは私の驚愕を気にもせずにガトリングを掃射していく。デルジャバンやパノンの上位種であるベル・パノン、オルクディランを次々と撃ち貫いていった。

「よそ見してていいのかしら？」

リアが手にした改造ハンドガンを手にしながら大型のSEEDフォームの一体であるデルナディアン製の複眼を正確に射抜き、脳を収めたSEEDフォームであるジェディンの中枢部を貫く。彼女は的確に敵の急所を狙うタイプ、NT-Xは自分のスペックを利用して殲滅するタイプ、両者時間を短縮させると言う共通点はあるとは言えもの見事に戦い方のスタンスが分かれている。

「はっ!！」



一方で私は手にした細剣とハンドガン、新たに作り直したリゾネーターでSEEDフォームを次々と打ち倒していく。そもそも質ではリアに、量ではNT-Xに劣っているのだ。必然的に私は手数を増やしていく必要がある。もしくは……

「見つけた!!」

『侵食している廃棄プラント』と言う設定を活かして侵食させているSEEDを破壊してボーナスポイントを狙うしかない。小型のSEEDフォームを一掃して一気に稼ぐNT-X、中型を的確に倒していくリア、そして侵食の元凶を打ち倒していく私にスタンスが分かれる。

(現在スコアはNT-X、リア、私の順か……やはり大型狙いで効率が悪いか……)

ガトリングが切れたと思ったら今度はバルカンを打ち続ける。一方でリアも射撃系統の武器を切らしたかと思えば彼女が新たに取っ出したのは……

「!?!」

彼女が取り出したのは、パルムなどの量販店で見かけるような力トだった。尤も、それは見るからにナイフなどの刃系の凶器が満載のクバラやMAW社の一部の開発者が見たら目を輝かせそうな代物だ。

「お客様へ6番レジへどうぞ」

そう言いながら彼女はそれを押し出してSEEDフォームへと駆

け出していく。しかも刃の取り付け位置も計算されているのか的確にSEEDフォームを切り裂いていった。

あのような規格外の行動など見た事が無い。私が唾然としている間もNT-Xは左腕から出現したレーザーブレードらしきもので切り裂いていく。

侵食しているSEEDフォームを打ち貫いていく私を尻目に2人は敵を打ち倒していく。私も負けじと手にした細剣で相手の心臓や喉元を貫き、スコアを稼いでいく。

とは言えNT-Xの一斉発射やリアの改造カートでの稼ぎが効いたのか、二人とも私のスコアを引き離していく。

「……このままではまずい!!」

このままでは悪夢の全額自腹が待っている。無駄な出費をこれ以上出したくない私にとってそれだけは断固として避けたいところだ。

(こつなれば……)

確かこのミッションの正式な目標は自爆装置を掌握しているSEEDフォーム『SEED・ヴィタス』を倒す事。そうなればミッションは強制終了、彼らの荒稼ぎもそこで終わる。

後は時間との戦いと言うわけだ。2人には悪いが先に進ませてもらう!!

「はあっ!!」

手にした細剣で迫るデルジャバンを切り裂きながら私は奥へと進む。2人も狙いに気付いたのか私の後を急いで追うことになった。

こつなると2人も必然的に敵を荒稼ぎしている場合ではなくなる。SEED・ヴィタスを倒したのものには更にボーナスポイントが付加

されるのだ、狙わないわけが無い。

3人でSEEDフォームを蹴散らしながら奥へと進む。私が切り裂き、NT-Xが何処かで拾った鉄パイプで叩きのめし、リアが格闘術で蹴散らしていく。

最早単なるゴロツキ同然の行進に私が溜息を漏らすと中枢部らしき広間へたどり着くと突如巨大なSEEDフォームが姿を現す。それを見た瞬間、私達は一斉に飛び掛る。

とは言え他の2人の足を引っ張らず、触手や本体を隙あらば叩きのめすと言う連携なき連携を見せ付ける。

NT-Xが叩きつけ、リアが取り出したチェーンソーで切り裂き、私が細剣で貫く。

そして目の前の敵が完全に怯んだ瞬間、一斉に止めを刺さんとNT-Xは腕を高く掲げ、リアは腕を振るい、私は一気に踏み込んだ。

その結果は

「それでは、本日はモトウブで大人気のステーキショップ『グラトニービースト』でゴチになります!!」

『ゴチになります!!』

エミリアの声を合図に夕食交流会が始まる。この場にいたのは彼女の他にバスクとNT-Xとリアのパートナーマシナリーであるベルとメリーも共にいる。

『……フツ、開闢の世に記された墮落の果実を食らうヒトを思わせるな……』

そう言っただけハンバーグを食べるラドル。一方でメリーも美味しくうに食べ、ベルはこちらを見据えるが直ぐにバスクが声を上げる。

『……とは言えいいのか？ 俺までご相伴に預かって……』  
「細かい事は気にしない気にしないっ!!」

エミリアが美味しくそうに食べる中、私達は黙々と食べる。しかし私達が頼んだメニューには明らかに勝者と敗者の間に越えられない溝を造り上げていた。

勝者たちの食事はこの店で一番高いセットメニュー、一方で敗者たる者たちの食事は出費を避けたいと言う理由で安いメニューを頼んでいた。

「いやー、まさかあんな結末になるとわねー」

そう、彼女の言うように誰があのような結末を想像しただろうか。

私達が最後の攻撃を行った瞬間、SEED・ヴィタスが地面に逃げ込んだ。攻撃は虚しく空を切ればよかったものの、私の刺突がNT-Xの頭部を射抜き、NT-Xの鉄パイプがリアの眼帯ごと左側の側頭部を砕き、リアのチェーンソーが私の腹部を斬り裂いたのだ。

そう、あの試合の結果はものの見事に無効試合。しかもある種致命的な同士討ちと言う有様だった。一番安いサイコロステーキを黙々と食べる羽目になってしまった我々はパートナーマシナリーは自分で払うことになり、残ったエミリアとバスクについては我々3人が折半で払うことになってしまったのだ。

当然の事ながら自分達の分は各自自腹。その結果、我々はかなりきつめの仕事を各々で担当する羽目になったのは言うまでも無い。

#### 余談その1

「……？」

私はふとNT-Xがサイコロステーキを食べる光景を見て目を疑った。口のパーツを開いた様子も無いのに、何故か口へと運ばれると消滅するステーキ……最早ある種のミステリーも同然だった。レオンですら食事の時は口のパーツを外したりしていたのにも関わらずだ。

そして私は後日他の同僚に聞いて回ったところ、こういう答えが返ってきた。

「気にしたら負けだ」と。

ちなみに内蔵武器についても同じ答えが返ってきた。

## 余談その2

後日暴走するコルトバの集団を倒す依頼をあの2人と共に行動していた私だったが、リアに対して気になった事を声に上げた。

「そう言えばあの武器は何処で手に入れたんだ？」

彼女の改造ショットガンやハンドガンの類はまだいい。あのような改造をするのは理解が出来るからだ。だが彼女が手にした改造カートや玩具の銃型の火炎放射器に冷凍銃、巨大なパノン・ヌイミ型の銃の自動発射装置など理解に苦しむような武器も山ほどあったのだ。

「その武器はですね、ここに来る前に偶々一緒にいたカメラマンさんやライダーさんとの共同開発だったり戦利品だったりするのよ」

ちなみに他の同僚について聞いて回ったところ、このような答えが返ってきた。

「気にしたら負けだ」と。

## 2人のトップランカー（コラボ枠）（後書き）

今回の小説で初のコラボをやりました。3人の共同ミッション（？）は結果としてこのような形で終わってしまいましたが、今度は成功パターンを書いてみたいと思います。

また、この作品でのエミリアのデッキは記されたようにVWXYZ系のデッキになりました。今後もオリカが増えていくと思います。ワームがAttoZやったんだからこっちでもやりたいとささやかな野望があるので。

ではまた。



## 用語集その2

ビジフォンに用語が更新されました。

ネタバレになりますのでストーリーをお読みになってからこの項目をお読みください。

原作で出てきた用語については割愛しますのでご了承ください。

なお、メンアットワーク!4とのクロスでもございますが、こちらはマイナーかつ原作から離れているので記載します。

## 【人物】

不知火飛鳥

ギユスターヴと同じ異能者。20歳。

かつてはギユスターヴと彼の親友だったカール＝ワインバーグと

共に『三騎士』として行動していた。

白髪かつ黒目のヒューマンだったが、SEED事変後から自分の身体が変質していき、ウォザールブルグ動乱にて完全に突然変異を遂げた。

以前は口は悪いが同朋意識は強く、特に親友であるカールや妹分だったレイナとリイナは彼にとって宝そのものだった。

ウォザールブルグ動乱において些細なすれ違いからカールと敵対していたが、2人そろって行方不明になった後、カーシュ族の村にて生存が確認された。

また、彼はニューデイズのある文化保護地区の出身であるため独特の文字で上記のように表されているが、グラール共用文字では『アスカ』シラヌイ』と表記するのが正しい。

彼と親しい人間以外は彼の名を『アスクア』もしくは『アスクシユライン』と呼ぶことが多い。

### レイナ＝ワインバーグ

飛鳥の幼馴染であり、ギュスターヴが属している異能者一族の先代当主の娘。17歳。

幼い頃に双子の妹であるリイナと離れ離れにされ、彼女との再会を望み続けてきた。

ウォザールブルグ動乱においてその望みは歪んだ形で叶えられ、それが結果として今回のウォザールブルグ動乱となる。

しかも父親はリイナの件に関して偽りの報告をしてきたため、一族を完全に信用しなくなる。

ウォザールブルグ動乱終結後、自分の家の持てる範囲の家財道具を持ち出して換金して逃亡資金に仕立て上げた。

モトウブで異能者として活動する事が多いが、ニューデイズに行こうとした矢先にヴァイロンとの戦いに巻き込まれた結果である。またワインバーグと言うのは飛鳥の親友であるカール・ワインバーグの苗字であるため、ギュスターヴには偽名だと看破された。

リイナ・ワインバーグ

飛鳥の幼馴染であり、ギュスターヴが属している異能者一族の先代当主の娘。17歳。

幼い頃家族と引き離され、“協会”の副代表理事によって様々な人体実験を施された結果、人間不信となってしまうた。

それ故に他者のある例外を除いて排斥し続けた結果、今回のウオザ・ブルグ動乱を招いてしまう。

終結後は飛鳥とカールが行方不明になった元凶を造り上げた自分を責め続け、己の殻に閉じこもってしまった。

今では幼児退行を引き起こし、レイナと共に行動を共にする。

また彼女にも本来の苗字があるのだが、当の本人はそれを忘れてしまっている。

ミサキ・オラクル

近年グラールで流行しているロックバンド『Vanguard』の女性ボーカリスト。ピースト。19歳。

彼女もまた異能者であり、かつて『三騎士』の前進となった組織

『虹』のメンバーの1人だった。

彼女はSEED事変が起こった直後、レオンやイーサンと共にガイディアンに入隊したがある事件が切欠で謹慎処分を受ける。

謹慎があけたときに『虹』のリーダーだった異能者がGコロニー落下の際に死亡していた事もあり、辞表を出してイルミナスを当時のパートナーと共に追っていた。

SEED事変後、パルムで歌い手の仕事をして路銀稼ぎをしていたところ芸能プロダクションにスカウトされて今に至る。

## リアリゲート

ジュラルミンダンボール様の小説『ファンタシースターポータブル2「小さな翼と歩く悪意」』の主人公。

オリジナルでは『ある存在』だが、この小説では通常のデューマンとして行動している。

また上記作の影響もあり、彼女の武器は作中でも語られたテノラ製の改造武器の他、デッドライジングシリーズの武器を扱う設定を追加した。

この作品ではリトルウイングのトップランカーとして登場している。

## NT-X

雑炊様の小説『ファンタシースター【それゆけ機械人形】』の主

人公。

オリジナルでは謎の存在（2011年12月26日現在）だが、こちらでもやはり謎の存在である。

とは言え精々が内蔵武器の謎であり、『二手二足の直立歩行型マシナリーの製造禁止』と言う観点からギユスターヴから正体を疑われているが、本人（？）は至って気にしていない様子。

この作品ではリトルウイングのトップランカーとして登場している。

## 【技術】

### デュエルディスク

MAW社が開発したデュエルモンスターズを行うために造られたVRビジョンを搭載した投影システムを内蔵させた携帯装置。

MAW社に存在するサーバーを介してデュエルディスクから登録された映像データを映し出すため、臨場感溢れるデュエルを可能にした。

だが技術が進歩するに連れて鮮明すぎる実体化が事故を招き重大な問題になっていたが、そこをグレイウスがデュエルディスクから得た情報を擬似的なVR空間に映し出し、それを視認するための装置『VRゲイザー』を開発して解決させた。

## VRゲイザー

グラディウスⅡウィンストンが新たに製作したデュエルディスクの機能拡張ツールで形状は片眼鏡型。元はガーディアンズや同盟軍などで使われているゴーグルを応用したもの。

MAW社が有するデュエルサーバーを介して擬似的なVR空間をプレイヤー同士の周囲に展開させ、そこに映像データを映し出す。

肉眼では擬似VR空間を視認出来ないので従来のデュエルディスクの問題であった事故の多発を防ぐ形になった。

また運転する際などで使用することはグラディウス自身が固く禁じており、後に同盟などからもそれに関した法律が出されることになる。

## 【異能者】

### デュエルトランサー

異能者がデュエルを行う時に用いる装置で通常はナノトランサーに擬態している。

しかしナノトランサーと違い、カードを100枚前後までしか入れられない様子。

デュエルランサー自体の構成は機械とプログラムで作られており、簡単にヒトが異能を使えるようにした物であるが、悪用が問題視されている。

また違法者を罰するための技術を備えているため、空間認識阻害や仮想現実を実体化させるためのフィードバックシステムなるプログラムも設置されている。

これらの要素を排除し開発コストを低くしたものがデュエルディスクである。

#### 違法者

異能者の暗黙の了解を逸脱し、異能を己の私欲のために扱う者達。近年デュエルランサーの普及や横流しなどによって違法者が増加する傾向にあり、異能者狩りを恐れる組織たちから抹殺指令が下っているほど。

異能者たちに敗れたが最後、彼らは存在そのものを抹消される運命にある。

#### “協会”

異能者たちを束ね、管理してきた組織。

表向きはパルムに存在するレリクスの研究施設を営んでいる。

しかし1年前のウォザールブルグ動乱の際、幹部の一人が主導していた異能者を使った人体実験や政府の転覆計画が露見してしまい権

威は地に墮ちた。

そのため今や“協会”は機能不全の状態に陥り、傘下だった組織が挙って独立。新たな勢力が生まれるなどの事態に陥っている。

### ウオザーブルグ

パルムの文化保護遺産でもある古城。

その付近の建物を利用して異能者の育成を行っていた。

また城の真下にはレリクスが存在し、その中にはカードや500年戦争時代の兵器が眠っているとされている。

### ウオザーブルグ動乱

パルムにある古城・ウオザーブルグを舞台にした戦い。

500年戦争時代でも異能者がそこを本拠地として戦い、また今から20年前のグラールでも異能者の復権を狙った者達がウオザーブルグ・レリクスに眠っていた兵器を持ち出そうと目論んだが敗れ去った。

しかし今から1年前のウオザーブルグ動乱で協会の暗部が露見、権威は失墜しウオザーブルグも教員や一部の協会の幹部たちが『ウオザーブルグアカデミー』なる組織を設立し異能者集団として独立した。



【武器】

改造カート

分類不可

クバラ製・ 6・B

以前リアが倒したある人間が用いていたスーパーにある買い物カートを改造した武器。

武器が絶妙な配置で設置されているので試行錯誤の末にたどり着いた一品である。

【エネミー】

忠志

カーシュ族の集落付近で襲い掛かった違法者。

カーシュ族の少年と何らかの因縁がある様に思えるのだが……？

篤志

忠志の弟。

偽造カードを大量に保持しており、それらを使って数多のデッキを使用している。

毛飛漢

カーシユ族の村を焼き払った張本人。

グラールで飛鳥しか所有していないインフェルニティを操る違法者。

作中では明かされなかったが炎を操る能力を持っていた。

## 【オリジナルカード】

レインボー・クリスタ

融合・効果モンスター

星10 / 地属性 / 岩石族 / 攻4450 / 守2950

「ジエムナイト・クリスタ」+「究極宝玉神」と名のついたモンスター1体

このモンスターの融合召喚は、上記のカードでしか行えず、融合召喚でしか特殊召喚できない。

手札の「ジエムナイト・フュージョン」を除外する事で1ターンに1度だけ以下の効果から1つを発動できる。

このカードの効果はそれぞれデュエル中1回しか使用できない。

相手フィールド上のモンスターを全てデッキに戻す。

相手フィールド上の魔法・罫カードを全てデッキに戻す。

相手の墓地のカードを全てデッキに戻す。

インフェルニティ・ファントム

効果モンスター

星5 / 闇属性 / 悪魔族 / 攻1000 / 守 0

自分の手札が0枚で相手がコントロールするカードによってダメージを受けた時、

除外されているこのカードを特殊召喚する事ができる。

この方法で特殊召喚に成功した時、除外されている「インフェルニティ」と名の付いたモンスターカードを1枚このカードに装備する事ができ、

装備したモンスターの攻撃力分だけ攻撃力がアップし、効果を得る。

インフェルニティ・ファントムの効果はデュエル中1回しか使用できない。

インフェルニティ・ヘル・タイガー

シンクロ・効果モンスター

星6 / 闇属性 / 獣族 / 攻2400 / 守1900

闇属性チューナー+チューナー以外のモンスター1体以上

このカードがシンクロ召喚による特殊召喚に成功した時、

自分の手札が0枚の場合、自分のデッキの上から1枚墓地へ送る  
事で

相手フィールド上のカード1枚を除外することができる。

インフェルニティ・グール

効果モンスター

星1 / 闇属性 / アンデット族 / 攻 0 / 守 0

自分フィールド上に「インフェルニティ」と名のついた

モンスターが表側表示で存在し、

自分の手札が0枚の場合に発動する事ができる。

自分の墓地に存在するこのカードを除外する事で

相手の墓地からの特殊召喚を無効にし破壊する。

## 用語集その2（後書き）

今回も設置しました用語集。今後も章の終わりに追加していこうと考えています。

では次回は3章です、そろそろ転生者側もカマセ犬以外にもまとめた敵を用意せねば……

## 新たな依頼と最悪の傭兵（前書き）

新年最初の投稿です。

今回は遂にE P 1 においての敵側のレギュラーキャラが登場します。

後あるキャラがフライングして登場しますのでご了承ください。

## 新たな依頼と最悪の傭兵

『不正カードを使っちゃダメ、ゼツタイ!!』』

美少女型のモンスターが怒りながら人差し指を立てている絵が描かれたポスターが貼られている扉の前に私はノックをして呟く。

「……グラディウス会長、ギユスターヴゥウィンストーン参りました」

私がMAW社本社・会長室に足を踏み入れると、そこには既に兄上が椅子に座って私を待ち構えていた。

「来たか、ギユスターヴ」

兄上がそう言うのと私に座るよう促す。私もその言葉に甘えて椅子に座ったがどうにも座り心地が異質に思えた。ここ最近リトルウィングでの生活に慣れていったのか、硬い椅子やベッドに腰掛ける事が多かったため、体重を乗せたら沈むようなソファは久しぶりだった。

「どうやらリトルウィングでの生活に慣れてるようで安心したぞ。あの海底レリクス調査のスポンサーになった甲斐があったな」

椅子と格闘していると、兄上が小さく笑う。しかし、直ぐに本題に入る事になったのか、彼は私に向かって真剣な表情で声を上げた。

「ああ、それでクロウドッグ地方での出来事だが……アスクシユラインを見かけたようだな」

アスクシユラインと兄上が言った言葉に私は若干の修正を加える。彼はニューデイズに存在する文化保護地区……『イズモ地方』の出身であり、アイツの名を冠する文字もまた独特の文化で綴られた物だ。アスクシユラインはイズモ文字で飛鳥・不知火と綴るのが正しいのだ。

私はイズモ文字には詳しくないが何とか発音までは修正できたが……何人かの人間は彼の名をまだ読み違える事が多く、アスカもアスカでグラール文字にして訂正しようとか考えていなかったのだ。それはともかく、私は頷きそしてレイナとリイナを見かけたことも話す。リイナの異変についても話したが兄上は端的に言い放ったのみだった。

「そうか……モトウブを中心にして行動しているのか……2カ月後に氷結界の里で封印祭があるからその時に鉢合わせするかもしれないな。それにナチュル族……いや、今はカーシユ族か……」

それで話は終わり。一族の長になった今の兄上にとって彼女らは書類上に記載されている事項の一つでしかないため反応が薄かった。更に言えばMAW社会長としての兄上にしたらVRゲイザーの売り上げの方に興味が向いているし、異能者組織の長としての当主にしたらそれどころではない。

「……クラウドッグ地方で思い出したが……例のものを出してくれないか」

「……はい。こちらに」

私が腰からナノトランサーを取り出すと、そこからデュエルディスクを取り出す。そこにあっただのはレイナが倒したタダシが使っていたデュエルディスクであり、カードもレイナが破り捨てたダーク・



ダイブ・ボンバーを除いて全て収まっている。

「……改めて聞く、抜き取ってはいないな？」

その声から今までのような暖かさは微塵も感じられず、底冷えするかのような冷たさしかなかった。私はダーク・ダイブ・ボンバーをレイナが破り捨てた事を踏まえて抜き取っていないと宣言すると、兄上はそれを見て忌々しそうに吐き捨てた。

「そうか……コレから本題に入らせてもらうが……」

兄上がナノトランサーからトランクを取り出すと、そこに入っていたのは無数のカードだった。それを見た瞬間、私は息を飲んだ。そのトランクの中に入っているのはまさか……

「私の側近やお前の部下がデュエルで倒して押収した偽造カードだ。カオス・ソルジャーや強欲で謙虚な壺にF・G・Dなどの高額カード、それどころかお前が遭遇したインフェルニティや氷結界で封じられている龍を初めとして我らが造り上げた兵器にその動力……そしてお前達が倒した破滅の光の象徴たる侵略者まで存在している……どのようにして造り上げたのかは知らんがな……」

まず手触りを確かめてみたが『粗雑』としか言いようが無かった。更に言えばそれを折り曲げたが元の形に戻らず折れ曲がったままだった。

「偽造カードにしては作りが粗雑……それに強欲で謙虚な壺の文字が金字でないのも文体がイズモ文字に似ているのも気になる……」

イラストが光っているのは同じなのだが、文字が金字ではない……

…それに『紙』に記された文体はイズモ文字に似た文字で記されているのも気になる。

「これは一体……」

「私を知りたいぐらいだぞギユスターヴ。文字からして出所はイズモ地方だと思ったのだが殆どの組織は企業系だ。偽造するような組織など足がつくと思っていたのだが……神とやらも何らかの暗号だと思って調べても該当者なしだ」

兄上が沈んだ表情で溜息をつく。確かにあれほどのことをしていたのなら直ぐに解決できると思ってもおかしく無いだろう。現に私もそう思っていたのだから。

「しかも最近このカードを使って不当なアンティデュエルをやっている人間も出ている。何人かは我が社の精鋭やデュエルポリスで対処したが、殆どの人間が実力行使に出て逃亡した。目下その者たちはデュエル界からも追放させている」

忌々しい現実には私は拳を握らせる。一方で兄上も眉間に皺を寄せ私に向かって問いかける。

「私がSEED事変後にデュエルディスクを作ったのはグラールを生きる人々の憩いとなるためだ」

「……はい」

グラールを生きる人々にとって希望や癒しなどは緊急かつ重要な議題でもあった。

それに私達にとってSEED事変での最終決戦で戦った異能者や兄上が体験したウォザーブルグ動乱の首謀者の嘆き……『異能者である限り光を浴びる事が出来ない』と言う事もあり、兄上はデュエ

ルディスク開発に着手したのだ。

そしてデュエルディスクを開発し、カードの製造も活発になり、子供たちに笑顔が戻りつつあった事を聞いた兄上が笑ったのをよく覚えている。

もし偽造カードがばら撒かれていたら……誰もデュエルモンスターズに希望を抱かなくなる。そうなれば我々の命脈を絶たれる。

それだけは断じて避けたい悲劇なのだ。

「偽造カードが流通してグラール中にばら撒かれるのは断じて許さん。意図的にそれを用いてデュエルをする者たちも裁きを与える。幸い使っている者たちのデュエルディスクは不正な改造を用いたものである事が発覚している。そして奴らは戦闘能力が高く実力行使を行える違法者であると同盟間の会議で決定された」

その証拠だと言わんばかりに兄上は自分のデュエルディスクを取り出して起動させ、デッキを抜いて私が押収したディスクから紙束を取り出して差し込み直すと突然警報音が鳴り響く。そして紙束は瞬く間に切り刻まれ、私達の上空には細切れになった紙が空を舞った。

「……」

予想していた答えだったが改めて怒りが湧き起こる。兄上は私に對して声を上げる。

「既にお前の部下にも通達しているが、よほどの事が無い限りその様な者達と真っ向から戦おうとするなギユスターヴ……奴らはデュエルで打ち倒せ」

兄上……いや、当主が立ち上がると私に向かって声を上げる。

「故に『マジック&ウィザーズ』の長・グラディウス・クライトンの名において命ずる!!! この様な異能者と決闘者の誇りを汚すような事態最早捨て置けん!!! 奴らの存在を……」

そして当主は腕を振るい、親指を立ててから一気に下に突き刺す。

「歴史の闇からも抹消させろ!!!」

当主がその様な事を言うのは正真正銘の抹殺指令であり、自分達が歴史の闇に埋もれている存在だと言う事を自覚してこそその発言……そして『クライトン』の名は我々が持つ本来の苗字……それを使い、なおかつ今の組織の長として命じるということは……最優先事項となる事!!!

「了解しました当主……『三騎士』の名において、その任請け負います!!!」

私は椅子から立ち上がると即座に跪いて宣言した。

「うーん……」

ギユスターヴは当主に呼ばれたとか言って自分が所属している異能者組織の本部へ行ったから、あたしはマイルームでこれからの事について考えていた。

まず亜空間研究をしているインヘルト社に止めて貰うよう頼み込む事が先決だけど、どのように説明しようかと言う段階で悩んでしまふ。

おっさんに話せばいいと思うんだけど……まずあたしの言う事を真面目に聞いてくれるかどうかすら危うい。今まで働いてなかったのがここに来て足かせになるなんて思いもしなかった。

「うーん……」

海底レリクスでギユスターヴが倒した武器を発射する奴の事を思い出す。アイツはミカの事を知っていた、でもあの時のあたしやギユスターヴはミカのことなんて見る事が出来なかったし名前すら知らなかった。

ミカの話だとギユスターヴも似たような質問……アイツと面識があるのかって聞いてみたいけど、ミカは知らないって言った。アイツはあたしも知らない事を知ってたし、そもそもその時のあたし達はミカの姿を見ることが出来ていなかった。

つまり普通のヒトじゃミカの姿を見ることが出来ないって話だ。ミカもその話には頷いて肯定したから、もしいきり立っておっさんの所に行っていたら完全に愛想つかされる所だった。

「でも言わないと伝わらないし……どうやって伝えようか……」

まあいきなり旧文明がグルールを乗っ取るうって話をした時点でアイツの様に頭がおかしいって思われるのがオチだ。あたしもミカを見ることが出来ていなかったら変な奴だと思って距離をとるし、アイツと戦ってなかったらいきなりおっさんの所へ突撃していた。

そこだけは感謝するべきなのかな……？ アレや“あいつら”なんかと同じ扱いはあたしも嫌だし。

「まずこんな話聞いたんだけど……って切り出しでいいかな？  
後は……」

あたしは管轄区へ歩いていきながらおっさんに何を話すか呟きながら居住区から管轄区に出ると、目の前にはあたしのパートナーと我が社で一番の嫌われ者が今険悪な雰囲気醸し出していた。

（氷結界に存在する龍は一体も封印が解かれていない……インフエルニティはアスカが手放していない……太陽王カムハーンはインヘルト社の人間が手にしたカードで現在登録待ち……どうなっているんだ？）

兄上から説明は受けたものの違法者が使う偽造カードの入手経路だけがどうしても分からない。それに奴らが使う異常と言うにもおこがましい力はどうにも腑に落ちないのだ。しかも最後の太陽王のカードの所有者にいたっては他の違反者と戦い、カーシユ族の集落を焼いていないと言うではないか。

武器を散弾銃のように発射させ不死身の身体を持つ者や虚空から武器を作り出す人間に、キャストを巨大にした自立兵器を呼び出す

ものや雷やら炎やら好き勝手に放つことが出来る人間、拳句の果てには捕らえたと思っただらいつの間にかいなかったと言うケースだってあった。

偽造カードを好き勝手使う違法者といい、異常な力を振り回してグラールを荒らす者たちといい、今のグラールはSEED事変の時より異常だ。一体何がどうなっているんだ……

『マイマスター、小鳥達が集う最後の楽園に着いたぞ』  
「……クラッド6、だ」

もう何度目かになる訂正を告げると、私はマイシップのトランスポーターを使い管轄区に戻る。すると周囲は異常なざわめきと、周囲から漂う敵意が充満していた。

「……なんだ、どうなっているんだ？」

私が首を傾げている中、あるサングラスを着けた傭兵が舌打ちする。

「ちつ、生きて帰ってきやがったか……」

あからさまな敵意は私に向けられたものではないが、その物言いからして物騒なことには違いない。私は彼に向かって声をかける。

「一体何が起きているんだ？ 何か知っているのか？」

「……ああ、噂のルーキーか。嫌な奴が帰ってきたってだけさ」  
「嫌な奴？」

彼は私を見ると周囲がざわめいている理由を挙げた。とは言え、それだけでこのような雰囲気になるものなのか？

「ぐあつ!!」

すると1人の男がこちらへ向かって吹き飛んでくる。私は避ける間もなく激突し、身体をよろめかした。しかし吹き飛ばされたのが予想外の人間……以前同行したト二才だった。

「……ト二才……!!」

「ふう……折角のエースが帰ってきたのに、何だよしけた面は」

姿を現したのは白いコートを肌蹴させた茶髪の中に金髪が混ざった17歳前後の少年だった。顔立ちこそそこそこいる美形の男と言った感じが、その表情は人をバカにし切ったものであり嘲笑を浮かべながらこちらへ歩いてきた。

「へえ……テメエが噂のルーキー、ねえ……」

しばらくの間、私の方を見据えていると突如私を見下したような表情を浮かべ嘲笑う。

「こんなのを期待のルーキーなんて言うんざ、バカだよなおっさんも」

流石に初対面の人間に見下されたような表情と台詞を言われるのは私もいい気分ではない。目つきを鋭くすると、奴はおどけたような仕草をとる。

「おお怖い怖い。俺達にトップ総なめにされるような連中が何言っても無駄なんだよね、期待のルーキーだとか言ってもさ」



周囲の怒りの視線に対して奴はおどけた顔で接する。しかし、私は怒りを隠しながらも声を上げた。

「それで、お前の名前は何だ？」

「……テムエ、俺の名前を知らねえとか言うんじゃねえだろうな？」

何を当たり前な事を。私はお前が名乗った記憶など無いし、名乗ってもいない相手の名前を知っていたら化け物としか言えまい。そう言えば海底レリクスで戦った男は化け物だったなと思いつくと、奴は拳を握ったり離したりしながら見下した表情で言い出す。

「……俺はリトルウイングのトップランカーの頂点に立つセイマ様だ、覚えて置けよ」

「……ギユスターヴゥウィンストンだ」

私とセイマが一触即発の雰囲気を出す中、エミリアが姿を現す。彼女の姿を認めたのかセイマは既に私や周囲の人間の事など眼中に無い様子で声を上げてきた。

「よお、エミリア。大丈夫か？ クロウドッグに行ってたって聞いて心配したんだぞ？」

その顔は先程の見下した表情など微塵も出してはいない、だが何処からか薄っぺらなものを私は感じ取っていた。

「あんたか……あたしはおっさんに話したいことがあるからそこどいてくれる？」

「おっさんに？ 無駄だって、あののんだくれに何言ったって無

駄さ」

セイマがそう言ってもエミリアは無視してリトルウイングの事務所へ入っていく。エミリアが完全に事務所の中へ入っていった事を確認すると、セイマは舌打ちをしながら我々の側から離れていった。奴も完全に姿を消すと他の傭兵達も漸く口を開き始める。

「まったく、奴が帰ってきやがったのかよ……」

「あいつらのせいで俺たちまで同類扱いされるからなあ……」

「アイツまだエミリアに粉掛けてたのね……」

「そう言えばギユスターヴが拾われてなかったら、あいつがエミリアのパートナーになってたって話も聞いたぜ？ 立候補してみてえだし」

『でもクラウチが珍しく却下したんだよな……』

「それは初耳だな……」

私が思わずそんな事を口に出す。エミリアのパートナーの話にその様な話が出てきていたとはな。

「ところでアイツはどういった奴だ？ リアやNT-Xと同じトップランカーなのは分かるが……」

私がそう言うのと近くにいた傭兵が忌々しげに舌打ちをして吐き捨てた。

「奴の名はセイマ・メフィス、あれでもウチのトップランカーの頂点……つまりリトルウイングで一番の稼ぎ頭って奴だ。顔もいい方だし、腕は立つんだよ。格闘技は死ぬほど有能だって話だぜ、打撃に耐性がある奴でも問題なくブツ倒せるんだと」

「だけどそれがどうでもいいぐらいに性格は最悪。男は平然と見

下すし女には死ぬほど甘いし、その女性も顔が悪ければそんなに扱う。しかも頭が悪いし金払いも悪い、報告書も人任せで自分が書いたようにする、ガーディアンズに喧嘩を売るわ、戦ったら自然保護地区だろうと荒野に変えるわ、報酬の上乗せは茶飯事だわ好き放題。我が社で一番の問題児だよ」

「クラウチの奴はあれでも仕事はやるタイプだし、エミリアは働きもしなかったから毒にも薬にもなりやしねえからまだマシ。アイツは事務も出来ない、命令も聞かない、男のガーディアンを半殺しにして女の犯罪者を逃がすなんて事もやったんだぜ？」

「……それだったら普通クビになんじゃねえか？　いくらウチが来るもの拒まず前歴問わずの傭兵集団だとしてもな」

トニオがそんな事を言いながら頭をかく。しかし周囲の反応は意外と薄かった。と言うより恐らく彼と同じ意見に至った人間はいるのだろう。

『それが出来たら苦労しねえよ。アイツ、あれでもウチの親会社……スカイクラッド重役のお気に入りだからな……』

「デイ・ラガンを素手で倒した腕前だからなあ……しかも当たったと思ったらいつの間にか後ろにいやがったしよ」

「弱み掴もうとした奴は行方不明になっちまったしな……」

「今はここにいないみたいだけど、アイツの取り巻きも似たような感じよ」

口々にセイマに向かって罵詈雑言を言い出す面々。どうやら彼らが起こすトラブルに辟易しているらしく容赦が無い。私も兄から推薦状のようなものを書いてもらったため、セイマの事を悪く言えない。

『ア、ギユスターヴ、サン』

そう言って私の方へ近づいてくるのは以前交流したNT-Xと言うキヤストだった。私が何か用かと答える前に彼が特徴的な話し方で声を上げた。

『クラウドサン、ガ、ヨンデマス。イライガ、ハイッタ、ミタイデス』

「わかった。すぐに行く」

私がリトルウイングのオフィスに入るとそこにいたのは頭に来たこぶを抑えているエミリアと、呆れているのか怒っているのか判別がつかない表情をしたクラウドだった。

「……おう、ギユスカ」

こういった時、なるべく刺激させるような事は言うべきではない。それが分かっているからこそ、私は単刀直入に声を上げた。

「NT-Xが読んでいると言っていたから来たが……」

私がそう言うくとクラウドは待つてましたと言わんばかりに端末を操作して見覚えのある建物……インヘルト社の研究施設を映し出した。

「今回の任務は亜空間研究の主導者・インヘルト社からの依頼だ。その研究施設から逃げ出した原生生物の駆除をしてくれ」

表情から以前のような借金取りの様な私的流用ではなく真正正銘の依頼である事が分かる。そもそも今回の任務は亜空間研究で有名なインヘルト社……つまり依頼者としては上客と言えよう。

「今回は本日も本腰だからな……本社からの推薦組も来るみてえだがトラブル起こして依頼失敗しましたくなんてやらかすんじゃないぞ。詳しいメンバーはお前さんのマイシップにデータを転送してあるからそいつを見るんだな」

それは当然だ。しかしそれ以上に私が気になった方へ目をむけ、クラウチに問いかける。

「クラウチ、エミリアはどうして溜息ばかり吐いて……」

その時私はクラウチの表情が強張るのを感じた。すると呆れ返ったかのように声を上げる。

「ああ、単なる中二病をこじらせたバカが溜息吐いてるだけだ。クラウドッグ地方での連中の言い訳といい最近中二病や妄想日記が流行っているのかねえ？」

「ち、ちよつとおっさん！！それってどういう意味よ！！」

エミリアが突然声を張り上げるとクラウチがバカにするように言い放つ。

「『旧文明人がグラールを乗っ取るうとしてる』だの、『亜空間研究がヤバイ』だの、『ミカがどうたらこうたら』だの、何処からどう見てもそうとしか見えねえんだよ。エア友達と駄弁ってねえで、ちったあ働きやがれ！！」

クラウチの怒声が響くとエミリアが先に行っててと云ってオフィスから立ち去る一方で私もマイシップへ向かう。

マイシップに乗り込むと私は端末を操作して今回の任務に同行す

るメンバーをリストアップした。そこには見覚えのある名前が書かれてある。

「リマ夫妻も同行するのか……」

研究施設だから大つぴらに異能は使えないが違法者が研究施設を狙う物好きとは思えない。リマ夫妻は異能を知っているので最悪の場合、協力してもらおう必要があるかも知れないな。

「他には……!?!」

そして私は思わず息を飲んだ。クラウチは確かに本社からの推薦組を派遣すると言っていたし、先のあの男は本社の重役のお気に入りだと言っていた。

まさかいきなり同行する事になるとは思っても見なかった。モニターを見てもそこにはある名前が堂々と出力されていたのだ。

『同行者・トニオ＝リマ、リイナ＝リマ』

セイマ＝メフィス』と。

「あいつのポカでまた苦情が出たぜ……今度はコルトバ農場が破産するほどコルトバを駆逐したんだとよ。本当にアイツのトラブルを気にしてるのか？」

『少なくとも私はしているわよ。あいつを首にするべきだって言ってるけど、ウチのルールはクラウチも知ってるはずでしょ？ あの頭でっかち共、都合のいい時だけウチのルールを持ち出してね……』

俺はモニターを使って本社用の回線を使ってリトルウイングの社長……ウルスラに抗議を上げる。対象はもちろんセイマ……本社から押し付けられたウチの疫病神だ。

コイツが起こした問題は数知れず、ウルスラにも色目使う俺の言う事なんざ無視するわ、拳句の果てに俺がクロウドッグ地方での焼き討ち犯をワレリー共々太陽系警察に突き出すと『洗脳されていただけの人間を逮捕するなんて何て奴だ！』とかほざきやがった。

それに比べりゃ今回のエミリアの用件なんて、まだ可愛いほづだ  
ったぜ……

「プロダクション・ディーヴァの歌姫達とVanguardの共  
演ライブ、実施決定か……」

以前クロウドッグ地方での焼き討ち騒動で縁があったMISAが  
所属しているロックバンドが、有名な芸能プロダクションとの共演  
ライブを開く事が決定したと言う記事を見ながら俺は仕事に入ろう  
としていた。

昨日の依頼の報告書を見るだけと言う楽な仕事もあれば、それを  
纏めて本社にいるウルスラに提出するって言う仕事もあるし、バス  
クに誘われてVRシステムを使ったトレーニングを行う時もある。  
とは言え、今回は報告書の山を処理しない事には酒も飲めねえな。  
まずは今いる傭兵を調べねえとな。バスクにクノーにNT-X、  
リアは今いねえから呼ぶに呼べねえ、ああギユスも兄貴に呼ばれて  
いなかったんだっけな……後は……

「……おいおい、あいつら帰ってきやがったのかよ!？」

出来れば見たくなかった名前が羅列されてあった。ウチの評判が  
悪い最大の理由……典型的なゴロツキ傭兵が帰ってきやがったって



訳か！！ しかもよりによってインヘルト社への依頼を回せてオマケつきだあ！？

「冗談じゃねぞオイ！！」

『シャツチヨサン、どうしたノー？』

チエルシーが話しかけるが俺はモニターを指差すだけにしておく。それを見るとチエルシーも驚いた表情を見せた。

『コレってマジなのシャツチヨサン！！』

その声を合図にエミリアが姿を現す。珍しいな、アイツが呼び出しもギユスターヴも無しにココへ来るなんざ……

「……………どうしたエミリア。今俺は機嫌が悪いんだ」

俺の声に萎縮したのかエミリアが震えるものの、アイツは力を振り絞って声を上げた。

「あのさ、おっさん……………例えばの話んだけどさ……………」

例えばの話、ねえ……………たいていこう言い出す奴の話なんざ、それが本音だったりするんだよな。

「亜空間研究がやばいって聞いたらどう思う？」

「どうもしねえ。証拠がねえからよ」

よりによってクラウドグ地方でのバカと同じ様な中二発言が出てきやがった。となると次に出てくる言葉は……………

「それと最近ギユスターヴのパートナーマシナリーから聞いた話  
なんだけど、旧文明人がグラールを乗っ取るうとしてたらどう考え  
る？」

「アイツも見かけによらず変なパートナーマシナリー持つてるよ  
な。それがどうかしたか？」

俺がエミリアの言葉にあきれ返っているとチエルシーが感心した  
ように声を上げた。

『シャツチヨサン、何か変なお酒でも飲んだノー？ 淡々と返す  
なんてらしくないネー』

「やかましいぞチエルシー。エミリア、ああだこうだ言い出した  
んだ…… テメエがそこまで言うんだったら証拠はあるんだろうなあ  
？」

あいつらもセイマも俺が世界で一番軽蔑しているバカな刑事も、  
証拠は俺自身だといわんばかりの態度だったからな…… エミリアも  
噛み付くタイプだし一応付き合ってるが、もしそうだったら説教  
の一つや二つでも……

「……………」

するとエミリアは諦めたように溜息を吐きながら顔を俯かせた。  
俺がその様子に呆気に取られていると……

「そうだよね…… おっさんミカ見えてなさそうだし…… 証拠出せ  
るわけ無いじゃん……………」

…………… ああなるほど。要するに俺に対する新しい言い訳を編み出し  
たから実験台にしたって事か……………

『エミリアー、そのミカって人……』

「え？ チェルシー見えるの？」

『最近流行してるエア友達って奴じゃないカシラー？』

エミリアが違つと吼えた瞬間、俺はエミリアに盛大な拳骨を一発食らわしてやった。

「……まあいい。一応俺のほうからギユスターヴを出さず、コレならあつちも文句言えねえだろ？」

『噂の三騎士ね。しかも品行方正・厳正厳格を地で行く紅騎士様を入社させたつて話じゃない。よくスカウトできたわね』

「大穴の馬が当たつたつてレベルの偶然だよ。コイツで奴らをぐうの音を出せねえ位大手柄を立てさせてやる、そうすりゃ奴をお払い箱に出来るかもしれねえしよ」

期待してるわよと言ってウルスラは通信を切った。あいつが来てから俺らは色々なところに頭を下げたり余計な出費を出されたりしている。しかも奴と仕事した奴は拳つて行方不明になる始末だ。

「……フン」

俺が懐からウイスキーの入ったボトルを開けると一気に飲み干す。ギユスが奴以上の大手柄を立てりやそれでよし、立てれなくてもギユスならインヘルト社の研究施設を潰すような真似はしねえからそこを褒めればいい。

「……頼むから生きて帰ってきてくれよ？　俺はMAW社と喧嘩起こす気はねえんだ」

『今日はずいぶんと荒れてるな……どうかしたのかクラウチ？』

そう言っに入ってきたのはバスクだった。エミリアがバカな発言をしたって話すとバスクは苦笑しながら声を上げる。

『バカな発言、か……思えば俺達が戦ったあの男も似たような事を言っていたな』

バスクがそう言うのと俺は眉間に皺を寄せる。確かに奴は俺とウルスラとチエルシーしか知らない（今じゃバスクも知ってるが）俺の過去をぺちゃくちゃと話しやがった。

『ウルスラとチエルシーを含めたリトルウイングの連中は俺が可愛がってやるよ、だからバカなのんだくれポリはココで消えな！！』  
『テメエなんか奴らを守るわけねえだろ！！　昔捕まえた奴』

に家族死なせたアンタにはな！！」

……嫌な奴を思い出した。まあ、そいつが死体になったって報告書を見たときは大声で笑ったもんだ。

『それに以前クロウドッグ地方で捕まえた奴らの何人かも亜空間研究が危険だだの旧文明人がグラールを乗っ取るうとしているだの言っていたわけだ……』

しかも奴らはエミリアと違って自信満々に吼えていた。反省も何も無し、むしろ自分は正しい、何をやっても許されるって感じて話していたから問答無用で宇宙追放刑……僅かな酸素しか提供されないって言う事実上の死刑にされるって話だ。

「……ま、それに比べたらマシだって話だよ」

そう言っただけ俺は再び酒を飲み始めた。

「今回の依頼はインヘルト社から逃げ出したアスタークを中心とした原生生物の駆除だ」

「……………」  
「道中の原生生物もアスタークが逃げ出した隙に逃亡した為、駆除の許可もでていたため戦闘も懸念されているが……………聞いているのか、エミリア？」

私のマイシップにてエミリアに今回の依頼を説明していてもエミリアは溜息をついてばかり。漸く頭の痛みが取れたのかと思ったら今度は落ち込む……………一体何が起きたんだ？

「……………エミリア、何があった？」

「……………あ、ギユスターヴ？　いーよ、あたしなんかほっといてよ……………」

そう言ってぶつぶつと再び呪文を唱えなおすエミリアと彼女を慰めようとするミカ。一体何が起きた事やら……………

「とは言うが、今回はあまりに異常だ。クラウチと何か話し合っていたのだろう、何を話したんだ？」

しかし答えが返ってくるはずも無い。まさか異能者がどうたらこうたらと言う話ではないだろう。旧文明人や亜空間研究、そしてミカの事を話していたことから旧文明人の陰謀の……

「……ああ、そう言えば旧文明人がグラールを乗っ取るうとしていると言う話もあったな」

『あの……ギユスターヴさん……忘れていたのですか？』

ミカの指摘に私は若干目線を彼女から逸らしてしまう。ここ最近偽造カードや違法者のトラブルばかりで、すっかり旧文明人の騒動を忘れてしまっていたのだ。

そもそも違反者の実力は強く、奴ら一人でSEED事変を解決させる事が出来たのではと思えるような実力を兼ね備えているのだ。

それが自分達に牙を向ける。未だに動きを見せていない旧文明人とどちらが厄介かと聞かれれば、私は迷わず前者を採るだろう。

「……まさかエミリア、それをクラウチに話したのか？」

「……やんわりとだけど……多分それでおっさんに愛想完全につかされたわ……」

「証拠が無くまだ実害は無い……しかも証拠は私達にしか見えないと来ているからな……」

信じる方がどうかしている。私は心の中でそう思っていたがエミリアは私に気付かず溜息をついた。

「あれでも考えた方なんだよね……昔のあたしだったら即効でおっさんに殴りこんでたわ……」

それだけでも立派に成長しているのではないか？ 私はそう思ったが今のエミリアに言ったところで焼け石に水だ。

「……まあ、本当に取り返しのつかないミスを犯したのでないなら挽回する事は可能だぞ？ SEED事変前まではグラディウス氏は頭でっかちの小僧だとバカにされていたんだが今では周囲の信頼を勝ち取ったし、リトルウイングだって犯罪者まがいと言われながらも依頼を手に行っているのだろうか？」

「……そう、かな……？ ま、気休めだけでも受け止めておくわ、ありがとね……」

そして彼女は落ち込んだ表情で溜息をつくが、その表情から若干影は取れたようだ。さて、そろそろパルムだ。インヘルト社の駐船場の使用許可は既に下りている。コンピュータに登録していた座標をクリックして大気圏突入準備に入った。

さてインヘルト社の研究施設に入るとトニオが感嘆の声を上げた。

「ココがインヘルト社か。流石亜空間研究の主導企業だな、ずいぶん豪華な構えしてんな……」

「そうだね。エミリアも機嫌直ったようで何よりだよ」



リマ夫人もトニオに賛同し、エミリアの方を見て頷く。一方でセイマは何故か不機嫌そうな表情をするが、私達はあえてそれを無視した。

「おいおいおい！！ 俺らは観光に来たんじゃねえんだぞ、さつさと依頼済ませようぜ！！」

それだけは同感だ。

「……で、ギユスターヴ。お前、アレを使う気か？」

アレとは恐らく異能の事だろう、当然使うはずが無いから私は否定の言葉を紡いでトニオに説明した。

使わない理由は三つある。一つはココがインヘルト社の研究施設であるため不用意に明かしたくないから、もう一つは自分の自力を鍛えたくて異能に頼りきりな戦いから脱却するため。

最後の一つは……今も自分達を見下した表情で見据える男の存在だ。不用意に手札を見せたくない、それが残った二つの言い訳を作り出していた。

「……ま、使う必要が無いならいいんだ。さつさと行ってアスタークを……」

「ハアイ、待ってたわよりトルウイングの皆さあん」

そう言っただけ姿を現したのは長身の男性ビーストだった。

中性的な顔立ちに背中まで伸ばした滝のように流れる茶髪に腹部を晒し胸部を隠したチューブに腕には腕輪が詰められている白いズボンを履いていた。しかもビーストの特徴たる獣のような鼻と耳を持ち、左耳にはイヤリングをつけていた。

悪趣味に見える服装だったが、彼自身の顔立ちが整っていたから一種のファッションとして完成してしまっている。そんな感じの男だった。

「だ、誰だアンタは!？」

セイマがありえないものを見たかのような表情で彼を見据える一方で、彼は私達に向けて声を上げた。

「アタシはインヘルト社の研究員、カツツエ＝オルケストよ。一応聞くけどあなた達は誰かしら？」

予想はしていたがインヘルト社の社員と言うわけか……彼の問いに対して私達は自己紹介の声を上げる。

「……私はリトルウィングの傭兵であるギユスターヴ＝ウィンストンです。そこにいるのは同僚のトニオ＝リマとリイナ＝リマ、パートナーのエミリア＝パーシヴァルに……」

トニオたちもよろしくと声を上げ、最後にセイマに目をむけたところで……

「セイマ＝メフィスだ。こいつ等の中でも俺がトップだ、覚えておきな」

ふてぶてしく、更にズボンに手を入れたまま声を上げる。あからさまな態度に私達は悪印象を植えたのではと思ったが、カツツエは気にしていないと言わんばかりに声を上げた。

「それじゃあアタシが案内するし駆除の協力もするわ。いいでし

よ？」

人手が増えるし、信用できないセイマを監視する人間も増える。監視を差し引いても案内できるほど内部にも詳しい人間、願ってもいない人選だな。

「…………信用できねえな」

しかしセイマは何を思ったのかカツツエに向かって不信の目をむける。しかし彼は柳に風と言わんばかりに腕を広げて声を出した。

「じゃ好きにしなさい、結構複雑だからアタシでもたまたまに迷っちゃうのよね」

「…………ちっ」

舌打ちをしながら先程の言葉を訂正する。しかしその表情は見るからに不機嫌そうだった。

「ま、断る理由もないよな…………」

トニオが賛成の声を上げると、カツツエが片足を曲げ腕を上げて声を上げる。

「それじゃ皆さん、張り切って行きましょー!!」

そして我々はインヘルト社の原生生物の駆除活動を開始する事にした。

## 新たな依頼と最悪の傭兵（後書き）

今回登場させたセイマの能力は次回明らかになります。

またカツツエさんは転生者じゃありませんが、モチーフは自分が最もかっこいいと思ってるスパロボキャラです。

さて、この章は普通のデュエルを挟む余地が無いんだよね……

こんな幕開けで大丈夫かとかいえないような展開ですが、これから1年間よろしく願います。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3100x/>

---

傭兵と決闘者の協奏曲

2012年1月2日01時47分発行